

— 茨城県土浦市 —

北西原遺跡(第3次・第4次調査) 山川古墳群 (第1次調査)

— 土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 —

2004

土 浦 市
土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

北西原遺跡(第3次・第4次調査) 山川古墳群 (第1次調査)

— 土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集 —

2004

土 浦 市
土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

土浦市は、北に名峰筑波をひかえ、東に霞ヶ浦を望み、市の中央には謡曲にも唄われた桜川が流れるなど、自然環境に恵まれた都市です。江戸時代には、土浦藩9万5千石の城下町として栄えた歴史のある土地でもあります。本市は、「ひとにやさしい街作り」を目標に都市の整備を行っていますが、埋蔵文化財の保存と活用は、生涯学習や文化の育成の観点からも欠かすことのできない大切な事業です。

本書は、平成7年度に行われた常名地区の土浦市総合運動公園建設に伴う、埋蔵文化財発掘調査の報告書です。この発掘調査で出土した考古資料は、土浦市のみならず、茨城県の地域史を考える際の重要な資料となります。この成果を、市民の皆様と共に享受し、更に次の世代の大切な財産として伝え続けたいと考えるものであります。

最後になりますが、発掘調査と整理作業に際しまして、多大なるご厚意を賜りました関係各位の方々に、衷心より御礼を申し上げます。

土浦市教育委員会

教育長 富永善文

例　言

- 1、本書は、土浦市常名地内に建設を予定している土浦市総合運動公園建設事業に伴い実施された、埋蔵文化財発掘調査報告書である。
- 2、当調査は、土浦市常名地内2799番地他に所在する北西原遺跡（市遺跡地図番号238）の第3次・第4次調査と、常名地内2542番地他に所在する山川古墳群（市遺跡地図番号235）の第1次調査にに関するものである。調査面積は、北西原遺跡第3次調査が2,600m²、第4次調査が13,000m²、山川古墳群第1次調査が13,000m²である。
- 3、発掘調査は、土浦市都市計画部新運動公園課（当時）から委託を受けた土浦市遺跡調査会が実施した。調査担当は、比毛（当時橋場）君男があたり、調査員中野耕太郎がこれを補った。
- 4、発掘調査は、平成7年5月21日から平成7年10月13日まで、合計142日間行われた。整理作業は、平成8年3月15日まで行われた。
- 5、本書の執筆は石器：渡辺丈彦、縄文土器：中野耕太郎、縄文時代以降の遺物観察表：鶴町明子（当時）・比毛君男が行ない、これ以外の記載・総括・編集は比毛が行なった。写真撮影は、遺構を比毛・中野が、遺物を比毛が行った。
- 6、発掘調査と整理作業にあたっては、下記の方々と諸機関に御協力、御教示を賜りました。記して感謝申し上げます。（敬称略、50音順）
赤井博之、石橋充、茨城県教育委員会文化課、茨城県県南教育事務所、川合正一、瓦吹堅、窪田恵一、小泉光正、国立歴史民俗博物館、小玉秀成、後藤理加、財団法人茨城県教育財団、佐々木義則、田中新史、田中裕、千葉隆司、土浦市文化財保護審議会、土浦市立土浦第二中学校、土生朗治、日高慎、福田礼子、箕輪健一、本橋弘美、吉澤悟、吉野健一
- 7、遺跡出土の遺物や記録図面、写真に関しては、一括して土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。

凡 例

- 1、遺物番号は、本文・観察表・挿図・写真ともに一致する。
- 2、挿図図版中の縮尺は以下の通りである。
 - 1) 遺物は基本的に1/3、玉類・土人形など小型のものは原寸で表現した。
 - 2) 遺構は基本的に1/60、遺構内の付属施設は1/30、ほかは掲載されたスケールによる。
- 3、挿図中の遺構の表現方法は以下に従う。
 - 1) 方位はすべて北を示し、数値は海拔高度を示す。
 - 2) 遺構の推定線は、破線で表す。
 - 3) 遺構の略称 積穴住居：S I 土坑：S K 溝：S D 古墳：T M
不明遺構：S X 掘乱：K ピット：P
 - 4) 遺構内のスクリーントーンの意味は、以下の通りである。
 : 焼土  : 粘土  : 炭化物
- 4、挿図および表中の遺物の表現方法は以下に従う。
 - 1) 回転復元実測を行った遺物は、中心線を一点鎖線で表す。
 - 2) 実測図上の矢印は、ナデ・ケズリなどの調整の方向を示す。
 - 3) 法量 A：口径 口縁部外面端部間の長さ
B：底径 底部接地面外側端部間の長さ
C：器高 正置した状態で底面から口縁部上端までの長さ
〔推定値〕 回転復元などによって、推定して得られた数値
(現存値) 現状で遺存する部分のみの数値
 - 4) 遺物実測図中のスクリーントーンの意味は、以下の通りである。
 : 煙・炭化物付着  : 施釉範囲  : 頸恵器
 : 胎土中に纖維を含む繩文土器
 - 5) 遺物観察表中の残存率は、実測図で表現された箇所に対して実際の遺物がどの程度残っているかについての割合であり、完形の遺物を想定した時の値ではない。
- 5、北西原遺跡の遺構番号は、第1次調査以降、通し番号を付している。そのため本報告は、積穴住居は91号住居から、溝は10号溝から、土坑は44号土坑から番号を開始する。なお、番号の途中で欠番となる遺構がみられるが、それは発掘・整理中に検討を加えた結果、自然堆積や搅乱などと判断したために報告からは除外したものである。

6、山川古墳群のうち、古墳の番号は墳丘の現存する2基と昭和48（1973）年に開墾中に発見した1基に次いで付した。そのため本報告は4号墳から番号を開始する。

7、遺構覆土と遺物の色調判定には、『新版標準土色帖』（編 小山正忠・竹原秀雄1990）を用い、表現も同書に拠っている。

8、挿図1～3では、地図を使用している。図の出典を以下に記す。

- 1) 図1は、『土浦市史別巻上浦遺跡地図』PP112⑤常名村絵図を抜粋・加筆した。
- 2) 図2は、『明治前期測量2万分の1 フランス式彩色地図 土浦北部地区 174 茨城県常陸國 新治郡常名村信太郡飯田村』（発行 財團法人日本地図センター）を抜粋・加筆した。
- 3) 図3は、土浦市都市計画図 1 1万分の1を使用した。

9、遺構観察の基準は、以下の記載に従う。

- 1) 垂穴住居址の主軸に関しては、カマドをもつ住居はカマドを通る方向を主軸線とみなした。カマドのない住居は、入口状のピットや炉・貯蔵穴の位置で判断した。不明な場合は南北に近い軸線を主軸とみなした。他の遺構に関しては、長軸を主に主軸とみなした。
- 2) 付属施設のうち、大きさに変動のあるものは、最大・最小値を計測した。

10、常名地区新運動公園建設事業に伴う発掘調査の名称として、以下の通り略表記する場合がある。

- 1) UK 1 ……北西原遺跡第1次調査〔平成5年度実施〕
- 2) UK 2 ……北西原遺跡第2次調査〔平成6年度実施〕
- 3) UK 3 ……北西原遺跡第3次調査〔平成7年度実施、今回の報告対象遺跡〕
- 4) UK 4 ……北西原遺跡第4次調査〔平成7年度実施、今回の報告対象遺跡〕
- 5) UY 1 ……山川古墳群第1次調査〔平成7年度実施、今回の報告対象遺跡〕

平成7年度土浦市遺跡調査会組織

会長	須田直之	土浦市文化財保護審議會會長
副会長	青木利次	土浦市教育委員會教育長
理事	大塚博 廣田宣治 内海崎保生 雨貝宏 野口幹雄 金塚文雄 大塚重治	土浦市文化財保護審議會委員 土浦市參事兼企画課長 土浦市區画整理課長 土浦市參事兼建築指導課長 土浦市都市計画課長 土浦市耕地課長 土浦市土木課長
監事	矢口寛 飯田章二	土浦市教育委員會教育次長 土浦市監査事務局長
幹事長	宮本昭	土浦市教育委員會文化課長
幹事	矢口俊則 小貫俊男 塙谷修 石川功 黒澤春彥 中澤達也 閑口満 橋場君男 宮本礼子	土浦市教育委員會文化課課長補佐 土浦市教育委員會文化課主査兼文化財係長 土浦市立博物館主幹 土浦市教育委員會文化課文化財係主幹 土浦市教育委員會文化課文化財係主事 土浦市教育委員會文化課文化財係主事 土浦市教育委員會文化課文化財係主事 土浦市教育委員會文化課文化財係主事

北西原遺跡第3次・第4次調査、山川古墳群第1次調査 発掘調査・整理作業参加者名簿 (敬称略 50音順)

発掘調査

調査主任 橋場君男 (土浦市教育委員会文化課)

調査員 中野耕太郎

発掘調査作業員 新 清 飯田陽子 飯村洋子 石倉しげ 石浜敏子 市村光子 今泉代志子
大久保由紀子 大久保敦子 大竹信子 大坪美知子 大和田怜 岡田さだ子
岡田次男 岡本君子 小野豊 菊田眞代 坂みよ 桜井秀子 佐野清江
島田初男 鈴木たま 鈴木知恵子 鈴木秀雄 関野齊久代 高野敏江
田畠保子 土屋和馬 戸崎生子 戸崎由三郎 富島栄子 富島繁 富島利治
中野富美子 沼尻久子 沼尻文子 野坂隆市 平野篤志 福田加代
細野重雄 横田整子 増谷ふさ子 丸岡公子 松浦澄子 松浦博子
松延貞次郎 宮本操 矢口なか

事務員 中村浩子

整理調査

調査主任 橋場君男

調査員 小松葉子 鶴町明子 中野耕太郎 福田礼子 渡辺丈彦 (慶應義塾大学院)

調査補助員 加藤寛雄 (国学院大学学生) 谷口陽子 (筑波大学学生)

整理調査作業員 天谷瑛子 新井栄子 石橋深雪 石山春美 大久保由紀子 大島麻奈美
大野美津子 柿本江里奈 川田光子 小松崎廣子 小松崎礼子 富田シズエ
長嶽道子 中村節子 浜田久美子 横田整子 松川さち子

事務員 中村浩子 鈴木ひと美

* 氏名・所属は調査当時のものである。

目 次

序	i
例言	iii
凡例	iv
平成7年度土浦市遺跡調査会組織	vi
北西原遺跡第3次・4次調査、山川古墳群第1次調査発掘調査・整理作業参加者名簿	vii
目次	vii
第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と調査経過	1
第2章 環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4
第3章 北西原遺跡第3次調査	9
第1節 竪穴住居址	9
第2節 土坑	66
第3節 溝	70
第4節 不明遺構	71
第5節 遺構外出土遺物	72
第4章 北西原遺跡第4次調査	82
第1節 上坑	82
第2節 溝	84
第3節 遺構外出土遺物	85
第5章 山川古墳群第1次調査	87
第1節 古墳	87
第2節 方形周溝墓	96
第3節 竪穴住居址	101
第4節 上坑	107
第5節 溝	120
第6節 不明遺構	126
第7節 遺構外出土遺物	129
第6章 結語	134
引用・参考文献	135
報告書抄録	136
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	近世末期の常名村	5	第35図	107号住居址遺物出土状況	46
第2図	明治前期の遺跡地周辺	6	第36図	107号住居址検出状況	47
第3図	周辺の遺跡	7	第37図	107号住居址出土遺物①	48
第4図	基本層序	8	第38図	107号住居址出土遺物②	49
第5図	91号住居址出土遺物	9	第39図	108号住居址検出状況・出土遺物	50
第6図	92号住居址検出状況・出土遺物	10	第40図	109号住居址検出状況・出土遺物	52
第7図	93号住居址検出状況・出土遺物	11	第41図	111号住居址検出状況	54
第8図	94号住居址検出状況	13	第42図	111号住居址遺物出土状況	55
第9図	94号住居址遺物出土状況	14	第43図	111号住居址出土遺物①	56
第10図	94号住居址出土遺物	15	第44図	111号住居址出土遺物②	57
第11図	95号住居址検出状況	17	第45図	113号住居址検出状況	58
第12図	95号住居址出土遺物	18	第46図	113号住居址掘り方検出状況	59
第13図	96号住居址検出状況	19	第47図	113号住居址出土遺物	59
第14図	96号住居址遺物出土状況	20	第48図	114号住居址検出状況	60
第15図	96号住居址出土遺物①	21	第49図	115号住居址検出状況・出土遺物	61
第16図	96号住居址出土遺物②	23	第50図	118号住居址検出状況	63
第17図	97号住居址検出状況	25	第51図	118号住居址遺物出土状況	64
第18図	97号住居址遺物出土状況	26	第52図	118号住居址出土遺物	65
第19図	97号住居址出土遺物①	27	第53図	土坑検出状況(44~48・50・51・53・56号)	67
第20図	97号住居址出土遺物②	28	第54図	55号土坑検出状況・出土遺物	69
第21図	98号住居址検出状況・出土遺物	29	第55図	10号溝検出状況・出土遺物	70
第22図	99号住居址検出状況・出土遺物	31	第56図	1号不明遺構検出状況	71
第23図	100号住居址検出状況	33	第57図	遺構外出土石器・石製品	73
第24図	100号住居址遺物出土状況	34	第58図	遺構外出土縄文土器①	75
第25図	100号住居址出土遺物	35	第59図	遺構外出土縄文土器②	76
第26図	101号住居址検出状況・出土遺物	36	第60図	遺構外出土縄文土器③	77
第27図	102号住居址検出状況	38	第61図	遺構外出土土器片錐・土製円盤	79
第28図	102号住居址遺物出土状況	39	第62図	遺構外出土土器・土製品類	81
第29図	102号住居址出土遺物①	40	第63図	57号土坑検出状況	82
第30図	102号住居址出土遺物②	41	第64図	58号土坑検出状況	83
第31図	103号住居址検出状況	42	第65図	11号溝検出状況	84
第32図	104号住居址検出状況	43	第66図	遺構外出土縄文土器	85
第33図	104号住居址遺物出土状況	44	第67図	遺構外出土土師質土器他	86
第34図	104号住居址出土遺物	45	第68図	4号墳検出状況①	88

第69図	4号墳検出状況②・出土遺物	89	第86図	8号土坑出土遺物②	112
第70図	5号墳検出状況・出土遺物	91	第87図	9号土坑検出状況・出土遺物	113
第71図	6号墳検出状況・出土遺物	92	第88図	10号土坑検出状況	114
第72図	7号墳検出状況・遺物出土状況	94	第89図	11・12号土坑検出状況・出土遺物	115
第73図	7号墳出土遺物	95	第90図	13～16号土坑検出状況・出土遺物	117
第74図	1号方形周溝墓検出状況	97	第91図	16号土坑出土遺物	118
第75図	1号方形周溝墓出土遺物	98	第92図	17・18号土坑検出状況	119
第76図	2号方形周溝墓検出状況	99	第93図	1～5号溝検出状況	121
第77図	3号方形周溝墓検出状況	100	第94図	1～3号溝出土遺物	123
第78図	3号方形周溝墓出土遺物	101	第95図	6号溝検出状況・出土遺物	125
第79図	1号住居址検出状況	102	第96図	7号溝検出状況	126
第80図	1号住居址遺物出土状況	103	第97図	1号不明遺構検出状況	127
第81図	1号住居址出土遺物①	104	第98図	1号不明遺構出土遺物	128
第82図	1号住居址出土遺物②	105	第99図	遺構外出土石器	129
第83図	土坑検出状況（1～7号土坑）	108	第100図	遺構外出土縄文土器	130
第84図	8号土坑検出状況・遺物出土状況	110	第101図	遺構外出土土師質土器他	132
第85図	8号土坑出土遺物①	111			

付 図 目 次

付図1 北西原遺跡第3・4次調査

付図2 山川古墳群第1次調査

写 真 目 次

P L 1	調査前風景	P L 10	U K 3	100号住居址
P L 2	U K 3 91・92号住居址	P L 11	U K 3	101号住居址
P L 3	U K 3 93号住居址	P L 12	U K 3	102号住居址
P L 4	U K 3 94号住居址	P L 13	U K 3	103号住居址
P L 5	U K 3 95号住居址	P L 14	U K 3	104号住居址
P L 6	U K 3 96号住居址	P L 15	U K 3	107号住居址
P L 7	U K 3 97号住居址	P L 16	U K 3	108号住居址
P L 8	U K 3 98号住居址	P L 17	U K 3	109号住居址
P L 9	U K 3 99号住居址	P L 18	U K 3	111号住居址

P L19	U K 3	113号住居址	P L56	U K 3	遺構外出土繩文土器
P L20	U K 3	114号住居址	P L57	U K 3	遺構外出土繩文土器
P L21	U K 3	115号住居址	P L58	U K 3	遺構外出土中近世遺物
P L22	U K 3	118号住居址		U K 4	遺構外出土遺物
P L23	U K 3	45・47・56号土坑	P L59	U Y 1	4・5・6号墳出土遺物他
P L24	U K 3	55号土坑	P L60	U Y 1	7号墳出土遺物
P L25	U K 3	10号溝・1号不明遺構	P L61	U Y 1	1・3号方形周溝墓出土遺物
P L26	U K 4	57・58号土坑、11号溝	P L62	U Y 1	1号住居址出土遺物
P L27	U Y 1	西側調査区	P L63	U Y 1	1号住居址、9・11・13号土坑出土遺物
P L28	U Y 1	4・5号墳	P L64	U Y 1	8号土坑出土繩文土器
P L29	U Y 1	6号墳	P L65	U Y 1	8・16号土坑、6号溝、遺構外出土遺物
P L30	U Y 1	7号墳	P L66	U Y 1	1・3号溝、1号不明遺構出土遺物
P L31	U Y 1	1号方形周溝墓	P L67	U Y 1	遺構外出土繩文土器
P L32	U Y 1	2・3号方形周溝墓	P L68	U Y 1	遺構外出土中近世遺物他
P L33	U Y 1	1号住居址			
P L34	U Y 1	1～7号溝			
P L35	U Y 1	1・4・7号土坑			
P L36	U Y 1	8号土坑			
P L37	U Y 1	9～12号土坑			
P L38	U Y 1	13～16号土坑			
P L39	U Y 1	17・18号土坑			
P L40	U Y 1	1号不明遺構			
P L41	U K 3	91～94号住居址出土遺物			
P L42	U K 3	94号住居址出土遺物			
P L43	U K 3	95・96号住居址出土遺物			
P L44	U K 3	96号住居址出土遺物			
P L45	U K 3	96・97号住居址出土遺物			
P L46	U K 3	97～99号住居址出土遺物			
P L47	U K 3	100～102号住居址出土遺物			
P L48	U K 3	102号住居址出土遺物			
P L49	U K 3	104・107号住居址出土遺物			
P L50	U K 3	107・108・109・111号住居址出土遺物			
P L51	U K 3	111・113・115・118号住居址出土遺物			
P L52	U K 3	118号住居址、55号土坑、10号溝出土遺物			
P L53	U K 3	遺構外出土石器他			
P L54	U K 3	遺構外出土繩文土器			
P L55	U K 3	遺構外出土繩文土器			

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経緯

平成2年3月、土浦市総合運動公園基本計画書が発表された。これにより土浦市の西端の常名地区に、川口運動公園にかわる新しい運動公園が建設される計画が示された。この新しい総合運動公園は、予定総面積約290,000m²を有し、予定地内には昭和56年の分布調査で発見された弁才天遺跡・神明遺跡・北西原遺跡・山川古墳群の四つの周知の遺跡が含まれている。そのため、これらの遺跡の分布状態と遺構の密度を把握するために、平成3年3月に土浦市教育委員会による試掘調査が行われた。

この試掘調査によって得られた結果は、以下の通りである。弁才天遺跡は周知の遺跡としての面積が約18,500m²で、古墳時代を中心とする堅穴住居址が70軒以上存在することが予想された。神明遺跡は約28,500m²の面積で、古墳時代と縄文時代中期を中心とした堅穴住居址100軒以上が予想され、地点貝塚の存在する可能性もある遺跡と判断された。北西原遺跡は、面積が約18,500m²の古墳時代前期の大規模な集落跡と推定された。山川古墳群は、現状で古墳が2基残り、市指定史跡の前方後円墳である常名天神山古墳の外側に古墳が点在するものと予想された。この試掘調査により、常名台全体に埋蔵文化財が分布する可能性が極めて高いことが判断され、発掘調査区は台地全体に拡充して設定されることとなった。

本調査は平成5年度から開始され、これまで2次にわたって北西原遺跡約7,700m²が調査されている。本年度は、4月24日付けで土浦市都市計画部新運動公園課（以後運公課と略称）から土浦市教育委員会文化課（以後市教委と略称）あてに発掘調査の依頼があり、北西原遺跡と山川古墳群の2遺跡合計25,551m²を調査することとなった。同日付けで市教委は、土浦市遺跡調査会（以後調査会と略称）を紹介し、翌25日に発掘調査の通知についての進達を行なった。4月27日付けで運公課と調査会間で発掘調査に関する契約が取り交わされ、発掘調査区内の表土排除・方眼測量が着手された。

第2節 調査の方法と調査経過

発掘調査を行なうに当たっては、まず重機による表土除去を行なった。表土除去は、地表下約30cm～50cmまでの表土と耕作土を除去し、関東ローム層（いわゆる赤土）の上面を以って留めた。この関東ローム層上面が、遺構を確認する際の確認面[遺構確認面]となる。

表土除去に続き、磁北をもとにして20m間隔の方眼座標軸を設定した。このうち北西原遺跡第3次調査区は、前年度調査（北西原2次）で用いた座標軸に則って軸を設定し、その呼称も準拠した。

しかしながら北西原遺跡第4次と山川古墳群第1次の調査区は、北西原第3次と同一の座標上に位置するものの、距離的に約150mほど離れているために、前年度調査のグリッドの呼称を準拠すると煩雑化することが予想された。そのため北西原遺跡第4次と山川古墳群第1次の調査区では、北西原第4次の北西端部が事業予定地の際にあたることを鑑みて、その西端からアルファベットと数字によるグリッドの呼称を新たにふり直している〔付図参照〕。

遺構の確認は、人力で遺構確認面を精査して行なった。所在の確認された遺構に関しては、長軸に

沿う形で任意に土層観察用の畦（ベルト）を残し、平面プラン内を底面まで掘り下げる方法に依っている。掘り下げの過程で出土した遺物は、口縁部・底部や特徴があると判断されるものを現位置のまま残し、他を一括遺物とした。しかしながら、やむをえない事情で現位置を保てない遺物もある。一方で、調査時に現位置の記録をとりながら本報告から除外した遺物もある。

遺構の底面・床面まで掘り下げる後は土層堆積の観察・記録をとり、ベルトを除去了した。ベルト除去後、遺構内の遺物の出土がまとまりをみせた段階で、その状況（遺物出土状況）を実測図及び写真で記録した。遺物出土状況の記録は、遺物の東西軸・南北軸・高さの三次元的記録を念頭に置き、方眼座標軸上の遺構の位置と遺構平面上の遺物出土位置を計測・図化した。

遺物の取り上げ後は、遺構が掘り込まれた状況まで完全に掘り下げた状態（完掘状況）を検出し、実測図及び写真で記録した。遺構の性格によっては柱穴・炉・カマドなどの付属施設を有するものも見られるが、それらはこの段階で全て検出した。各付属施設のうち、必要があると認められるものは、長軸に沿う形で半截し、覆土の堆積状況を観察・記録した。

調査経過については、まず5月21日から北西原遺跡の第3次調査を開始し、8月31日に終了した。8月中旬からは、北西原遺跡第4次調査を併行してとり行い、この調査も8月末に終了した。

この間、北西原・山川両遺跡の遺構の密度と調査の進捗状況を鑑みて、年度内に発掘調査の対象面積を拡大することについて、市教委と運公課との間で協議がもたれた。その結果として同年9月から、北西原遺跡第4次調査区の北隣と山川古墳群第1次調査区の東隣を各々拡張して調査することが決定した。

この拡張区については、トレチ（試掘坑）を設けて、その範囲内で発見した遺構を広げて調査する方法に則っている。拡張部の面積は合計約12,200m²を測る。トレチ調査で発見した遺構と遺物は、第4章と第5章の中で合わせて報告する〔付図参照〕。

9月1日からは山川古墳群第1次の発掘調査と拡張区のトレチ調査が始まり、10月8日にこれら全ての遺構の記録を終了した。10月13日に航空測量と機材の撤収を行い、全ての発掘調査作業は終了した。発掘調査に要した日数は、合計142日である。

第2章 環境

第1節 地理的環境

北西原遺跡は、土浦市大字常名2799番地他に所在する周知の遺跡である（市遺跡地図番号238）。山川古墳群は、北西原遺跡と同一台地の南端に位置し、土浦市大字常名2542番地他に所在する（市遺跡地図番号235）。

これら両遺跡のある常名地区は、土浦市中心市街地から北西方向にあたり、常磐高速道路を境として新治郡新治村と接している。その地形は、手野・木田余・真鍋・殿里から連続する標高約26~28mの洪積台地の新治台地と、その南に広がる桜川・古鬼怒川起源の沖積低地の桜川低地、そして両者の接点たる緩斜面を有した開析谷の三者から構成される。

現在ある集落のうち、比較的古い家屋は台地から低地に移行する緩傾斜地に営まれている。その一方で、新しい宅地は台地上に多い。慶應元（1867）年の絵図¹⁾を見ても、既存の集落が東西方向の道を軸として台地際に多く営まれたことが理解される（図1参照）。

北西原遺跡は、新治台地に南から北へ大きく貫入する谷とその谷から西方に派生する支谷に囲繞された、台地上の北縁部に立地する。この谷は現在、葦などの生える湿地であるが、かつては谷の開口部に在る溜池とともに、一連の池をなしていたと伝えられる。このことは明治時代の迅速図を見ても、明らかである（図2参照）。支谷の湿地帯より台地上にかけては、谷筋に並行する道と道よりも一段高い平場があり、急傾斜して台地上に至る。現在、台地上は畑地または荒地に、斜面部は杉・檜などの林となっている。

山川古墳群は、北西原遺跡と同一台地上の南端部に位置し、現状では古墳（円墳）が2基遺存する。現在、遺跡地の大部分が畠地・林地として利用されているため、地表で確認される表徴は残されていない。但し、古墳群のある台地の約80m南の独立丘上には、前方後円墳の天神山古墳（市指定史跡）があり、隣接する削平地には80m級の前方後方墳と伝えられる挑戦塚古墳（湮滅）の所伝が伝えられることから、本来はより多くの古墳があったと推定される。

当遺跡のある台地の地質は、表土・耕作土下に、関東ローム層が約1.5m堆積し、その下に常総粘土層・成田疊層が続く。北西原第3次調査区内では、表土以下の層序を確認するために深掘りを1か所行なった（図4参照）。近在の出土事例を参考する限り、旧石器時代の遺物は、ローム層中でも上面から下50cm以内に収まるようである。遺構の残存具合は各々異なるが、概して確認面下の掘り込みの深い遺構は良好である。

しかしながら、近年まで根菜類の栽培が盛んに行われていたため、トレンチャーといわれる掘削機械による搅乱がみられる部分が多い。その上、戦後暫くまで養蚕に伴う桑樹栽培も行われていたために、現況では確認できない桑根が地中に多数残されて遺構を傷める箇所も存在した。また、近在の人家の墓所や塵芥の捨て場として、現在に至るまで積極的な土地利用がなされている。

註1)『土浦市史別巻 土浦歴史地図』（土浦市史編さん委員会 1974）

2)『図説 土浦市史』（土浦市史編さん委員会 1966）P.P.17-P.P.18

第2節 歴史的環境

常名地区とその周辺には、昭和55（1980）年度から昭和57（1982）年度にかけて茨城大学人文学部史学教室の茂木雅博助教授（当時）を中心に行われた分布調査¹⁾、および平成13（2001）年に茨城県教育委員会によって著された『茨城県遺跡地図』によって、図3に示す遺跡が確認されている。各分布調査の大まかな傾向としては、縄文時代と古墳時代の遺跡が多く分布する点が指摘できる。その中でも古墳群は、地図上の分布を見る限りでは、新治台地の縁辺部で桜川に接する立地のものが多い。

この他、常名地区周辺で発掘調査が行われた例を記すと、昭和47（1972）年11月、大字殿里688の3番地の造園工事中に、古墳の石棺が発見された。土浦市教育委員会が緊急調査を行った結果、複数の入骨と鉄製直刀3口、金鰐製鏡1点を発見した。また、昭和48（1973）年2月、常名字山川2730番地で、開墾中に石棺が発見された。⁴⁾緊急調査の結果、骨片の他に鉄製細棒2本と直刀片2個を発見した。直刀片が石棺天井石の上から出土したことから、既に盜掘を受けたものと判断される。この両者は、とともに箱式石棺を採用する点から古墳時代後期の古墳と考えることができる。

この他にも常名台周辺には、市指定史跡の前方後円墳である天神山古墳（全長78m）が存在し、昭和41（1966）年土取り工事時に埋没した前方後円墳の挑戦塚（瓢箪塚）古墳⁵⁾（全長74m）の所在も伝えられる。常名町並木からは、古墳から馬形埴輪が出土している。

また、山川古墳群の300m北西の新治村坂田には武者塚古墳がある。当古墳は、昭和58年に筑波大学考古学研究室によって発掘調査が行われ、古墳時代終末期の方墳であることが判明した。この古墳は、葬られた成人男性の頭髪が「みづら」の状態で発見されたことで全国的に名高い。これらの事例からも、常名台周辺一帯は古墳時代の遺跡に特に恵まれた地域であることが窺える。

平成元（1989）年7月～8月、土浦市遺跡調査会（担当 黒澤春彦・中澤達也）によって、常名字八幡下の八幡下遺跡が発掘調査された。⁹⁾これにより古墳時代後期の竪穴住居址4軒と土坑1基、奈良・平安時代の竪穴住居址8軒と土坑2基が発見された。遺物では、土師器・須恵器の他、墨書き土器・鉄製紡錘車等が出土している。

平成5（1994）年7月～10月、常名地区総合運動公園建設に伴い、北西原遺跡第1次調査が行われた。調査は土浦市遺跡調査会が主体となり、日本考古学研究所（担当 大瀬淳志・小川和博）が実施した。発掘調査面積は2,311m²を数え、古墳時代前期の竪穴住居址22軒、縄文時代の「陥し穴」と考えられる土坑、古墳時代終末期の古墳（方墳）1基などが検出された。

平成6（1995）年10月～2月、北西原遺跡第2次調査が行われた。調査は、土浦市遺跡調査会が実施し（担当 黒澤春彦）、調査面積は約5,000m²である。この調査によって、古墳時代前期を中心とする竪穴住居址68軒、土坑11基、溝7条、古墳時代終末期の古墳（方墳）が1基発見された。

過去2回の調査により北西原遺跡は、古墳時代前期を中心とする集落が遺構の大半を占め、一部に古墳時代終末期の方墳もみられることが判明した。特に集落からは、東海・北陸・畿内といった他の地域の影響を受けて製作されたと覚しき土師器や、関東地方南部で多くみられる枯土敷きの炉をもつ竪穴住居などが発見され、遠隔地との交流をもった集落であることを推測させる。

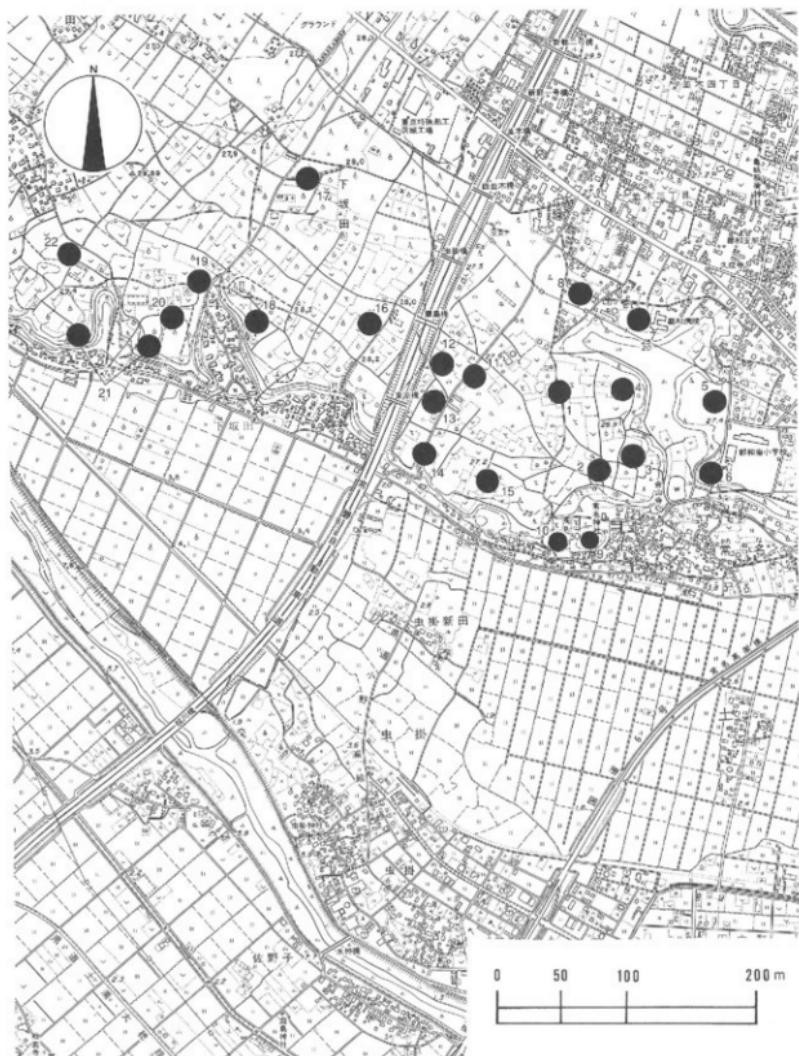
なお、中世以降の文化財には、（伝）常名城が、桜川低地上の字八幡に比定されている。¹⁰⁾市指定文化財には、天神山古墳墳頂の宝鏡印塔と金山寺境内の五輪塔が挙げられる。両者共、中世後期から近世初期に位置する地方色豊かな石塔である。

- 註1)『土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』(茨城大学人文学部史学第六研究室 1984)
 2)『茨城県遺跡地図』(茨城県教育委員会 2001)
 3)『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』(土浦市教育委員会 1974)
 4)『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』(土浦市教育委員会 1974)
 5)『土浦市における古墳の測量』(茂木・水野・長洲 1991『博古研究』創刊号)
 6)『図説 土浦市史』(土浦市史編さん委員会 1966) P.P.17-P.P.18
 7)『図説 土浦市史』(土浦市史編さん委員会 1966) P.P.19
 8)『武者塚古墳 武者塚古墳・同 2号墳・武具八幡古墳の調査』(増田・岩崎ほか 1986)
 9)『土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書』(土浦市遺跡調査会 (黒澤春彦) 1991)
 10)『土浦市史』(土浦市史編さん委員会 1975)
 11)『土浦市の文化財』(土浦市文化財保護審議会 1978) P.P.62-P.P.63





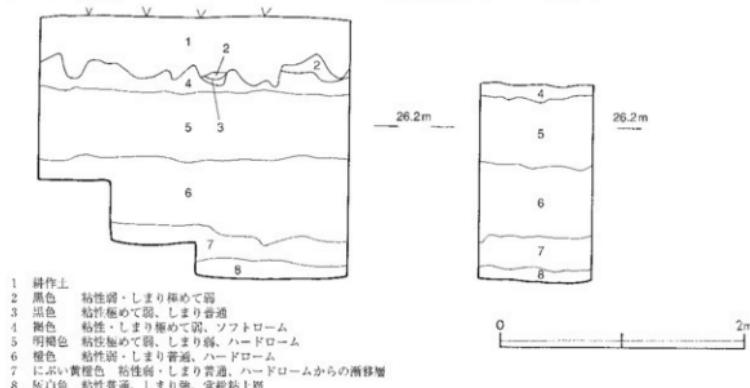
第2図 明治前期の遺跡地周辺



第3図 周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡

番号	遺跡名	市町村	地名	時代	備考
1	北西原遺跡	238	土浦市常名字北西原	縄文(中)、古墳(前)	平成5・6年度発掘調査
2	山川古墳群	235	土浦市常名字今方	古墳、奈良・平安	
3	常名台の石棺出土地		土浦市常名字山12730	古墳	昭和48年、発掘調査
4	神明遺跡	237	土浦市常名字神明	縄文(中)、古墳(前)	
5	弁才天遺跡	236	土浦市常名字弁才天	古墳(後)、奈良・平安	
6	天神塚遺跡	212	土浦市常名字乙越	縄文(後)、古墳、平安	
7	西谷津遺跡	245	土浦市常名字西谷頭	古墳(前・後)	
8	西谷津西遺跡	244	土浦市常名字原新田	縄文(前)、古墳(後)	
9	常名天神山古墳	233	土浦市常名字天神久保	古墳	市指定史跡
10	挑戦塚(瓢箪塚)古墳	234	土浦市常名字西根	古墳	昭和41年坪誠
11	アラク遺跡	243	土浦市虫掛字坂上道東	縄文(前)	
12	中畠遺跡	242	土浦市虫掛字中畠	縄文(前)	
13	小坂の上遺跡	241	土浦市虫掛字小坂ノ上	縄文(中)	
14	坂の上遺跡	240	土浦市虫掛字坂上	縄文(前)	
15	羽黒後遺跡	239	土浦市虫掛字羽黒後	縄文(前)	
16	馬場先貝塚	002	新治村下坂田字馬場	縄文	
17	坂田稻荷山古墳群	112	新治村下坂田字稻荷	古墳	
18	赤弥堂遺跡	003	新治村下坂田字馬場先	縄文、弥生、古墳	
19	下坂田貝塚	104	新治村下坂田字天神台	縄文、弥生	昭和63年、筑波大学発掘調査
20	中台貝塚	006	新治村下坂田字中台	弥生、古墳、奈良・平安	
21	坂田古墳群	007 009	新治村下坂田字花輪台、上坂田字立野	古墳	
22	武者塚古墳群	070	新治村上坂田字峰台	古墳	昭和58年、筑波大学発掘調査



第4図 基本層序

第3章 北西原遺跡第3次調査

第1節 竪穴住居址

北西原遺跡第3次調査では、22軒の竪穴住居址が検出された。これらの時代別の内訳は、古墳時代前期が20軒、時期が不明なものが2軒である。

以下、住居址毎に解説を加える。住居址番号が91号から始まる理由は、第2次調査までの時点での90軒の竪穴住居址が検出されており、番号を後続してつけたためである。

91号住居址〔付図 第5図 PL 2・41〕

位置 S-2-9区を中心に、T-2-9区に至る。

主軸方向 ピット・炉穴のみのため不明。

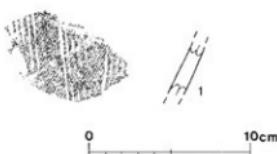
規模と形状 正確な規模と形状は不明である。掘り込みが浅いため、床面・壁面は検出されなかった。炉址とピットのみを検出した。

ピット 18~25cmのピットが周辺で検出された。

炉 110×95cmの楕円形で、上面に焼土塊を多量に含むことから判断。西方は擾乱される。

遺物 精査中、中世の上部質土器焼鉢（1）を発見したが、遺構に伴う可能性は乏しい。

所見 本址は、掘り込みの浅い竪穴住居址である。時代と役割は不明である。



第5図 91号住居址出土遺物

91号住居址出土遺物観察表

図版No	器種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器形・技 法の特 徴	備 考
1	上部質土器 焼鉢 側部	C (2.6)	覆土中 5%	良好	赤色微砂 少量	にほい橙色	内面に5条1単位の鉢し目がはしる。内面は 使用により良く磨滅している。鉢し目は重複 しない。	中世在地系

92号住居址〔第6図 PL 2・41〕

位置 T-U-2-6区

主軸方向 N-2°-W

規模と形状 隅が丸い長方形で、径410×326cmを計る。

壁面 南壁は垂直気味に、他の三方はなだらかに立ち上がる。

床面 貼り床状を呈していないが、平坦である。

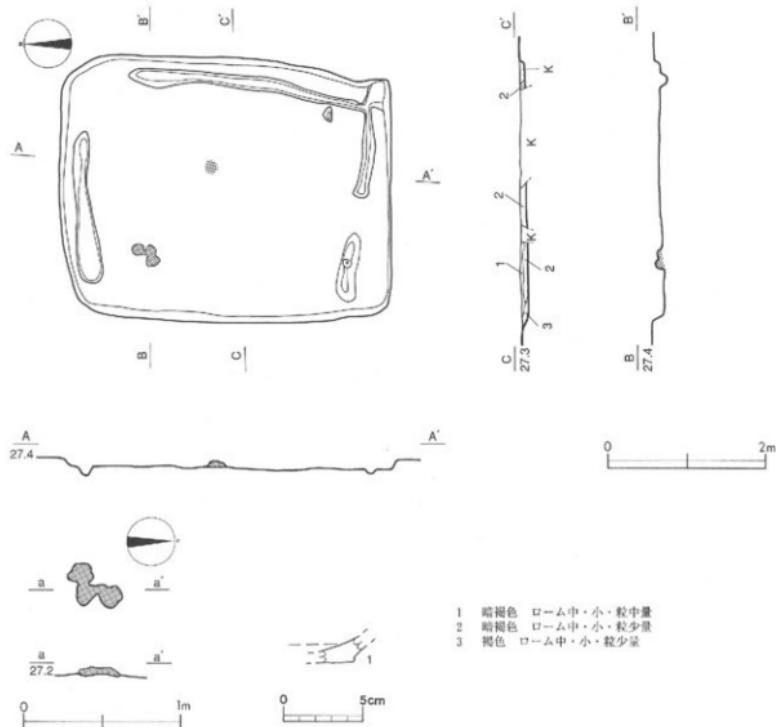
ピット 南壁側に2か所あり。うち一つは、壁溝と覺しき溝中に設けられる。

炉 住居内北西に設置される。住居内ほぼ中央にも焼土塊が分布する。

覆土 トレンチャーによる搅乱が著しい。深さ8~10cmと浅く、混入具合で分層したが、基本的には、暗褐色相の自然堆積である。

遺物 覆土中から、土師器壺の底部（1）が出土した。

所見 出土遺物から、古墳時代前期の竪穴住居址と考えられる。



第6図 9-2号住居址検出状況・出土遺物

9-2号住居址出土遺物観察表

図版No	器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼 成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 壺 底部	C (1.1)	覆土中 5%	良好	粘石少量 石英板量	褐灰色	体部外面に煤付着。内外面ともにナデ。底部 内面に一部赤色部分あり。	

9 3号住居址〔第7図 P L 3・41〕

位置 S・T - 3 0 区

主軸方向 N - 6° - E

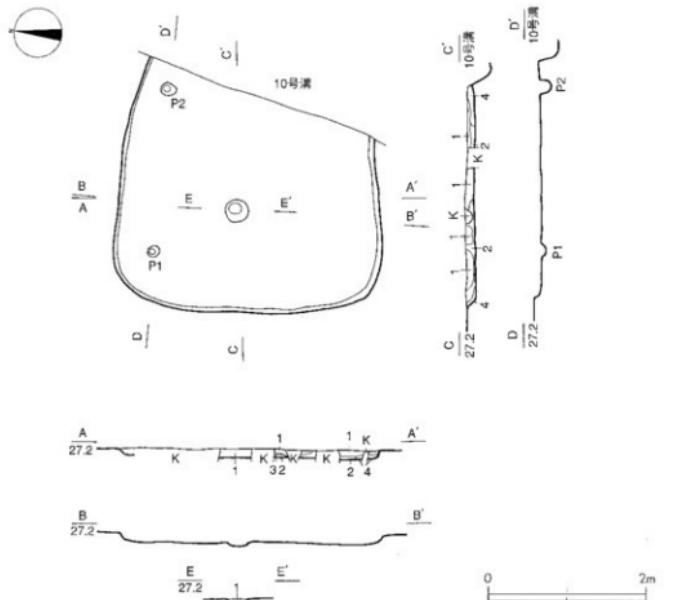
重複関係 住居南壁の一部と東壁を10号溝に切られる。

規模と形状 332×286cmの隅丸方形。

壁面 深さ約10cmで、外傾して立ち上がる。壁溝は確認されなかった。

床面 所謂貼り床状を呈していないが、平坦である。

ピット 北壁側に2穴(P 1・P 2)検出した。P 1は深さ5cm、P 2は15cmである。



- 1 黒褐色 白色針状物質中量、粘性極めて弱、しまり弱
 2 黒褐色 ローム粒中量、粘性強、しまり弱
 3 黒褐色 ローム小少量、黒色土多量、粘性弱、しまり普通
 4 鹿色 硅化物少量、黒色土粒中量、粘性弱、しまり極めて弱

- 地層
 1 黒褐色 烧土粒微量、ローム粒少量、
 粘性・しまり弱



第7図 9 3号住居址検出状況・出土遺物

炉 住居中央から西寄りに1基、幅28~30cm、深さ5cmに掘り塗められて設けられる。

覆土 トレンチャーの搅乱あり。壁沿いの4層に統一され、2・1層が堆積したものと考える。

遺物 土師器片などが覆土中から出土した。4は後世の混入であろう。

所見 本址は、出土遺物から判断して古墳時代前期の堅穴住居址と考える。

9 3号住居址出土遺物観察表

器数No	器 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 上	色 調	器 形・技 法 の 特 殊	備 考
1	土師器 器台 受部	C (2.1)	覆土中 5%	良好	長石少量	にぶい橙色	内外面共に、ヘラミガキ。特に内面は、中央から放射状にヘラミガキが施される。	
2	土師器 蓋又は瓶 口縁部	C (3.3)	覆土中 5%	不良	長石微量	にぶい黄橙 色	内面・口縁部外側は焼ナデ。腹部は継ぎのハ ケメをナデ消す。複合口縁。	
3	土師器 高杯 杯部	C (1.6)	覆土中 5%	良好	石英ごく微 量	浅黄褐色	胎形は不明瞭。内外面赤彩痕残る。	
4	不明土製品 土鉢?	長 (2.6)	覆土中 10%	良好	長石微量 石英微量 粉質	にぶい黄橙 色	上部に棒状工具を通した跡が残る。内外面共 にナデ胎形。	近世遺物か?

9 4号住居址〔第8~10図 P L 4・41・42〕

位置 V-25・26、W-25・26区。北側はイモ穴により壊されている。

主軸方向 N-44°-W

重複関係 1号溝が住居中央を貫通するが、床面までは至らない。

規模と形状 径476cm×481cmの方形を呈する。

壁面 深さ約30cmで垂直に立ち上がる。壁溝（深さ約6cm）は、北西コーナー部と南東側の壁に部分的に確認された。

床面 遺存面の全面が、貼り床状を呈する。

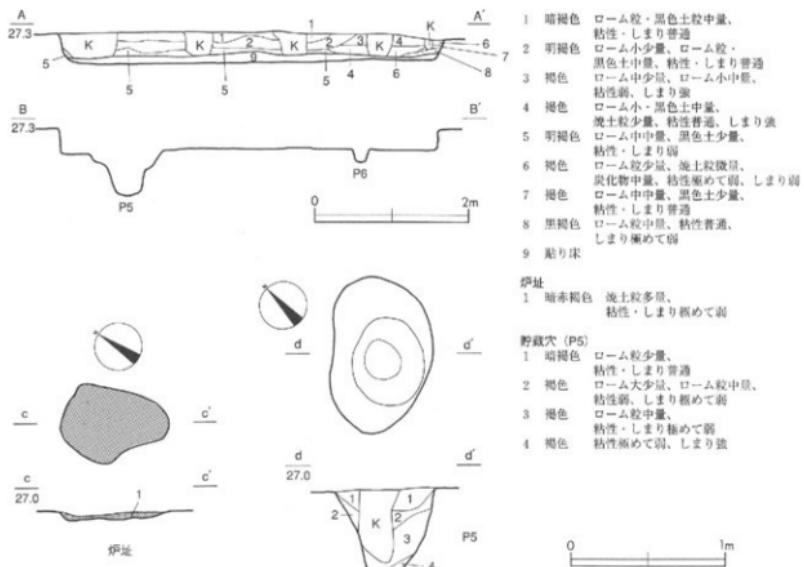
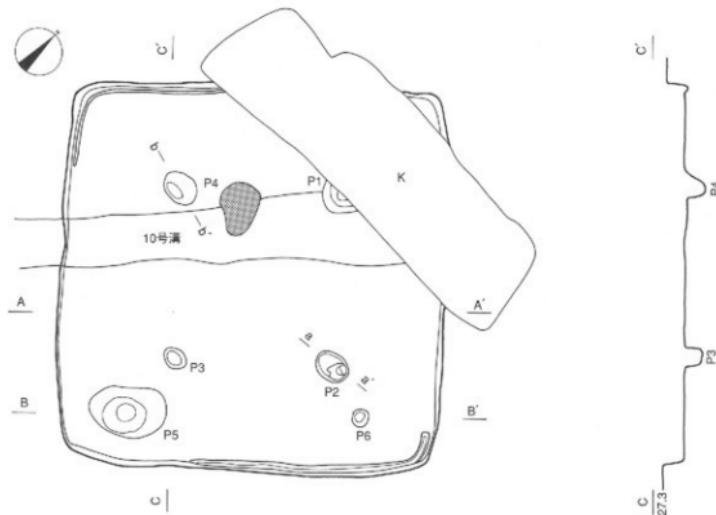
ピット 5基検出された。配置から考えて、P1・P2（深さ18~41cm）・P3（深さ約20cm）・P4（深さ29cm）は柱穴、P5（深さ51cm）は貯蔵穴と判断される。南東壁沿いのP6（深さ14cm）も住居に伴う可能性がある。

炉 住居中央からやや北西寄りに、1基確認された。径67×48cmの長楕円形で、炉床面は固く焼き締まる。

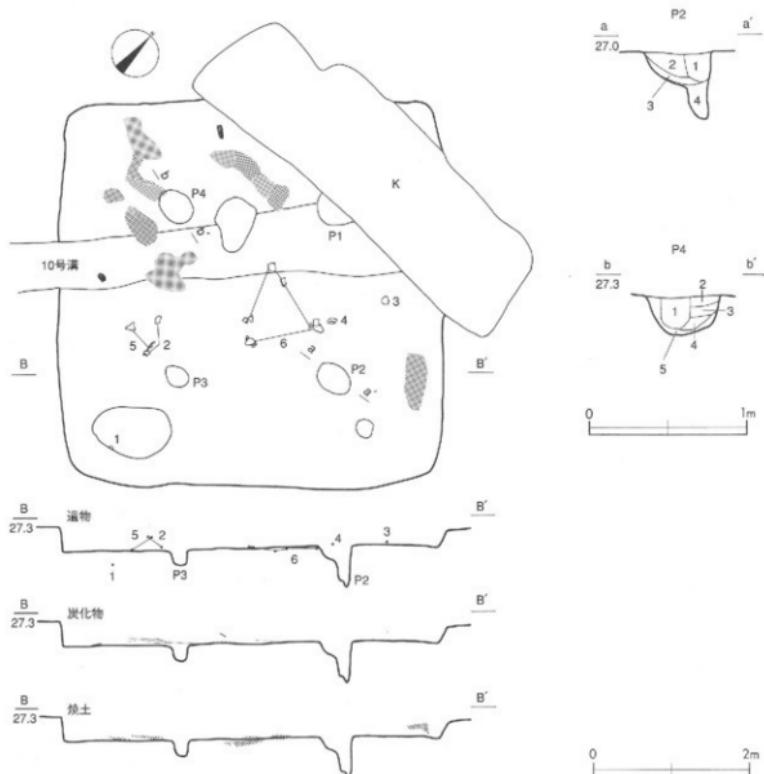
覆土 トレンチャーと木根により一部搅乱される。南側は5層、北側は7・8層が初めて堆積し、統いて北側の4・6・7層の後、1・2層が堆積したと考えられる。住居内北西と東に一部、焼土と炭化物がみられる。

遺物 土師器（1~11）が出土した。1・3・4・6は確実に当遺構に伴う遺物だが、2・5は中層と下層で接合関係があり、若干疑問が残る。

所見 本址は、出土遺物から判断して古墳時代前期の堅穴住居址である。



第8図 9 4号住居址検出状況



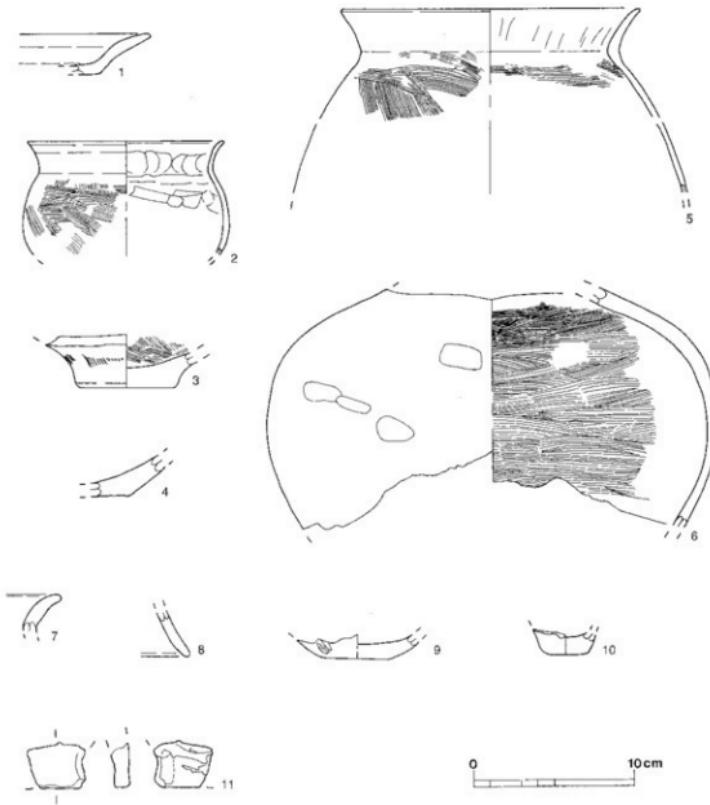
P2

- 1 暗褐色 ローム粒少量、粘性極めて弱、しまり普通
- 2 暗褐色 ローム中量、ローム粒多量、粘性普通、しまり弱
- 3 明褐色 ローム質土、粘性弱、しまり普通
- 4 明褐色 ローム中多量、粘性・しまり極めて弱

P4

- 1 暗褐色 ローム粒・焼土粒中量、炭化物多量、粘性・しまり極めて弱
- 2 暗褐色 ローム粒・炭化物中量、焼土粒少量、粘性普通、しまり極めて弱
- 3 暗褐色 焼土粒少量、炭化物中量、粘性弱、しまり極めて弱
- 4 明褐色 ローム粒中量、炭化物少量
- 5 明褐色 ローム質土、粘性極めて弱、しまり極めて弱

第9図 9-4号住居址遺物出土状況



第10図 9-4号住居址出土遺物

9-4号住居址出土遺物観察表

回収No	器 種 形	法 番	出土位置 (cm) ³	残存率	焼成	加 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	土器 高杯又は器台 口縁部	C	(29)	貯藏穴 中層 5%	良好	長石微量 石英微量	浅黄褐色	内外面共に、横ナデの上へラミガキ。	
2	土器 器 口縁～胴部	A [120] C (7.0)	覆土上層 20%	良好	長石微量 石英微量	橙色	LJ縫部は新位のハケメの上を横ナデ。胴部は 横ナデ。胴部外面はハケメの上をナデ。内面 はヘラナデ。		
3	土器 壺 底部	B 5.6 C (2.7)	床面直上	10%	良好	長石少量 石英微量 雲母少量	褐色	内面は焼位のハラナデが連続する。外面は指 頭によるナデと原位のハケメ。底面はナデ。 外間に焼付着。	

図版No	器種形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
4	土師器 壺 底部	B [8.0]	床面直上 10%	良好	長石多量 石英多量	明赤褐色	外側底部寄りは、ヘラによる接ナデ。体部寄りはナデ。底面はヘラによるナデ調整。内面はナデ。	
5	土師器 壺 口縁～胴部	A [18.4] C (11.1)	覆土上層 30%	不良	長石少量 石英少量	にぶい橙色	球状の体部から口縁部は緩やかに外反。体部外側はハケメ。内面は、横位のハケメの上にヘラナデ。	
6	土師器 壺 胴部上半	C (14.7)	床面直上 5%	良好	長石少量 石英微量	にぶい赤褐色	外側はハケメの上を丹念なナデ。内面は横位のハケメが連続する。外側の一部に擦付着。	
7	土師器 壺 口縁部	C (2.3)	覆土上 5%	良好	長石微量 石英微量	にぶい褐色	外側共に横ナデ。緩やかに立上り、口縁部外側に擦を生じて外反する。外側に擦付着。	
8	土師器 壺又は器台 胴部	C (2.5)	覆土中 10%	不良	長石少量 石英微量	浅黄褐色	外側共にヘラミガキの上、赤彩。	
9	土師器 壺 底部	B [4.0] C (1.1)	覆土中 5%	良好	長石少量 石英少量	明赤褐色	脚部外側ヘラミガキの上、赤彩。内面はナデ。	
10	土師器 壺? 底部	B 2.0 C (1.6)	覆土中 5%	良好	長石少量 石英少量	黒褐色	内面ヘラナデ。底径の狭さから小形の壺と判断される。全体に二次焼成を受ける。	
11	不明土製品 脚部?	厚 1.1	覆土中	良好	長石少量 石英多量	にぶい橙色	粘土土による成形。外側はナデ。上面に接合痕が残る。	

95号住居址〔第11・12図 PL 5・43〕

位置 T-33・34区。住居南側は調査区域外に延びる。

主軸方向 N-12°-W

規模と形状 356×(218)cmの方形プラン。

壁面 深さ約40cmではほぼ垂直に立ち上がる。

床面 脚部を除く全面が、貼り床状を呈する。中央は幅150cm程著しく被熱し、赤化する。

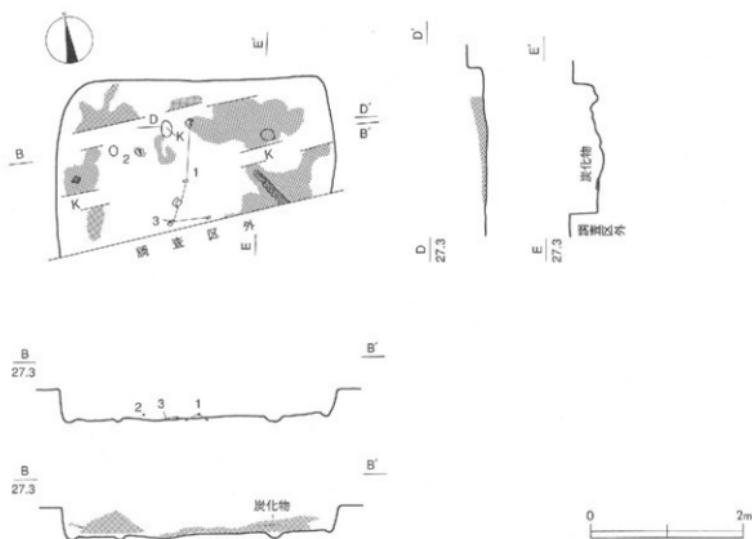
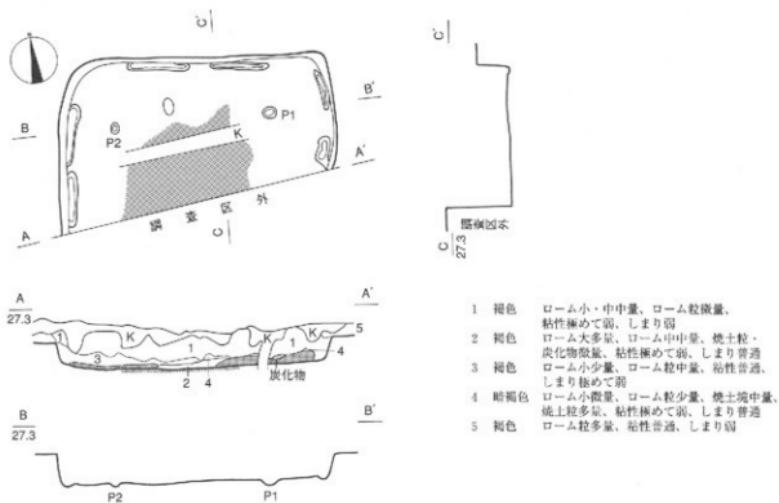
ピット 北側に2か所(P1・P2)確認され、P1は深さ8cm、P2は深さ6cmである。位置的にみて、柱穴と判断される。

炉 未調査の南半分に含まれるものと思われる。住居中央の赤化した個所が、炉址に該当する可能性は否定できないが、落ちくぼみは生じていない。

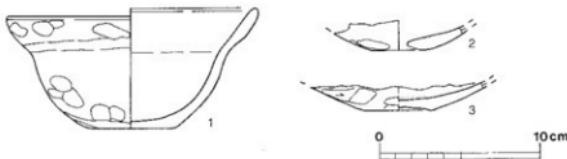
覆土 東西南北共、トレンチャーなどの搅乱を受ける。床面直上から覆土中層にかけて、焼土が堆積する。焼土は、中央よりも壁沿いの方が厚く堆積する傾向が見られる。炭化物は、焼土中または焼土上に多く分布している。これらの状況から当住居は、所謂焼失住居に該当しよう。

遺物 土師器(1~3)が出土している。いずれも、床面直上か覆土下層の出土資料である。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居址と考える。



第11図 9号住居址検出状況



第12図 9-5号住居址出土遺物

9-5号住居址出土遺物観察表

閲覧No	器種 器	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 鉢 口縁～底部	A 15.5	床面直上	良好	長石少微量 石英微量 小石微量	にぶい赤褐色	底面から内側気泡に立上り、頸部で受け口状に外反する。口唇部に削位のハケメを微かに残すほかは、全周にナゲ整形。	
		B 5.3						
		C 7.4	95%					
2	土師器 鉢 底部	B 3.4 C (1.9)	覆土下層 10%	堅焼	長石粒微量	にぶい褐色	底面はへそ状にへこむ。内外面共に丁寧なナゲ整形。内面から穿たれた6～7mm幅の穿孔がある。	
3	土師器 甕 底部	B 4.3 C (1.5)	床面直上 10%	良好	長石少微量 石英微量	暗赤褐色	底面中央はへそ状にへこむ。内外面共に細いヘラナデ。二次焼成を受け、全体に褐色のムラがある。	

9-6号住居址〔第13～16図 P L 6・43～45〕

位置 U-3-2区を中心に、U-3-3区、T-3-2・3-3区に一部かかる。

主軸方向 N-12°-W

規模と形状 径520×498cmの方形プランを呈する。

壁面 高さ38～40cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝（深さ8cm）は、北壁沿い中央に一部検出された。南壁から垂直方向に延びる溝（深さ12～13cm）は、所謂間仕切りの溝である。トレンチャーの搅乱が著しく、壁上半は遺存する下半から立ち上げて調査した。

床面 壁際と貯蔵穴付近を除くほぼ全面が、貼り床状を呈する。

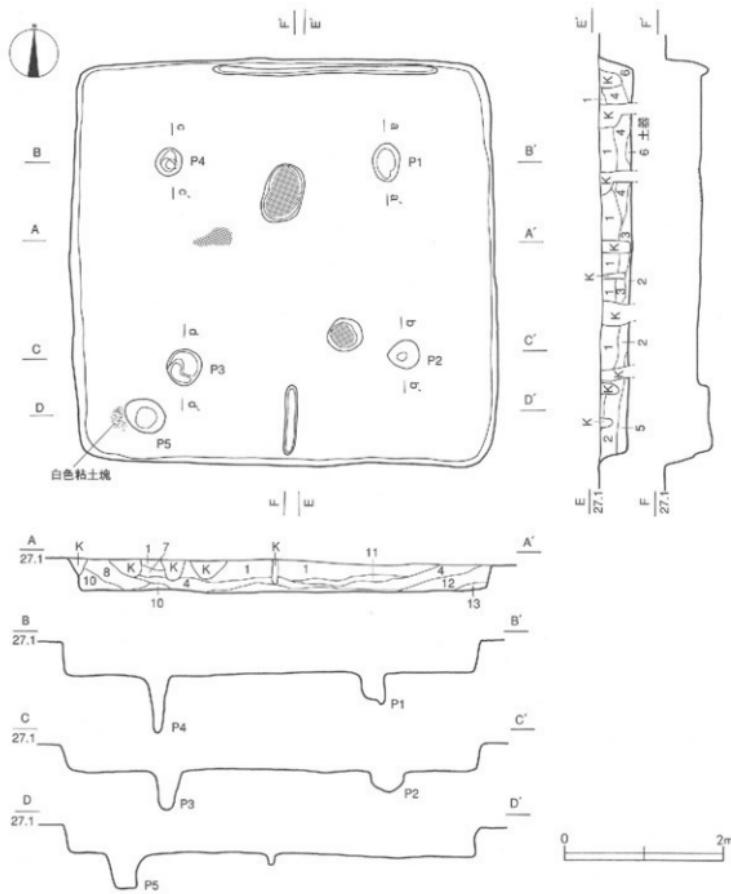
ピット 5基検出され、いずれも住居に伴うものである。P1（深さ28cm）、P2（深さ19cm）、P3（深さ23～70cm）、P4（深さ38cm）は柱穴、P5（深さ37cm）は貯蔵穴と、位置的に見て判断される。また、P2の西隣には焼土を含む浅い落ち込みがあった。

炉 径75×47cmの長楕円形で、炉床面は凹凸があるも、良く焼け締まる。

覆土 東西南北4方向でトレンチャーの搅乱がみられる。床面から覆土下層にかけて、3か所ほど焼土が散出した箇所があった。また住居南西隅には、貯蔵穴（P5）上場にかかるように白色粘土塊が発見された。12・13層の疊堆積に統いて、4・11・1層の水平堆積が生じたものと考える。

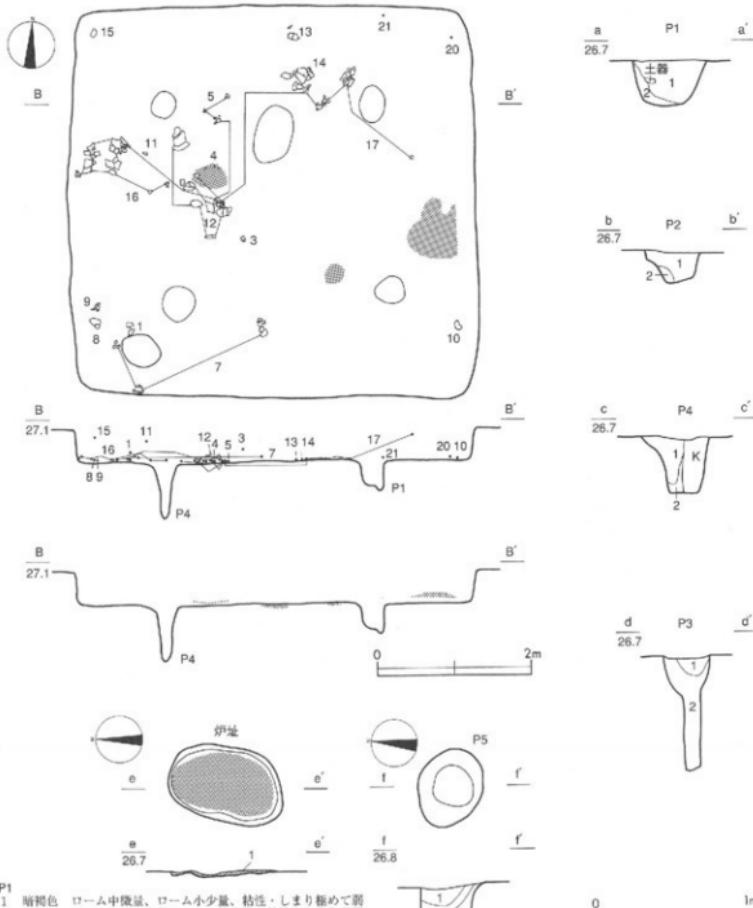
遺物 土師器などが出土した（1～21）。11・15・17は出土高から、廃棄遺物の可能性がある。

所見 本址は、出土遺物から判断して、古墳時代前期の竪穴住居址である。



- | | | |
|----|-----|------------------------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム大少量、中中量、粒多量、粘性極めて弱、しまり普通 |
| 2 | 褐色 | ローム大・中・小・粒多量、粘性普通、しまり強 |
| 3 | 黒褐色 | ローム小少量、粘性極めて弱、しまり普通 |
| 4 | 褐色 | ローム中・小・粒多量、黒色土粒中量、粘性・しまり弱 |
| 5 | 褐色 | ローム大少量、ローム粒中量、粘性・しまり普通 |
| 6 | 暗褐色 | ローム小・炭化物少量、燒土粒微量 |
| 7 | 暗褐色 | ローム粒中量、粘性普通、しまり弱 |
| 8 | 黒褐色 | ローム粒多量、粘性弱、しまり普通 |
| 9 | 褐色 | ローム粒中量 |
| 10 | 暗褐色 | ローム小少量、ローム粒微量、粘性・しまり弱 |
| 11 | 暗褐色 | ローム粒・炭化物少量、粘性弱、しまり極めて弱 |
| 12 | 褐色 | ローム粒少量、燒土粒中量、粘性極めて弱、しまり強 |
| 13 | 灰褐色 | ローム粒・燒土粒微量、炭化物中量、粘性極めて弱、しまり弱 |

第13図 9-6号住居址検出状況



P1
1. 暗褐色 ローム中微量、ローム小量、粘性・しまり極めて弱
2. 褐色 ローム中・小少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱

P2
1. 暗褐色 ローム小少量、ローム粒中量、粘性・しまり弱
2. 暗褐色 ローム小・粒少、粘性普通、しまり弱

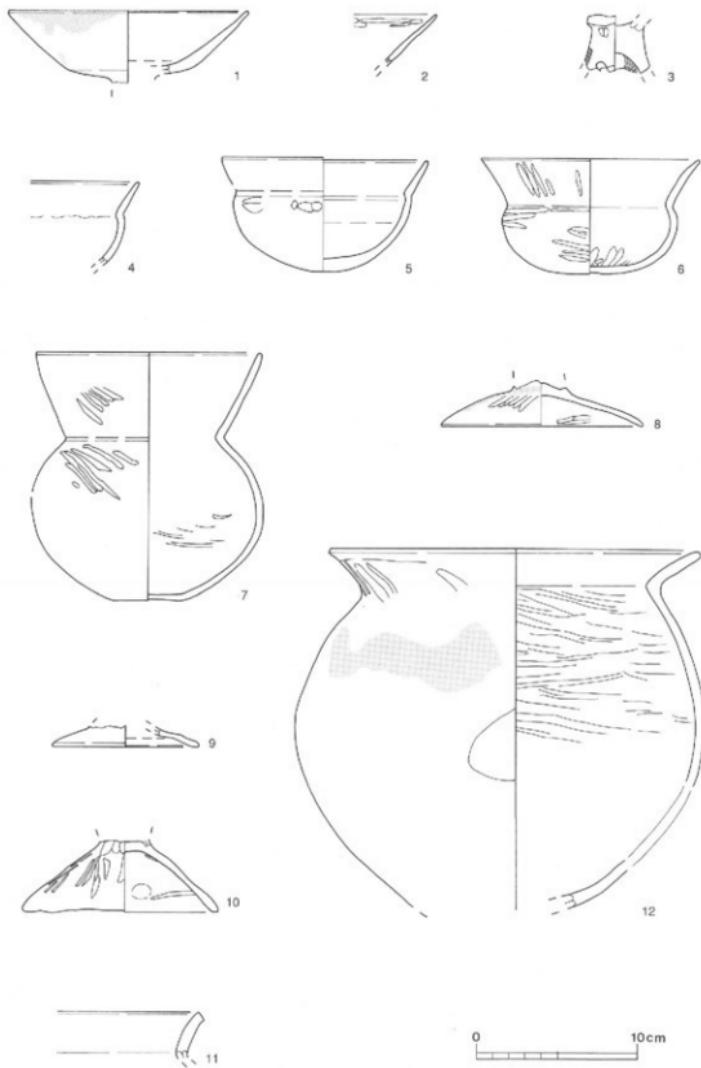
P4
1. 暗褐色 ローム中・小少量、ローム粒微量、粘性弱、しまり極めて弱
2. 褐色 ローム中・小中量、ローム小・粒中量、粘性普通、しまり弱

P3
1. 暗褐色 ローム小少量、粘性弱、しまり極めて弱
2. 褐色 ローム中少、ローム小・粒少、粘性・しまり弱

炉址
1. 褐色 ローム粒・洗土中・小少、燒土粒中量、粘性弱、しまり普通

貯糞穴 (P5)
1. 暗褐色 ローム小少量、粘性極めて弱、しまり弱
2. 褐色 ローム中量、ローム粒少量、粘性弱、しまり普通
3. 暗褐色 ローム小・粒多量、粘性極めて弱、しまり弱
4. 褐色 ローム中・小中量、ローム粒多量、粘性弱、しまり強

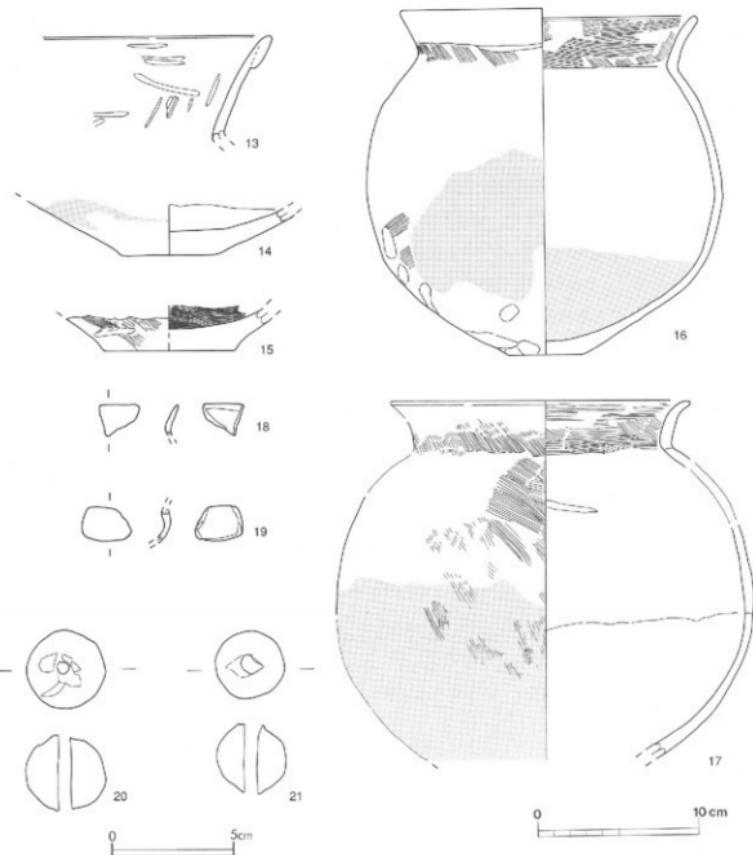
第14図 9 6号居住址遺物出土状況



第15図 9 6号住居址出土遺物①

96号住居址出土遺物観察表

団体No	器 器	種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 上	色 調	器 形・技 法の特 徴	備 考
1	土師器 高杯 杯部	A C	14.7 (44)	覆土中層 30%	堅密	長石少量 石英少量 雲母微量	橙色	杯部底面は平底だが、直線的に体部は立上がる。体部外側と内面は丁寧なナデ、それ以外はヘラミガキを施す。口唇部に保付着。	
2	土師器 高杯又は培 口縁部	C	(3.2)	覆土中 15%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	明赤褐色	外傾して立上がる口縁部片。外表面は斜位、内面は横位のヘラミガキが施される。内外面赤彩。	
3	土師器 器台 器部	C 孔詳	(3.8) (0.6)	覆土中層 5%	良好	長石較少量 石英少量 雲母微量	橙色	3か所穿孔される。外表面は底位にハケメを施した上、種々のヘラミガキ。内面はハケメを残す。	
4	土師器 培 口縁～胴部	C	(5.3)	覆土下層 10%	良好	石英多量 小石片少量	にぶい橙色	口縁部は外傾して立上がる。内外面共に粗いナデを基調とする。口縁部に赤彩痕が残る。	
5	土師器 培 口縁～底部	A B C	[12.6] 1.7 6.9	覆土下層 50%	不良	長石少量 石英多量	明赤褐色	底面は幅狭で、胴部上半に最大径をもつ。胴部は球状に立ち上り、外反する。内外面共にナデを基調とする。外面・口縁部内面赤彩。	
6	土師器 培 口縁～底部	A B C	[13.4] 1.9 7.1	薪窓穴 覆土中 25%	良好	長石少量 石英微量	明赤褐色	底部は僅かにこみ、胴部上半に最大径をもつ。口縁は外反気味に立ち上り。内底面は敷射状、体部外表面は横位。口縁は底位のヘラミガキ。	
7	土師器 培 口縁～底部	A B C	13.8 4.0 15.4	覆土下層	堅密	長石極微量 赤色微微量	赤色	底部は僅かに凹み、胴部中位に最大径をもつ。口縁は外反気味に立ち上り。全体にヘラミガキ調整を施す。外面・口縁内面赤彩。	
8	土師器 高杯 瓶部	B C	12.3 (2.5)	覆土下層 15%	良好	長石較少量 石英微量	橙色	瓶部から僅かに立ち上り、軸部横合面に至る。外表面部・内面は横ナデ、それ以外はヘラミガキを施す。一部二次焼成を受ける。	
9	土師器 高杯 瓶部	B C	8.9 (1.2)	覆土下層 10%	不良	長石粒微量 石英微量	橙色	接缝面から僅かに立ち上り、胴部へすばまる。外表面部はハケメの上をナデ、それ以外は横ナデを基調とする。	
10	土師器 器台又は高杯 器部	B C	12.1 (4.5)	床面直上 20%	良好	長石少量 石英少量	橙色	器部から内傾して立上がり、軸部接合面にすばまる。内外面共に、ナデの上にヘラミガキを施す。台付器の台部の可能性あり。	
11	土師器 裏 口縁部	C	(2.6)	覆土上層 5%	不良	長石粒微量	にぶい褐色	外傾して立上がり、外表面口縁部には横5mmで、而取られる。内外面共に横ナデ。外表面付着。	
12	土師器 裏 口縁～胴部	A C	22.8 (22.1)	覆土下層 70%	良好	長石少量 石英微量	橙色	L1器部3~4mm幅で面取り。内外面共にナデを基本的な調整をする。内面及び胴部外面上半に焼が多量に付着する。	
13	土師器 裏 口縁部	C	(6.2)	床面直上 15%	不良	長石多量 石英多量	にぶい褐色	外傾して立上がり、口縁部外表面は帯状の粘土が付加される。内外面ともに横位のナデ。外表面は一部ミガキが施される。横合口縁。	
14	土師器 蓋 器部	B C	6.0 (2.2)	覆土上層 20%	不良	長石多量 石英多量	明赤褐色	底面中央が僅かに凹み、体部は外傾して立上がる。体部は横位のヘラナデ、底面はヘラケズリ。外表面に窪付着。	
15	土師器 蓋 器部	B C	[8.0] (2.0)	床面直上 10%	良好	長石粒少量	にぶい橙色	底面は平底で体部は外反する。底面はナデ、胴部外表面はハケメの上をナデ、内面はハケメを施す。	
16	土師器 裏 口縁～底部	A B C	18.2 4.8 21.2	覆土下層 90%	良好	長石多量 石英少量	にぶい赤褐色	L1器部外表面は横ナデ。器部はハケメをナデ削す。内面はハケメ。内底面に保付着。胴部外面向に二次焼成。	
17	土師器 裏 口縁～胴部	A C	[18.4] (21.9)	覆土上層 70%	良好	長石多量 石英微量	橙色	外表面はハケメの上をナデ。口縁部内面に横位のハケメ、胴部外表面に横付着。口縁部は外反する。	



第16図 9-6号住居址出土遺物②

図版No	器種形	法量 (cm.)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
18	土製品 ミニチュア 口縁部	C (2.0)	覆土中 10%	堅緻	長石微量 良土	明赤褐色	ナデ成形による小型の壺の可能性あり。接合はしないが19と同一個体である。	
19	土製品 ミニチュア 体部	C (2.1)	覆土中 10%	堅緻	長石微量 良土	明赤褐色	ナデ成形による小型の壺の可能性あり。接合はしないが18と同一個体である。	
20	土製品 上玉	長 3.3 幅 3.2 孔径 0.5	床面直上 95%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	にぼい黄褐色	不均一な球形体を呈し、全体に丹念にミガキが施される。部分的に黒褐色を呈する。 重量30.2g	
21	土製品 下玉	長 2.9 幅 2.9 孔径 0.7	床面直上 95%	良好	長石微量 石英微量 雲母微量	にぼい褐色	球形体をなし、穿孔部は粘土が僅かに反り返る。全体の約半分は、黒褐色を呈する。 重量20.8g	

97号住居址〔第17~20図 P L 7・45・46〕

位置 T-29・30区、U-29・30・31区、V-30区にあり、北西壁の一部がイモ穴によつて壊されている。

主軸方向 N-43°-W

規模と形状 径580(~520)×508(~480)cm四方の、台形プランを呈する。

壁面 深さ20~30cmで垂直気味に立ち上がる。壁溝は、北西(深さ6cm)・北東(深さ6~10cm)・南東辺(深さ8cm)の壁沿いに部分的に検出された。

床面 全面に貼り床が見られるが、南側と壁寄りは密度が薄い。トレンチャーの搅乱あり。

ピット 5基検出された(P1~P5)。位置から考えてP1・P2(深さ16~18cm)・P3(深さ18cm)・P4は柱穴、P5は貯蔵穴(深さ20~23cm)と判断される。

炉 住居内北寄りに1基検出された。径93×71cmの梢円形を呈し、焼土を多く含む。

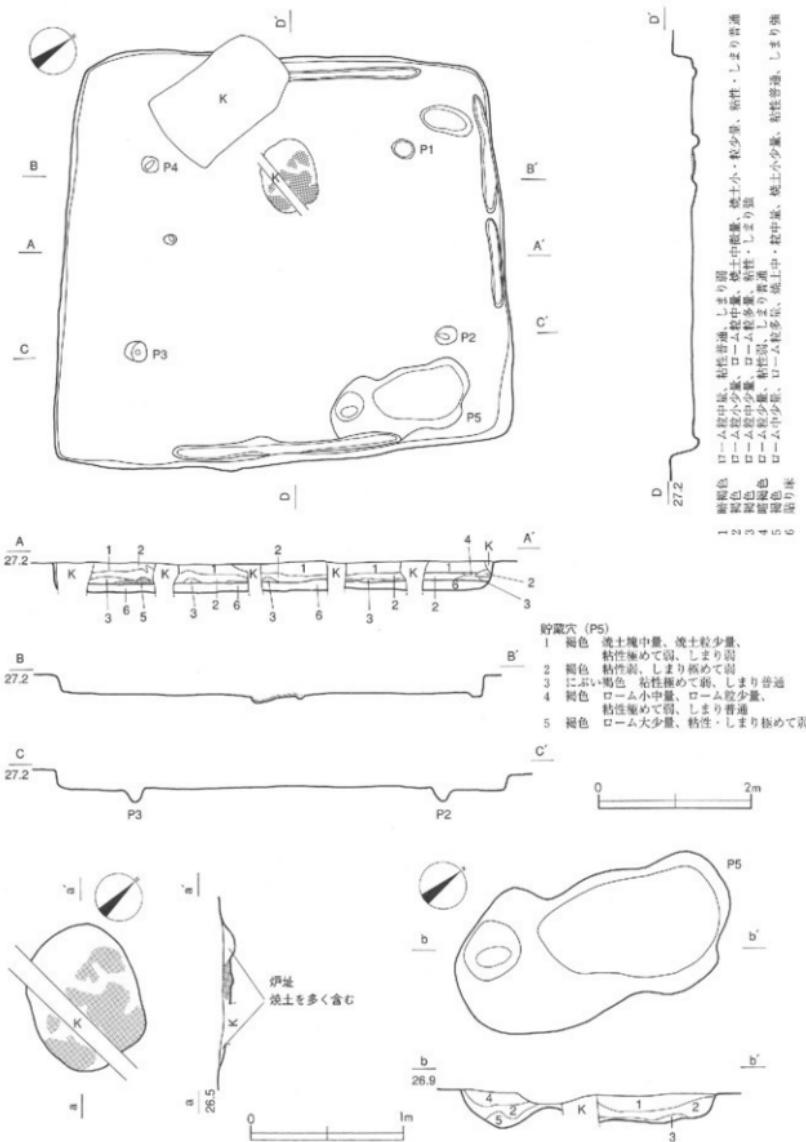
覆土 トレンチャーによる搅乱を受ける。6層は床面構築土。床面上には焼土(5層)が2~20cm厚で堆積する。層序は、3層が壁堆積として初めに堆積し、1・2層がこれに続く。

遺物 土器器(1~11)が出上している。10以外は住居廃絶時に伴うものと判断される。

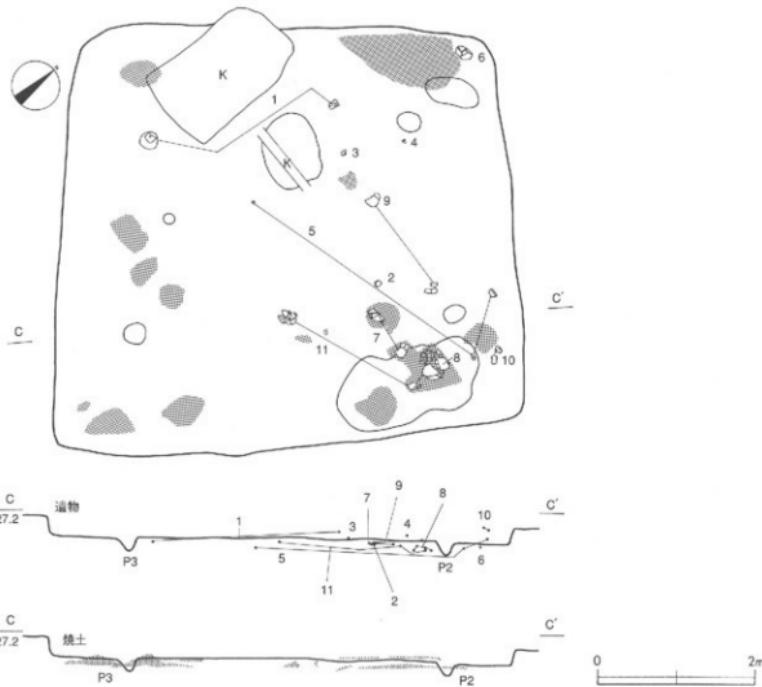
所見 本址は、出土遺物から判断して古墳時代前期の堅穴住居址である。

97号住居址出土遺物觀察表

固版No	器種 器形	法寸 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 特殊器台 受部	A [23.2] B [23.2] C [23.2]	覆土下層 受部高3.9 孔径 15	良好	良土	褐色	受部は直立した後、大きく外反する。受部外 面は丹念なヘラミガキ。内面はナデを基調と する。内底面に穿孔あり。	
2	土師器 壇 胸~底部	B 4.0 C (4.8)	床面直上 60%	良好	長石粒微量 石英少量	にぶい黄褐色	底部は微々に凹み、緩やかに立上がる。外側 ヘラミガキ、内面ナデ。外側赤彩と模付着。 底面に模羽根。	
3	土師器 壇? 口縁~肩部	A [6.4] C (4.8) 孔径 0.4	床面直上 25%	良好	長石粒微量	褐色	縁やかに直立した後、内湾気味にすぼまる口 縁部。内面直井に横位のヘラミガキ。2か所穿孔される。	
4	土師器 器台又は高杯 脚部	C (2.8)	覆土下層 10%	無焼	長石粒微量	赤褐色	外側は縱位、内面は横位のヘラミガキ。内外 赤彩される。	
5	土師器 壇 口縁~底部	A 12.8 B 6.0 C 6.6	覆土下層~ 貯蔵穴中層 口縁~底部	良好	長石粒微量 石英少量	赤褐色	口縁部はS字状を呈する。底面は丸く凹み、 縁やかに立上がる。口縁部は横ナゲ、脚部指頭 部の上、横ナデ、脚部ヘラミガキ。赤彩。	
6	土師器 壇 口縁部	A [23.8] C (8.1)	床面直上 40%	良好	長石多量 石英微量	にぶい黄褐色	有段口縁。縁部から外反気味に立上り、段を 生じて更に外反する。外側はハケメの上を横 ナゲ。内面は丹念なヘラミガキ。	
7	土師器 壇 脚部上半	C (13.5)	床面直上 40%	良好	石英少量 良土	浅黃褐色	脚部中位下半に最大径をもつ下膨れ状の脚部。 脚部中位は横位のヘラミガキ。内面は横ナデ。 外側に模付着。	
8	土師器 壇 口縁~肩部	A 17.6 C (14.5)	貯蔵穴 下層 40%	普通	長石粒少量 石英少量	褐色	口縁部は縱位、肩部外面は斜位、口縁部内面 は横位のハケメ。口部は横ナゲ。脚部内面 はヘラナデ。	
9	土師器 壇 口縁~肩部	A [18.6] C (15.6)	床面直上 25%	良好	長石粒微量 石英微量	褐色	口縁部外縁は横ナデの上を縱位のハケメ、内 面は横ナゲ。肩部外縁は斜位と縱位のハケメ、 内面はヘラナデ。外側に模付着。	

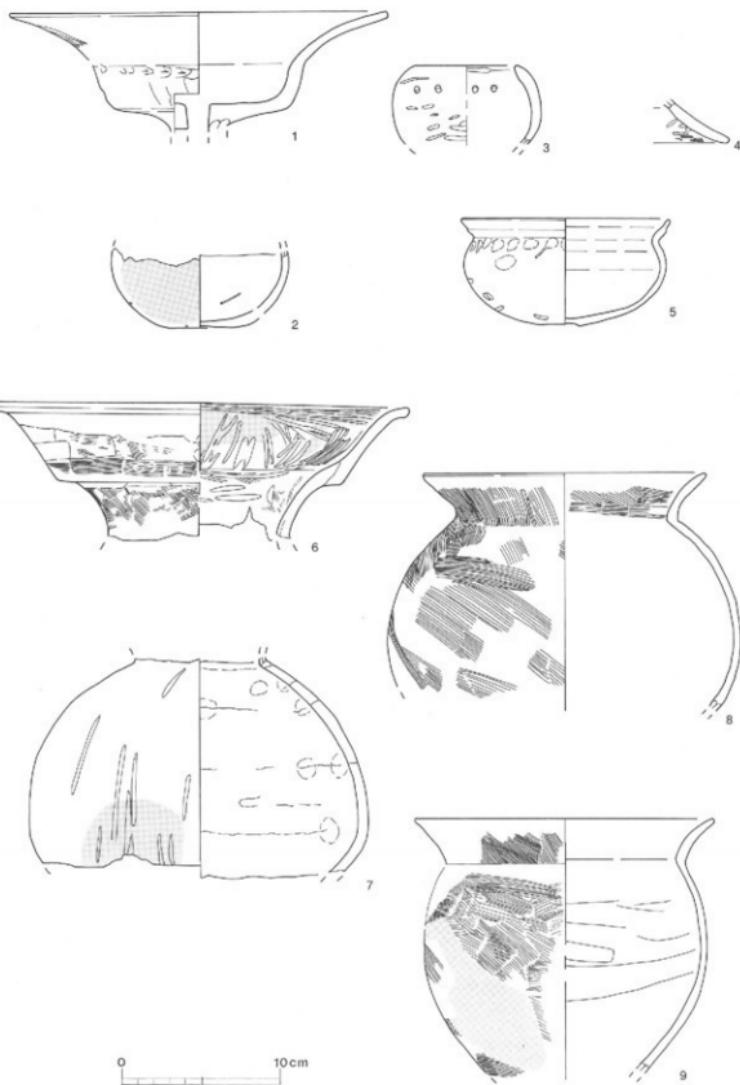


第17図 97号住居址検出状況

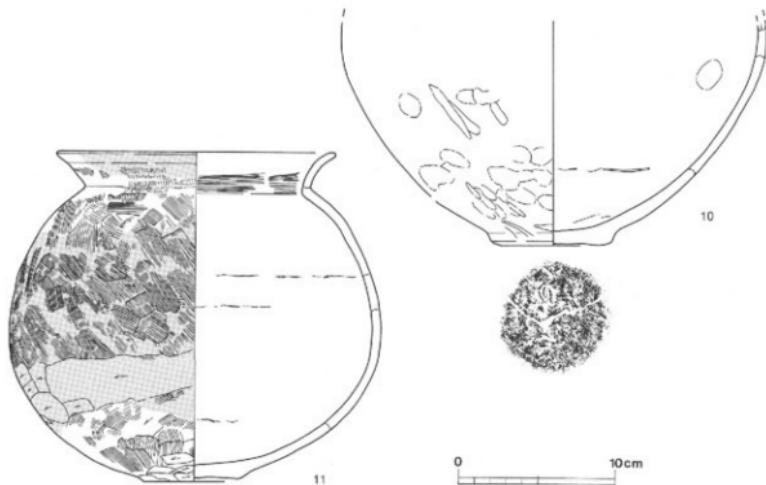


第18図 9-7号住居址遺物出土状況

回収No	器種 種形	法量 (cm)	出土位置 発見率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
10	土師器 甕 胴～底部	B C (14.0)	覆土上層 25%	良好	長石微量 石英微量 良土	にぶい黄褐色	底部は8mmほど高台状に隆起し、緩やかに球状に立上がる。外面・底面はヘラミガキ。内面ナナフ。底部外面に刷毛痕。	
11	土師器 甕 口縁～底部	A B C	亂上下層～ 貯藏穴下層 80%	良好	長石粒少量	にぶい黄褐色	外面と口縁部内面はハケメの上をナデ。胴部内面はヘラナフと接着痕を残す。胴部外面中位と内底面に煤付着。	



第19図 9-7号住居址出土遺物①



第20図 97号住居址出土遺物②

98号住居址〔第21図 P L 8・46〕

位置 V・W-28区

主軸方向 N-4°-E

規模と形状 径350×304cmの隅丸方形を呈する。

壁面 深さ6cmで緩やかに立ち上がる。壁溝は確認できなかった。

床面 中央が若干踏み締まるのみで、不明確である。

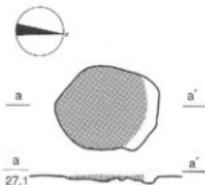
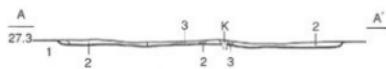
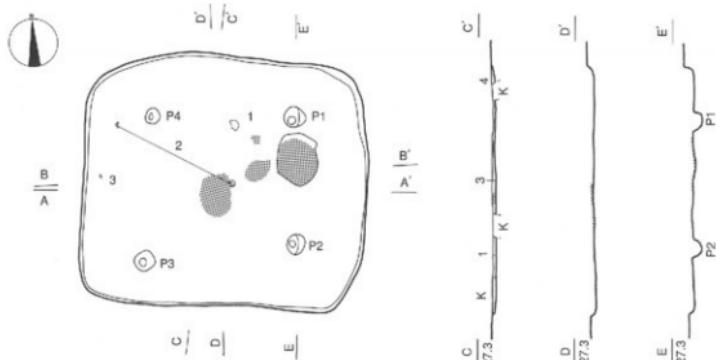
ピット 4基(P1~4)確認され、P1(深さ11cm)・P2(深さ10cm)・P3・P4とともに、位置的に柱穴と考えられる。

炉 住居中央から北西寄りに一基発見された。65×51cmの不整形円形を呈し、焼土が2~4cm厚で堆積する。

覆土 4~6cm厚で、3層に分層された。また、住居中央に3か所焼土が検出された。トレンチャーによる破壊が著しい。

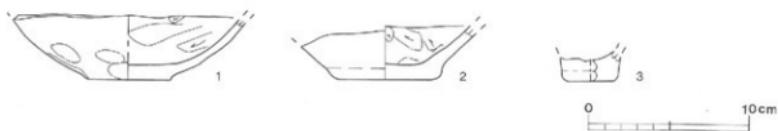
遺物 土師器(1~3)が出土した。

所見 出土遺物から判断すると、古墳時代前期の堅穴住居址と考えられる。



- 1 茶色 ローム粒少量、粘性弱、しまり普通
2 茶色 ローム粒・焼土粒微量、粘性弱、しまり普通
3 茶色 ローム粒少量、焼土粒中量、粘性弱、しまり普通
4 茶色 ローム小粒量、焼土粒量、粘性・しまり普通

炉址
1 暗赤褐色 烧土粒微量、粘性極めて弱、しまり弱



第21図 98号住居址検出状況・出土遺物

9 8号住居址出土遺物観察表

図版No	器種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	十脚器 壺 肩~底部	B 5.4 C (3.6)	底面以上 25%	普通	長石粒多量	明赤褐色	外側は僅かに凹み、胴部にかけて緩やかに立上る。外側は底部付近を粗くハラ割りの上、ナゲ。内面はナゲ調整。	
2	上部器 壺 肩~底部	B 6.3 C (2.9)	覆土上層 75%	普通	長石粒少量	褐色	底面は僅かに凹み、外側して立上がる。底面・外側は丁寧なナゲを基調とし、内面もヘウナゲによる。	
3	十脚器 小判壺? 底部	B [2.9] C (1.5)	覆土上層 25%	普通	長石粒微量 良土	にほい黄橙 色	底部は厚みをもち、胴部は外に向く。調整はナゲを基調とする。手づくね成形である。	

9 9号住居址〔第22図 P L 9・46〕

位置 W・X - 2 6・2 7区

主軸方向 N - 2 0° - W

規模と形状 径438 (～466) × 346 (～358) cmの台形プラン。北西隅の張り出しあは、状況的にこの住居に伴うものとは考えにくい。

壁面 深さ 6 (～12) cmでなだらかに立ち上がる。壁溝 (深さ 4 ~ 8 cm) は、東壁と西壁の一部を除いて周回する。

床面 貼り床状ではなく、平坦である。

ピット 検出数 2 基。P 1 は深さ11cm、P 2 は深さ18cmで、位置的なものを考慮すると、P 1 は柱穴、P 2 は貯蔵穴の可能性を想定できる。

炉 住居内北西寄りにあり、径108×78cmの不整形である。南側がトレンチャーに搅乱され、正確な形状を捉えきれない。

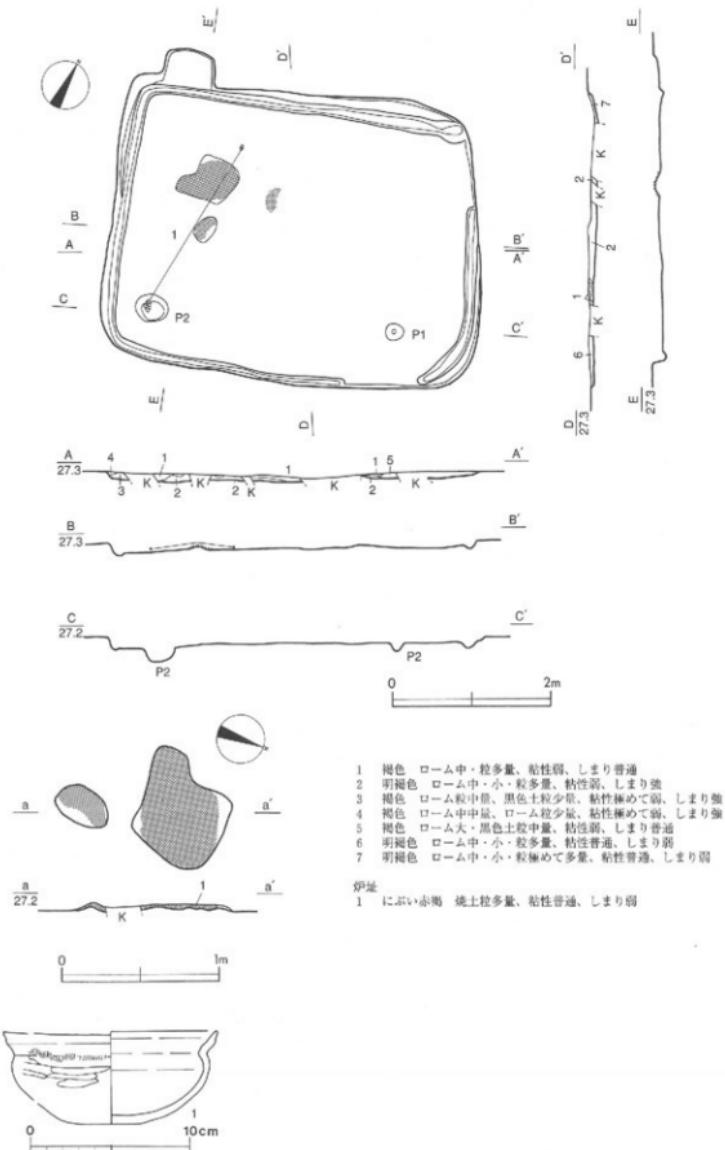
覆土 トレンチャー・搅乱により破壊を受ける。また、住居中央に焼土が一部分分布する。細分したが、自然堆積であろう。

遺物 土師器 (1) が出土した。

所見 本址は、出土遺物から判断して古墳時代前期の堅穴住居址である。

9 9号住居址出土遺物観察表

図版No	器種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	粘土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	十脚器 壺 口縁~底部	A [3.2] B 3.5 C 5.7	覆土下層 40%	普通	長石粒少量 石英少量	赤褐色	丸底の底部から緩やかに立上り、口縁部は内外面共にS字に屈曲する。口縁は横ナゲ、頸部はハケメ、体部横位のヘラミガキ。赤彩。	



第22図 9-9号住居址検出状況・出土遺物

100号住居址〔第23~25図 P L10・47〕

位置 Z-25・26区、2A-25・26区

主軸方向 N-22°-W

規模と形状 645×580cmの方形プランを呈する。

壁面 深さ約30cmで、わずかに外傾して立ち上がる。壁溝は全辺（深さ北辺8cm・南辺6cm・東西辺10cm）途切れながらも周回する。

床面 全体に貼り床状を呈する。トレンチャーによる破壊が著しい。

ピット 6基確認された（P1~P6）。P1（深さ72cm）・P2・P3・P4（深さ84cm）は位置から柱穴と考える。P5（51cm）は貯蔵穴であろう。P6及びP1・P2間のピットと南壁沿いのピットも、用途は不明ながら、当住居に伴う可能性がある。

炉 住居中央よりやや北西に偏する。91×88cmの円形で、深さ約5~8cmの落ち込みがある。

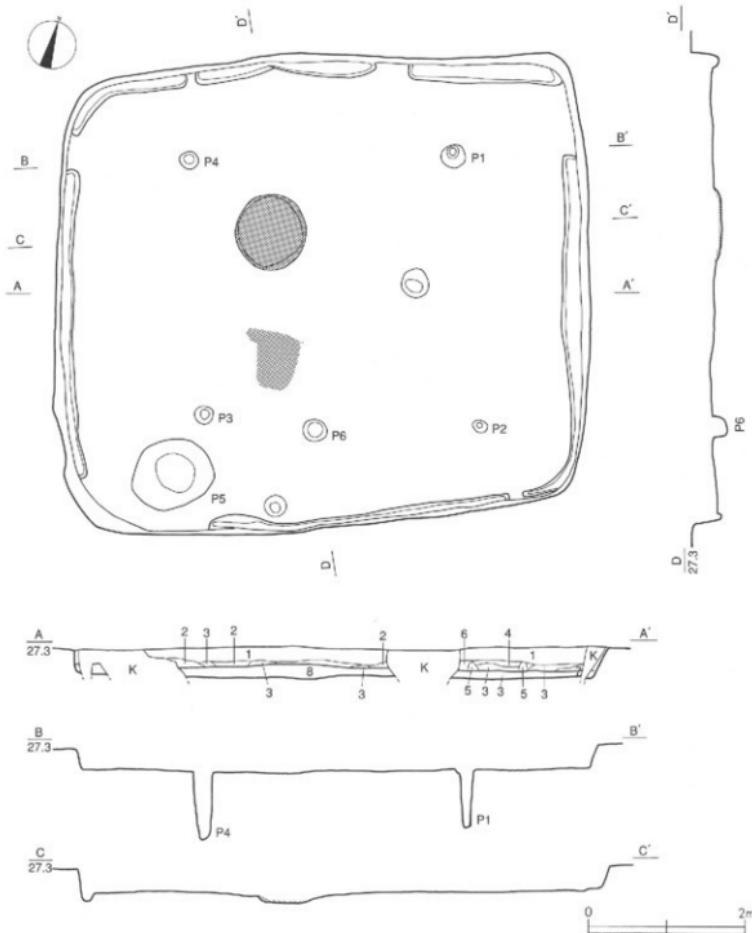
覆土 トレンチャーなどの搅乱が著しい。8層は床面構築土である。2・7層を壁堆積とし、その上に1層が水平に重なる。また、第24図のように焼土と炭化物（材）が住居内全体から多量に出土した。両者はレベル的にはほとんど重複する。

遺物 土器部（1~5）・土玉（6・7）が出土した。特に3は、東海地方西部のS字状口縁甕の影響を受けた甕で、色調や質感が在地産の甕とはやや異なっている。6・7はレベル高から判断して、廃棄遺物かもしれない。

所見 本址は、出土遺物から判断して、古墳時代前期の竪穴住居址である。焼土・炭化物の量からこの住居址は、焼失住居に相当するものと考える。

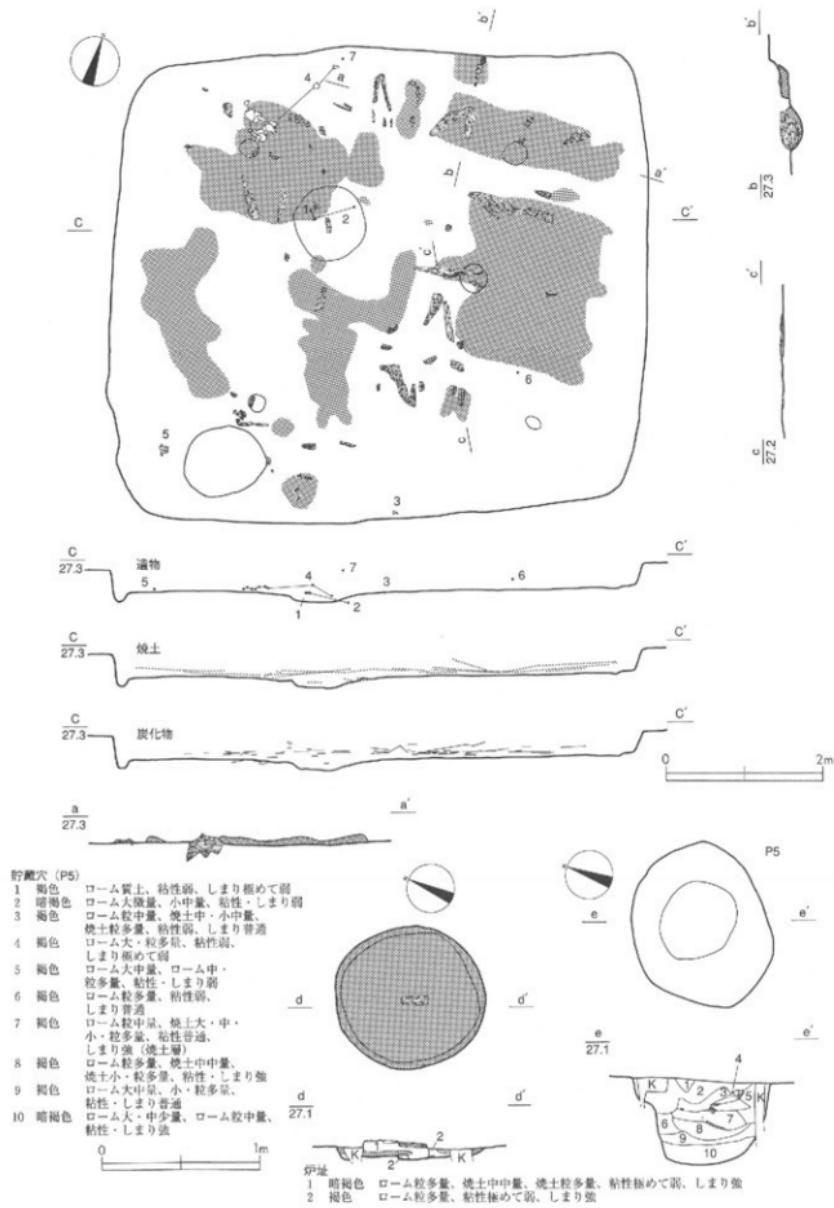
100号住居址出土遺物観察表

図版No	器種	法 量 (cm)	出土箇 所 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	土器部 器台 受部～脚部	A C	7.4 (5.8)	炉板上層 55%	良好 長石少量 石英微量 雲母微量	にふい橙色	船部外側は底板、受部は輕かにハケメを残すほか、横位のヘラミガキ。底部内面はナデ。脚部に3か所穿孔される。赤彩。	
				炉板上層 30%	良好	長石粒微量		
2	土器部 器台 受部～脚部	A C	[6.9] (5.7)	炉板上層	良好	明赤褐色	脚部外側は板状、受部は横位のヘラミガキ。底部内面はヘラミガキ。口唇部外側は3mm幅で取り、脚部に3か所穿孔される。赤彩。	
3	土器部 器台 口縁部	A C	[15.2] (4.8)	床面直上 13%	良好 長石少量 石英少量 雲母微量	にふい黄褐色	S字状口縁。器壁は3mmと薄い。口唇部内面は焼ナデ。体部外側は脚部寄りに擦痕、体部側が横位のハケメを施す。	
4	土器部 器台 脚～底部	B C	10.1 (26.0)	覆土中層 40%	良好 長石粒微量 良土	にふい褐色	平底の底部から球状に立上がる。外側はハケメの上に丹念なナデとヘラミガキ。内面はヘラナデ。	
5	土器部 小型甕？ 口縁～底部	A B C	[9.4] 4.1 9.2	覆土下層 50%	良好 長石粒微量	黒褐色	平底の底面から球状に外傾して立上り、口縁はやや外反する。外側はハケメ、内面はナデ。全面に焼付着。	
6	土製品 土玉	長 幅 孔径	2.9 2.7 0.6	覆土中層 完形	良好 長石少量 雲母微量	にふい黄褐色	丹念にミガキを施す。表面が數か所残る。一方の穿孔部は隆起する。部分的に黒褐色を呈する。	重量17.1g
7	土製品 土玉	長 幅 孔径	3.2 3.0 0.6	覆土下層 完形	良好 長石少量 石英微量 雲母微量	明褐色	不整方向のミガキを施す。半分は黒褐色。一方の穿孔部は隆起する。	重量248g

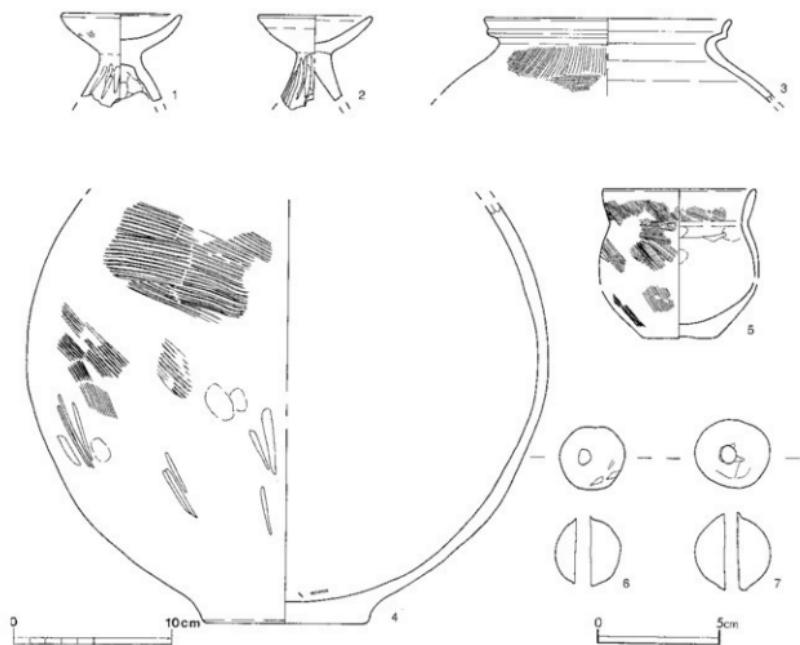


- 1 白色 ローム小・粒多量、地上微量、粘性弱、しまり普通
- 2 白色 ローム中・小・粒多量、粘性普通、しまり弱（焼失時の人为堆積）
- 3 にぶい赤褐色 ローム粒少量、焼土・炭化物多量、粘性・しまり弱（焼失時の住居建基材）
- 4 白色 ローム粒少量、焼土粒微量、粘性極めて弱、しまり普通
- 5 黄褐色 ローム質土（焼失時の人为堆積）
- 6 黄褐色 ローム粒少量、地上・皮化物中量、粘性・しまり普通（焼失時の人为堆積）
- 7 にぶい赤褐色 ローム粒少量、焼土・炭化物微量、粘性・しまり極めて弱
- 8 明褐色 ロームブロック多量、焼土粒・炭化物微量（貼り床）

第23図 100号住居址検出状況



第24図 100号住居址遺物出土状況



第25図 100号住居址出土遺物

101号住居址〔第26図 P L 11・47〕

位置 T・U-29区

主軸方向 N-9°-W

重複関係 10号溝に切られる。また、南半は所謂イモ穴に大きく搅乱される。

規模と形状 392×(346)cmの方形（推定）プランを呈する。

壁面 深さ4～7cmでわずかに垂直に立ち上がる。壁溝は検出されなかった。

床面 10号溝に切られて、東西に若干貼り床が残る。貼り床は部分的に鳥状に分布し、壁下までは至らない。

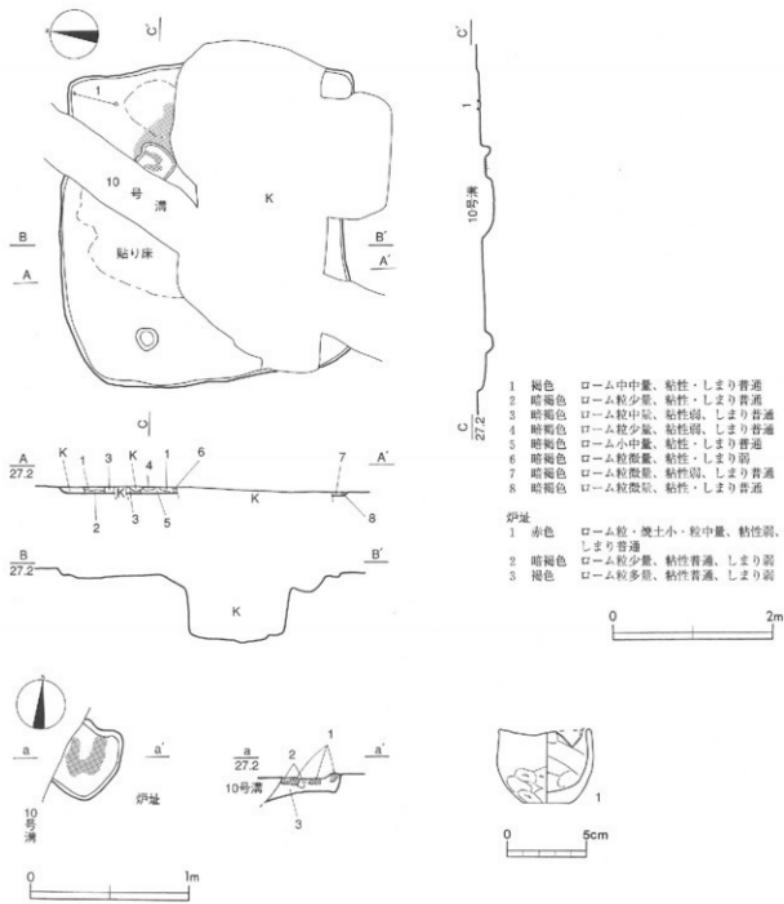
ピット 住居内北東に1基、確認された。深さ11cmで柱穴の可能性がある。

炉 径50×(37)cmの不整形を呈し、10号溝に切られる。焼土を上層に多く含んでいる。

覆土 イモ穴のほかにトレンチャーガ縦横にはしり、搅乱される。住居内北東部には炭化物が分布する。

遺物 土師器の小型壺が1点（1）、出土している。

所見 本址は、出土遺物から判断して、古墳時代前期の堅穴住居址である。



第26図 1001号住居址検出状況・出土遺物

1001号住居址出土遺物観察表

図版No	器種 形態	法量 (cm)	出土位置 残存率	地成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	上踏面 小型要 割・底部	A 5.7 B 3.0 C 4.6	床面上 70%	良好	良石粒少量	褐色	平底の底部から側面に直立して立上がる。内 外表面はナダを基調とし、底面削りをヘラ削り する。手づくね成形。	

102号住居址〔第27~30図 P L 12・47・48〕

位置 2A・2B・2C-29区、2B-28区。南壁はイモ穴に切られる。

主軸方向 N-33°-W

規模と形状 径632×492cmの方形を呈する。

壁面 10~14cm高で、緩やかに立ち上がる。南西壁から垂直に延びる落ち込み（長さ100cm）は、間仕切りの溝であろう。

床面 中央部には貼り床が残るが、周辺部には至らない。

ピット P1（深さ56cm）は、位置・形状から貯蔵穴と考えられる。この他、床面上に6基ほどピットが検出されたが、確実に伴うものと断言できない。

炉 住居内北半中央寄りに、1基検出された。径74×62cmの不整形で、炉床面は、良く焼けている。また、北半中央と南半中央に1基づつ、焼上塊がみられた。

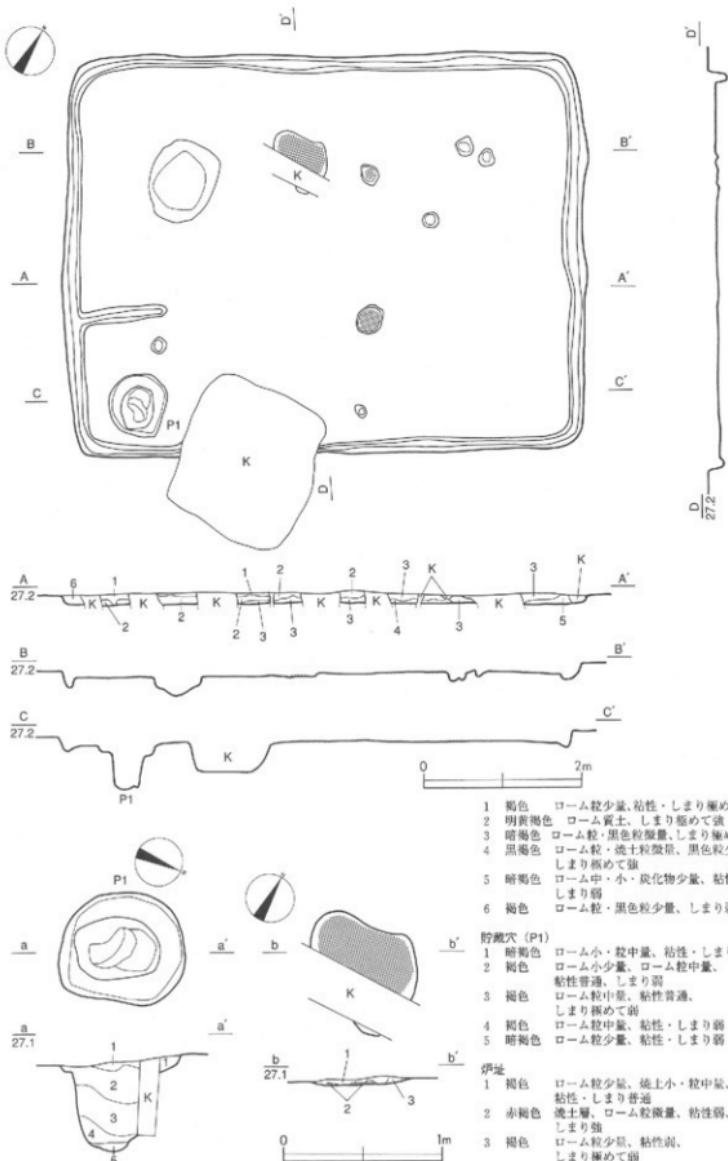
覆土 レンチマーによる擾乱が入る。層序は3・2・1層の順で、北東方向から水平堆積したものと考えられる。北東側には焼上片、貯蔵穴の上場には白色粘土小片がみられた。

遺物 土師器と土瓦が出土した。北壁と南隅に、ややまとまった分布がみられる。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居址と判断される。

102号住居址出土遺物観察表

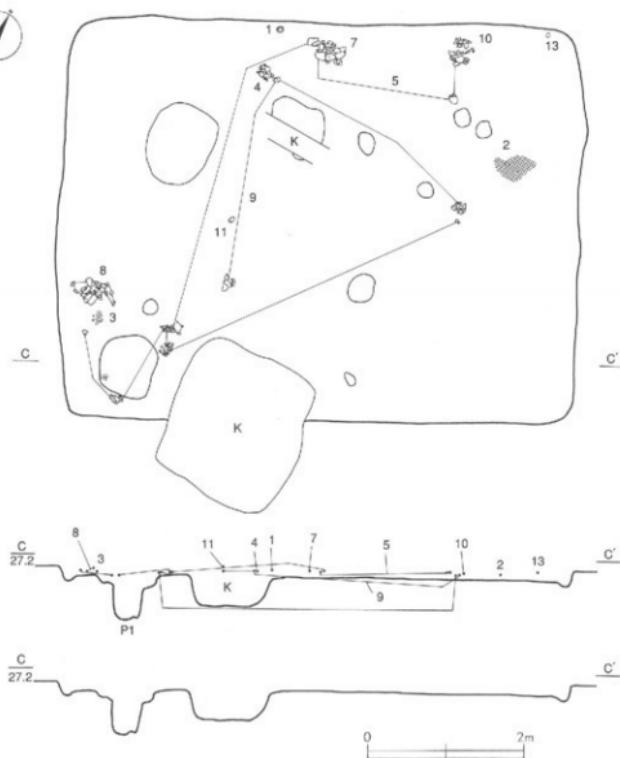
四版No	器種 形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壁 脚～底部	B C 2.0 (3.6)	覆土中層 90%	堅緻	長石少量 石英微量 雲母微量	橙色	底面は丸く凹み、緩やかに立上がる。外面は横位のヘラミガキ、内面はナデ。赤彩痕あり。	
2	土師器 高杯 脚部	C (8.0)	覆土下層 90%	堅緻	長石微量 石英微量 雲母微量	橙色	杯部に向かい除々にすぼまる面部。内面には円錐状の穴がなだれる。外面は縦位のヘラミガキ、赤彩痕あり。保付着。	
3	土師器 高杯 杯～脚部	C (4.5)	覆土下層 40%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	橙色	脚部はラック状に開く。杯部内面に煤付着。外面上縁位のハケメ。内面に粗いヘラナデ。	
4	土師器 壺 口縁～頸部	A C 16.8 (6.2)	覆土下層 80%	堅緻	長石微量 石英微量 雲母微量	橙色	肩部から外壁して立上がる。口縁部外面は絞り、唇がつき、ハケメの上にヘラナデ、内面はヘラミガキを各々施す。	
5	土師器 壺 口縁～脚部	A C [14.6] (25.6)	覆土中層 35%	良好	長石少量	にぶい橙色	壺形の体部から口縁部は外傾して立上がる。外面部共に丹念なナデとヘラミガキを基調とする。保付着。10と同一個体。	
6	土師器 壺 脚～底部	B C 5.4 (3.7)	覆土中層 30%	良好	長石多量 石英少量	橙色	底面から緩やかに外傾して立上がる。底部中央に12cmの空孔あり。外面縦位のヘラナデ、内面ハケメ。	
7	土師器 壺 口縁～脚部	A C [20.0] (22.4)	覆土中層 60%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	橙色	壺形の脚部から脚部は直立気味に立上がる。口縁部は有段口縁で、ハケメの上をヘラミガキ。外面赤彩痕あり。	
8	土師器 壺 口縁～脚部	A B C [16.4] [6.5] 21.4	覆土中層 60%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	にぶい橙色	平底で球状を呈する。口縁部はくの字状に外反する。口縁部横ナデ、胴部ヘラナデと一部ハケメ。外面部共に煤付着。	
9	土師器 壺 口縁～脚部	A C [16.8] (19.0)	覆土下層 25%	良好	長石微量 石英微量 雲母微量	橙色	球状で、くの字状に外反する。口縁部は横ナデ、胴部はヘラナデ。肩部に一部赤彩痕（？）あり。外面煤付着。	



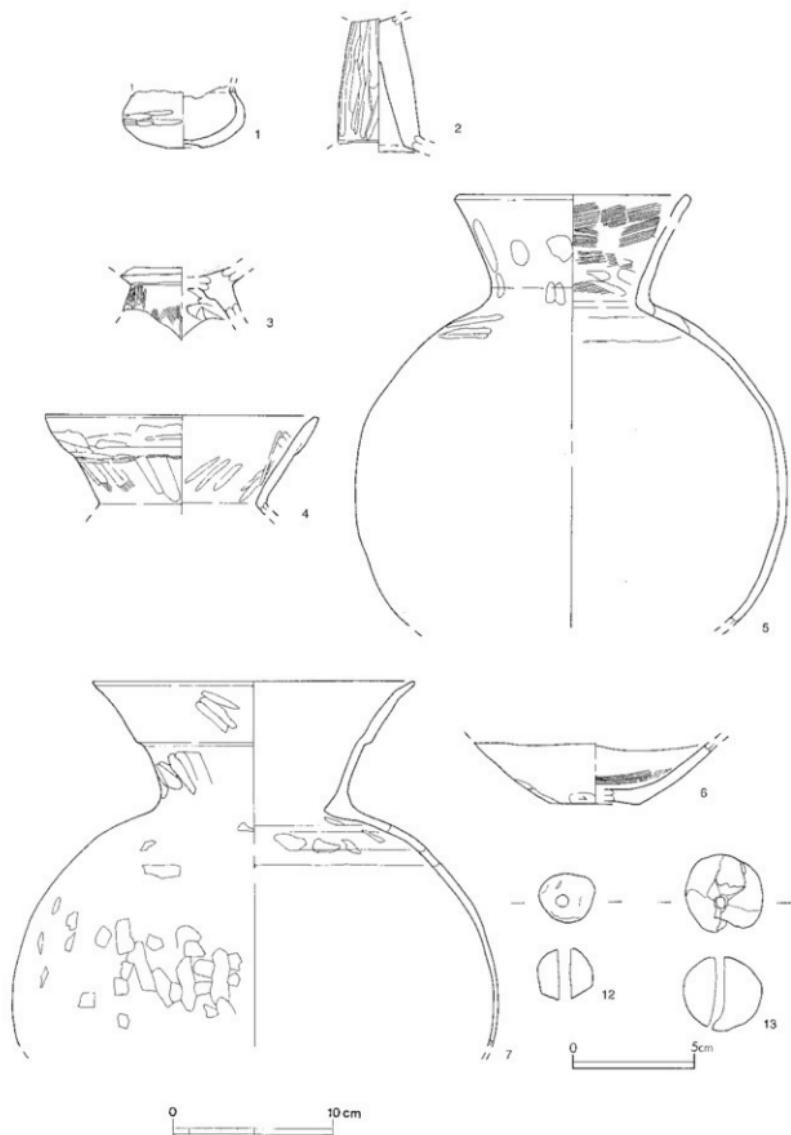
第27図 102号住居址検出状況

図版No	器種形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
10	土師器 壺底部	B C (4.8)	8.0 30%	良好	長石少量	にぶい褐色	平底底部から大きく外反する。5と同一個体。 底面は円弧のケズリ。外面は丹念なナナメミ ガキを施し、漆付着。	
12	土製品 土玉	長 幅 孔径	2.0 2.3 0.5	覆土中 35%	不良	長石微量 良土	にぶい黄褐色	器表は荒れているが、表面には赤彩痕(?)が 残る。
13	土製品 土玉	長 幅 孔径	3.0 3.2 0.4	覆土中層 70%	良好	長石多量 石英微量 雲母微量	明褐色	不均等な球形を呈する。全体にミガキが施さ れる。穿孔部には傷がある。

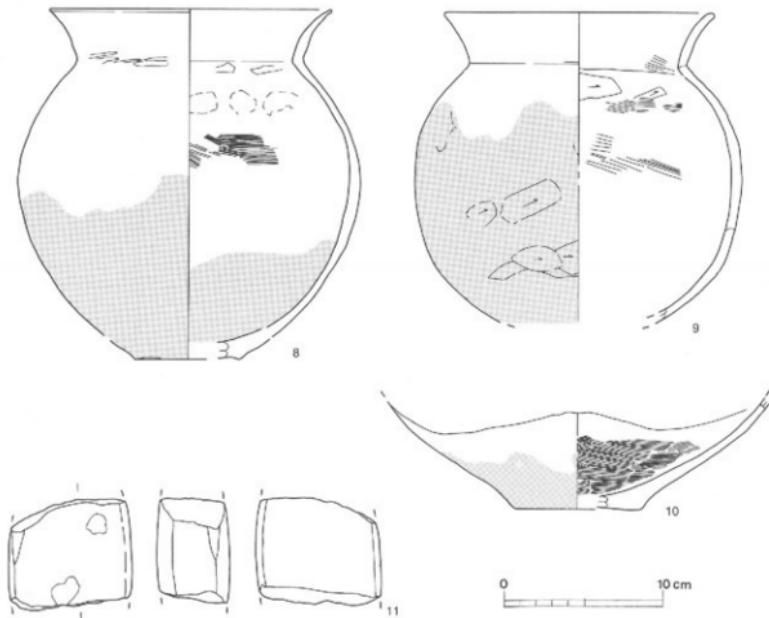
図版No	形 状	法量 (cm)	出土位置 残存率	混入物	色 調	石 材	特 徴	備 考
11	石器 磨製石斧片	長 幅 厚	(5.7) 7.5 4.2	覆土中層 100%	—	褐灰色	砂岩	遺存面は4面あり、いずれも良く磨かれてい る。 2か所座みあり。一部被熱する。



第28図 102号住居址遺物出土状況



第29図 102号住居址出土遺物①



第30図 102号住居址出土遺物②

103号住居址〔第31図 P L13〕

位置 2A・2B・28・29区。

主軸方向 N-69°-E

規模と形状 正確な規模は不明であるが、貼り床の範囲は方形である。

壁面 確認されなかった。

床面 494(460)×391(374)cmの方形の範囲に、明瞭な貼り床が確認された。

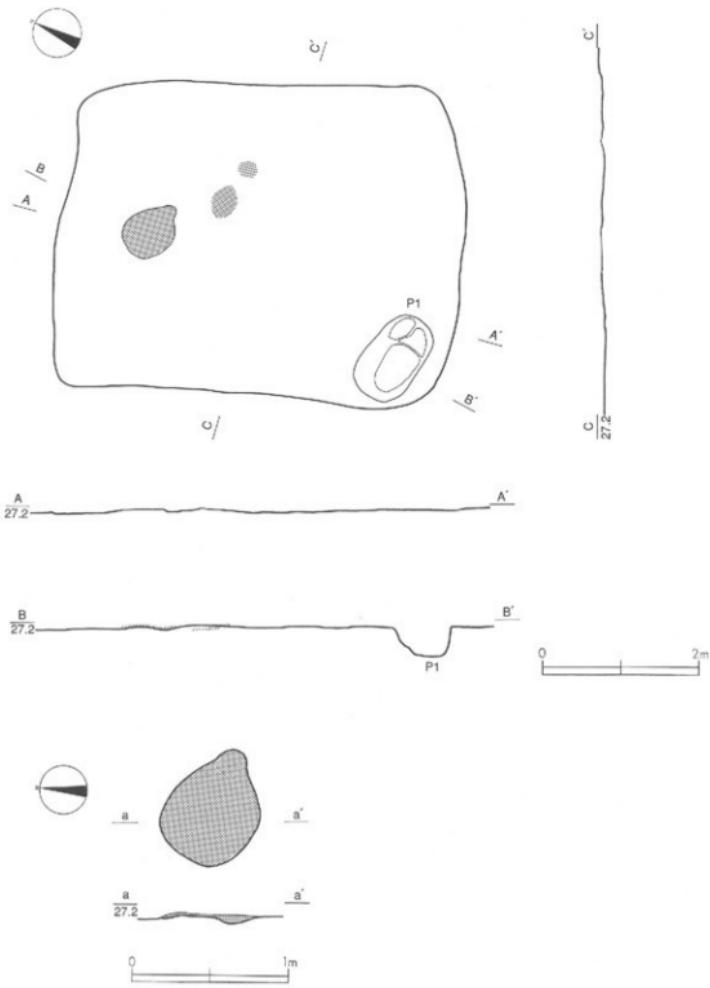
ピット P1は111×70cmで、深さ36cmを計る。位置的に貯蔵穴の可能性がある。

炉 75×59cmのイチジク状を呈する。

覆土 造構確認時に褐色土が分布していたが、造構の掘り込みが浅いため観察できなかった。

遺物 土師器細片が南隅から出土したが、実測に耐えない大きさである。

所見 伴出遺物が乏しいために正確な時期判定は難しいが、周辺の造構の密度を鑑みて、古墳時代前期の竪穴住居址の可能性が最も高いものと考える。



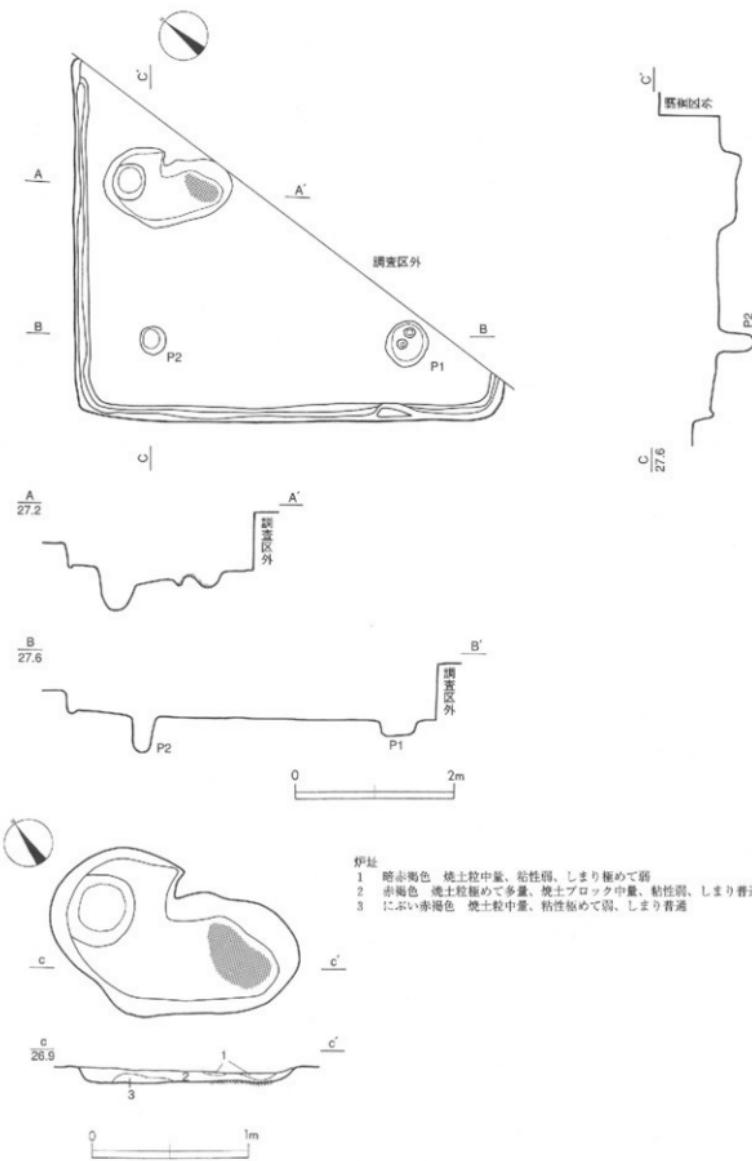
第31図 103号住居址検出状況

104号住居址〔第32~34図 PL 14・49〕

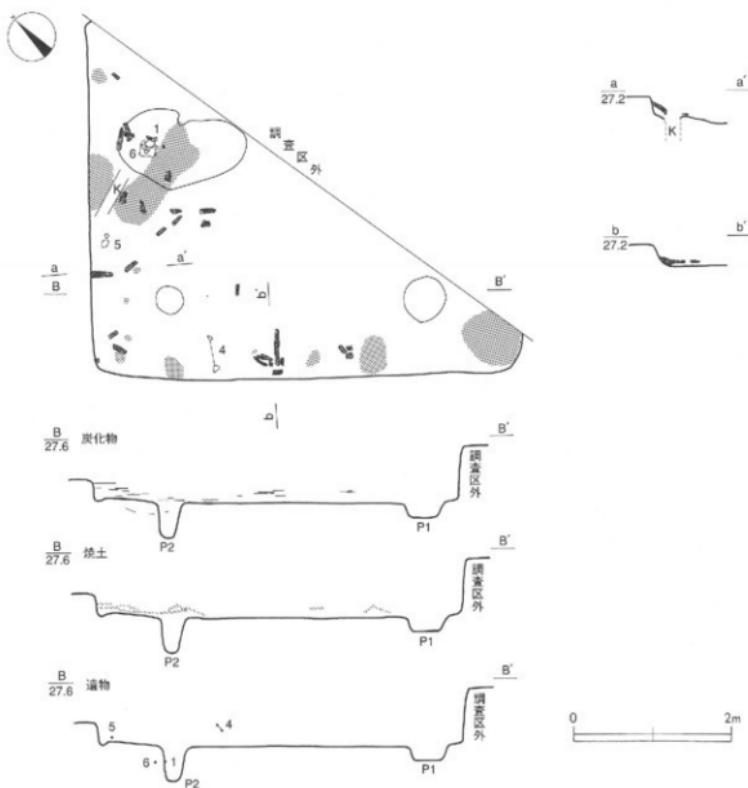
位置 2C-29・30・31区、2D-30区。東半は東壁外に延びる。

主軸方向 N-42°-W

規模と形状 524×(432)cm、方形プランと推定される。



第32図 104号住居址検出状況



第33図 104号住居址遺物出土状況

壁面 壁溝は深さ4~5cmで、北西~南西壁沿いに遺存するが、周回する可能性がある。

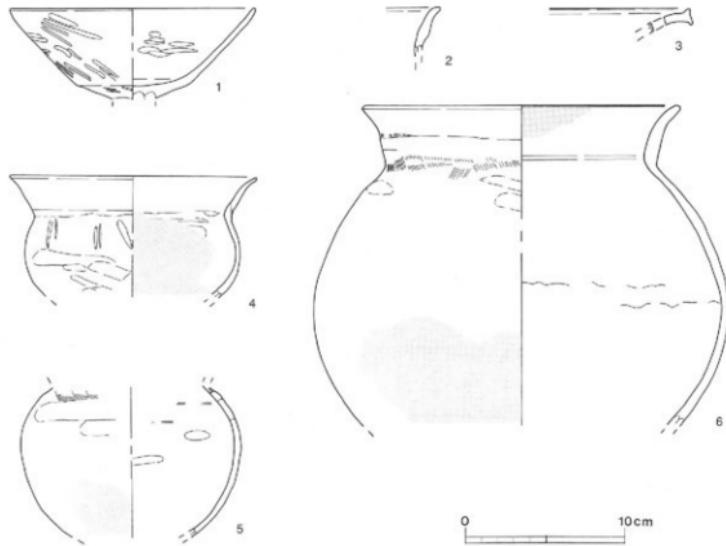
床面 住居中央に貼り床が残る。

ピット 2穴確認された。P1(深さ20cm)・P2(深さ42cm)ともに柱穴と考えられる。

炉 径156×82(~71)cmの不整楕円形を呈する。北側に30cm径の落ち込みがみられ、被熱した土師器焼片が出土した(6)。炉床面は良く焼けている。

覆土 炭化材と焼土が多量に出土した(第33図)。炭化材は床面直上とは限らないが、その多くが住居内側に倒れ込むように出土している。焼土も壁沿いに途切れながら分布する。

遺物 土師器(1~6)が出土した。



第34図 104号住居址出土遺物

所見 本址は、出土遺物から判断して、古墳時代前期の竪穴住居址である。焼土・炭化物の量からこの住居址は、焼失住居に相当するものと考える。

104号住居址出土遺物観察表

図版No	器 器	種 形	法 量 (cm)	出上位 残存率	成 胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 高杯 杯部	A C	[15.0] (5.6)	炉址下層 40%	良好 長石少量 石英少量 雲母微量	橙色	腹部から直外張して立上がる。外面は斜位、内面は横位のヘラミガキ。内外面共に赤彩度あり。	
2	土師器 壺形類? 口縁部	C	(2.5)	覆土中 5%	良好 長石少量 石英少量 雲母少量	赤色	頸部から直立気味に立上がり、外面はナデによりS字状の隆起を生じて、外反する。内外面共に横ナデの上、赤彩される。	
3	土師器 壺台又は壺? 口縁部	C	(1.5)	覆土中 5%	堅密 長石少量 石英微量 雲母少量	にぶい赤褐色	口縁部は8mm幅で、標広の平坦面をもつ。外面に横位、内面に横位のヘラミガキ。内外面共に一部赤彩斑あり。1か所穿孔される。	
4	土師器 罐? 口縁~胴部	A C	[15.2] (7.4)	覆土上層 30%	良好 長石少量 石英少量 雲母少量	にぶい橙色	頸部は球状で、頸部はくの字状に外反する。裏部に指痕痕、外面にヘラミガキを残す。内面に丹念なヘラナダ。	
5	土師器 壺 胴部	C	(9.3)	覆土下層 10%	良好 長石少量 石英少量 雲母微量	にぶい赤褐色	頸部外面は、底位の細いハケメの上にナデ。内面はヘラナダ。内外面共に塗付着。	
6	土師器 甕 口縁~胴部	A C	[19.8] (19.5)	炉址下層 30%	良好 長石少量 石英少量 雲母少量	明赤褐色	口縁部外面は底位のハケメの上に横ナデ、内面は斜位のハケメの上に横ナデ、頸部内外面は丹念なナデ。外側塗付着。	

107号住居址〔第35~38図 P L 15・49・50〕

位置 2B・2C-31・32区

主軸方向 N-61°-E

規模と形状 488(~450)×416(~396)cmの台形プラン。

壁面 10~17cmで垂直気味に立ち上がる。壁溝は、北壁沿いに長さ95cm・幅18~20cmで一部検出された。南東壁に垂直に交わる溝（長さ129cm・幅20cm・深さ21cm）は、間仕切りの溝と考える。

床面 住居中央に貼り床が残る。周辺部は不明確。

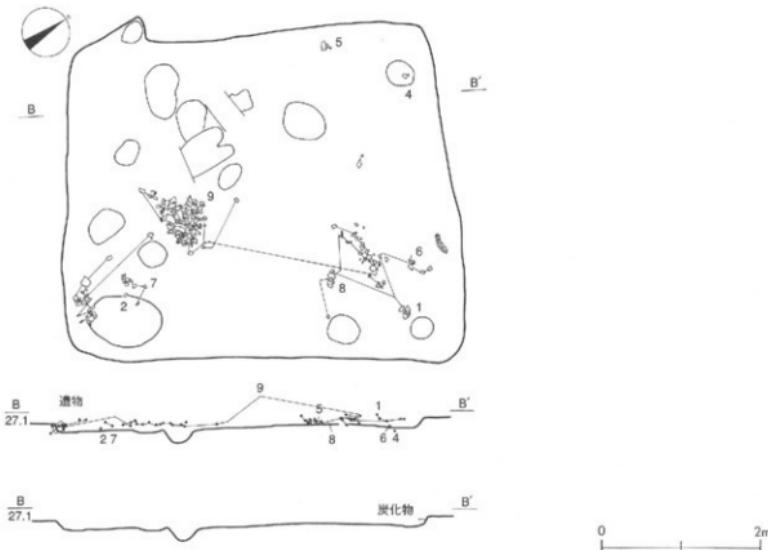
ピット P1は、径89×63cm・深さ36cmで、位置から貯蔵穴と考えられる。その他のピットは、明らかに擾乱と見做しえるもの他は、住居に伴う可能性がある。

炉 遺存範囲は22×(22)cmで、南半をトレンチャーに切られる。不整形で、炉床面は良く焼けている。

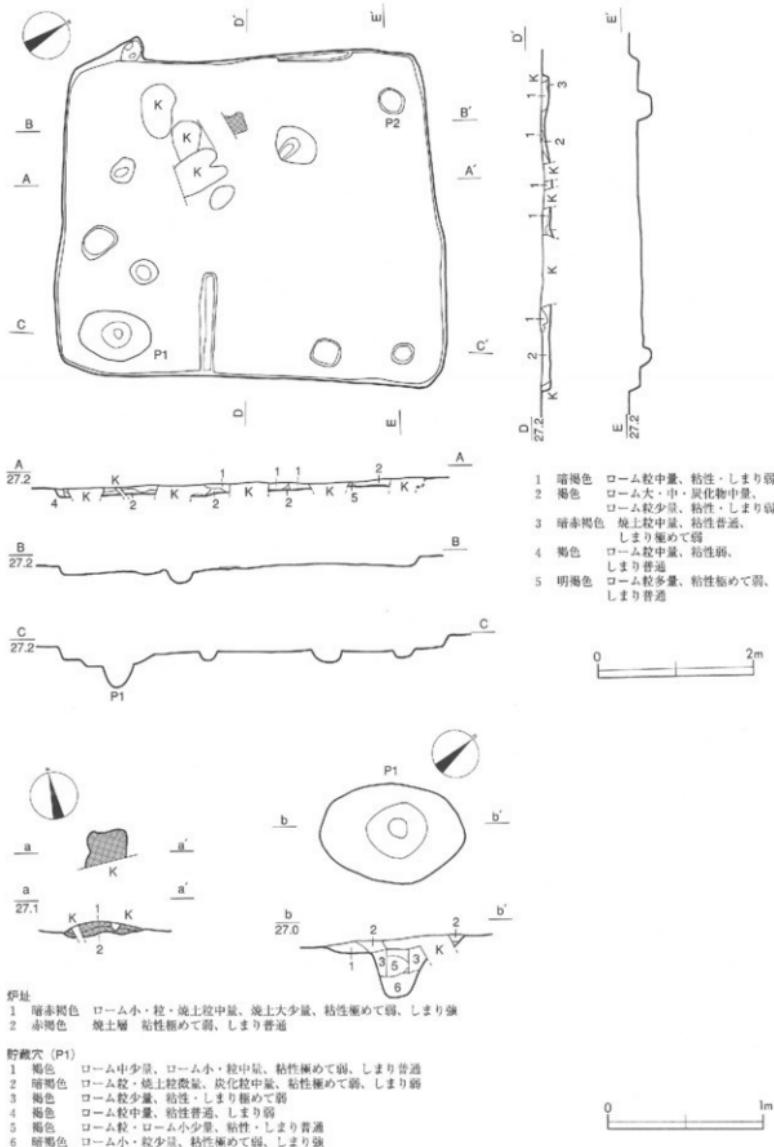
覆土 摻乱とトレンチャーが多い。1次堆積の4・3層に統いて、2・1層が水平に堆積する。

遺物 覆土下層から中層を中心に、土師器（1~8）が分布する。

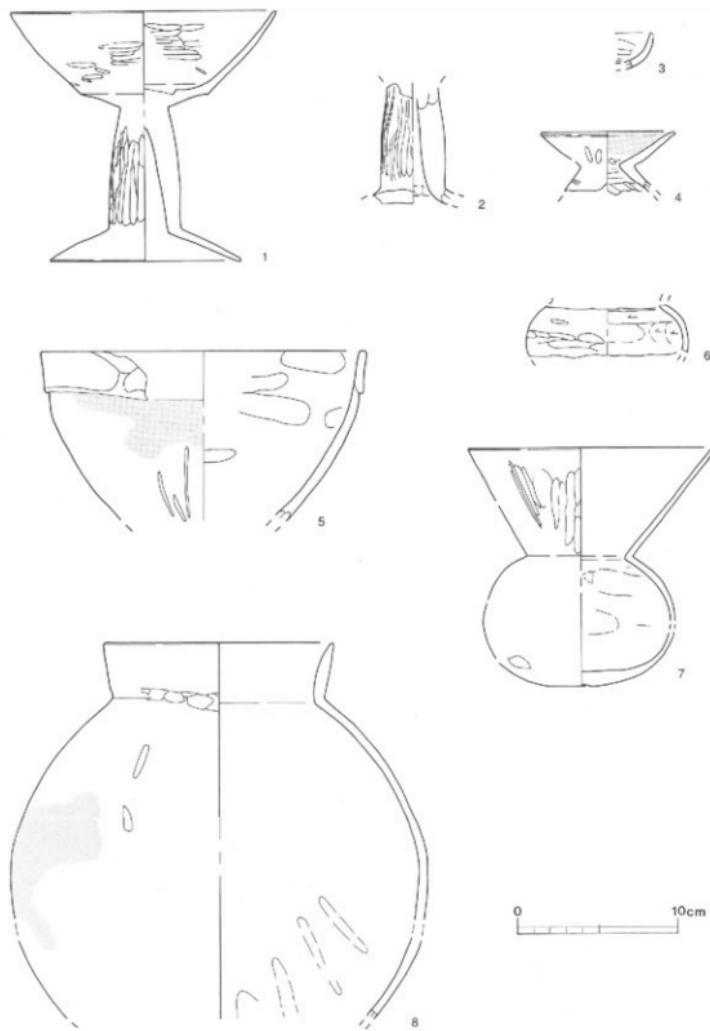
所見 本遺構は、出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居址と考えられる。



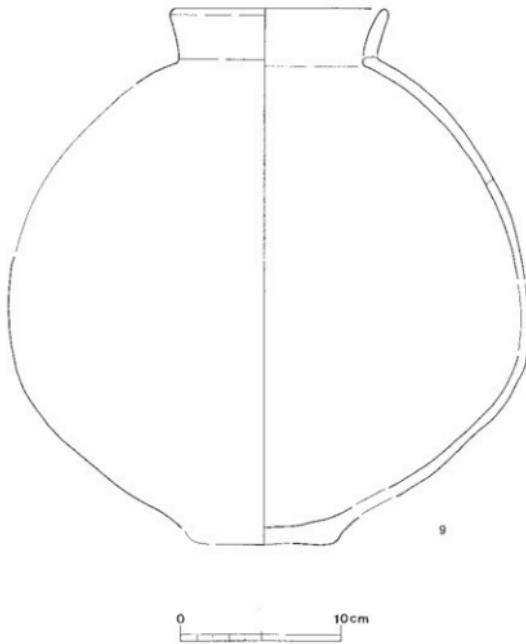
第35図 107号住居址遺物出土状況



第36図 107号住居址検出状況



第37図 107号住居址出土遺物①



第38図 107号住居址出土遺物②

107号住居址出土遺物観察表

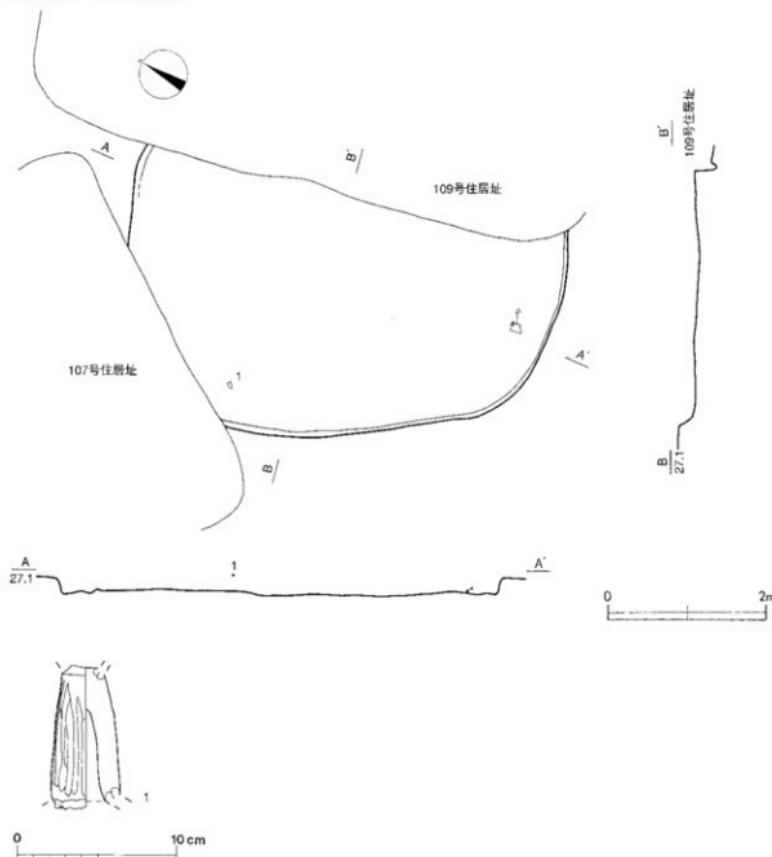
図版No	器形 種類	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 高杯 杯部～縁部	A [15.6] B 11.6 C 16.5	覆土上層 80%	堅緻	長石粒少量	明赤褐色	脚部は円筒状で、杯部は下方を後方に生じ、外傾して立上がる。内外面はヘラミガキと丹念なナデ。杯部内面に風呂釜。	
2	土師器 高杯 脚部	C (7.3)	床面直上 40%	堅緻	長石粒微量	明赤褐色	突起がりの脚部から、内傾気味に立上がる。外表面に羅位のヘラミガキ。内面下部にハケメ。	
3	土師器 壺 脚部	C (2.4) 穿孔径1.3	覆土中 5%	良好	長石粒微量	赤褐色	縫やかに立上がる脚部片。外表面は羅位のヘラミガキ。内面は横穴のヘラナデ。	
4	土師器 蓋合 体部	A [14.8] C (2.2)	P 2 下層 60%	堅緻	長石粒微量	暗褐色	脚部は、くの字状に外反する。内外面共にヘラミガキ。赤影。口縁部内面に媒付着。内底面に1.2mm幅で穿孔あり。	
5	土師器 瓶 口縁～体部	A [20.0] C (10.5)	覆土下層 20%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	にぶい黄褐色	縫やかに立上がり。口縁部はほぼ直立する。口縁部は縫合部より上端を4mm範囲で而取る。外表面ナデと指痕有。内面ヘラナデ。媒付着。	
6	土師器 壺 脚部	C (3.0)	床面直上 50%	堅緻	長石粒微量	にぶい赤褐色	脚部は球形。外表面に横穴のヘラミガキ。内面は縫ナデの上、指痕有。内外面共に赤影。	

図版No	器種	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
7	土師器 壇 口縁～底部	A [15.1] B [2.1] C 14.8	覆土中層 50%	良好	長石粒微量	明赤褐色	球状の胴部から、口縁部は外焼して立ち上がる。 口縁部外面に擬似のヘラミガキ。内面に指痕 痕・ヘラナデ。内外面赤彩。	
8	土師器 壇 口縁～胴部	A [14.2] C (23.0)	覆土下層 40%	良好	長石少量 石英微量	にぶい褐色	胴部は球形で、口縁部は直立気味に立ち上がる。 口縁部は横ナデ、胴部ハケメ、外曲はヘラミ ガキ。内面ヘラナデ。外面煤付着。	
9	土師器 壇 口縁～底部	A [11.9] B [8.9] C 33.4	覆土下層 50%	良好	長石少量 玄母微量	にぶい赤褐色	平底の底部から、胴部は下膨れ状を呈し、口 縁部は直立気味に立ち上がる。肩部に赤彩。 全体に丁寧なナデ整形。	

108号住居址〔第39図 P L 16・50〕

位置 2C-32・33区

主軸方向 不明である。



第39図 108号住居址検出状況・出土遺物

重複関係 107号と109号住居址に切られ、トレンチャーも入るなど遺存状況は悪い。

規模と形状 532×(320)cm、楕円形または隅丸方形と推定される。

壁面 深さ20cmで立ち上がる。

床面 貼り床状を呈さず、平坦である。

ピット・炉 検出されなかった。

遺物 土師器甕片、高杯（1）が出土した。高杯は出土位置が床面より高く、廃棄遺物であろう。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期のものと推定される。が、付属施設が無いために、住居址とは断定しえない点も残る。

108号住居址出土遺物観察表

図版No	器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	十脚器 高杯 脚部	C (8.9)	覆土上層 90%	堅緻 長石少 石英少 云母少量	明赤褐色	筒状の脚部で、基部で下方に広がる。外面は 脚部のヘラミガキを施し、赤彩板が残る。		

109号住居址〔第40図 PL 17・50〕

位置 2D-32・33、残りの東半部は調査区外に延びる。

主軸方向 N-13°-W

規模と形状 690×(148)cmで、方形（推定）と考えられる。

壁面 深さ30~45cmで垂直に立ち上がる。

床面 壁沿いは密度が薄いが、貼り床が中央部に広がる。

ピット 確実に伴うものは見つからなかった。ピットではないが、住居内南西部に方形の落ち込み（深さ8~10cm）がみられた。

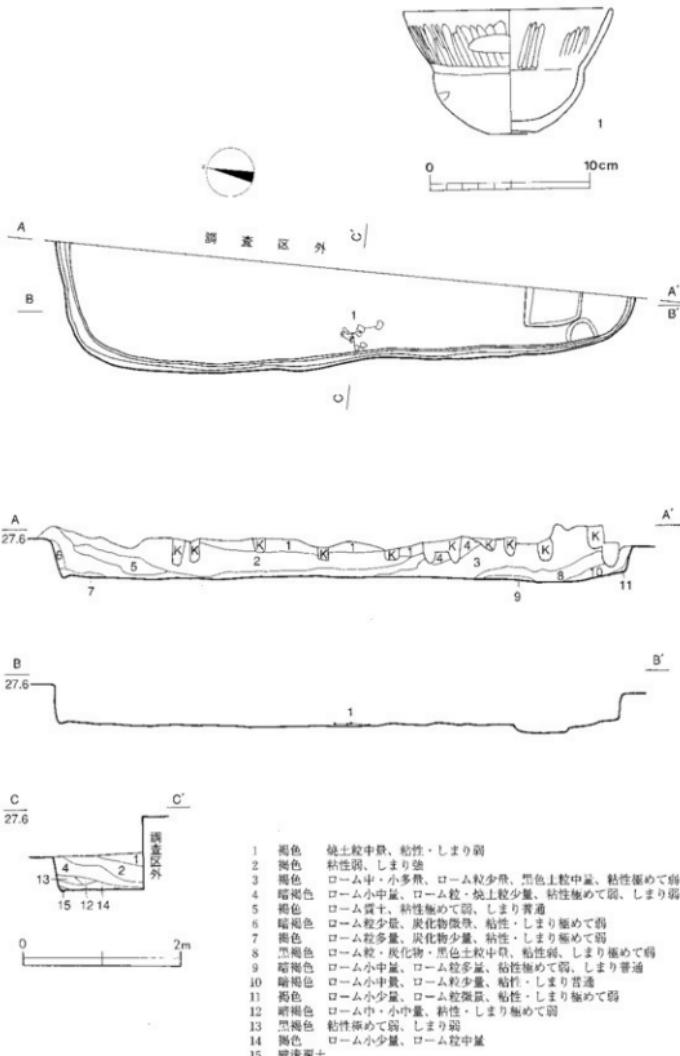
覆土 トレンチャーが入る。11・7・6層は壁堆積で、以後南方から徐々に埋まっていったものと考えられる。

遺物 床面直上で、土師器塙（1）が出土した。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居址と考えられる。

109号住居址出土遺物観察表

図版No	器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 塙 口縁～底部	A B C 12.7 2.8 7.6	床面直上 90%	良好 長石少量 石英少量	赤色	底面から緩やかに立上がり、口縁部は外傾して開く。口縁部根元のヘラミガキ。外面ナデ。赤彩。端付着。		



第40図 109号住居址検出状況・出土遺物

111号住居址〔第41~44図 P L 18・50・51〕

位置 2B-32・33・34区、2A-33区、2C-33区。

主軸方向 N 55° - W

規模と形状 築570×544cmで、方形。

壁面 深さ40cmで垂直に立ち上がる。壁溝（深さ6~12cm）は、東隅を除き全周する。南東壁と南西壁から垂直方向に延びる2条の溝は、間仕切りの溝と思われる。

床面 全面に貼り床状を呈する。トレンチャによる搅乱が著しい。

ピット 5穴検出された。位置から、P1（深さ18cm）・P2（深さ16cm）・P3（深さ28cm）・P4（深さ14~32cm）は柱穴、P5（深さ54cm）は貯蔵穴と判断される。

炉 径92×60cmの楕円形を呈する。炉床面は良く焼け締まる。

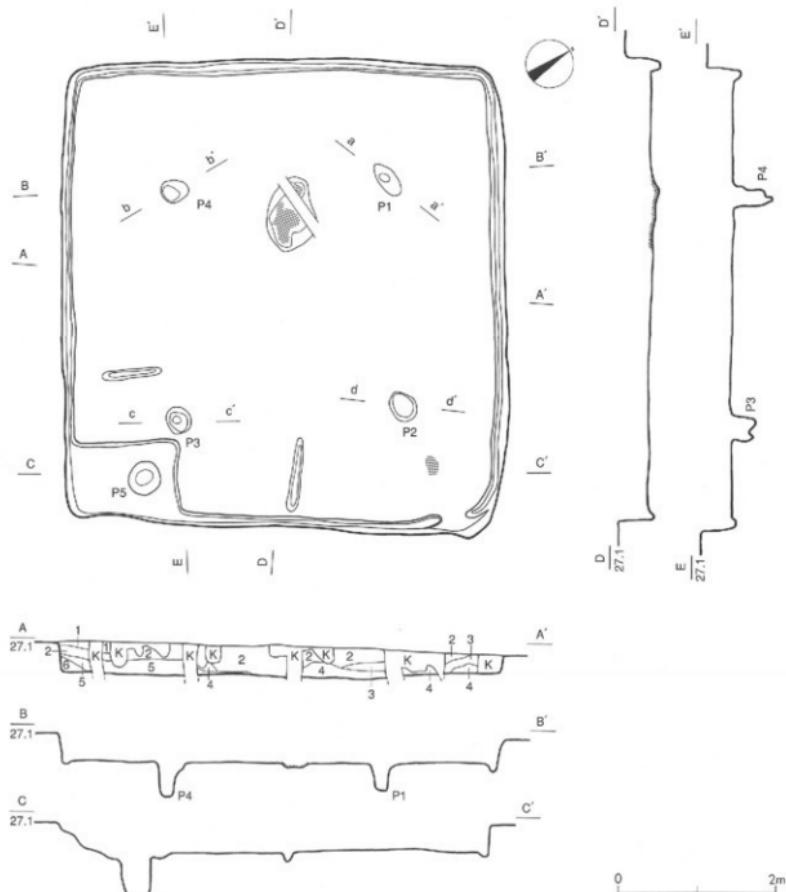
覆土 トレンチャによる搅乱が著しい。壁堆積（6・5層）後、水平堆積（2層）がみられる。焼土が南北を中心に分布し、レベル的に5・4層に対応するだろう。よって当住居は、一度被熱・焼失してから3・2層の自然堆積が生じたものと考える。

遺物 土師器・土製品が出土した（1~15）。壺甌類の数がやや多い傾向がある。レベル的に2・3・5・6・12・14は落ちくぼみを利用した廃棄遺物であろう。

所見 当遺構は、出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居址と考えられる。

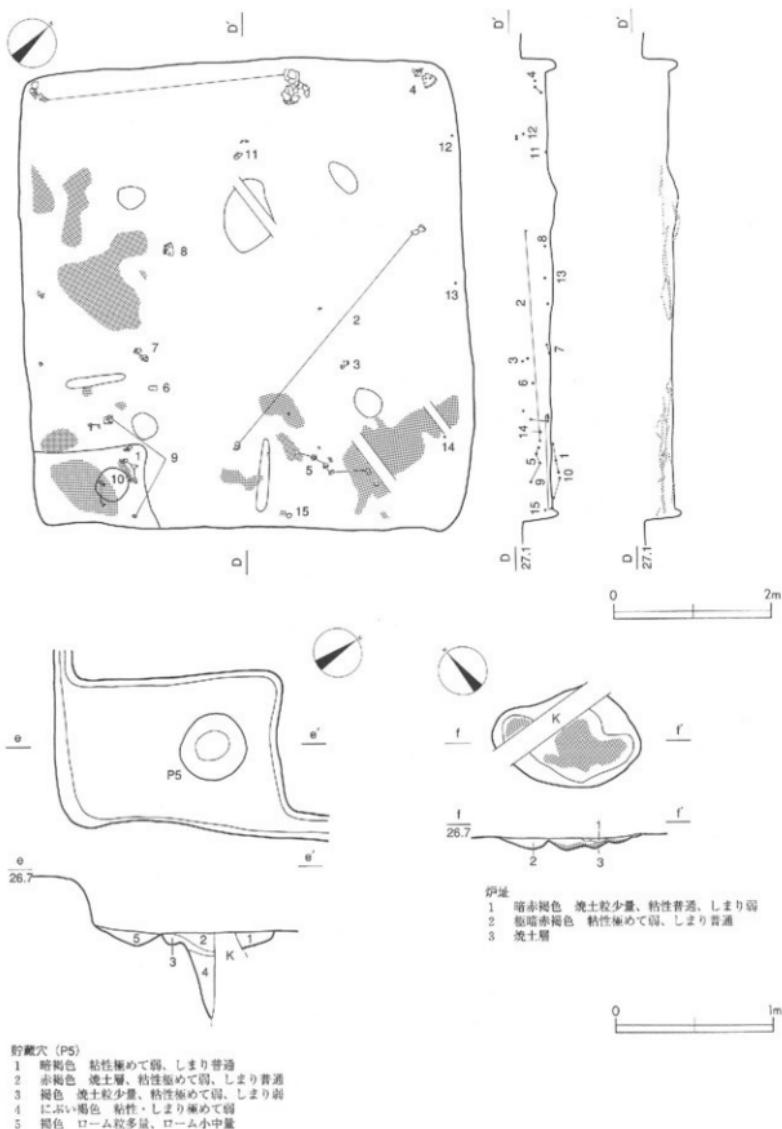
111号住居址出土遺物観察表

団体No	器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 萬葉 杯部	A C 16.3 (4.7)	貯藏穴 上層 90%	良好	長石少量 石英微量 雲母少量	褐色	脚部から縫やかに立上がり、下方に優をもち、外傾する。外面に丹念なナダ、内面にヘラミガキ。縫付蓋。一部赤彩痕あり。	
2	土師器 壇 脚～底部	B C 3.3 (7.4)	覆土上層 70%	良好	長石少量 石英微量 雲母少量	浅黃褐色	平底で球形を呈する。外表面に絞りのヘラミガキ。一部赤彩痕と縫付蓋。	
3	土師器 壺 口縁?	A C [3.0] (1.4)	覆土上層 15%	良好	良土	にぶい褐色	底面から、やや内縫気味に優かに立上がり。口縁部外側と内面ナダ。底部外側に指ナダ。	中世?
4	土師器 壺 口縁～底部	A B C [21.0] 4.0 (10.7)	覆土中層 50%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	にぶい黄褐色	底部から縫をかに外傾し、口縁部は絞状を呈する。外表面指痕とナダ。内面ヘラナダ。一部焼付着。	底部單一穿孔 径2.2cm
5	土師器 台付壺? 台部	B C 7.9 (6.7) 台部高4.8	覆土中層 80%	良好	長石多量 石英少微量 雲母微量	にぶい黄褐色	縫やかに内傾して立上がり。底部は外傾する。内外表面共にヘラナダ。縫付蓋。接地面は3~5mm幅で面取り。	
6	土師器 壺 口縁～脚部	A C [14.6] (6.5)	覆土中層 20%	堅焼	長石微量 石英微量	にぶい褐色	脚部から直立気味に立上がり、口縁部は外傾して開く。外表面は縫位のハケメの上、横ナダ。内面横ナダ。	
7	土師器 壺 口縁～脚部	A C [16.8] (6.0)	床面直上 25%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	褐色	脚部から直立気味に立上がり、口縁部は外傾する。縫位で大きなヘラミガキ。内面は横位のヘラミガキ。内面、一部焼付着。	
8	土師器 壺 口縁～脚部	A C [17.2] (9.6)	覆土下層 25%	良好	長石少微量 石英微量 雲母微量	にぶい黄褐色	この字状に外反し、口縁部はやや外傾する。口縁～脚部にナダ。一部赤彩痕、縫付蓋。	
9	土師器 壺 口縁部	A C 17.7 (7.6)	貯藏穴上層 ~覆土下層 50%	良好	長石微量 石英多量	にぶい褐色	脚部から外傾して立上がる複合口縁。縫帶で口縁部は、5~6mm幅で面取られる。内外面はハケメの上を月念なナダ。	

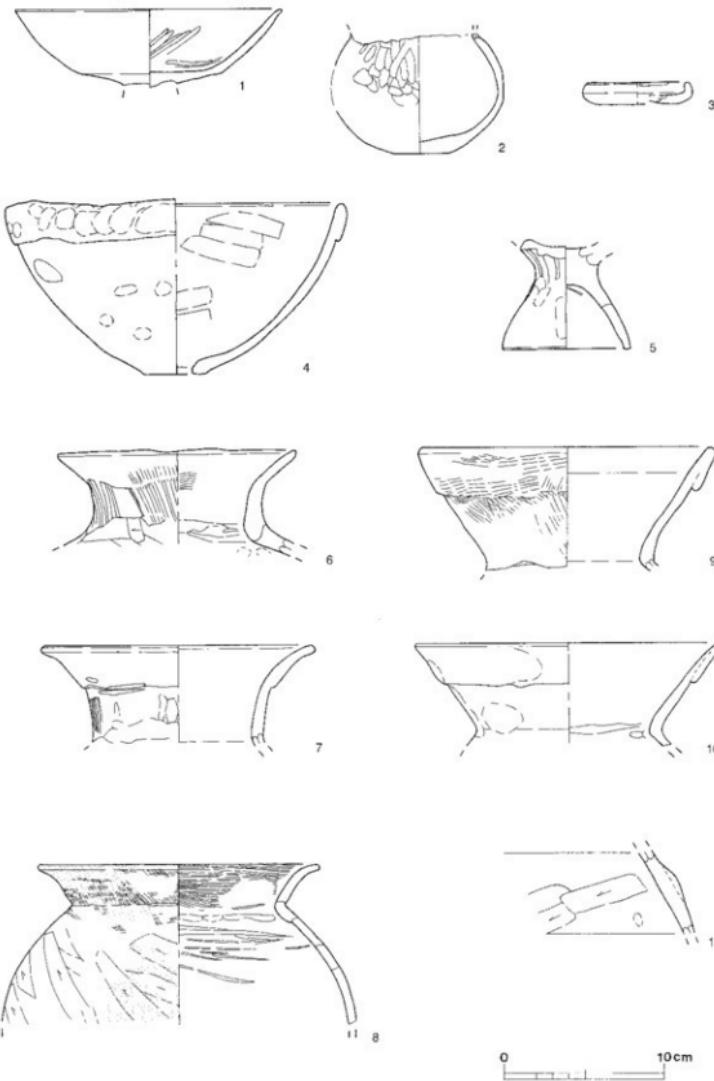


	P1	a'	P4	b'	P3	c'	P2	d'	
26.7	2		26.7	2	26.7	3	2		
P1	1 暗赤 2 暗褐色 3 明褐色	粘性極めて弱、しまり弱 ローム中・小・少量、粘性極めて弱、しまり弱 ローム質土、粘性・しまり極めて弱	P4	1 暗褐色 2 暗褐色 3 明褐色	1 褐色 2 暗褐色 3 褐色	P3	1 褐色 2 暗褐色 3 褐色	P2	1 暗褐色 2 海色
P2	1 海色 2 暗褐色 3 明褐色	粘性極めて弱、しまり弱 ロームブロック多量、粘性極めて弱、しまり極めて強 ローム質土、粘性・しまり極めて弱	P3	1 海色 2 暗褐色	ローム粒・炭化物中量、粘性極めて弱、しまり普通 ローム小量、粘性極めて弱、しまり弱 粘性極めて弱、しまり弱	P4	1 海色 2 暗褐色 3 明褐色	P1	1 暗褐色 2 暗褐色 3 明褐色

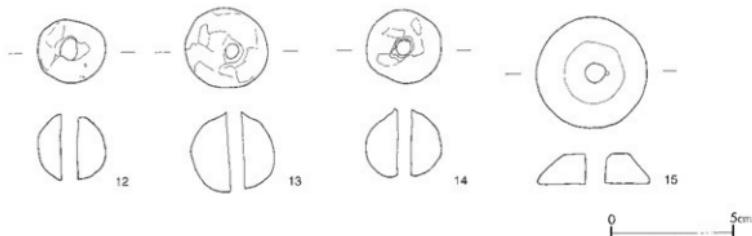
第41図 111号住居址検出状況



第42図 111号居住址遺物出土状況



第43図 111号住居址出土遺物①



第44図 111号住居址出土遺物②

図版No	器 種 形	法 華 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器形・技法の特徴	備 考
10	土師器 壺	A C (5.7)	貯藏穴 上層 25%	良好	長石少 石英微量 雲母微量	明赤褐色	くの字状に外反し、口縁部は縦帶を呈す。内外面共に横位の丹念なナメ。赤芯。頸部外側に腹窓のミガキ。	
11	土師器 盃 蓋焼類? 壺-頸部	C (5.0)	床面直上 5%	良好	長石少 石英微量 雲母微量	灰褐色	頸部にケズリによる棱が見られる。内外面共に丹念なナメ。外側に蓋付着。	
12	土製品 土瓦	長 幅 孔径 2.7 2.8 0.7	覆土上層 完形	良好	長石少 石英微量 雲母微量	にぶい 黄褐色	不整形な球状で、一方の孔で粘土が隆起する。重量17.7g 部分的に黒褐色を呈する。	
13	土製品 土瓦	長 幅 孔径 3.2 3.4 0.6	覆土中層 完形	良好	長石少 石英微量 雲母微量	にぶい 黄褐色	表面は丹念にミガキが施される。一方の穿孔部では粘土が隆起する。わずかに黒褐色を見出し、一部赤褐色残る。 重量32.8g	
14	土製品 土瓦	長 幅 孔径 2.8 3.1 0.6	覆土中層 完形	良好	長石少 石英微量 雲母微量	橙色	表面は、滑らかに人念にミガキが施される。 一方の穿孔部は隆起する。 重量22.1g	
15	土製品 筋跡車	長 幅 孔径 1.2 4.6 0.9	覆土下層 完形	堅密	長石少 石英微量 雲母微量	にぶい橙色	輪窓円錐形を呈し、中央に穿孔される。全体に丹念なミガキ調整が施される。 重量26.6g	

113号住居址〔第45~47図 P L19・51〕

位置 Y-3-2区、Z-2 A-3-2・3-3区。

主軸方向 N-44° -W

重複関係 114号住居址を切る。

規模と形状 600×548cmの方形を呈する。

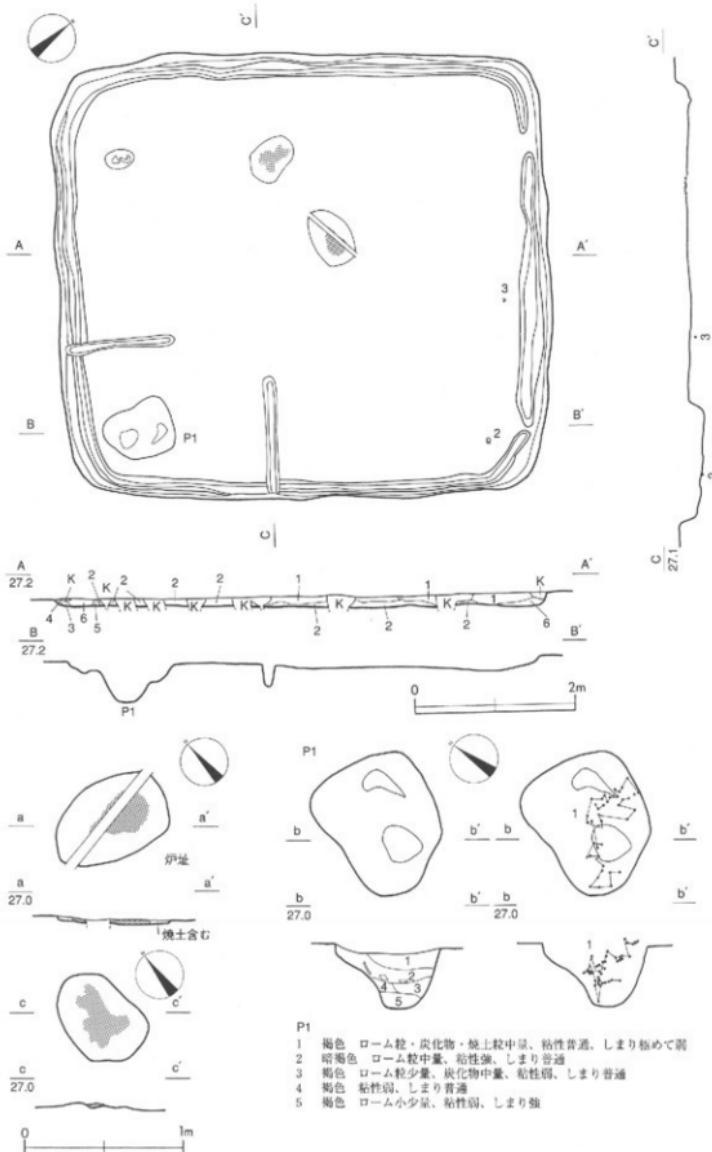
壁面 深さ12~18cmで、外傾しながら立ち上がる。壁溝（深さ4cm）は、北東壁で一部途切れるもほぼ全周する。南東・南西壁で、垂直方向に穿たれた2条の溝（長さ132~146cm・幅14cm・深さ16~20cm）は、位置などから問仕切りの溝と思われる。

床面 全面貼り床状を呈する。

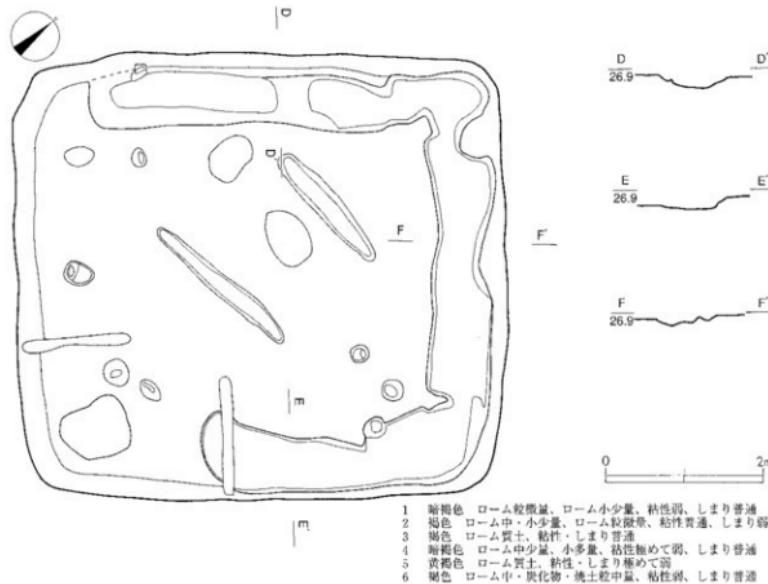
ピット 南隅に穿たれたP1（径88×79cm・深さ36~40cm）は、位置と形状から貯蔵穴と考えられ、覆土中から土師器壺（1）が出土した。この他、西隅に34×20cm径のピットがみられた。

炉 2基確認された。中央の炉は径77×51cmの楕円形を呈し、落ち込んだ底面中央がよく赤色変成している。西壁寄りの炉は、径61×42cmでやはり楕円形である。

覆土 トレンチャーや搅乱に床面まで破壊される箇所が多い。層序は、6・4・3層を主体とする壁堆



第45図 113号住居址検出状況



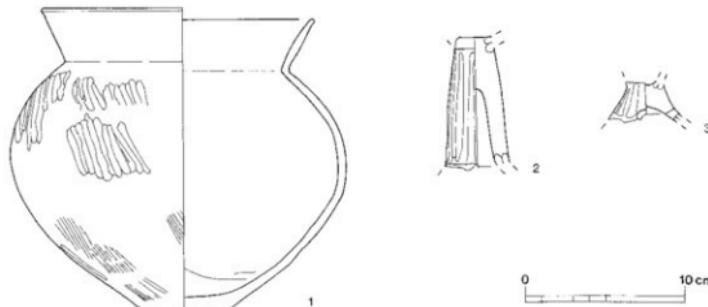
第46図 113号住居址掘り方検出状況

積に続き、1・2層の水平堆積が続く。自然堆積である。

掘り方 付属施設検出後に、貼り床を除去したところ、床面中央をU字状に周回する溝（深さ2~6cm）を発見した。この他にもピットや溝状の落ち込みを検出したが、用途は不明である。U字状の溝は、住居建築時に伴って掘られたものであろう。

遺物 床面上から土師器（1~3）が出土した。いずれも住居に伴う遺物である。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期の堅穴住居址と考えられる。



第47図 113号住居址出土遺物

113号住居址出土遺物観察表

図版No	器 器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 貯蔵率	焼成	粘 土	色 調	器 形 ・技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 甕 口縁～底部	A B C 16.5 5.1 18.7	貯蔵穴下層 ～上層 70%	良好	長石微量 石英微量 雲母少量	に赤い黄橙 色	平底で外傾して立上がる。球状に膨らみ、口縁部横ニアア。 外面丹念なナデとハケメ。内外面共に擦付着。	
2	土師器 高杯 脚部	C	(7.8) 床面直上 90%	堅軟	長石少量 雲母微量	赤色	円筒状の脚部で、内面に穴が穿たれる。外面は腰位のヘリコガキの上、赤彩。内面ナゲ。 内底面ヘミガキ。	
3	土師器 高杯又は器台 脚部	C	(2.0) 床面直上 80%	堅軟	長石少量 石英微量 雲母少量	赤色	ラバ状に外延する。裾部に3か所穿孔。外 面は腰位のヘリナナデの上、赤彩。	

114号住居址〔第48図 P L20〕

位置 2 A - 3 2 · 3 3 区

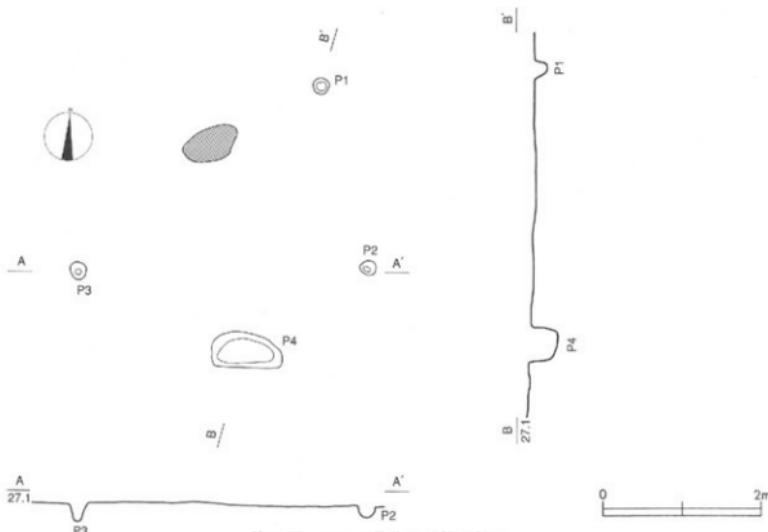
主軸方向 杜穴・炉のみのため不明。

重複関係 西側を113号住居址に切られる。

規模と形状 不明。113号住居址の検出後、その東隣で焼土の分布と土坑・ピットを検出した。これらを総合して、掘り込みが浅いために付属施設のみが残った住居址と判断した。

床面 貼り床は確認できなかった。

ピット 4基検出した。P1(深さ16cm)・P2(深さ14cm)・P3(深さ23cm)は柱穴、P4(深さ32cm)は貯蔵穴の可能性がある。



第48図 114号住居址検出状況

炉 70×40cmの範囲内で、焼土が分布する。炉床面のような焼け結まりや落ち窪み、遺物などは発見できなかった。

遺物 P 4 から土師器細片が出土している。

所見 時代は不明だが（切り合いから古墳前期以前か）、掘り込みの浅い竪穴住居址と考える。

115号住居址〔第49図 P L21・51〕

位置 X-33・34区。

主軸方向 N-61°-E

規模と形状 330×298cmの方形プラン。

壁面 12cmで緩やかに立ち上がる。塗溝なし。

床面 貼り床は確認できなかった。

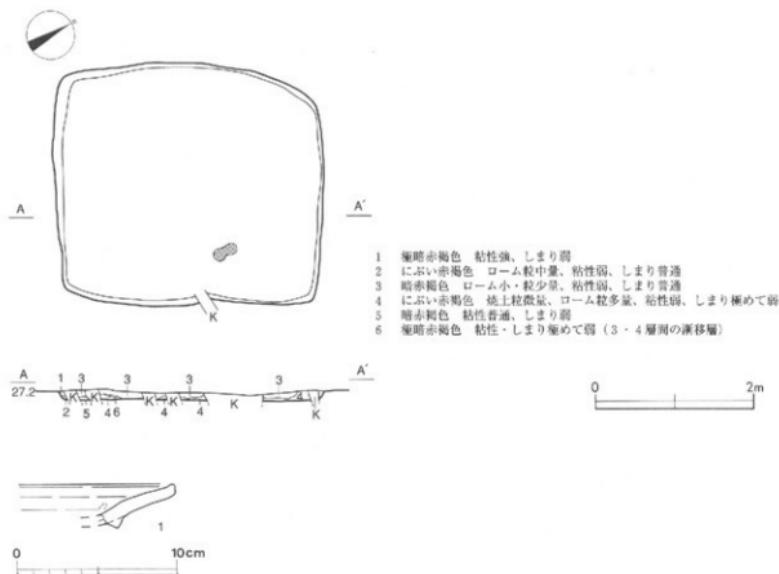
ピット 検出していない。

炉 断定できるものはない。住居内東寄りに30×14cmの範囲でひさご状に焼土が分布した。

覆土 トレンチャーによる擾乱を受ける。初めに壁堆積（2・5層）が南西から入り、次いで4・3層と自然堆積が生じた。

遺物 覆土中から土師器壺（1）が出土した。

所見 当遺構は、出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居址と考えられる。



第49図 115号住居址検出状況・出土遺物

115号住居址出土遺物観察表

国版No	器種	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 蓋 口縁部	C (2.6)	覆土中 3%	堅緻 長石少量 石英微量 雲母少量		橙色	水平に縫を生じ、外反する有段口縁。口縁部 は5mm幅で面取られる。内外面共に横ナギ。 内面に一部煤付着。	

118号住居址〔第50~52図 P L22・51・52〕

位置 V-33区、W-32・33区。

主軸方向 N-87° - E

規模と形状 456(~474) × 504cmの方形。

壁面 深さ18~11cmで、やや外傾して立ち上がる。壁溝(深さ6~8cm・幅17~13cm)は、東西南壁沿いでは途切れながらも検出したが、北壁沿いは1か所を除き検出されなかった。

床面 全体に貼り床状を呈する。

ピット 北東寄りに1基(径34cm)、発見した。

炉 93×75cmの不整形。炉床面はよく焼け縮まり、凹凸がある。

覆土 木根やトレンチャーなどに搅乱される。5・3・4層の壁堆積後に、1・2層の水平堆積が生じた。北壁側に焼土・炭化物がみられる。

掘り方 付属施設完掘後に、貼り床を除去した。床面構築土は4~12cmの厚さである。地山上に溝状の掘り込みや小穴がみられたが、役割は不明である。

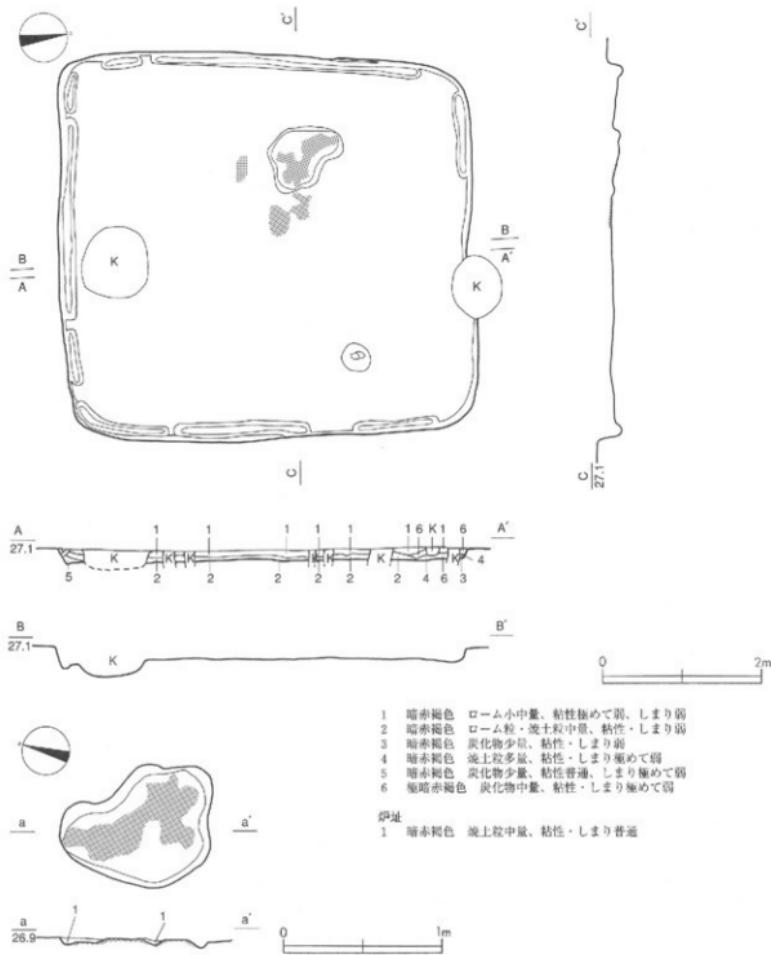
遺物 土師器が、覆土中層から下層にかけて出土した(1~12)。6と8は、住居址に直接伴わない遺物である。

所見 本址は、出土遺物から古墳時代前期の竪穴住居址と考えられる。

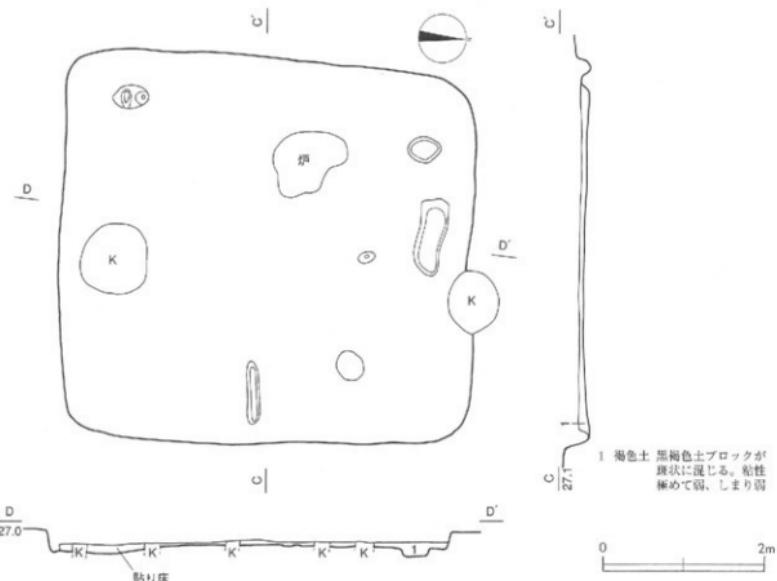
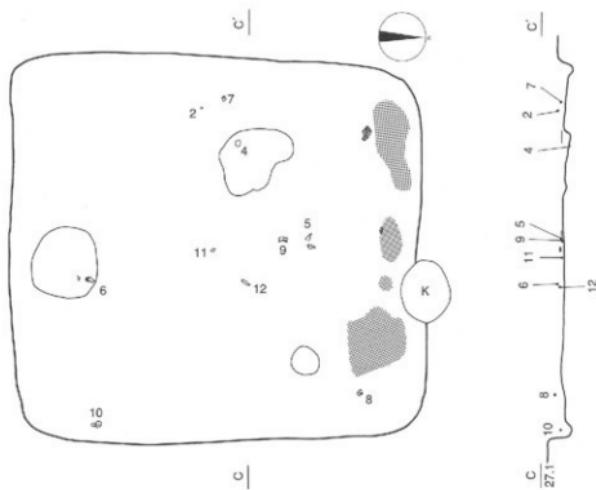
118号住居址出土遺物観察表

国版No	器種	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壇 口縁~胴部	A (1.2) C (4.8)	覆土中 20%	堅緻 長石微量 石英微量 雲母少量		赤色	口縁部は僅かに外傾して開く。外面に横位の ヘラミガキ。内外面共に赤彩。一部煤付着。	
2	土師器 壇 胴部	C	(1.6)	覆土下層 25%	良好 長石少量 石英少量 雲母少量	赤褐色	縦やかに立上がる蝶形の胴部上半。内外面共 に横位のヘラミガキを施し、赤彩。	
3	土師器 壇 胴~底部	B (2.4) C (3.4)	覆土中 30%	堅緻 長石微量 石英微量		赤色	やや深んだ平底で、胴部は縦やかに内済して 立ち上がる。外表面に横位のヘラミガキ。外 面赤彩。底部に一部煤付着。	
4	土師器 壇 底部	B (2.4) C (1.6)	伊址直上 30%	堅緻 長石少量 石英微量		に赤い褐色	平底で、縦やかに外傾して立ち上がる。外面 に横位のヘラミガキ。胴~底部外表面に煤付着。 底部外表面に赤彩直残。	
5	土師器 壇 底部	B (3.8) C (3.6)	床面直上 20%	良好 長石少量 石英少量 雲母少量		に赤い橙色	平底で、縦やかに外傾して立ち上がる。内面 ヘラナデ。外縁ノケメの上、ヘラミガキ。	
6	土師器 高杯又は器台 脚部	C (5.6)	壇亂中 30%	良好 長石微量 石英微量		に赤い橙色	下方に外反する脚部。11cm幅で3か所に 穿孔される。内面ヘラナデ。	

図版No	器 種 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 製	備 考
7	土師器 器台 同部	C (2.4)	覆土下層 60%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	にぶい褐色	上・下方共にハの字状に開き、内底面に14cm 幅で穿孔される。外面はハケメの上、腹位の ヘラミガキ。内底面放射状にヘラミガキ。	
8	土師器 高杯 胴～脚部	C (2.7)	覆土中層 50%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	にぶい赤色	下方に外反する。外面と内底面は継位のヘラ ミガキの上、赤彩。内面はヘラナダ。	

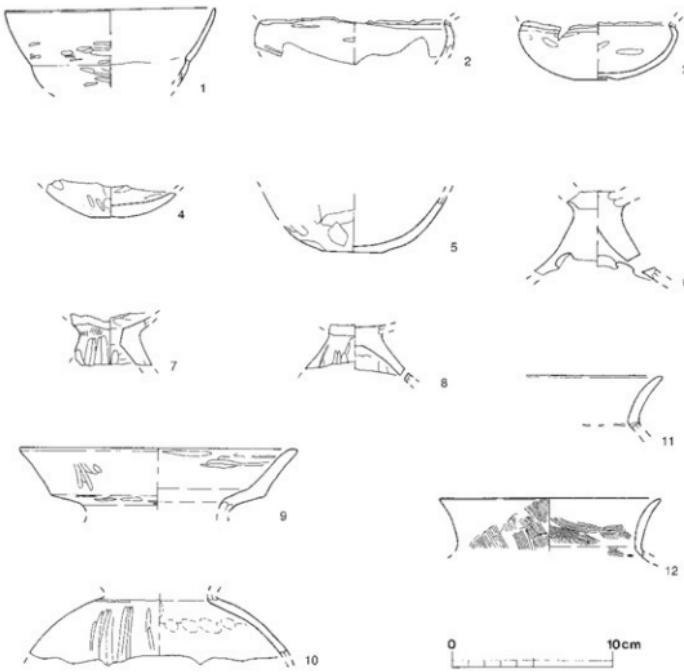


第50図 118号住居址検出状況



第51図 118号住居址遺物出土状況

図版No	器種 形	法量 (cm)	出土位置 床面直上 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
9	土師器 甕 口縁部	A C 〔17.2〕 〔3.9〕	床面直上 25%	良好	長石多量 石英少量 雲母微量	にぶい黄褐色	横位から後を生じ、外傾して立上がる有段口縁。内面に横位、外面観位のヘラミガキ。内面張付蓋。	
10	土師器 甕 胴部	C 〔4.8〕	床面直上 30%	堅軟	長石少量 石英少量 雲母微量	赤色	球形の腹部上半。外面はヘラミガキ・ヘラナデの上、赤彩。内面はヘラナデと指頭痕。	
11	土師器 甕 口縁部	C 〔3.1〕	覆土下層 10%	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	橙色	腹部から外反気味に立上がる。外面はハケメの上に横ナデ。内面ナデ。	
12	土師器 甕 口縁部	A C 〔13.7〕 〔3.3〕	覆土下層 25%	良好	長石少景	にぶい黄褐色	脛部から外傾して、立上がる。外面はハケメの上に横ナデ、内面ハケメの上横ナデ。内外面共に塗付蓋。	



第52図 118号住居址出土遺物

第2節 土坑

北西原遺跡第3次調査では、10基の土坑が発見された。これらの時代別の内訳は、縄文時代中期が1基、時期不明が9基である。

以下、土坑毎に解説を加える。土坑番号が44号から始まるのは、第2次調査までの時点で土坑が43基検出されており、番号を後続して付けたためである。欠番は調査後に近現代の搅乱とみなしたものである。

4 4号土坑〔第53図〕

位置 Y-3 5区

長軸方向 N-2° - E

規模と形状 径94×(79)cm、南半部は調査区外に延びる。

壁面 深さ36cmで、やや外傾して立ち上がる。

底面 径84×(58)cmで、中央がやや盛り上がる。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

4 5号土坑〔第53図 P L 23〕

位置 2 C-2 5区

長軸方向 N-28° - W

規模と形状 径84×68cmの楕円形を呈する。

壁面 深さ54cmで、垂直に立ち上がる。

底面 径77×60cmの平坦な楕円形。

覆土 中央に木の根の痕が入る。自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは不明である。

4 6号土坑〔第53図〕

位置 2 C-3 4区

長軸方向 N-65° - W

規模と形状 径140×116cmの隅丸方形。

壁面 深さ28cmで、東壁は緩やかに、他はやや垂直気味に立ち上がる。

底面 径107×82cmの隅丸方形。

覆土 トレンチャーが入る。平行に積み重なる自然堆積。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

47号土坑〔第53图 PL23〕

位置 Z-35区

長軸方向 N-7°-E

規模と形状 径150×106cmの方形プラン。断面観では、東側が約60cmほど内側に抉られている。

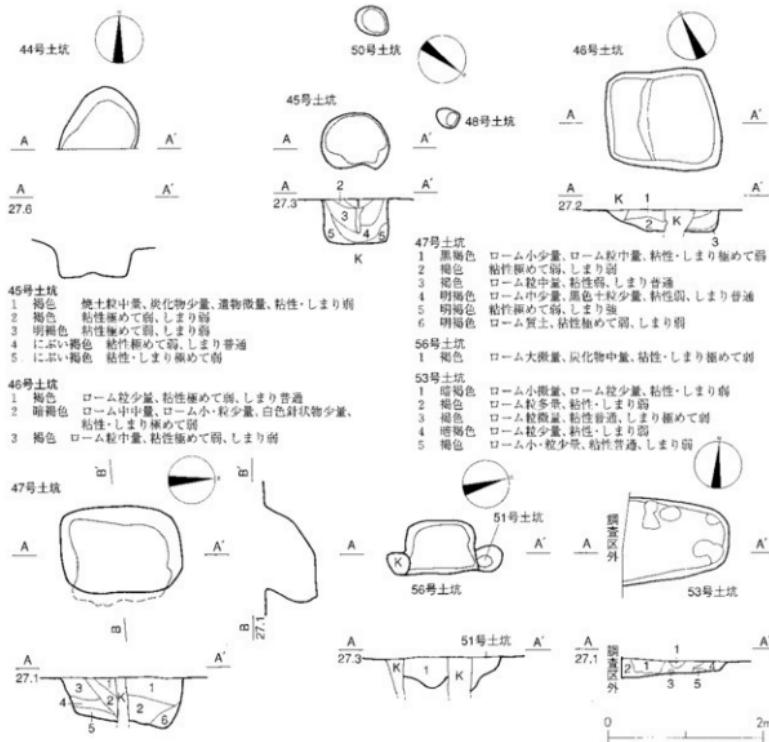
壁面 深さ約60~63cm。抉られた東側は内傾し、他の三方は緩やかに外傾して立ち上がる。

底面 径50 (~90) × 112cmの方形で、南から北へやや落ち込んでいる。

覆土トレンチヤーあり。南側(5:4層)と北側(6層)が埋まり、次いで2:1層が堆積した。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。



第53図 土坑検出状況 (44~48・50・51・53・56号)

4 8号土坑〔第53図〕

位置 2 C - 2 5 区

長軸方向 N - 1 0° - W

規模と形状 径39×22cmの楕円形。

底面 径16×12cmの楕円形。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

5 0号土坑〔第53図〕

位置 2 B - 2 5 区

長軸方向 N - 9° - W

規模と形状 径43×35cmの楕円形。

底面 径32×26cmの楕円形。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

5 1・5 6号土坑〔第53図 P L 23〕

位置 2 C - 2 6 区 5 1・5 6号土坑は切り合っているが新旧は不明である。

長軸方向 N - 1 5° - E

規模と形状 5 1号土坑は径30cm前後の円形、5 6号土坑は径88×68cmの隅丸方形である。

底面 起伏あり

覆土 搅乱が著しい。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

5 3号土坑〔第53図〕

位置 V - 3 4 区

長軸方向 N - 8 8° - E

規模と形状 径(134)×107cmの隅丸方形。西半は調査区外に延びる。

壁面 深さ11~20cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径(125)×97cmの隅丸方形。底面中央に向かい徐々に落ちくぼんでゆく。

覆土 木根としき搅乱が入る。

遺物 出土していない。

所見 本土坑の具体的な時代・用途などは、不明である。

5 5号土坑〔第54図 P L 24・52〕

位置 U - 2 5 · 2 6 区

長軸方向 N - 4 4° - W

規模と形状 径226(～108)×230(～84)cm。上面觀はT字状を呈し、東側に向かって落ち込む。

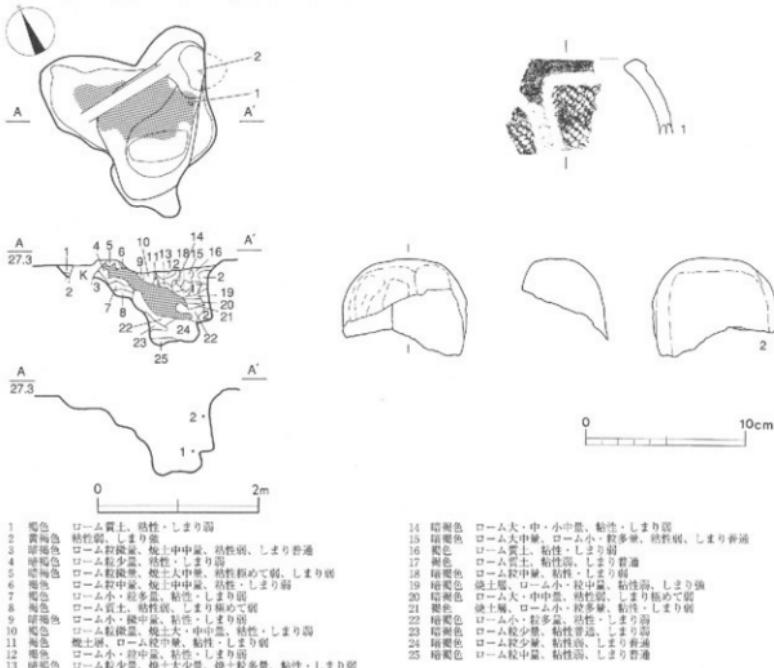
壁面 東側は、深さ102(～98)cmで垂直に立ち上がる。西側は徐々に外傾して立上り、深さ20cmの浅い落ち込みをもって終わる。

底面 不整梢円形を呈し、南北二つの落ち込みからなる。北側は奥に20~24cm抉れている。

覆土 覆土上位から中位にかけて、厚さ12~34cmの焼土が西から東へ多量に流れ込む。焼土は粉質で、ブロック状に硬化していない。焼土の下には、暗褐色相の上が30~40cm厚で堆積していた。

遺物 烧土の下から、縄文土器片(1)が1点出土した。中期後半の加曾利E式深鉢の口縁部である。北側の落ち込みの壁面沿いからは、焼け礫(2)の破片が1点出土した。

所見 本土坑の時期は、出土遺物から縄文時代中期後半頃と考えられる。この土坑の果たした本来の用途は不明である。しかし、土坑の機能を喪失し、ある程度の土が堆積した段階で、落ちくぼみを利用して焼土を廃棄したものと考えられる。



第54図 5号土坑検出状況・出土遺物

5号土坑出土縄文土器観察表

No	器種	部位	厚さ (mm)	器形と文様の若版	内面測定			胎土	色調 (外側/内側)	備考
					長石	石英	雲母			
1	深鉢	口縁	8.0	口縁部は縁帶を形成する。縁帶と伴う沈線により横長の区画を形成する。区画内にR.L.規定。	横ナデ	多	中	褐色/に赤色		

5号土坑出土礫觀察表

回収No	器種	形	法量 (cm)	出土位置 残存率	混入物	色調	石材	器形・技法の特徴	備考
2	焼け礫	厚長	4.0 (7.3)	覆土上層 焼土層上 3%	石英多量 に含む	橙色	石英斑岩	器表はわずかに赤味を帯びるが、破面は著しく赤色変成する。器表に凹凸があるが、磨滅してはいない。	

第3節 溝

北西原遺跡第3次調査では、溝1条が検出された。番号が10号から始まるのは、第2次調査までの時点での溝を9条検出されており、番号を後続して付けたためである。

10号溝〔第55図 P L25・52〕

位置 W-25、V-26、U-27・28、T-28~31、S-31~34区

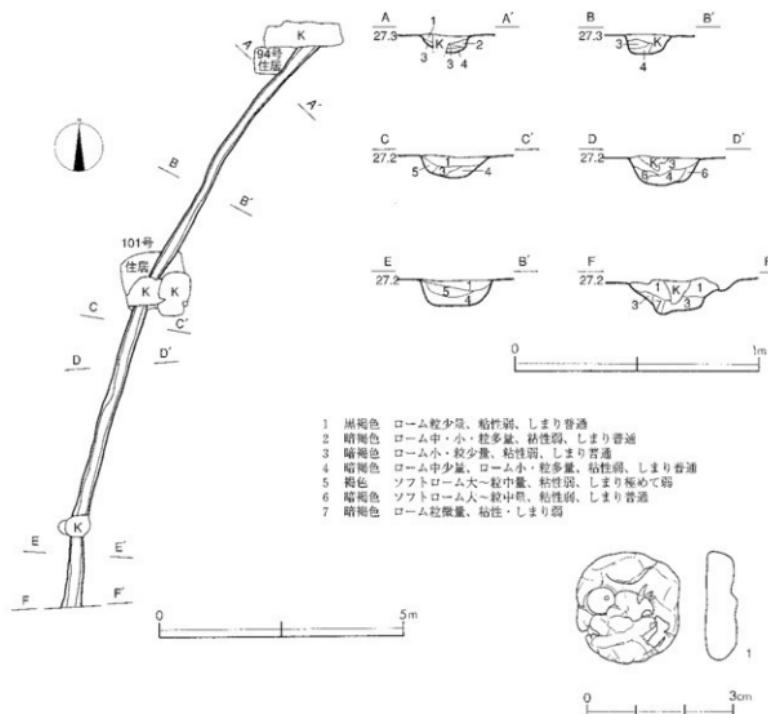
方向 北西方向にゆるやかに弧を描いて延びる。

重複関係 中央部で101号住居址、北端で94号住居址と切り合い関係にあるが、いずれも溝の方が新しい。搅乱はいずれも溝を切っている。

覆土 3~4層に分層できるが、自然堆積である。

遺物 覆土中から泥面子(1)が出土している。

所見 この溝は近世以降のものと考えられるが、その役割は不明である。



第55図 10号溝検出状況・出土遺物

10号溝出土遺物観察表

同版No	器種 形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土製品 泥面子	厚 0.6	覆土中 90%	良好	やや粉質	にぶい褐色	ひびが入り破損した箇所もあるが、笑みを浮かべた人物の顔面部と判じられる。	近世

第4節 不明遺構

当節では、調査中に発見した遺構のうち、性格の不明なものを扱う。第3次調査では、竪穴住居址と判断しがたい不整形の落ち込みを1号不明遺構として当節に収める。

1号不明遺構 [第56図 P L 25]

位置 Y・Z - 3 3 区。一部、Z - 3 4 区に係る。

規模と形状 径350×228 (~225) cmで、卵状の2穴が切り合ったような不整形。

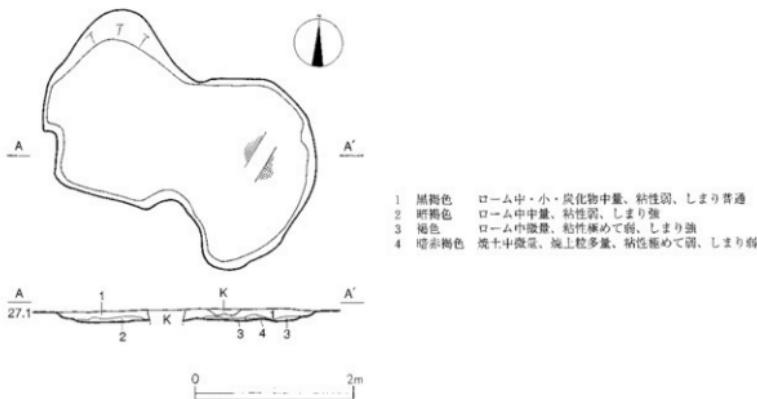
壁面 深さ8~14cmで、外傾して立ち上がる。

底面 下場より内側に、わずかに (2~3cm) 落ち崖む。底面のかなりの部分が貼り床を呈する。

覆土 トレンチャーが入る。深さ6~10cmで、自然堆積と思われる。

遺物 土師器細片が出土した。

所見 当遺構は、当初竪穴住居址と考えて調査したものであったが、壁及び掘り込みが非常に浅く、底の形状も不整形であるために住居址と断定することができなかった。底面のかなりの部分が貼り床状を呈し、床面上に被熱赤化した箇所があるため、単なる落ち崖みではなく、人為的な所作によるものであることは確かである。



第56図 1号不明遺構検出状況

第5節 遺構外出土遺物

当節では、表探・グリッド出土または当該遺構に伴わずに出土した遺物を報告する。報告に当たっては、石器・石製品・縄文土器、その他の3種に分類し、各項目ごとに解説を加える。

石器・石製品〔第57図 P L53〕

以下に、石器・石製品の遺構外出土遺物の観察表と図を掲載する。

遺構外出土石器・石製品観察表

No.	器種	最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	重量(g)	石材	備考
1	ナイフ形石器	3.8	1.0	4	1.9	チャート	
2	石核剥離片	3.6	7	4	1.2	チャート	二次剥離あり。111号住居復土中出土
3	石 繖	3.1	1.6	3	1.4	チャート	
4	石 鋸	2.3	1.9	3	1.7	チャート	9号住居復土中出土
5	石 錐	1.7	1.4	3	0.7	チャート	111号住居復土中出土
6	石 錐	2.0	1.5	2	0.8	メノウ	
7	石 錐	1.9	1.2	4	0.9	チャート	
8	石 繖	3.2	2.0	3	2.2	チャート	111号住居復土中出土
9	石 錐	1.5	1.0	2	0.2	真岩	9号住居復土中出土
10	石 錐	3.0	1.5	3	1.6	チャート	113号住居復土中出土
11	石 繖	2.6	1.0	8	1.0	玄山岩	111号住居復土中出土
12	石 錐	2.4	1.3	3	0.8	チャート	100号住居復土中出土
13	石 起	5.0	2.3	7	7.1	チャート	
14	二次剥離片	3.6	1.6	1.4	6.5	真岩	9号住居復土中出土
15	石 核	3.3	2.0	1.9	8.0	メノウ	16番と接合。111号住居復土中出土
16	剥片	2.4	2.0	1.0	3.6	メノウ	15番と接合。111号住居復土中出土
17	棒状石製品	1.6	6	6	1.2	滑石	

縄文土器〔第58~61図 P L54~57〕

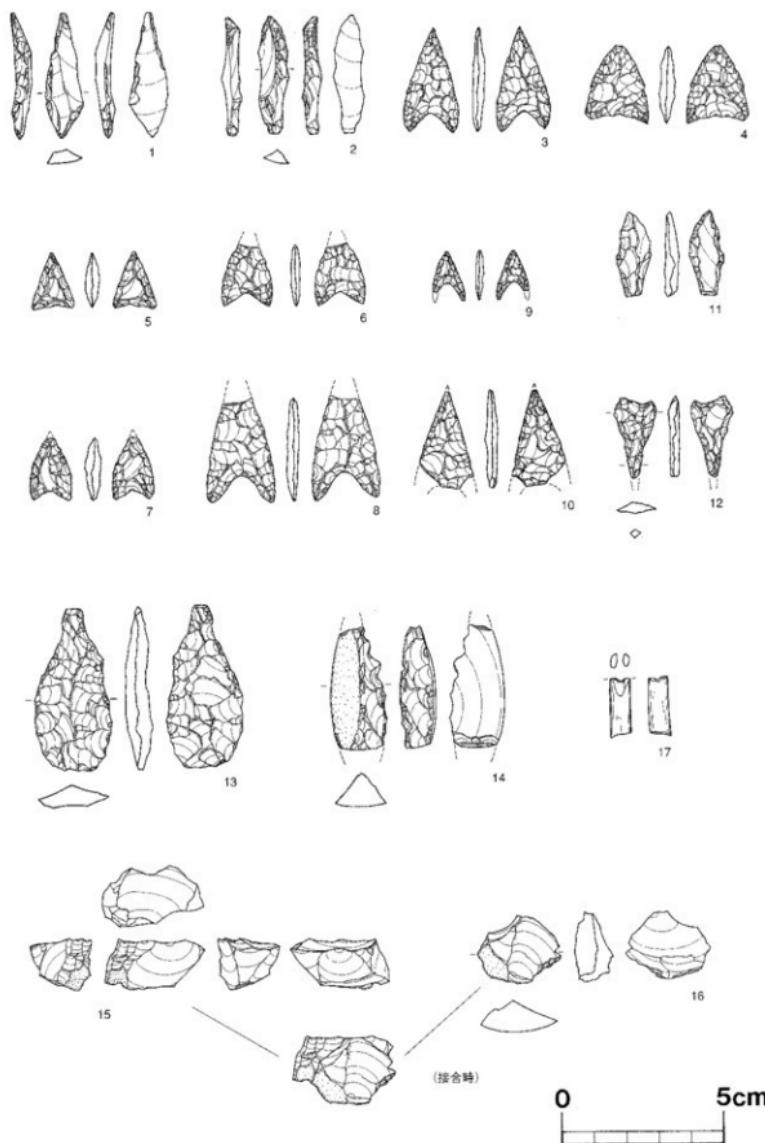
当調査区からは縄文時代前期から後期にかけての土器片が、テンバコ2箱強出土した。時期的には中期後半の加曾利E式が主体を占め、前期・後期の土器は十数点のみである。

1~3は前期中葉黒浜式の織維上器、4は前期末葉の結節縄文を有する土器である。5~7は中期後半の加曾利E式の土器である。口縁はほとんどが内溝し、胴部に垂下沈線文を施した土器、微隆起線文の土器が多い。わずかに渦巻文や連続刺突文も見られる。72~81は後期の土器で、堀之内式・加曾利B式の粗製土器が多い。縄文地文に斜行沈線、口縁内側を巡る沈線、紐線文を特徴とする。

上器片錠（第61図 1~33）は33点出土し、そのほとんどが加曾利E式の土器である。土製円盤（第61図 34~36）も3点出土した。

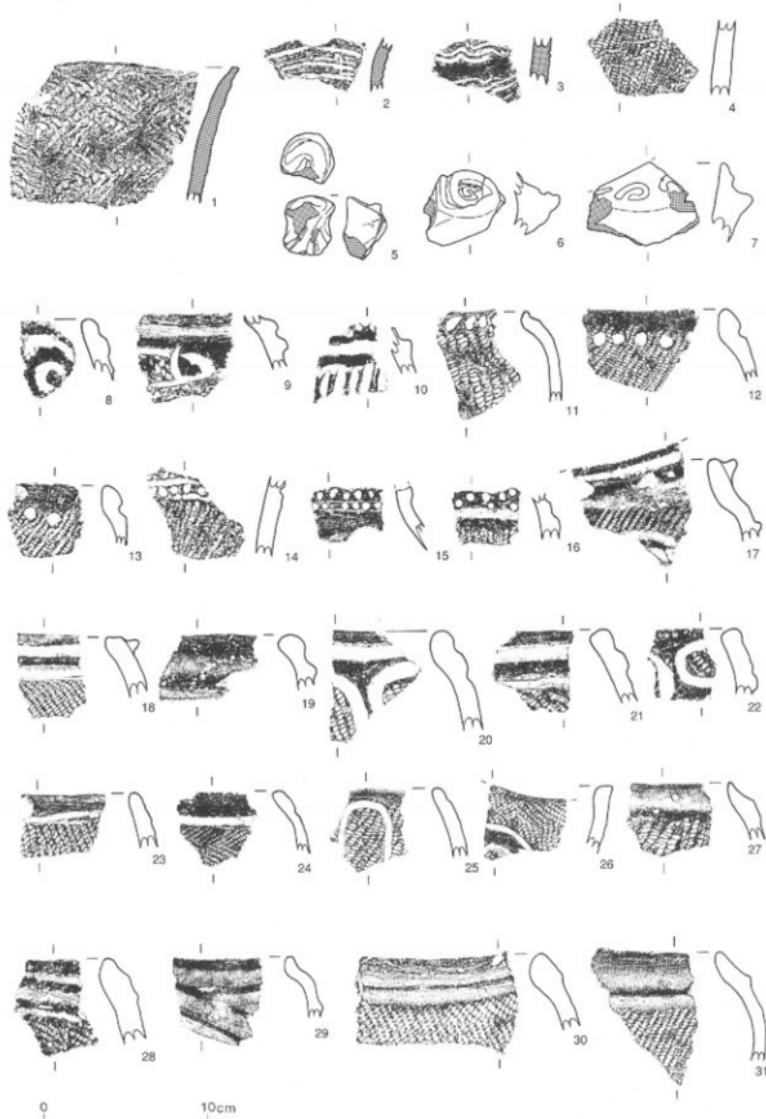
遺構外出土縄文土器観察表

No.	器種	部位	器厚(mm)	器形と文様の特徴	内面調査	輪 士 色 囲		備考	
						良石	石英	雲母	
1	深鉢	口縁	8.6	L唇部は唇を形成 「梅瓣」より無茎深鉢文・L唇文後退	薄ナデ	多	中	少	にぶい褐色/赤褐色 褐色多量
2	深鉢	胴	7.1	低い横窓の平行丸窓	薄ナデ	中	中	少	にぶい褐色
3	深鉢	胴	10.5	平行する低いL字文	ナデ				にぶい褐色/にぶい褐色 褐色多量
4	深鉢	胴	11.0	凹底茎溝文	薄ナデ	少	少		にぶい褐色/にぶい褐色
5	深鉢	山根突起	—	L唇の次起先端部にはL唇に複数舌巻文 先端部よりL唇部に被く跡		中	中		褐色

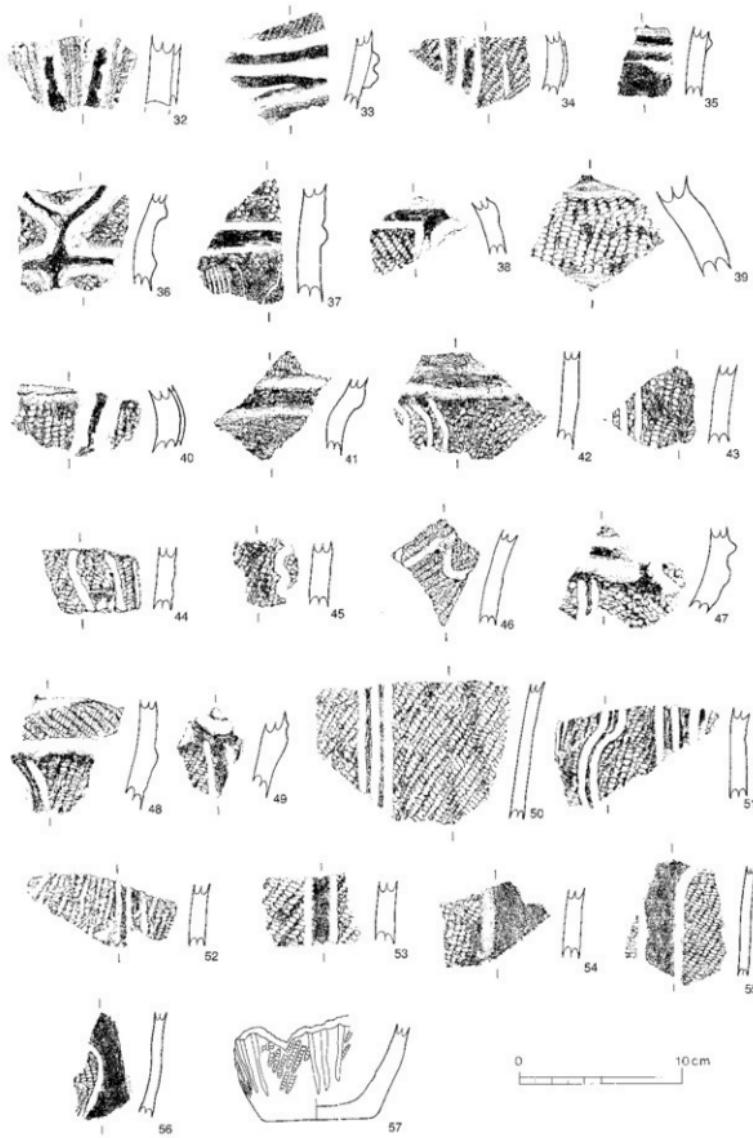


第57図 遺構外出土石器・石製品

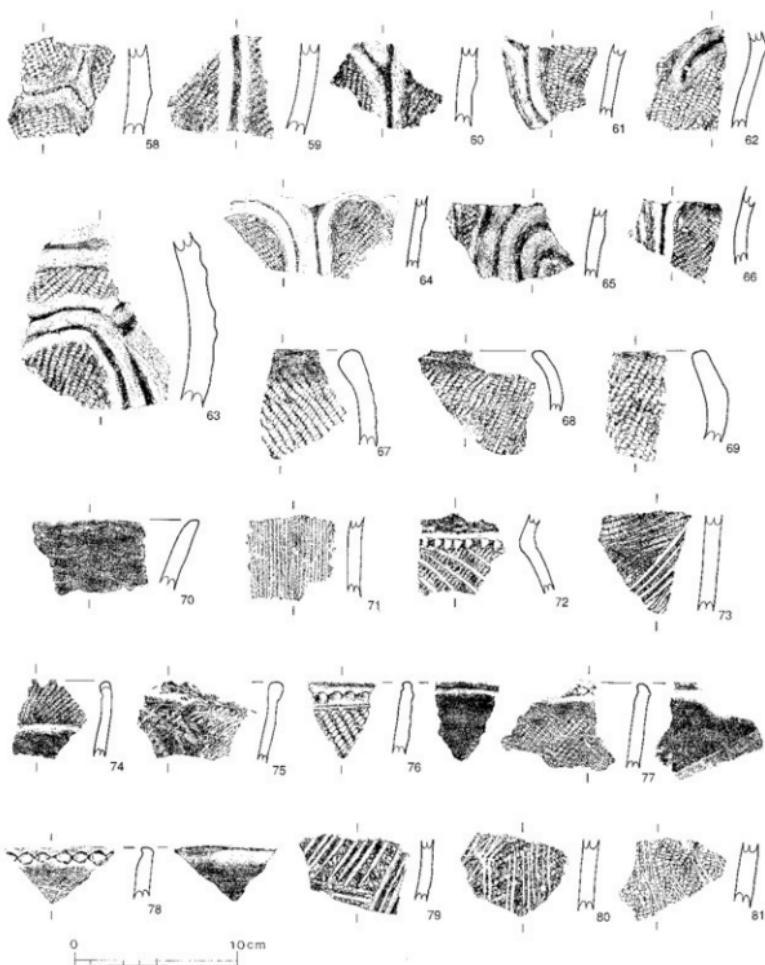
No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調整 長右:右高、雲母	勘定 多:多、少:少	色調 (外面/内面)	備考
6	深鉢	刷	10.8	外唇角上面に沈縁による彫文	横ナデ	多	多:中	要色/灰褐色
7	深鉢	口縁	9.5	横状口縁、底面上に沈縁による「つ」字状の書き文と横縁に沿った沈縁文	横ナデ			毛色/灰褐色
8	深鉢	口縁	10.2	口縁底下に沈縁による彫文	横ナデ	多	少	褐色
9	深鉢	刷	8.1	斬面台形状の書き文による彫文の区画 伴う丸窓により「し」字状の済文 区画内に彫文	横ミガキ	多		にぶい青褐色/灰褐色
10	深鉢	刷	10.0	斬面台形状の書き文による彫文の区画 伴う丸窓により「し」字状の済文 区画内に彫文	横ナデ	中	少	にぶい青褐色/灰褐色
11	深鉢	口縁	6.5	山形舟は蓋を形成、肥厚する RSL純文施文後、口縁下を磨り消す彫文の連続円形刻文	横ミガキ	中	少	褐色
12	深鉢	口縁	7.0	口縁底下に肥厚する舟形、RSL純文施文後、口縁下を磨り消す彫文の連続円形刻文	横ナデ	中		にぶい黄褐色
13	深鉢	口縁	6.9	口縁底下肥厚して舟形を形成、RSL純文施文後、無文帯下にRSL純文施文後、無文帯との間に横筋の連続円形刻文	横ナデ	中		にぶい黄褐色
14	深鉢	刷	10.9	RSL多条純文施文後、枝紋の平行沈縁による彫文	横ナデ	多	中	少
15	深鉢	刷	8.8	斬面台形状の書き文による彫文の区画 伴う丸窓により「し」字状の済文	横ミガキ	多		にぶい青褐色/灰褐色
16	深鉢	刷	10.9	横筋を有する舟形を形成するRSL純文施文後、沈縁を沿わせる舟形の斬面台形状の書き文	横ミガキ	少		にぶい青褐色/褐色
17	深鉢	口縁	9.3	底足口縁、口縁内に舟形を形成、底足による斬面台形状の書き文により「重」字形を呈する(二重口)等、内部の舟形と舟底による舟口縁の高さが同じ非常に低いもの。口縁底下に無文帯を有するRSL純文施文後、沈縁を沿わせる舟形の斬面台形状の書き文に區別される	横ナデ	中	少	にぶい褐色/にぶい青褐色
18	深鉢	口縁	12.1	口唇は舟を成すRSL純文施文後、口縁底下に斬面台形状の書き文を有する舟形を呈する	横ナデ	多	多	要色/にぶい褐色
19	深鉢	口縁	9.8	RSL基部に修理等有り舟形を呈するRSL純文施文後、舟形は開口部の舟形を呈する	横ミガキ	多	中	少
20	深鉢	口縁	12.5	口唇に肥厚する舟形の沈縁、舟形の沈縁による彫文の連続丸方彫の区画 内面にはRSL純文	横ナデ	多	中	多
21	深鉢	刷	10.2	口縁底下舟形を呈するRSL純文施文後、舟形の区画を形成、並處では無文	横ナデ	多		にぶい青褐色/にぶい青褐色
22	深鉢	口縁	11.9	口唇は舟を成すRSL純文施文後、舟形による舟口縁の高さが同じ非常に低いもの。口縁底下に無文帯を有するRSL純文施文後、舟形を沿わせる舟形の斬面台形状の書き文に区別される	横ミガキ	中		にぶい褐色
23	深鉢	刷	10.8	口唇下に無文帯、RSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ	少		にぶい褐色
24	深鉢	口縁	6.9	口縁下に無文帯、RSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ			にぶい青褐色/にぶい青褐色
25	深鉢	口縁	9.0	口縁底下に舟形を呈するRSL純文施文後、無文帯に覆する沈縁による連続U字彫	横ミガキ	多		明る光色/にぶい青褐色
26	深鉢	口縁	8.2	底足口縁、口唇は舟を形成、肥厚する舟形を呈すRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ミガキ	中	少	にぶい褐色
27	深鉢	口縁	8.9	口縁底下に舟形の書き文 下にRSL純文とRSL多条純文	横ナデ	多	少	明る光色
28	深鉢	口縁	11.6	口縁下に舟形を有する舟形を呈するRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ	多	中	にぶい青褐色/にぶい青褐色
29	深鉢	刷	7.4	口唇は肥厚 並置と斜置の2条件の平行する彫刻起源被輪下に横筋と底足を呈するRSL純文	横ミガキ	多	少	にぶい青褐色/灰褐色
30	深鉢	口縁	10.5	口唇は肥厚 口縁底下に舟形の無文帯 下にRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ	多	中	褐色/にぶい青褐色
31	深鉢	口縁	7.9	口唇は舟を成すRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ミガキ	中	少	褐色/にぶい青褐色
32	深鉢	刷	15.1	2条の船足による斬面台形形状の尾舟舟形 地文条文	ナデ			輪軸
33	深鉢	刷	9.0	RSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ	多	中	明る光色/にぶい青褐色
34	深鉢	刷	9.8	RSL純文施文後、2条の平行する舟形を呈するRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ナデ	多	少	にぶい褐色
35	深鉢	刷	10.2	斬面台形の横筋舟形	横ナデ	中		褐色/にぶい褐色
36	深鉢	刷	10.8	斬面台形の横筋舟形と伴う無文帯により区画を形成 斧面RSL純文	横ナデ	多		褐色/にぶい褐色
37	深鉢	刷	14.2	底足を有する斬面台形の横筋舟形 斧面RSL純文 斧面RSL純文	横ナデ	多	中	褐色
38	深鉢	刷	10.5	底足を有する斬面台形の横筋舟形の書き文による区画 斧面RSL純文	横ナデ	多		明る光色/にぶい青褐色
39	深鉢	刷	19.1	2条の平行する斬面台形の横筋舟形 斧面RSL純文	横ナデ	多		にぶい青褐色/灰褐色
40	深鉢	刷	14.7	底足の底足を有する斬面台形の横筋舟形と直立する横筋舟形 下にRSL純文	横ナデ	多	中	にぶい青褐色/にぶい青褐色
41	深鉢	刷	10.7	底足舟形の横筋舟形と伴う無文帯舟形 下に無文帯舟形 下にRSL純文	横ナデ	多		にぶい褐色/灰褐色
42	深鉢	刷	9.9	底足舟形によるRSL純文施文後、舟形を呈するRSL純文	横ミガキ	中		にぶい青褐色/にぶい青褐色
43	深鉢	刷	11.9	RSL純文施文後、3条の平行する彫刻起源	横ナデ	多	中	にぶい青褐色/にぶい青褐色
44	深鉢	刷	11.0	RSL多条純文施文後、2条の彫刻起源と1条の状態	ミガキ	中	少	にぶい青褐色/灰褐色
45	深鉢	刷	11.8	RSL多条純文施文後、舟形を呈するRSL純文				深褐色/にぶい青褐色
46	深鉢	刷	10.0	RSL多条純文施文後、横筋の底足舟形	横ナデ	少		褐色/灰褐色/にぶい青褐色
47	深鉢	刷	11.3	2条の平行する斬面台形の横筋舟形、伴う底足による区画 斧面RSL純文 下にRSL純文 斧面RSL純文	横ミガキ	中	少	にぶい褐色/明る光色
48	深鉢	刷	12.2	3条の平行する舟形を呈するRSL純文 斧面舟形にRSL多条純文施文後、上唇のみや舟形を呈するRSL純文 斧面舟形を呈する	横ミガキ	多	中	にぶい青褐色/にぶい褐色



第58図 遺構外出土縄文土器①



第59図 遺構外出土縄文土器②



第60図 遺構外出土縄文土器③

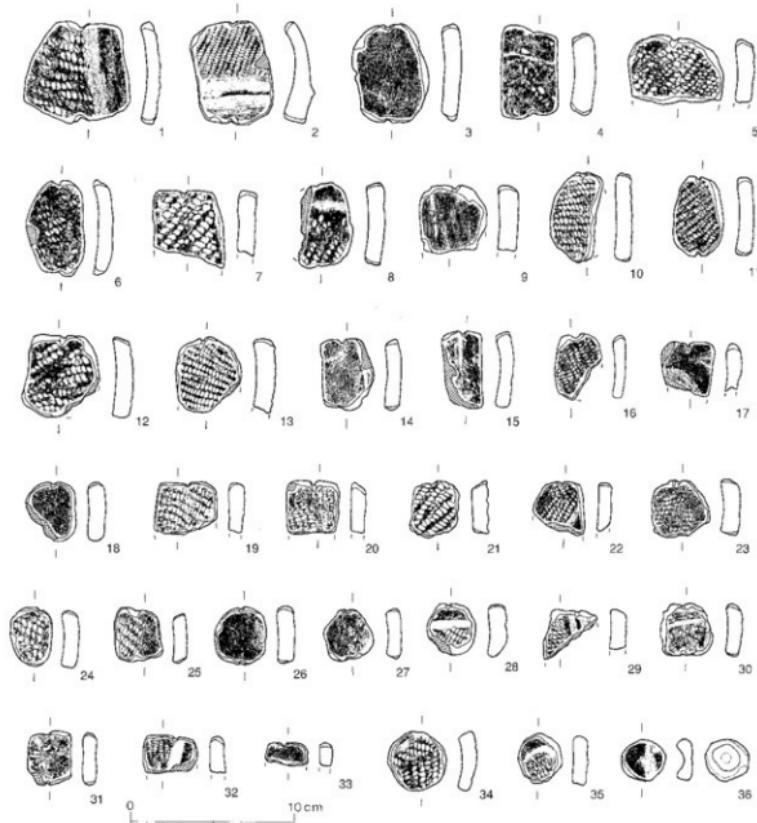
No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調整	胎上	色調 (外面・内面)	備考
4.9	深鉢	胴	11.1	光面を施した鋸歯三角形の強烈な隆起。弦目文強支え、平行する縦立沈折。光面開窓を有し。横ミガキ	長石 石英 波母	多	墨褐色/青褐色	
5.0	深鉢	脚	8.8	LR綱文強支え、3条の平行する縦立沈折。弦目文強支え消し。	横ミガキ	中	褐色/にい青褐色	
5.1	深鉢	胴	10.4	LR綱文強支え、3条の平行する縦立沈折と2条の淡赤沈折。光面開窓を有し。	ミガキ		にい青褐色/にい青褐色	
5.2	深鉢	脚	10.2	LR綱文強支え、3条の平行する縦立沈折。光面開窓を有し。	ミガキ		にい青褐色/暗青褐色	

No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調整	胎土		色調 (外面・内面)	備考
						長石	石英	雲母	
5.3	深鉢	網	11.9	LR純文施文後、2条の平行する縦斜文沈、口縁開きを設し	横ナデ	中		褐色系に赤い黄色	
5.4	深鉢	網	10.3	LR純文施文後、尾笠北端と伴う無文帶	横ナデ	多	中	赤い褐色・暗褐色	
5.5	深鉢	網	6.1	底部による尾笠北端の位置、口縁内にLR純文、口縁は堅り設し	横ナデ	少	少	褐色系に赤い黄色	
5.6	深鉢	網	8.5	底部による尾笠北端の位置、口縁内にLR純文	ミガキ	少	少	赤い褐色	
5.7	深鉢	底部	6.9	LR純文施文後、2条の平行する縦斜文沈、尾笠北端文様は付	横ナデ	多	多	赤い褐色・暗褐色	
5.8	深鉢	網	11.3	LR純文施文後、2条の平行する縦斜文沈、尾笠北端文様は付	横ナデ	多	多	赤い褐色	
5.9	深鉢	網	10.3	LR純文施文後、尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	暗褐色に赤い褐色	
6.0	深鉢	網	10.0	LR純文施文後、交差する2条の縦斜文沈、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	褐色	外縁変形付
6.1	深鉢	網	8.0	LR純文施文後、複数の縦斜文沈、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	赤い褐色・暗褐色	
6.2	深鉢	網	8.2	LR純文施文後、曲線状の尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	少	少	褐色	
6.3	深鉢	網	15.1	LR純文施文後、2条半位の尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	多	中	赤い褐色	
6.4	深鉢	網	7.3	LR純文施文後、2条半位の尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	赤い褐色・暗褐色	
6.5	深鉢	網	7.7	LR純文施文後、2条半位の尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	赤い褐色・暗褐色	
6.6	深鉢	網	7.6	LR純文施文後、2条半位の尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	少		赤い褐色	
6.7	深鉢	口縁	10.2	口縁部を削り出し、尾笠北端文様、尾笠北端文様は付	横ナデ	中	少	赤い褐色	
6.8	深鉢	口縁	7.9	口縁下に赤い文帯 下にLR純文	横ミガキ	中		暗褐色	
6.9	深鉢	口縁	11.5	口縁下に赤い文帯 下にLR純文	横ナデ	多		褐色・暗褐色	
7.0	深鉢	口縁	9.6	無文	横ナデ	中	少	赤い褐色	
7.1	深鉢	網	8.1	尾笠の無文各部	横ナデ	中		褐色・暗褐色	
7.2	深鉢	網	6.4	網は大きくぐれる びりびり脱皮する尾笠北端文様 剥げ上方に無文帯 網部はLR純文施文後斜削文の平行沈	ミガキ	中	少	暗褐色・赤褐色	
7.3	深鉢	網	9.9	LR純文施文後、斜削の手折断線	横ナデ	中		赤い褐色	
7.4	深鉢	口縁	6.8	口縁部に半円形の剥離する新文 内面口縁下にLR純文 外面口縁下よりLR純文 網文は後伏北端に剥離され下に無文帯	ミガキ	中		赤褐色・暗褐色	
7.5	深鉢	口縁	6.0	直角口縁、口縁部を削り出し口縁部の頂点に2倍の盛次尖端、残部はLR純文か付	横ナデ	中	少	褐色系・赤褐色	
7.6	深鉢	口縁	7.7	内面口縁下に伏北端 外面口縁下にLR純文 斜削文、尾笠北端文	横ナデ			暗褐色・暗褐色	
7.7	深鉢	口縁	7.8	内面口縁下に伏北端 外面口縁下にLR純文 斜削文、尾笠北端文	横ナデ	中	少	赤い褐色に赤い黄色	
7.8	深鉢	口縁	9.3	内面口縁下に伏北端 外面口縁下に伏北端文、下に無文帯を除んでLR純文	横ナデ	中	少	褐色	
7.9	深鉢	網	7.8	LR純文施文後、半段竹管削T溝による斜位の平行沈	ミガキ	中	少	褐色・暗褐色	
8.0	深鉢	網	9.5	LR純文施文後、半段竹管削T溝による斜位の平行沈	ナデ	多	中	暗褐色に赤い褐色	
8.1	深鉢	網	10.3	LR純文施文後、半段竹管削T溝による斜位の平行沈	横ミガキ	多	中	褐色・暗褐色	

造構外出土純文土器片錘・土製円盤観察表

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	器厚 (mm)	重量 (g)	残存	部位	器形と文様の特徴	内面調整	胎土		色調 (外面・内面)	備考
									長石	石英	雲母	
1	6.3	6.5	8.0	48	完	口縁	口縁下に無文帯 幅広の横斜沈板で区画 地文R.L.純文	横ミガキ	少	少	赤褐色・暗褐色	
2	6.4	5.0	13.5	48	完	網	LR純文施文後、微後起文様 横斜沈	横ミガキ	少	少	赤い褐色	
3	5.9	4.7	10.0	39	完	網	ナデによる無文	ナデ	多	中	赤い褐色・暗褐色	溝は付
4	5.1	3.5	13.0	27	完	口縁	LR純文	ナデ	多		赤褐色に赤い褐色	
5	(4.0)	5.8	10.5	(35)	1/2欠	口縁	口縁直下より良し純文	横ナデ	少		赤褐色に赤い褐色	
6	5.9	3.6	9.0	23	完	網	R.L.純文	横ナデ	中	多	赤い褐色・褐色	
7	(3.9)	4.4	10.0	(28)	1/2欠	網	R.L.純文	横ナデ	多	中	黒褐色に赤い褐色	
8	5.1	(3.2)	10.5	(22)	1/4欠	網	LR純文施文後、横斜沈板に区画された無文帯	横ナデ	多	少	赤い褐色に赤い褐色	
9	(4.0)	4.1	12.0	(24)	1/2欠	口縁	ミガキによる無文	横ミガキ	多	中	黒褐色	
10	5.5	(3.2)	9.5	(20)	1/5欠	網	R.L.純文	ナデ	多	中	赤い褐色・褐色	
11	4.9	3.1	9.0	18	完	網	R.L.純文	横ミガキ			赤い褐色に赤い褐色	口縫は付
12	4.9	4.8	11.0	(30)	1/6欠	網	R.L.純文	ナデ			赤い褐色に赤い褐色	口縫は付

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	器厚 (mm)	重量 (g)	残存	部位	器形と文様の特徴	内面調整	胎上 長石 石英 宝母	色調 (外面 内面)	備考
1 3	(4.6)	4.0	11.5	(26)	1/2欠	剥	R L 錐文	横ミガキ	褐色/深褐色		
1 4	4.5	3.3	9.0	14	完	剥	沈錐	横ミガキ	灰青褐色/深い青褐色		
1 5	4.7	(2.4)	9.0	(12)	1/4欠	円錐	口縁に浅い無文帯 横に沈錐で区画、地文純文	横ミガキ 多	中	黒褐色/灰褐色	
1 6	(4.1)	(2.9)	8.0	(9)	1/3欠	剥	R L 錐文	横ナメ	多 中 中	に深い黄褐色/褐色	
1 7	(2.9)	3.2	9.0	(10)	1/2欠	口縁	弧状の沈錐	横ミガキ	中 少	灰褐色/灰青褐色	
1 8	(3.6)	(3.1)	10.5	(13)	1/3欠	剥	ミガキによる無文	横ミガキ	少	に深い黄褐色/黒褐色	
1 9	(3.1)	3.8	8.5	(14)	1/2欠	剥	口唇部は面取り R L 錐文	ナゲ	中	明褐色/に深い青褐色	
2 0	(3.2)	3.2	8.0	(12)	1/2欠	剥	R L 錐文	ナゲ	少	に深い青褐色/灰褐色	
2 1	3.3	3.0	10.0	12	完	剥	R L 錐文	ナゲ	少	に深い黄褐色	



第61図 遺構外出土土器片錐・土製円盤

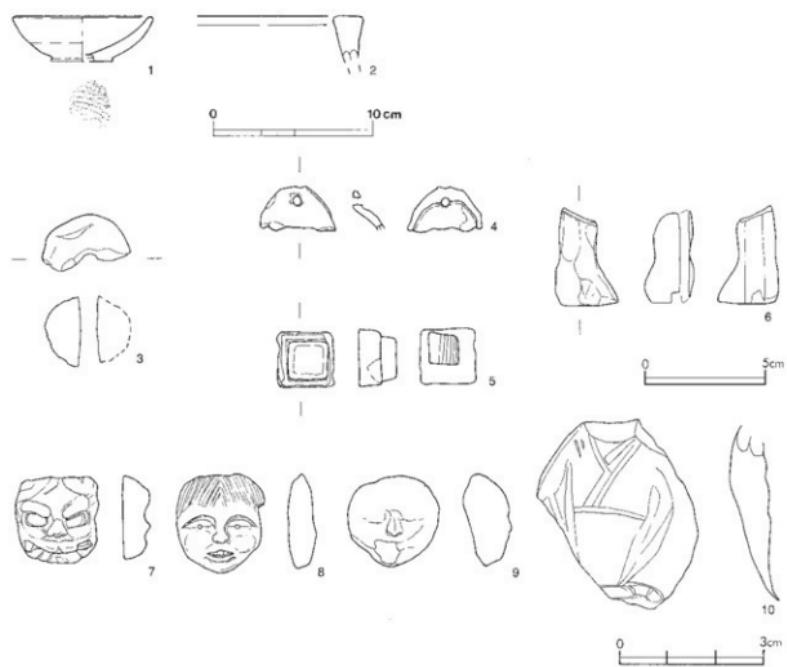
No.	長袖 (cm) (3.1)	短袖 (cm) (3.2)	脛厚 (mm) (8.0)	重量 (g) (10)	残存	部位	器形と文様の特徴	内面調整	胎 石 灰 土 骨母	色 調 (外側／内面)	備考	
2 2	3.4	3.6	10.5	16	完	胸	L R 繩文施文後、擬位沈縫と磨削	横ミガキ	多 中	灰黄褐色		
2 3	3.4	3.6	9.5	10	完	胸	L R 繩文	ナゲ	中	少	明赤褐色/明褐色	
2 4	3.6	2.6	9.5	10	完	胸	ミシ繩文	ナゲ	多 中	多	黄褐色/墨褐色	
2 5	3.1	2.9	8.0	10	完	胸	R L 繩文	横ミガキ		ない黄褐色		
2 6	3.5	3.2	11.0	15	完	胸	ナゲによる無文	ナゲ	少 少	ない黄褐色		
2 7	3.0	3.1	8.5	9	完	胸	ナゲによる無文	ナゲ	少 少	明褐色/墨褐色		
2 8	(3.1)	3.0	10.5	(11)	1/5欠	胸	破位沈縫施文後、L R 繩文	横ミガキ	中	少	明褐色/灰黄色	
2 9	(3.0)	3.2	9.5	(8)	完	胸	R L 繩文施文後、2条位沈縫	ミガキ	中	少	灰褐色/灰黄色	
3 0	3.2	3.2	9.0	12	完	胸	R L 繩文施文後、2条の直交沈縫	ミガキ	多 中	少	灰褐色/墨褐色	
3 1	3.3	2.2	7.5	10	完	口縁	口縁下に横位沈縫	ナゲ	多 中	少	ない黄褐色	
3 2	(2.2)	3.3	9.0	(10)	1/2欠	胸	R L 繩文施文後、擬位沈縫と磨削繩文	ミガキ	中	少	ない黄褐色	
3 3	(1.4)	2.6	8.0	(3)	2/3欠	胸	ミガキによる無文	ナゲ	少		灰褐色	
3 4	3.6	3.6	10.0	13	完	胸	R L 羽状縫・無文後、沈縫	杭ナゲ	少	少	灰褐色	円盤
3 5	3.0	2.7	9.0	8	完	胸	R L 繩文施文後、U字状の沈縫と無文帶	ナゲテ	多 少		ない黄褐色	円盤
3 6	2.5	2.7	9.5	6	完	胸	沈縫と無文帯 内面に15mm幅±4mmのすり鉢状の凹み	ミガキ	多 少		黒褐色/暗褐色	有孔透光量

その他 [第62図 P L 58]

以下に、石器・石製品と繩文土器以外の遺構外出土遺物を挙げる。

遺構外一括出土遺物観察表

回収No	部 器 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	十脚質土器 小皿 口縁～底部	A [8.7] B [1.9] C 2.8	95%保土 15%	良好	長石粗微量 雲母少量	に赤い黄褐色	底部回転系切り取。底部から微かに直立し、底やかに外反気味に立上がる。内外両共にナゲ。	
2	土脚質土器 内耳焼 口縁部	C (2.7)	102号住 居匂土 5%	良好	長石多量 石英少量 雲母少量	に赤い橙色	口縁部は肥厚し、ケズリにより削取られる。内外両共にナゲ。	近世
3	土製品 土生	長 幅 孔径 0.7	2.9 40% 0.7	良好	長石少量 石英微量 雲母微量	に赤い黄褐色	外側は網状が不明瞭。穿孔は上・下二方向から行われる。 重さ18.5g	
4	不明土製品 土杓？	長 (1.5)	表土 25%	不良	粉質 良土	浅黃桜色	内部に指痕痕、上方に棒状工具の貫通した痕跡を残す。	近世
5	不明土製品	幅 厚 1.4	2.2 100%	良好	精良	灰白色	方形の台が、大小二段に積み上がった形。底面には木製工具の木目痕（？）が残る。練籠等に用いるミニチュア製品か？	
6	不明土製品	長 幅 (2.6)	Y-29区 5%	不良	黒色微細 雲母微量 良土	灰褐色	棒状工具の貫通した痕が内部に残る。	
7	上製品 泥面子	厚 0.5	表土 90%	良好	やや粉質	褐色	斜めの肩、口から上方に立ち上がる牙の点から直面削を表すと考えられる。	近世
8	土製品 泥面子	厚 幅 0.5 1.9	搅乱中 90%	良好	やや粉質	褐色	中央で頭髪を二つに分け、笑みを浮かべた男児の顔面部分。眉や眼の表現が入念である。	近世
9	土製品 泥人形 頭部	厚 幅 0.9 (1.9)	搅乱中 10%	良好	やや粉質	橙色	禿頭の男児か？目は閉じられている。全体に削減感が有り、内部に指痕痕が残り、型押し作りと判斷される。	近世
10	土製品 泥人形 胸 頭～上胸部	厚 長 (3.8)	表土 20%	良好	長石微量 石英微量 雲母微量	褐色	上衣左襟を前にし、帯状のものを腰から着けた人物像。内面に指痕痕を有し、型押し造りと判断される。	近世



第62図 遺構外出土土器・土製品類

第4章 北西原遺跡第4次調査

第1節 土坑

北西原遺跡第4次調査では、2基の土坑が発見された。これらの時代別の内訳は、縄文時代が1基、時期不明が1基である。

以下、土坑毎に解説を加える。土坑番号が57号から始まるのは、第3次調査までの時点での56まで土坑名称を付けており、これに後続したためである。

57号土坑〔第63図 P L26〕

位置 C-9区

規模と形状 径280×156(～140)cm、長方形状の土坑である。

長軸方向 N-53°-E

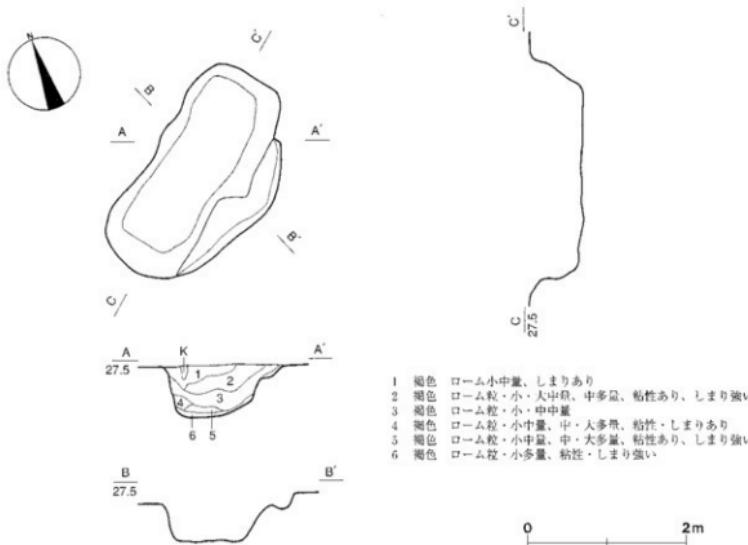
壁面 深さ64(～48)cmで緩やかに外傾する。南壁は、溝の肩に浅い落ち込みをもつ。

底面 径220×70cmで、ほぼ平坦な方形を呈する。

覆土 褐色相を主とした水平な自然堆積である。

遺物 出土していない。

所見 本坑は、時代・用途ともに不明である。



第63図 57号土坑検出状況

58号土坑〔第64図 P L26〕

位置 2D-16区

規模と形状 径268×150(～130)cmの平面イチジク形を呈し、周辺に桑根などの擾乱が入る。

長軸方向 N 53° - E

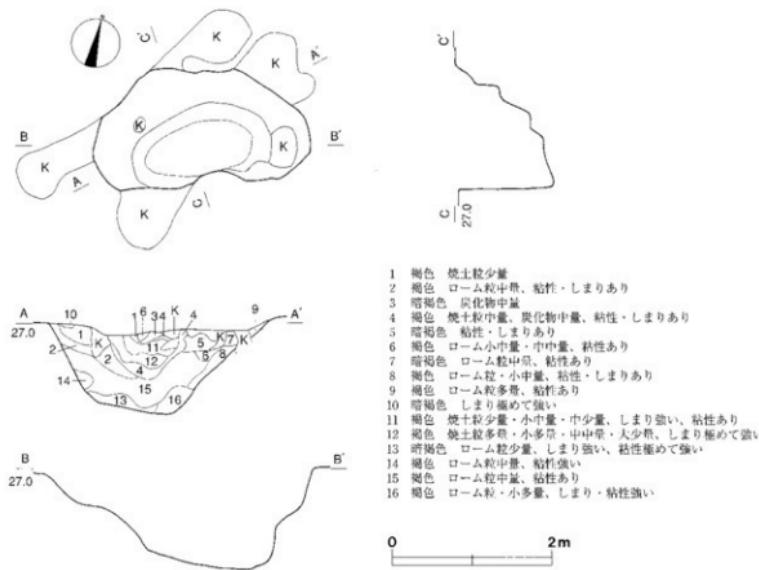
壁面 南壁は垂直に、他の3辺は外傾して立ち上がる。

底面 径136×64cmで楕円形状を呈する。東側の方が落ち込みが深い。

覆土 土坑中央部の中位上半の11・12層で焼土を含み、これ以下の層位はしまりが強い。このことは、本坑が人為的に埋められた結果によるものと考える。

遺物 出土していない。

所見 本坑は、帰属する時代・用途ともに不明である。ただし、北西原遺跡第3次調査の55号土坑と山川古墳群の13号土坑が、本例と同様の形態で覆土中に焼土を含むことから類推すると、縄文時代の道構の可能性がある。



第64図 58号土坑検出状況

第2節 溝

北西原遺跡第4次調査では、溝1条が検出された。番号が11号から始まるのは、第3次調査までの時点での溝が10条検出されており、番号を後続して付けたためである。

11号溝〔第65図 P L26〕

位置 A-2、-A-(-3)・(-4)・(-5)、-B-(-6)・(-7)・(-8) 区 調査区の西端、西壁際で発見される。

規模と形状 長さ(23.4)×幅1.1(~0.7)m。溝の南北方向は、西壁より更に区外に延進するものと思われる。

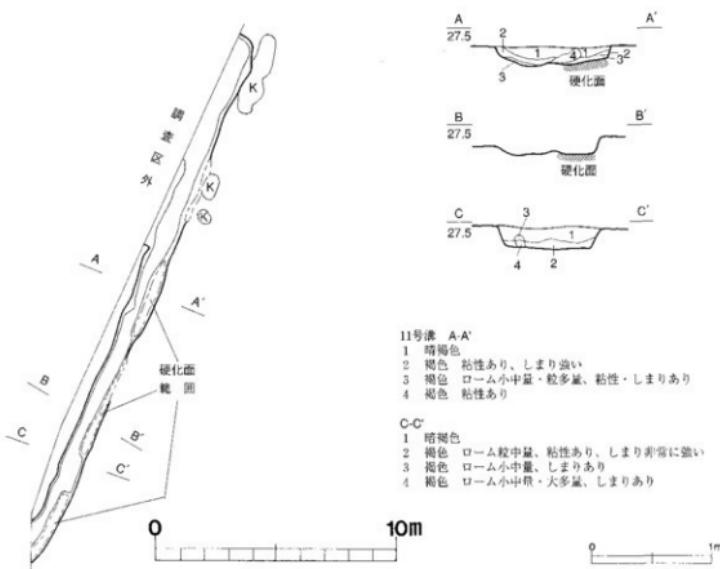
壁面 深さ10(~16)cmで外傾して立ち上がる。

底面 70~80cm幅で、ほぼ平坦である。溝の東岸のうち中央から南半にかけては、40~50cm幅でロームによる貼り床状の硬化面が形成されていた。

覆土 上層は黒褐色、下層は褐色を呈し、下層はしまりが強い。

遺物 固化していないが、数片の縄文土器が覆土中から出土した。

所見 本跡は、帰属する時期は不明であるが、硬化面を伴った溝である。硬化面は、道路的な用途を果たし、溝はそれに伴う側溝として利用されていたのかもしれない。



第65図 11号溝検出状況

第3節 遺構外出土遺物

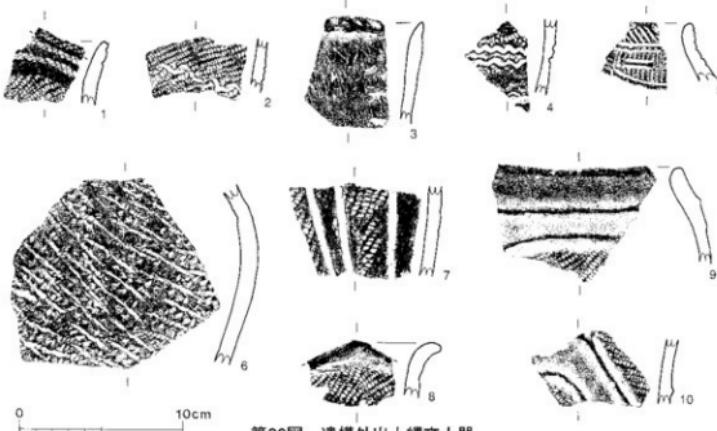
当節では、表掲・グリッド出土、または当該遺構に伴わずに出土した遺物を報告する。報告に当たっては、縄文土器とその他の2種に分け、各項目ごとに解説を加える。

縄文土器〔第66図 P.58〕

当調査区からは、縄文時代前期末から中期後半にかけての土器片が三十数点出土した。1~5は前期末の土器で、側面圧痕・結節縄文・波状貝殻文などを有する。このうち4・5は、大木5式の土器である。6は、前期と推測される附加条を施した土器である。7~10は、中期後半加曾利E式の土器で、垂下沈線文・微隆起線文が見られる。

北西原遺跡第4次調査遺構外出土縄文土器観察表

No	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面測量	施上		色調 (外面・内面)	備考
						長石	石英		
1	深鉢	口縁	8.5	波状口縁 口唇部にLR縄文 口縁下に2条横位LR結節 柱状無文帯を挿入して下にLR縄文	ナダ			灰青褐色/にい黄褐色	
2	深鉢	腹	6.7	LR結節縄文	横ナダ			黒褐色/にい黄褐色	
3	深鉢	口縁	6.1	口唇部に連続捺压痕 腹部に波状貝殻文	横ナダ	少		褐色/灰褐色	
4	深鉢	腹	6.6	平行する横位の波状沈線 地面R.L縄文	横ナダ			褐灰褐色/にい黄褐色	
5	深鉢	口縁	9.1	口縁部下に斜位の平行沈線 2条の横位沈線に区画され、下に細かいRL縄文 中央に2条の細かい横位沈線	横ナダ	中 多	少	にい黄褐色	
6	深鉢	腹	10.1	LR+その附加条縄文	横ナダ	中 少		黒褐色/灰褐色	
7	深鉢	腹	8.0	RL縄文施術後、柱状沈線間を磨消	横ナダ	中 少		にい褐色/にい黄褐色	
8	深鉢	口縁	6.8	波状口縁 口唇部は捺压痕を呈す 口縁部直下に無文帯 下にR.L縄文(異名)	横ナダ			にい黄褐色	
9	深鉢	口縁	7.7	口縁部は捺压痕に厚みを持つ 口縁部直下に無文帯 下にRL縄文施術後、2条の平行横位微隆起縫文 嵌入縫文跡はナダ	横ナダ	多 中		黒褐色/暗褐色	
10	深鉢	腹	7.0	LR縄文施術後、斜位と弧状の微隆起縫文 微隆起縫文跡はナダ	横ナダ	多 多	中	褐色/暗褐色	



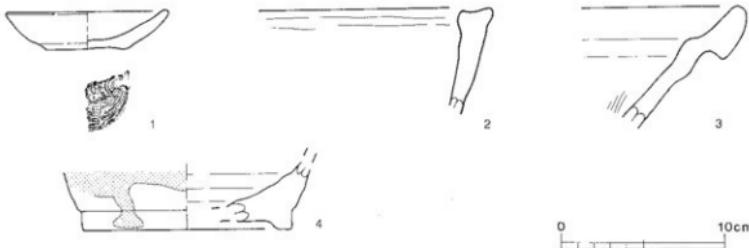
第66図 遺構外出土縄文土器

その他 [第67図 P L.58]

以下に、縄文土器以外の遺構外出土遺物を挙げる。

北西原遺跡第4次調査出土遺物観察表

回収No	器種 器	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師質土器 小皿 口縁～底部	A [6.7] B [3.3] C 1.5	表上 10%	良好	赤色微砂・ 雲母少散	橙色	底部回転糸切り痕。底部から横ナデによって 継やかに立ち上がる。	近世
2	上部質土器 内耳縁? 口縁部	C (4.6)	表土 10%	良好	雲母微散	にぶい赤褐色	直立気味に立ち上がる口縁部片。口縁部は1.3cm幅で半周に削取られる。	近世
3	陶器 揉り鉢 口縁部	C (4.9)	表上 5%	堅緻	長石微量 黒色少散	浅黄褐色 赤褐色	斜位に立ち上がる口縁部片。内外面施釉。内 面に、片口部のへこみと御し目あり。	瀬戸美濃系 近世
4	陶器 壺要素? 底部	B [8.5] C (2.6)	表土 15%	堅緻	良土	灰白色 オリーブ褐色	やや外傾して立ち上がる底部片。高台内底面 に回転糸切り痕。内面施釉。外面には釉溜り が生じる。付高台。	瀬戸美濃系



第67図 遺構外出土土師質土器

第5章 山川古墳群第1次調査

第1節 古墳

山川古墳群第1次調査では、古墳および方形周溝墓を合計7基発掘した。これらはいずれも墳丘を失っており、トレンチの掘削と表土除去中に周溝を確認したことから発見されたものである。

これらはみな主体部を喪失しており、埋葬状況や被葬者に関する具体的な情報は得られなかった。また、限定された調査区と土地利用上の制約により、墳墓全体の周溝を調査した訳ではない。

ここでは、周溝の形状と主軸方位の傾向、出土遺物の組成から、4基を古墳、3基を方形周溝墓と認識して報告を行なう。古墳の番号は、墳丘の残る2基、昭和48年調査の1基に統いて4号から番号を付す。

4号墳〔第68・69図 P L 27・28・59〕

位置 2K-27~29、2L-26~30、2M-2N-25~30区

規模と形状 周溝外縁間の最大径21.5m。幅3.5(~2.5)mの溝が、半円形の弧を描いて遺存する。東側は深さ数mにわたって、埴輪材を大量に含んだ現代の搅乱が入り込み、完全に破壊されていた。また周溝上面も、現代の農道が2条通るなど、遺存状況は良くない。

周溝壁面 良好に残る西側部で、深さ40cmを計り、緩やかに外傾して立ち上がる。

周溝底面 良好に残る西側部で、幅3mを計り、平坦である。

主体部 周溝内区を詳しく精査したが、搅乱がひどく、発見できなかった。

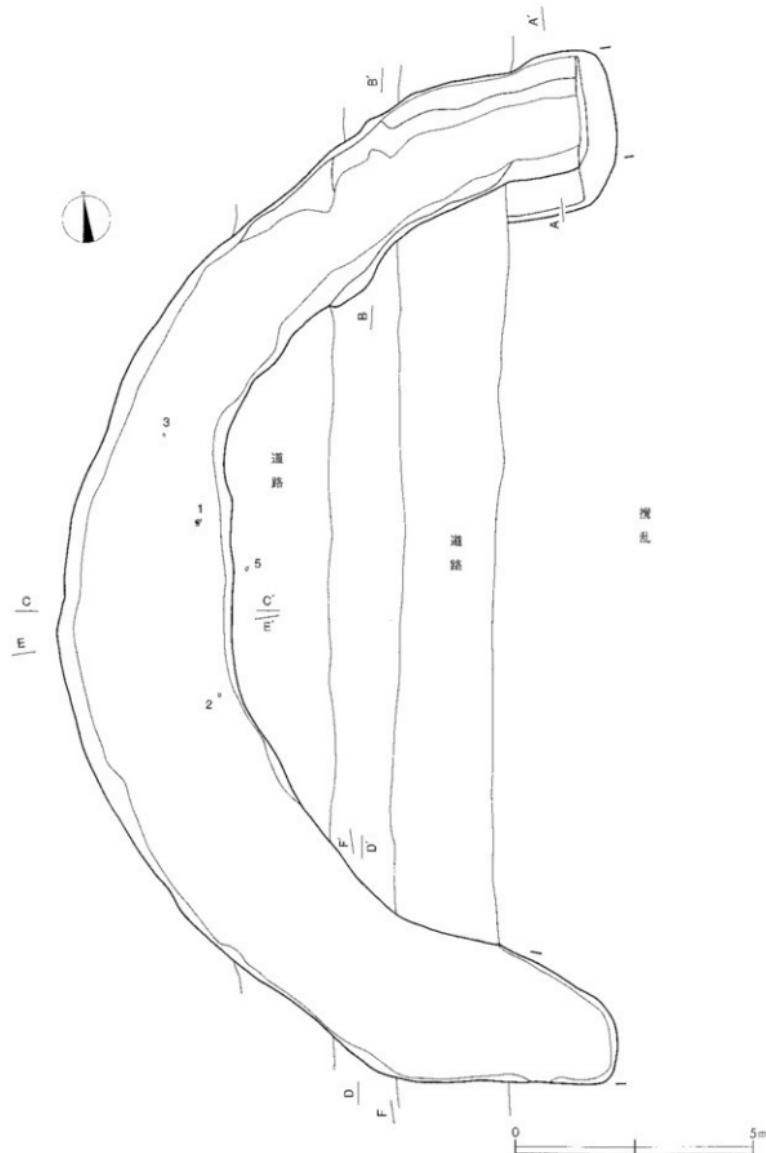
周溝覆土 色調が暗褐色相を中心とし、主に水平方向に堆積することから、自然堆積によるものと考えられる。

遺物 周溝西側のほぼ中央から、底面直上で須恵器杯(1)が出土している。時期的には、陶邑編年のTK47型式期併行の产品とみられる。この他、裾の広がる土師器高杯脚部(2)と、滑石製模造品の勾玉(3)が見つかった。

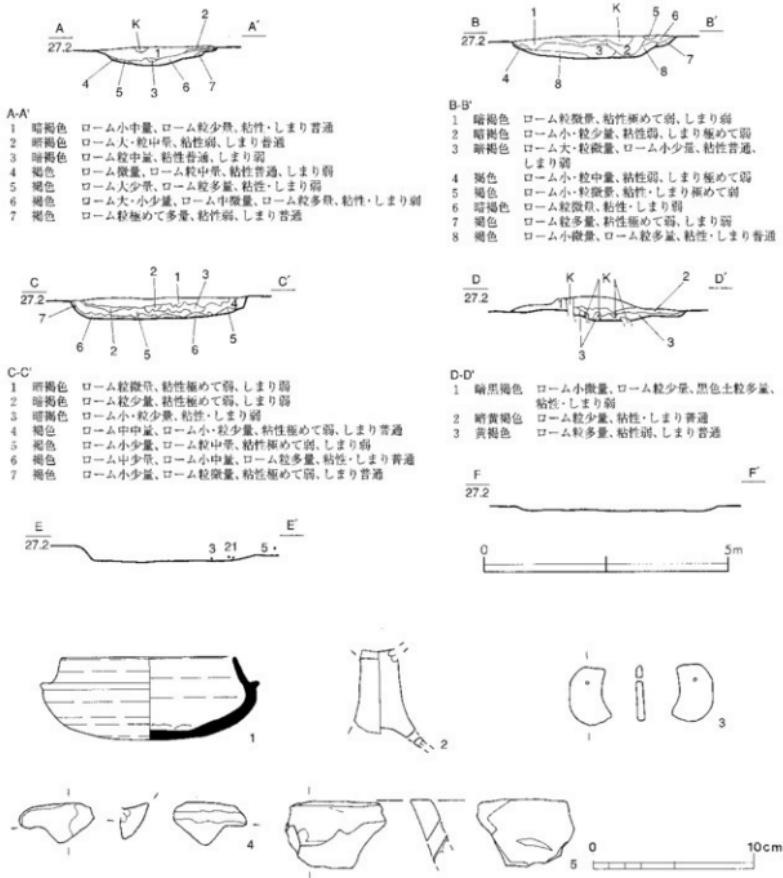
4号墳出土遺物観察表

団號No	器種形	法量 (cm)	出土位置 覆土・残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	須恵器杯	A C 10.6 5.1	底面直上 95%	堅焼 長石少骨 黒色微移 微量	灰色	右巻きのロクロ底形。底面から回転性のナデ によって面取られるように調整。体部中位に 引き出た棱を持つ。体部との境に沈窓を有す。 口縁はやや内傾して立上がる。見逃にナヂ。	陶邑TK47型式 併行期か?	
2	土師器 高杯 脚部	C (5.6)	覆土中層 50%	良好 赤色微細 長石粒微量	橙色	束広がりの縦筋から直立する脚部片。ヘラミ ガキで外腹整型。穿孔有り。外尚赤彩痕。		
4	不明土製品	長 (2.2)	覆土中	堅焼 長石粒少量 石英微量	にぶい赤褐色	遺存面は全留丹念なナデで調整を受ける。深 皿・鋸歯の高台・脚部か?		
5	不明土製品	長 (2.6)	遺構外	良好 右美多量	にぶい橙色	外面と内面はナデ。端面はヘラ削り。外面に 沈窓1条。1か所穿孔あり。		

No	種類	徑(cm)	厚(cm)	孔徑(cm)	重(g)	色調	出土位置	備考
3	滑石製勾玉	34×19	3	1.5	3.9	暗緑灰色	覆土下層・無頭は全体的に良く研磨されている。	



第68図 4号墳検出状況①



第69図 4号墳検出状況②・出土遺物

所見 当造構は、遺物の年代と組成から古墳時代中期の古墳と考える。その中でも、底面直上で出土した須恵器の年代からは、5世紀後半から5世紀末葉に位置付けが可能である。周溝の遺存状況が半円形のみのため、墳形が円墳となるか前方後円墳になるかは決定できない。主体部は、既に失われた墳丘上に設けられたものと推測される。

5号墳〔第70図 P L 28・59〕

位置 26・27トレンチの南方

規模と形状 周溝外線間の最大径は、12.5(～10.5)m。楕円形に周溝が巡る。

周溝壁面 深さ25(～18)cmで、外傾して立ち上がる。

周溝底面 幅約85(～60)cmで、ほぼ平坦である。

主体部 周溝内区を精査したが、発見できなかった。内区には、径60cmの楕円形の落ち込みがあるが、本跡に伴うものとは見なせない。

周溝覆土 黒褐色相を主体とし、水平方向の堆積状況から自然堆積と判断される。周溝東北側では、白色粘土塊が20cm大で集積していた。

遺物 土師器細片(1)を、周溝東北の底面直上で発見した。この他に時期決定に給し得る遺物は出土していない。

所見 本古墳は、正確には円形周溝状遺構と称すべきものであるが、失われた墳丘上に主体部が営まれたものと想定し、古墳時代の円墳と考える。

5号墳出土遺物観察表

図版No	器種 種形	法量 (cm)	出土位置 底面直上 残存率 5%	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師器 壺類? 底部	C (26)		良好	長石粒多量	にほい橙色	平底の底部から直立気味に立上がる底部片。 武面・外副火にヘラミガキ。内面はミガキとナデで調整される。	

6号墳〔第71図 P L 29・59〕

位置 46・47トレンチの西側。西半と南半は調査区外である。

規模と形状 幅2.2(～1.8)mの溝が、弧を描いて巡る。円形と仮定した場合、推定半径は15.7(～15.8)mを計る。

周溝壁面 深さ35(～10)cmで、全体としては緩やかに立ち上がる。しかしながら、緩傾斜する箇所もあって一様ではない。

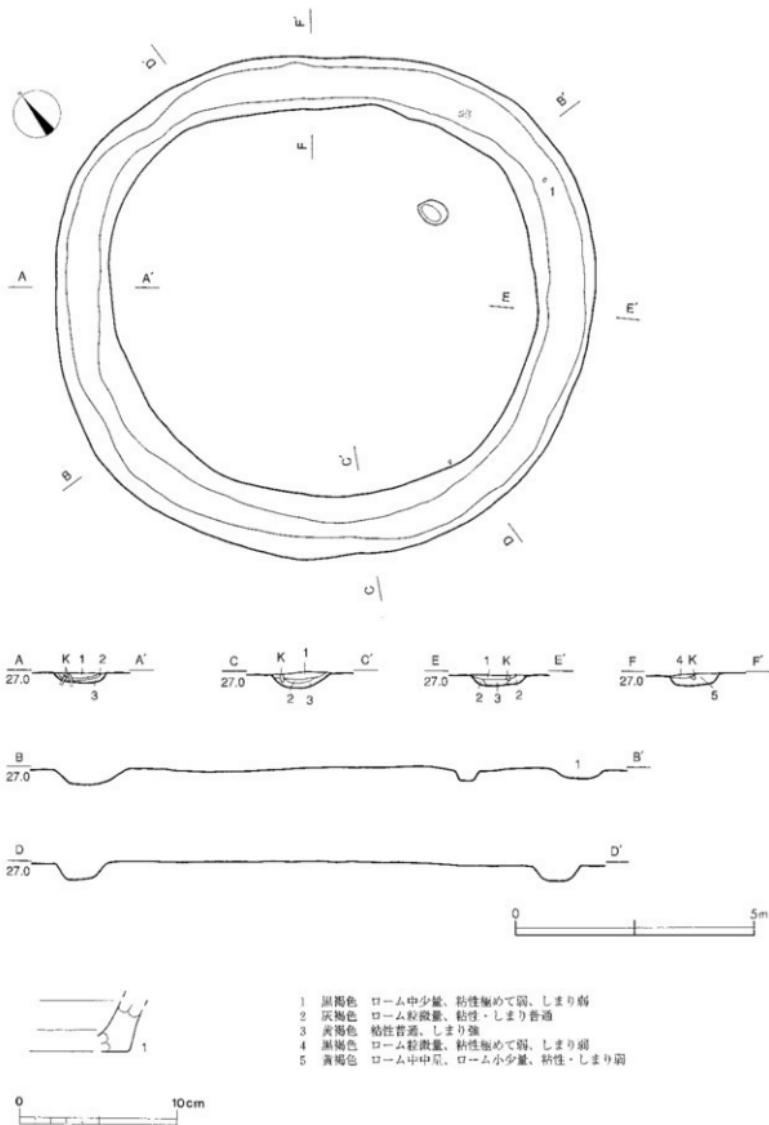
周溝底面 幅125(～40)cmで、ほぼ平坦である。

主体部 周溝内区の調査可能な範囲を精査したが、発見できなかった。図上の方形坑は、すべてイモ穴である。

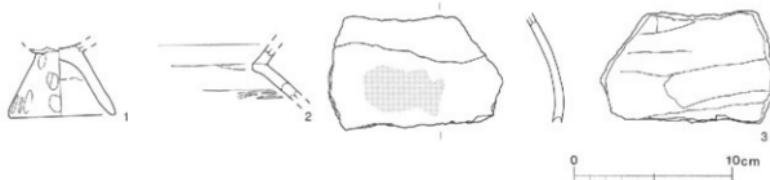
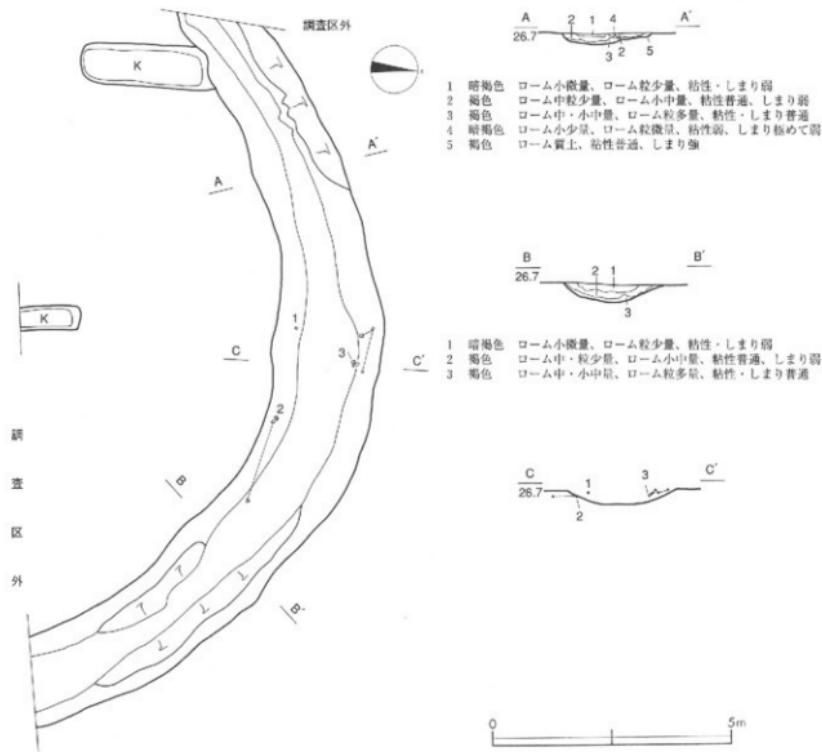
周溝覆土 暗褐色相の水平堆積で、自然堆積と思われる。

遺物 覆土中層から、古墳時代前期の土師器片(1～3)が出土した。

所見 周溝の一部(円形と仮定して1/3強)のみの検出のため、明確なことは決定しない。正確には古墳時代前期以降の円形周溝状遺構と称すべきかもしれないが、ここでは4・5号墳同様、消失した墳丘上に主体部があるものとみなし、古墳時代の円墳と考える。



第70図 5号墳検出状況・出土遺物



第71図 6号墳検出状況・出土遺物

6号墳出土遺物観察表

団版No	器種 形	法 身 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器形・技 法の特 徴	備 考
1	土器 高 杯 部	B C (4.6)	覆土中層 15%	良好	長石少量 石英微量 良土	に赤い褐色	杯部に向け内傾する器部片。器地面は削り される。外側はハケメの上にヘラミガキ。内 側はナデ。杯部底面は芯念なヘラミガキ。	
2	土器 環 頭～胸 部	C (2.7)	覆土中層 10%	良好	長石少量 石英微量 良土	に赤い黄橙 色	腹部は球状に内凹し、腹部はくの字に屈曲し て外反する。頭部内外面・体部外表面はヘラミ ガキ。体部内面はナデとミガキ。	
3	土器 高 杯 部	C (6.8)	覆土中層	良好	長石粒微量 良土	に赤い褐色	外側はヘラミガキ。内側はナデ。外表面には一 部赤彩痕が残る。頭部から体部上半辺りの部 分か。	

7号墳〔第72-73図 P L30・60〕

位置 5X-11・12、5Y-10～13、5Z-10・11区

規模と形状 遺存部で南北方向で(9.5)m・東西方向で(9.9)mを計る、緩やかなL字状の溝が巡る。東半は調査区外となる。

主軸方位 N-50°-W(南北方向から推定)

周溝壁面 深さ8～20cmと浅く、微妙に立ち上がって終わる。

周溝底面 幅1.6～2.2mで概ね平坦である。トレッシャーによる搅乱が著しい。

主体部 周溝内区の調査可能な範囲を精査したが、発見できなかった。

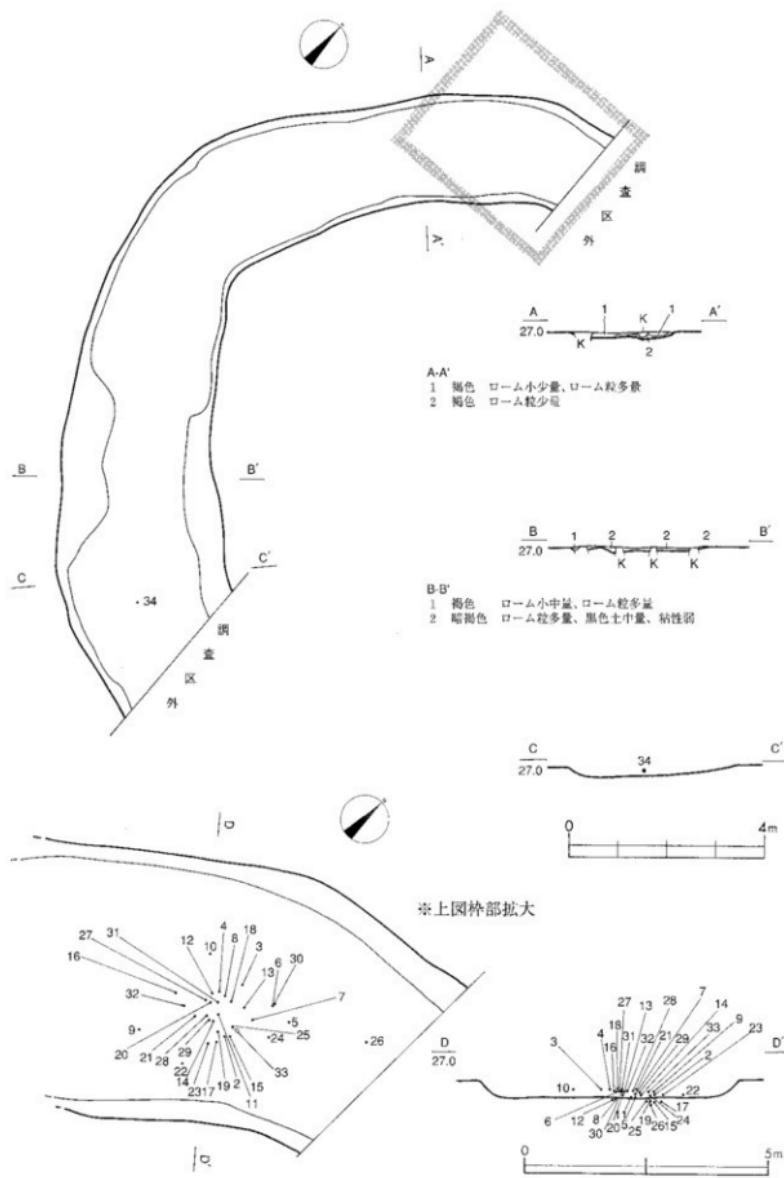
周溝覆土 深度が浅く不明確だが、褐色の單一層であることから自然堆積と考える。

遺物 周溝北側で、滑石製模造品が多数出土した(2～33)。数量は、白玉が30個、勾玉が1個である。出土レベル的にはやや上方のものもあるが、かなりまとまった分布がみられることから、埋没の同時性は強いものと考えたい。周溝南方では混入と見しき石鏡(34)が、覆土中からは赤彩の土師器杯(1)が出土した。

所見 本墳は、出土遺物の組成から古墳時代中期の古墳と判断した。検出した周溝が部分的であるため、墳形は決定できない。北側出土の滑石製模造品は、集中具合から判断して、古墳に伴うことは確実であり、何らかの行為の結果として留め残された可能性がある。主体部は、既に失われた墳丘上に設けられたものと推測される。

7号墳出土遺物観察表

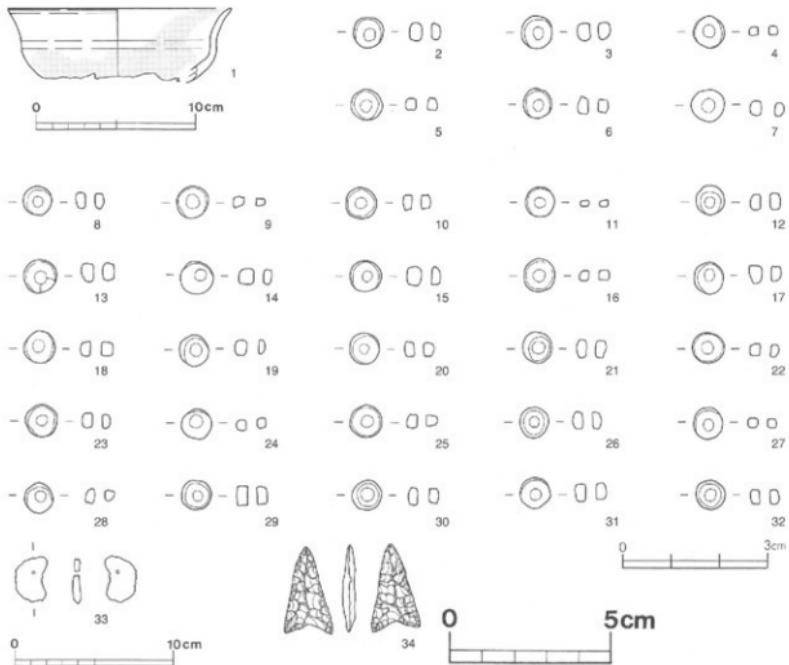
団版No	器種 形	法 身 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器形・技 法の特 徴	備 考
1	土器 高 杯 口縁～胸 部	A C (4.6)	覆土中 60%	堅密	長石粒微量 赤色	外反気味に立上がり、頭部でやや括れる。口 縁は粘ナデ。頭部はミガキとナデの併用。内 外面共に赤彩され、二次焼成を受け黒化し た部分も見られる。		



第72図 7号墳検出状況・遺物出土状況

7号墳出土滑石製品觀察表

No	種類	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	出土位置	備考
2	滑石製白玉	6×5.5	2.5~3	2.5	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨され、一部側面が破損する。
3	滑石製白玉	5.5×6	3	2	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
4	滑石製白玉	6×6	1~2	2	0.18	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
5	滑石製白玉	6×6	2~3	2	0.2	暗緑灰色	底面直上	側面観は傷みな形狀で、厚さは均一。
6	滑石製白玉	6×6	2~3.5	2.5	0.2	暗緑灰色	覆土下層	上・下面共に偏平な形狀。一部側面が破損する。
7	滑石製白玉	6×6.5	1~2.5	2.5	0.1	暗緑灰色	覆土下層	上・下面共に偏平な形狀。一部側面が破損する。
8	滑石製白玉	5.5×6	2.5~3.5	2~3	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨され、側面中央に縫が生じる。
9	滑石製白玉	6×6	1.5~2	2	0.15	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
10	滑石製白玉	6×6	2~3	2	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
11	滑石製白玉	6×6	1~2	2.5	0.1	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨される。
12	滑石製白玉	5.5×5.5	3	2~2.5	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨される。
13	滑石製白玉	6×6	2.5~3	2~2.5	0.25	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
14	滑石製白玉	6×6	2~3	2~2.5	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
15	滑石製白玉	6.5×6	2~3	2	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨される。側面中央に縫が生じる。一部破損する。
16	滑石製白玉	6×6	1.5~2	2	0.18	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
17	滑石製白玉	6×6	3	2~2.5	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨される。
18	滑石製白玉	6×6	1.5~3.5	2~2.5	0.28	暗緑灰色	覆土下層	上・下面共に偏平な形狀。
19	滑石製白玉	6×6	1.5~2.5	2	0.15	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨される。
20	滑石製白玉	6.5×6	3	2~2.5	0.2	暗緑灰色	底面直上	一部側面に削取りあり。上・下面是やや偏平。
21	滑石製白玉	6×5.5	2.5~3.5	2	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。



第73図 7号墳出土遺物

No	種類	径 (mm)	厚 (mm)	孔径 (mm)	重量 (g)	色調	出土位置	備考
22	滑石製臼下	6×55	2	2~25	0.18	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨され、側面中央に縦が生じる。
23	滑石製臼玉	6×6	2.5	2	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的によく研磨される。
24	滑石製臼下	6×6	1~2	2~25	0.1	暗緑灰色	底面直上	側面鏡は偏平な形状で、厚さは不均一。
25	滑石製臼玉	6×6	2~3	2	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨され、側面中央に縦が生じる。
26	滑石製臼玉	5.5×6	3	2	0.2	暗緑灰色	底面直上	全体的に良く研磨され、側面鏡は逆台形を呈する。
27	滑石製臼玉	6×6	1.5	2~25	0.1	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
28	滑石製臼玉	5.5×5.5	1~25	2	0.1	暗緑灰色	覆土下層	一部無垢が破損する。
29	滑石製臼玉	6×6	3~35	2	0.3	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
30	滑石製臼玉	6×55	3	2~25	0.2	暗緑灰色	覆土下層	側面中央に横位の縦が生じる。
31	滑石製臼玉	6×6	2.5~3	2~25	0.2	暗緑灰色	覆土下層	全体的に良く研磨される。
32	滑石製臼玉	6×6	3.5	2.5	0.2	暗緑灰色	覆土下層	側面中央に横位の縦が生じる。
33	滑石製勾玉	26.5×16	2~3	2	2.6	暗緑灰色	覆土下層	側面は未調整。下下面の研磨度も乏しい。

7号墳出土土器観察表

No	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
34	石 磨	26	15	4	1.1	チャート	

第2節 方形周溝墓

今回発見した方形周溝墓は3基である。これらは互いに、他の古墳よりも距離的に近く、相接した位置にある。2・3号方形周溝墓は、地形および調査区上の制約のために周溝を完掘していないが、南北方向の軸線もみな20°以内におさまることから、一連の方形周溝墓群と認めた。

1号方形周溝墓〔第74・75図 P L31・61〕

位置 5V・5W・5X-1 6~1 9区。東北隅は調査区外。

規模と形状 周溝外縁間で東西13.45m・南北12.9mを計る。幅2.45(~2.1)mで、方形に周溝が巡る。南東隅の傾斜は、掘削時に生じた搅乱である。

主軸方位 N-21°-E (南北方向の軸を用いる)

周溝壁面 深さ80(~65)cmで、外傾して斜位に立ち上がる。

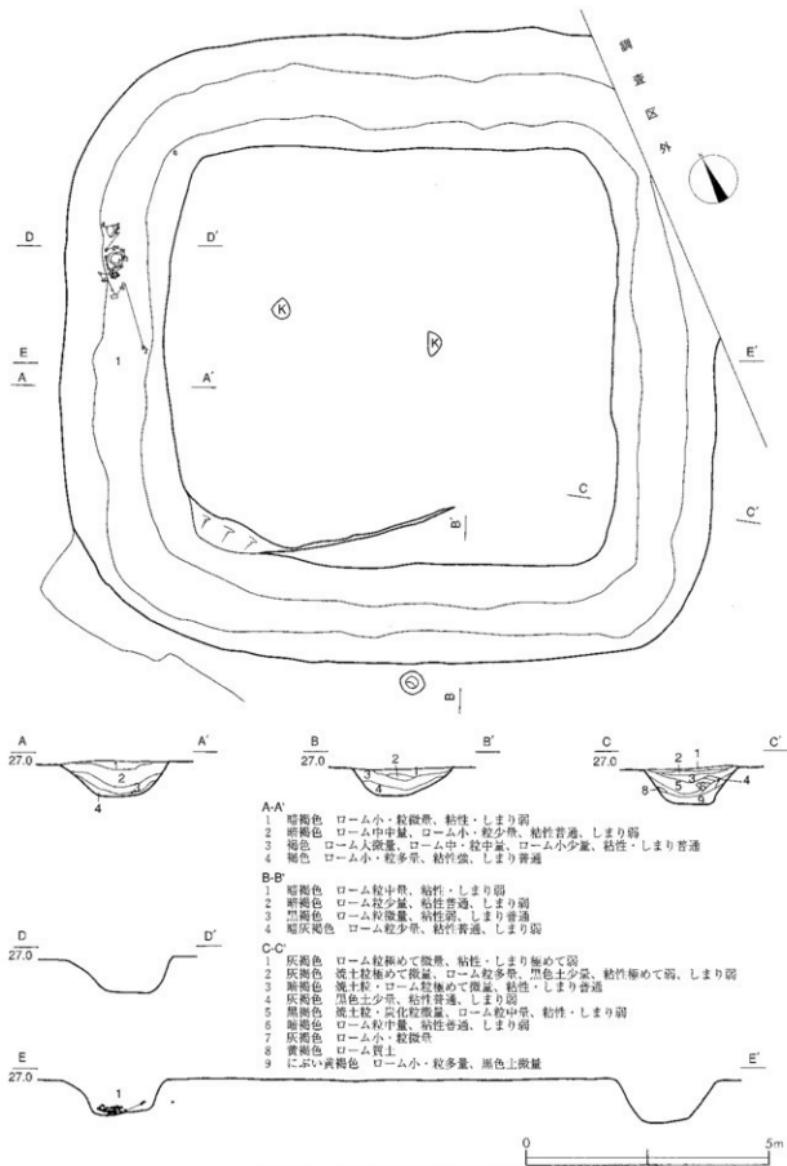
周溝底面 幅110(~90)cmで、ほぼ平坦である。

主体部 周溝内区を精査したが、発見できなかった。径40(~30)cmの円形の落ち込みが見られたが、浅いもので本跡に直接伴うものとはいえない。

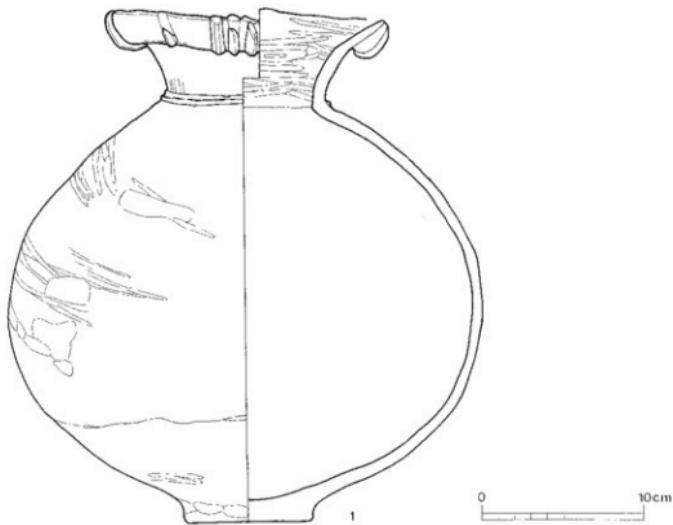
周溝覆土 暗褐色・褐色相を呈し、水平方向に堆積する自然堆積である。

遺物 北側の周溝の中程で、ほぼ底面直上から破砕された状態の土師器壺(1)が出土した。壺は、棒状浮文の複合口縁と頸部の凸帯から、関東地方南部から東海地方東部の影響を受けたものと考える。固化していないが、この他に覆土中から繩文土器細片が出土した。

所見 当造構は、出土遺物などから古墳時代前期の方形周溝墓と考える。破砕された状態の壺が周溝底面上に残されていたことは、土器を用いた何らかの行為が行われたことを強く推測させる。主体部は、既に失われた墳丘上に設けられたものと推測される。



第74図 1号方形周溝墓検出状況



第75図 1号方形周溝墓出土遺物

1号方形周溝墓出土遺物観察表

国製No	器種 形	法帶 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土陶 壺 口縁～底部	A 16.8 B 8.0 C 31.8	底面直上 95%	良好 具石多量 石英多量 雲母微量	にふい褐色	平底の底から大きく外反し、底部下半に種々の段を持た後、窓やかに内溝する。窓部に内溝部は複合口縁で、外縁に4条と1条の横状浮文が交互に配される。底部下半に最大径を有する。外縁は丹念なナメ、口縁内面はくらみがある調整を行う。底部に種類痕あり。	南関東～東海 東部地方の上 器の影響か？	

2号方形周溝墓〔第76図 P L 32〕

位置 5W・5X-20・21区。東半は調査区外に延びる。

規模と形状 遺存部のみで、東西(545)×南北(690)cmを計り、L字状に溝が巡る。

主軸方位 N-3°-E (南北方向で推定)

周溝壁面 深さ45(～30)cmで、やや垂直気味に立ち上がる。

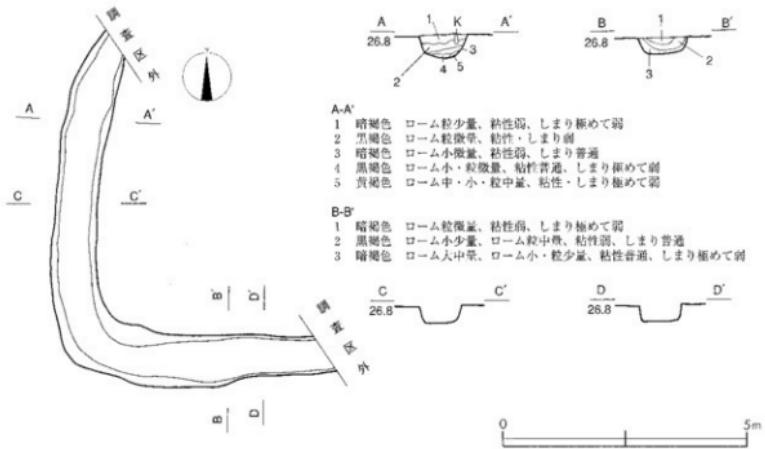
周溝底面 幅70(～55)cmで、平坦である。

主体部 周溝内区を精査したが、発見できなかった。

周溝覆土 自然堆積である。暗褐色と黒褐色を主体とし、水平方向に堆積する。

遺物 出土していない。

所見 本址は、1・3号方形周溝墓に隣接して主軸方向も概ね両者に近いことから、方形周溝墓と判



第76図 2号方形周溝墓検出状況

断した。周溝は調査区外に更に延進し、L字状に屈曲を重ねて方形状に巡るものと予想される。時期的にも4・6号墓と前後する頃のものである可能性が高い。主体部は、既に失われた墳丘上に設けられたものと推測される。

3号方形周溝墓〔第77・78図 P L32・61〕

位置 5T・5U-20・21、5V-21・22、5W-22・23区、溝の南方は緩斜面となり、桜川低地に続く。

規模と形状 南東隅は調査区外。南北108(~48)cm、東西6.5(~2.5)mのコの字状に溝が巡る。

主軸方位 N-3°-E (南北軸より推定)

周溝壁面 深さ60(~25)cmで、遺存部の良い箇所から判断すると、緩やかに外傾して立ち上がるものと推測させる。

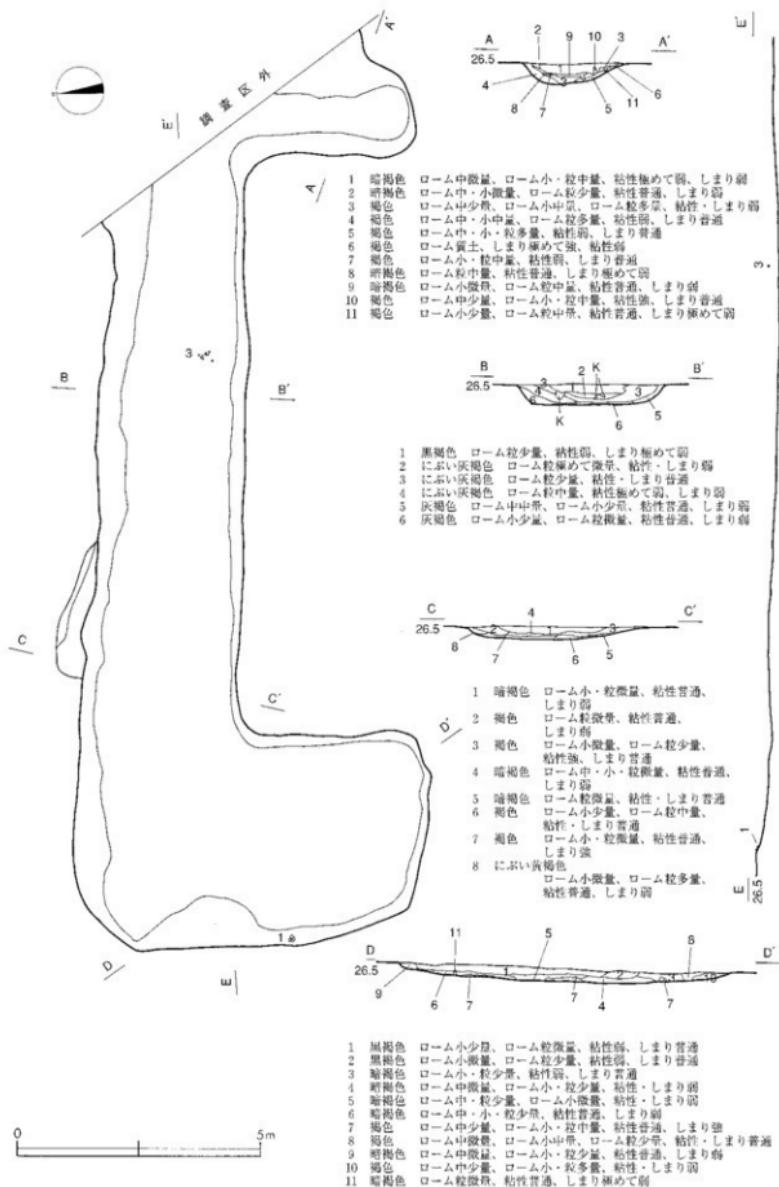
周溝底面 東西方向は、幅4.0(~3.3)m、南北方向は幅5.55(~1.6)mでほぼ平坦である。

主体部 コの字状の溝の内区を精査したが、発見できなかった。

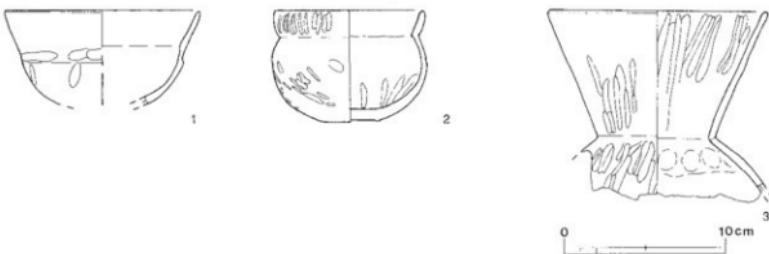
周溝覆土 暗褐色または黒褐色土を基調とする自然堆積である。

遺物 東西方向の周溝の中央部南寄りで上位から土器器壙(3)が、南北方向西側の壁面沿いに同じく土器器壙(1)が、破片で出土した。

所見 本遺構は、出土遺物から古墳時代前期の方形周溝墓と考える。周溝の南半が切れている理由は、本来の周溝は上位の堆積土中にも掘り込まれて続いていたが、南半部の地形が桜川低地に通じる傾斜のある斜面であり、その堆積土が失われたものと考える。旧地形は変化していないと仮定すると、南半部の周溝は当初から存在しなかった可能性も残る。主体部は、既に失われた墳丘上に設けられたものと推測される。



第77図 3号方形周墓塗出状況



第78図 3号方形周溝墓出土遺物

3号方形周溝墓出土遺物観察表

調査No.	器種形	法規 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土器部 杯 口縁～肩部	A C 11.8 (5.9)	覆面上 覆土下層 50%	良好	石英少量 黑色微帶 微量	にぶい褐色	肩部丹念なナデ。口縁部横ナデ。丸味をもつて立上り、肩部で僅かにくびれて外方に開く。外間に赤彩斑あり。	
2	土器部 鉢 口縁～底部	A B C 9.2 3.3 6.9	覆土中 95%	良好	石英少量 黒色微帶 微量	にぶい黄褐色	底面は僅かに凹み、体部は球状を呈する。頭部には援え板を外方に残し、口縁は肥厚して直立する。全体にヘラミガキ調整。	
3	土器部 壺 口縁～底部	A C 12.6 (10.8)	覆土中層 80%	良好	石英微量	にぶい褐色	体部は球状にすり、口縁部はやや外傾して直立する。口縁～頭部外向は複数のヘラミガキ、体部内面は粘土被覆合集。	

第3節 壇穴住居址

山川古墳群第1次調査では、1軒の壇穴住居址が発見された。以下に解説を加える。

1号住居址 [第79～82図 P L33・59・62・63]

位置 2A-25・26区

規模と形状 径325×326 (～314) cmの方形プラン。

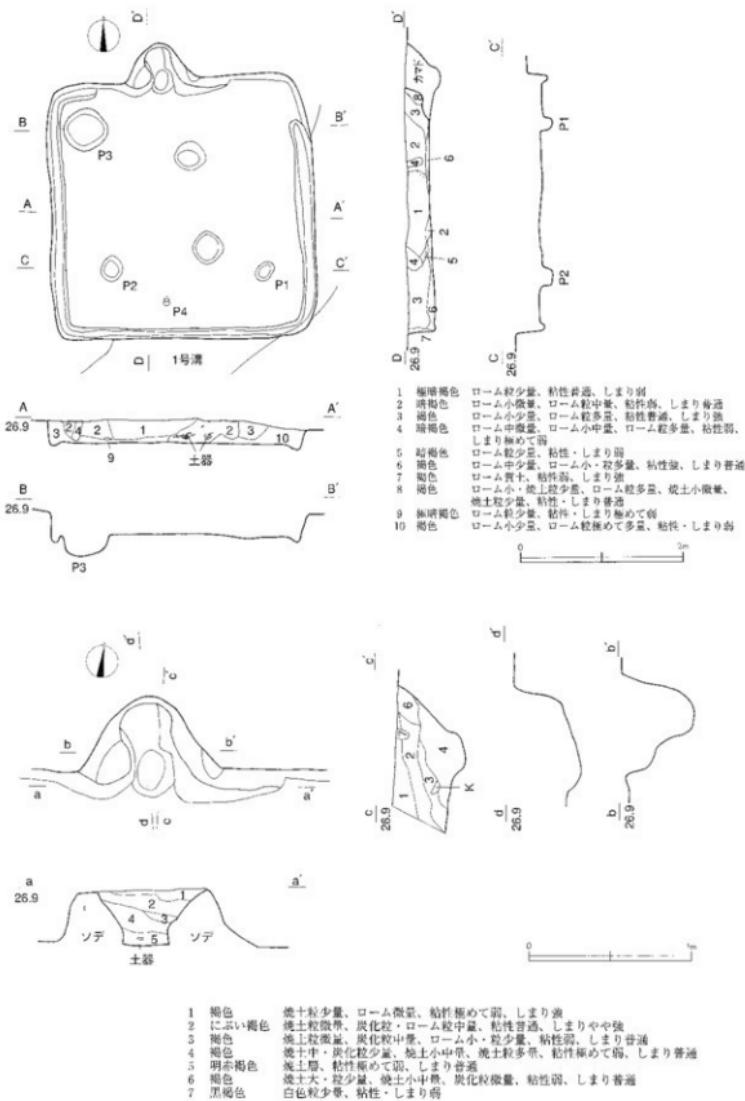
主軸方位 N-4°-W

壁面 深さ30 (～20) cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。壁溝は深さ8 (～4) cmで、北壁東側を除き10 (～8) cm幅で周回する。

床面 西側は貼り床状を呈し、東側は平坦である。

カマド 北壁中央からやや西寄りに設けられ、奥行きは48 (～43) cm掘り込まれる。白色粘土によるソデは、北壁沿いに一部遺存する。カマドの中央には、径25×16cm、深さ14 (～10) cmの浅い落ち込みがあり、燃焼部を形成する。

ピット 4穴確認された (P 1～4)。P 1とP 2は深さ12 (～8) cmで、柱穴と考えられる。P 3は、上面径55 (～53) cm、底面径46 (～40) cmで円筒形を呈する。P 4は径7 cmで、床面中央に向けて底面が斜位に抉られており、いわゆるハシゴ穴の用途を果たしたものと想定される。この他に住居



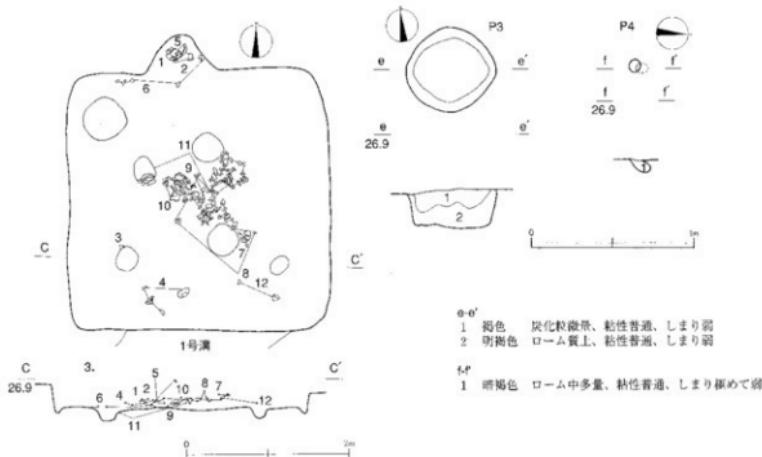
第79図 1号住居址検出状況

床面中央で、径40（～30）cmの浅い落ち込みを検出したが、住居に伴うものは不明である。

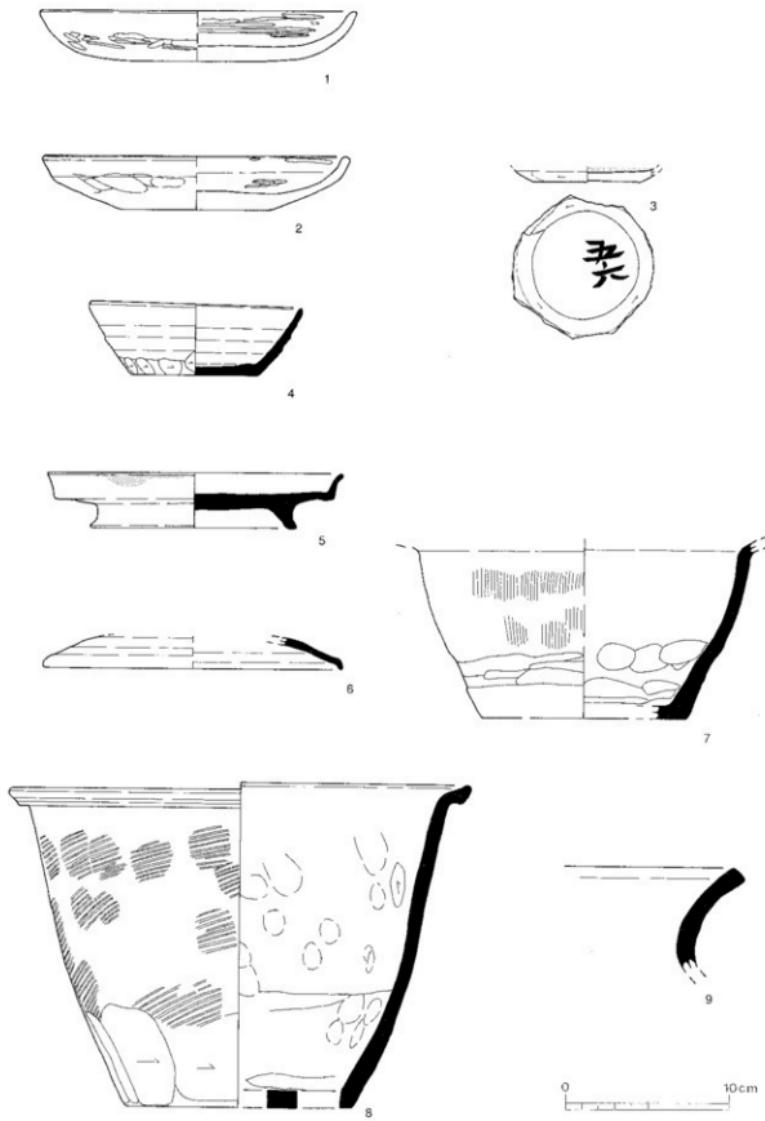
覆土 6・3・10層に統いて、1・2・4層が一気に堆積したものと考えられる。

遺物 住居中央とカマドに集中して分布している。ほぼ完形で、口縁部がひしゃげた須恵器の甕（11）は、住居中央やや西寄りで横位の状態で出土した。出土破片の傾向としては、住居中央には須恵器の壺・瓶が、カマドには土師器皿が多い。住居中央の遺物は、壁沿いの土砂が堆積したのに統いてまとめて廃棄された可能性がある。

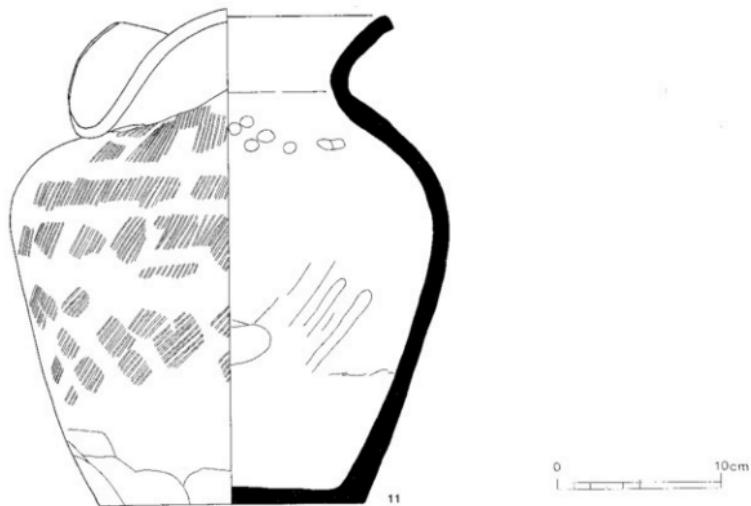
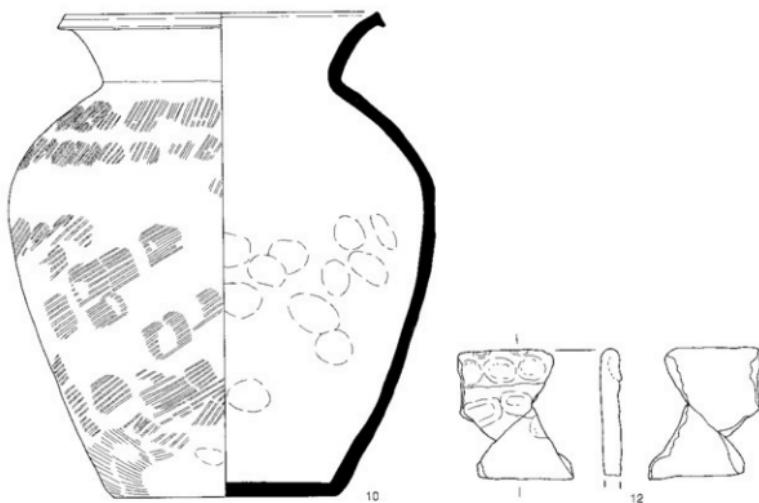
所見 当遺構は、出土遺物の組成から8世紀後葉から9世紀前葉にかけての竪穴住居跡と考えられる。



第80図 1号住居址遺物出土状況



第81図 1号住居址出土遺物①



第82図 1号住居址出土遺物②

1号住居址出土遺物観察表

回収No	器 形	法 量 (cm)	底土位 置 残存率	洗成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	土師器 皿 口縁～底部	A [19.8] C (3.1)	カマド内 覆土中 45%	良好	長石粒微量 雲母微量	橙色	やや直立気味に立上がる。底面はヘラ削りとナデ、体部はヘラミガキ、内面もヘラミガキ。	
2	土師器 皿 口縁～底部	A [19.0] C 3.3	カマド内 覆土中 20%	良好	長石粒微量 雲母微量	灰褐色	底面から、始め外板気味に、次いで直立気味に立上がる。内底面・口縁部はヘラミガキ。底面はナデ。	
3	土師器 皿 内黒杯 胴～底部	B 6.6 C (0.4)	覆土上層 10%	良好	長石少量 石英少量 雲母微量	明赤褐色	底面は回転ヘラ削り。内面は黒色処理の上、ヘラミガキ、体部は回転ヘラ削り。底面に「五人」の墨書きあり。	
4	須恵器 杯 口縁～底部	A 12.9 B 7.9 C 4.2	覆土下層 ～床底 90%	堅 破	長石少量 石英微量 雲母微量	灰色	回転ヘラ切り後にヘラ削りした底面から、3段の後を立てて立上がる。外板底部寄りはヘラ削りが遺被する。回転ナダ現す。	
5	須恵器 皿状杯 口縁～底部	A 18.4 B 12.8 C 3.3	カマド内 覆土中 70%	不良	長石少量 石英少量 雲母多量	におい黄褐色	回転ヘラ切りの底面から、開き気味の体部を経て、やや外板気味に立上がる。内面・体部ナデ調整。	
6	須恵器 蓋 口縁部	A [18.6] C (1.9)	床面直上 15%	良好	長石粒少量 雲母微量	灰黄色	内外両面に回転性のナデに面取られて蓋部に沿る。内面裏部にかえりはないが、沈像が生じている。	
7	須恵器 鉢 体部	B [13.0] C (10.5)	覆土上層 20%	良好	長石多量 石英少量 雲母多量	黄灰色	やや直立気味に立上り、口縁は横ナデ後に外反気味になる。胴部上半は条継印きにナデ消し、下半は横位のヘラ削り。内面はナデ。	
8	須恵器 皿 口縁～底部	A 28.6 B 14.0 C 19.9	覆土中層 ～下層 90%	不良	長石少量 石英微量 雲母少量	灰色	底面には5か所に通し、直立気味に立上り、口縁部は軽快い縁帶を作る。外面は条継印きを主とし、下方に削りが入る。内面ナデ。	
9	須恵器 壺 口縁部	C (5.4)	覆土中層 ～下層 15%	不良	長石微量 石英微量 砂質	灰白色	内外両面にナデ調整。ラッパ状に外反する口縁、口唇部は面取られる。	
10	須恵器 壺 口縁～底部	A 20.1 B [13.6] C 30.0	覆土中層 80%	堅 破	長石多量 石英少量	紫灰色	底面ナデ。胴部底面寄りは横位の連続ヘラ削り。胴部上半は斜位の条継印き。口縁～頭部横ナデ。内面ナデ。	
11	須恵器 壺 口縁～底部	A [18.4] B 16.1 C 24.4	床面直上 90%	堅 破	長石粒微量	鵝灰色	底面・胴部下位ヘラ削り。胴部は斜位の条継印き日。頭部・口縁部・内面はナデ。口縁から頭部は大きくくびみを生じる。	
12	不明土製品 縁辺部	長 (7.7)	覆土中層	良好	長石粒多量 赤色微量 多量	明赤褐色	外面は指削によるナデ。内面はナデ。口縁部・外側に粘土結成形の痕跡あり。蓋きカマド頭の破片か？	

第4節 土坑

山川古墳群第1次調査では、18基の土坑が発見された。これらの時代別の内訳は、縄文時代が3基、古墳時代前期が1基、時期不明が15基である。

以下、土坑毎に解説を加える。

1号土坑〔第83図 P L35〕

位置 2P-22区。

規模と形状 径244×180cmの長楕円形。

長軸方向 N-8°-W

壁面 深さ68(～60cm)で、南北方向は垂直気味に、東西方向は外傾して立ち上がる。

底面 224×48cmの長楕円形を呈し、平坦である。底面上には径8～10cm、深さ4～6cmのピットが5穴点在する。

覆土 6層を初期の壁堆積と見なし、以後水平方向に褐色土が漸移的に堆積する。

遺物 出土していない。

所見 本坑は、伴出遺物が無いため帰属する時代や役割などは不明である。但し、形態的には、縄文時代の陥し穴に類似している。

2号土坑〔第83図〕

位置 2J-18区

規模と形状 径82×54cmの不整楕円形。

長軸方向 N-59°-W

壁面 深さ9cmで、わずかに外傾して終わる。

底面 径38×22cmの不整形で、5cmほど浅く落ち込む。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割などは不明である。

3号土坑〔第83図〕

位置 2E-21区

規模と形状 径88×70cmの円形。

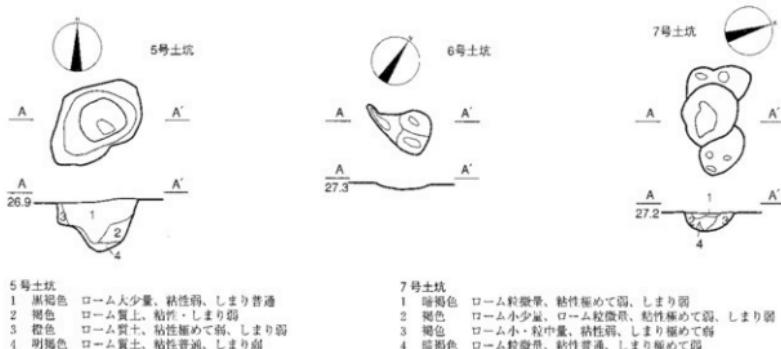
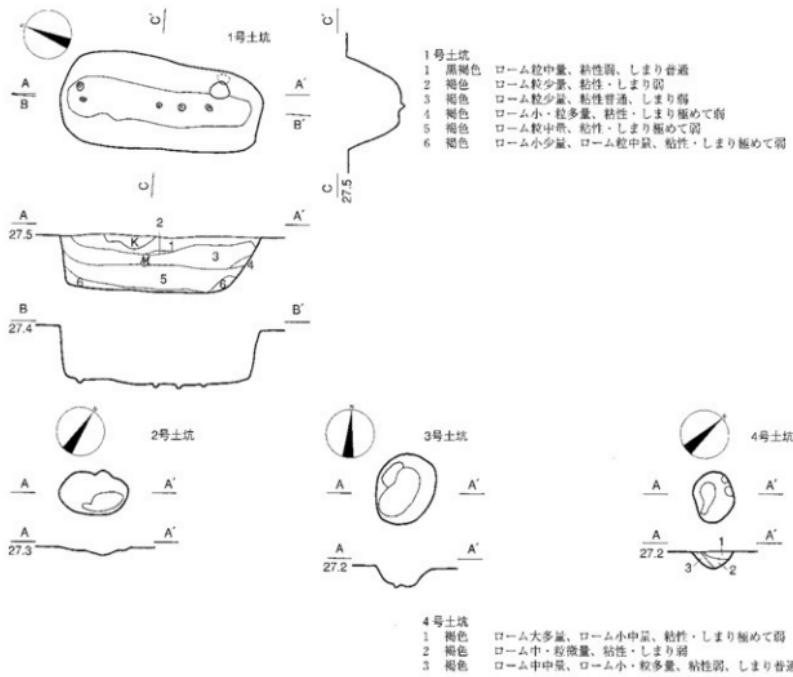
長軸方向 N-16°-W

壁面 深さ21(～19)cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径62×36cmの楕円形で、やや東側が下がる。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割などは不明である。



第83図 土坑検出状況 (1 ~ 7号土坑)



4号土坑〔第83図 P L 35〕

位置 2K-22区

規模と形状 径60×48cmの楕円形。

長軸方向 W-20°-N

壁面 深さ18cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径18×38cmの不整形。

覆土 褐色土の單一相であることから、自然堆積と考える。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割などは不明である。

5号土坑〔第83図〕

位置 2I-27区

規模と形状 径134×86cmの楕円形。

長軸方向 N-42°-W

壁面 深さ61cmで、東方は外傾して、西方は段を生じて立ち上がる。

底面 径52×44cmの不整形。

覆土 ロームの含度が高く、人為的に埋められた可能性がある。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割などは不明である。

6号土坑〔第83図〕

位置 2H-19区

規模と形状 径80×51cmの不整形。

長軸方向 N-8°-W

底面 深さ約4cmと浅く落ち込む。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割などは不明であるが、形状から耕作痕の可能性がある。

7号土坑〔第83図 P L 35〕

位置 2K-23区

規模と形状 中央は径70×70cmの不整楕円形。東面に、65~80cm径の落ち込みと切り合う。

長軸方向 N-67°-W

底面 径30~40cm、深さ約20cmで、外傾して立ち上がる。

覆土 褐色・暗褐色相の自然堆積と考える。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・役割は不明である。

8号土坑〔付図2 第84~86図 P L 36・64・65〕

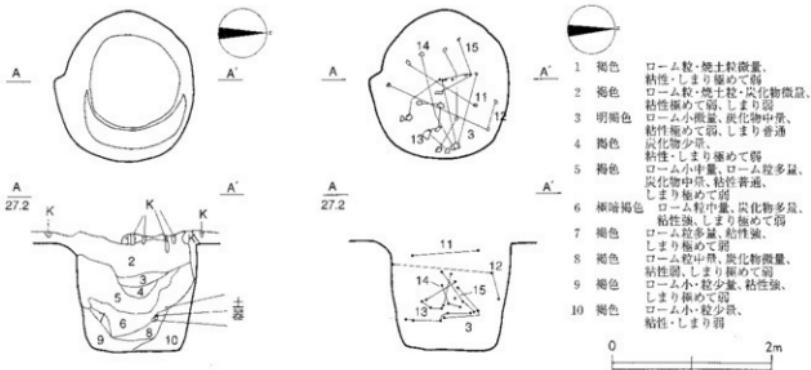
位置 8トレンチの北方

規模と形状 径155×183cmの円形で、南方に半月状のやや高まった張り出しが生じる。

重複関係 精査中に確認面上では、切り合いを観察することができなかったが、底面の東方に半月状の段がある。恐らく、この中间場を底面とする円形の土坑が先行して存在し、現在ある底面を範囲とする新しい穴が、その後に掘られたものと思われる。

壁面 深さ約130cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

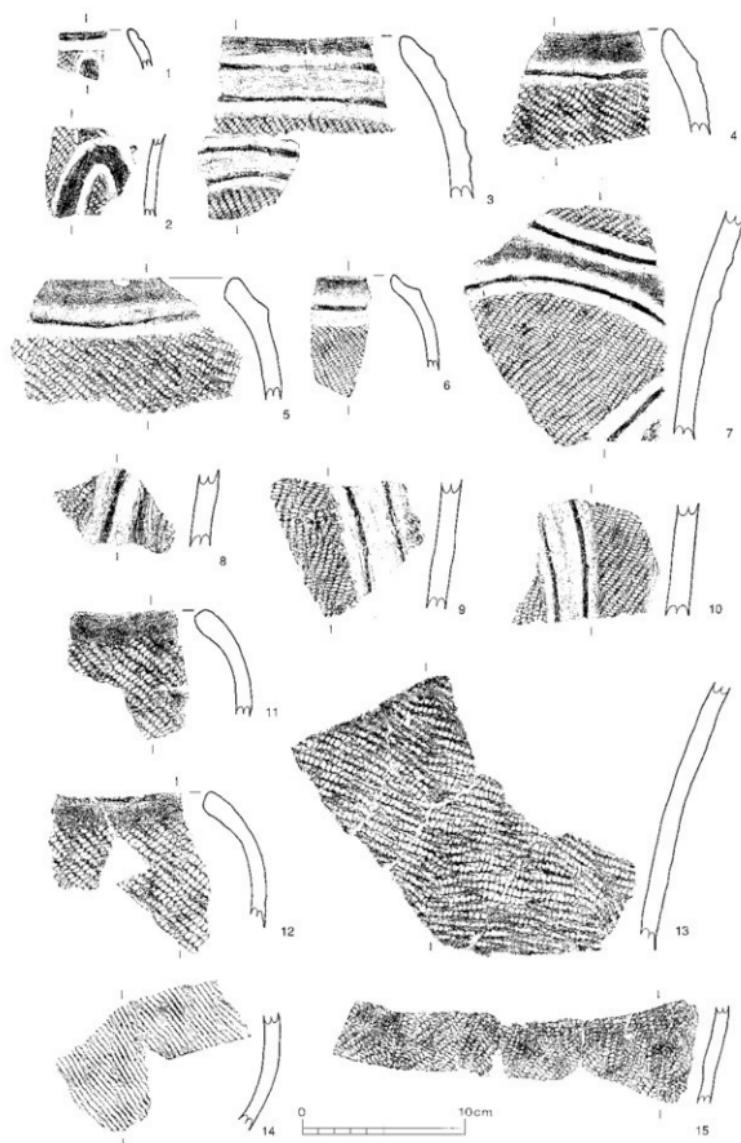
底面 径108×113cmの円形。



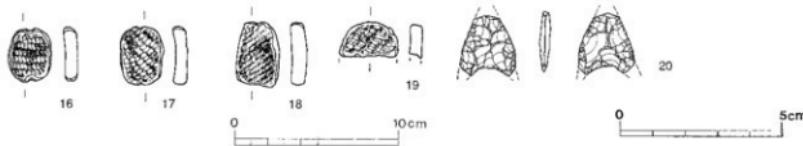
第84図 8号土坑検出状況・遺物出土状況

8号土坑出土繩文土器観察表

No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調整	胎土	色調 (外面/内面)	備考
					長石 石英 雲母			
1	深鉢	口縁	6.8	山崩田耕を経て口縁下に削波痕後、後の追字状の充満による剥離部	横ミガキ	少	黒褐色	
2	深鉢	側	7.1	上端文部、口縫の内底による剥離部の区画、口縫内に剥離部	横ナデ	中 少	褐色/にぶい青褐色	
3	深鉢	口縁	13.5	口縫下に剥離文部、小字車輪の充満部下に剥離文部 剥離文部はげ	横ナデ	多 多	黒褐色/青色	外縫灰化物
4	深鉢	口縁	11.5	口縫部上面を削離 口縫下に剥離文部 剥離文部はげ 下に剥離文部 剥離文部はげ	ミガキ	多 少	黒褐色	
5	深鉢	口縁	9.8	上端剥離文部を削離 口縫下に剥離文部 剥離文部はげ 剥離文部はげ	横ナデ	多 多 中	灰青褐色/褐色	
6	深鉢	口縁	7.4	口縫部を削離 口縫下に剥離文部 剥離文部はげ 剥離文部はげ	横ナデ		黒褐色/灰青褐色	
7	深鉢	側	13.2	江戸大文字文、底部の剥離文部による文部 剥離文部はげ	横ナデ	中 少	にぶい青褐色/褐色	
8	深鉢	側	12.8	瓦戸大文字文、底部の剥離文部 剥離文部はげ	ナデ	多 中	黒褐色/褐色	
9	深鉢	側	10.9	瓦戸大文字文、口縫の平行する縦筋の剥離文部 剥離文部はげ	ナデ	中 中	にぶい黄褐色	
10	深鉢	側	13.3	江戸大文字文、口縫の平行する縦筋の剥離文部 剥離文部はげ	ナデ	中 少 少	黒褐色/灰青褐色	
11	深鉢	口縁	9.2	口縫部を削離 口縫下に剥離文部 下に剥離文部	横ナデ	多 少 多	黒褐色	
12	深鉢	口縁	10.5	口縫部を削離 口縫部を削離するも口縫部下に剥離文部 下に剥離文部	横ナデ	多 中 多	灰青褐色/褐色	
13	深鉢	側	11.0	上剥離文	ナデ	多 中 多	にぶい青褐色/灰青褐色	
14	深鉢	側	8.6	上剥離文	横ナデ	少	黒褐色/灰青褐色	
15	深鉢	側	8.2	剥離文	横ナデ	多 多	褐色/にぶい青褐色	



第85図 8号土坑出土遺物①



第86図 8号土坑出土遺物②

8号土坑出土縄文土器片錐・土製円盤観察表

No.	長軸 (cm)	短軸 (cm)	器厚 (mm)	重量 (g)	残存	部位	器形と文様の特徴	内面調整	胎土	色調	備考
								長石 石英 雲母	(外面/内面)		
16	3.3	2.7	7.5	10	完	肩	RL 縄文 切り目は一対	ミガキ 少	にぶい青褐色	十跡	
17	3.5	2.7	7.0	10	完	胴	LR 縄文 切り目は一対	横ナデ 少	暗褐色灰青褐色	上鍊	
18	3.8	2.7	9.0	11	完	肩	LR 縄文 肩は片側のみ	ミガキ	にぶい青褐色灰青褐色	十跡	
19	(2.1)	3.6	8.0	(7)	1/2欠	肩	RL 縄文	ナゲ 少	褐色にぶい青褐色	円盤	
20											

8号土坑出土石器観察表

No.	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石材	備考
20	石 磨	18	17	2	1.0	チャート	覆土一括

覆土 9・10層を壁堆積とし、土坑の機能喪失後に、中位の5～8層が一気に埋められたものと考える。中位の層はローム粒や炭化物を含み、遺物の出土高・接合位置ともまとまりを見せる。

遺物 出土土器は全て、縄文中期後半加曾利E IV式期である。1・2は磨消沈線文、3～10は両側がなでられる微隆起線による曲線文、11～15は縄文のみが施文されている。16～18は土器片錐、19は土製円盤である。20はチャート製の石磨である。

遺物出土状況 平面的には土坑底面中央から壁際まで散在するが、出土高は2層から8層にかけてまとまりをみせる。接合関係も中位と上位のものが接合するなど、埋没の過程が早かったことを推定させる。最も低い位置の遺物でも底面から30cm程浮いており、土坑の機能喪失後の廃棄遺物と判断される。

所見 本坑は、縄文時代中期後半頃の土坑である。具体的な用途は不明である。

9号土坑〔付図2 第87図 P L 37・63〕

位置 16トレンチ南方

規模と形状 径260×168cmの楕円形。

長軸方向 N - 26° - W

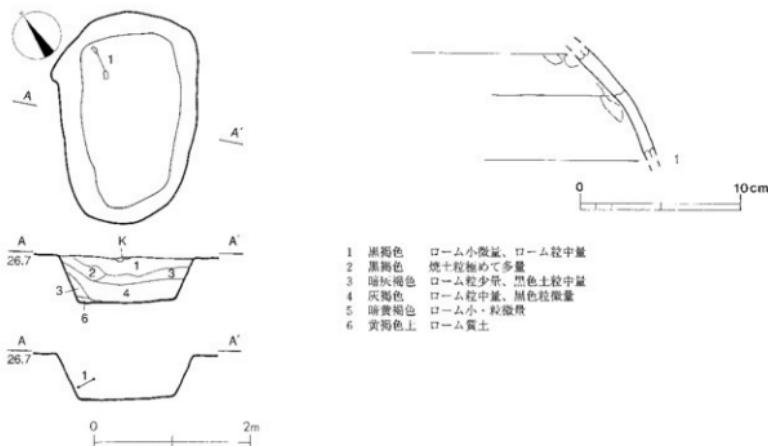
壁面 深さ58~52cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径210×120cmの隅丸方形。

覆土 西方（5・6層）から埋まり始め、以後水平堆積となる。2層中に多量の焼土粒が見られるが、埋没中に廃棄されたものであろう。

遺物 北方、壁寄りから土師器片（1）が、2点出土した。

所見 出土遺物から本坑は、古墳時代前期の土坑と考えられる。用途は不明である。



9号土坑出土遺物観察表

団取No.	器 器 種 形	法 量 (cm)	出土位置	焼成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	十師器 帶蓋瓶 胸部	C (6.9)	覆土中層 10%	良好	瓦石少量 石英少量	にぶい褐色	外面は丹念なナデ痕。内面頭部寄りは唇部 の上を横ナデ。胸部寄りは横位のヘラナデ。	

10号土坑〔付図2 第88図 P L 37〕

位置 33トレンチ西方、6号墳より5m北東方向に当たる。

規模と形状 上面観は、東西方向と南北方向の落ち込みが交わり、L字状を呈する。南北方向は径285×104cm、東西方向は径345×165（～140）cmを測る。重複関係は確認できなかった。

長軸方向 N - 4° - W

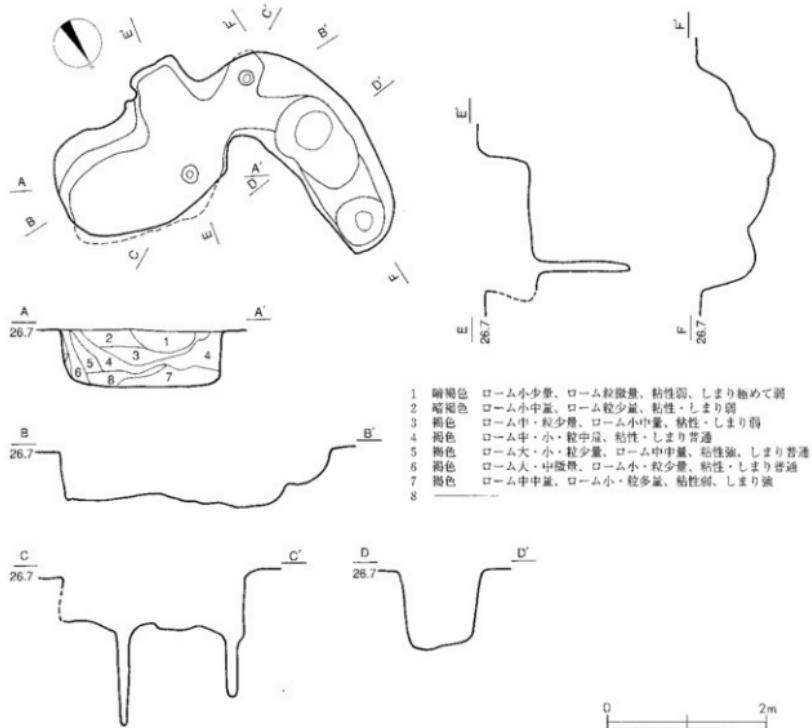
壁面 南北方向は深さ約70~50cmで、緩やかに外傾して立ち上がる。東西方向は、東端が深さ60cmで、垂直気味に立ち上がる。

底面 東西南北方向は概ね平坦で、北側が一部（幅10~15cm）抉られる。底面上には、2か所（120~80cm）のピットがある。南北方向は、中央（径120×70cm、底面42×50cm）と北端に（径56×60cm、底面径約20cm）、2か所の落ち込みが見られた。

覆土 いずれの層もロームを含み、しまりをもつ7・6・8・5層がまず堆積し、漸次埋まつていったものと考える。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格ともに不明である。



第88図 10号土坑検出状況

11号土坑〔付図2 第89図 P L 37・63〕

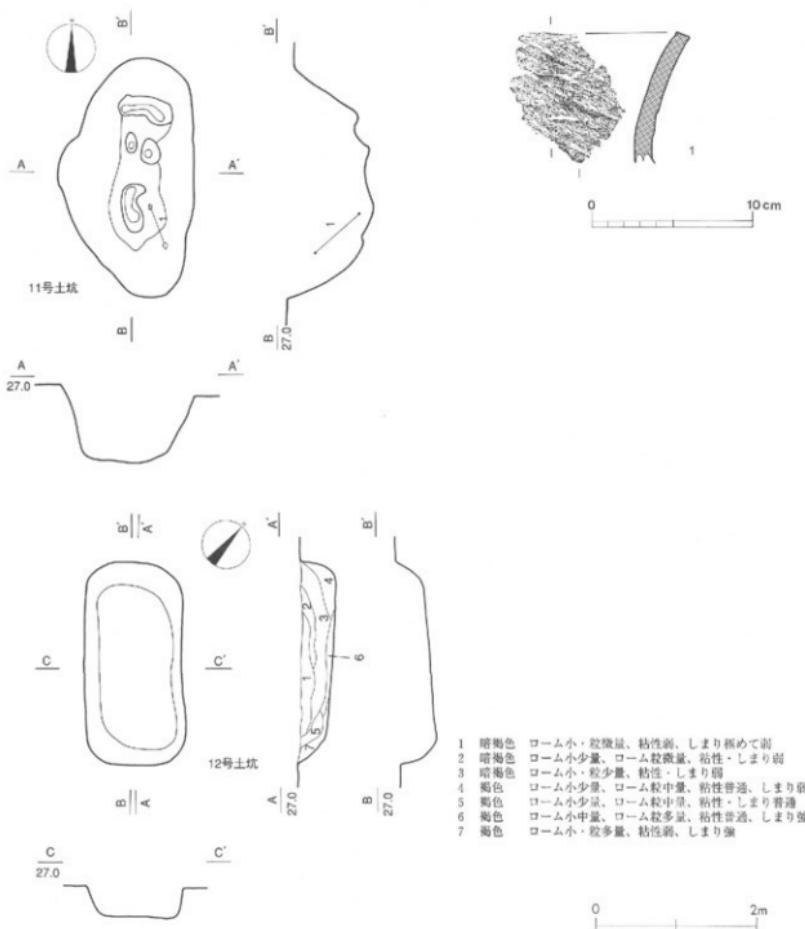
位置 34トレンチのほぼ中央。10号土坑の7m南東に当たる。

規模と形状 径290×166(～138)cmの長楕円形。

長軸方向 N-4°-W

壁面 深さ78～90cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径188×60cmで、内区に20～60cm径のピットが4か所穿たれる。



第89図 11・12号土坑検出状況・出土遺物

遺物 覆土中位～下位から縄文土器（1）が1点出土している。

所見 覆土中の遺物から判断して、本坑は縄文時代の土坑と考えられる。性格は詳らかにしないが、1号土坑と同様な形状から陥とし穴の可能性がある。

11号土坑出土縄文土器観察表

No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調査	施土			色調 (外側／内側)	備考
						長石	石英	雲母		
1	深鉢	口縁	11.5	口唇部は面取りされ、口縁部直下よりRと拡大。	横ナデ				に赤褐色/青褐色	繊維少量

12号土坑〔付図2 第89図 P L 37〕

位置 49トレンチの中央部。11号土坑の5m北方に当たる。

規模と形状 径250×120cmの隅丸方形を呈する。

長軸方向 N-42°-W

壁面 深さ33～40cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径200×88cmの不整形で、南方は底面上のレベル値に差があり、凹凸が生じる。

覆土 7・6・5・4層を壁堆積とし、暗褐色の1～3層がこれに統く。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格ともに不明である。

13号土坑〔第90図 P L 38・63〕

位置 5X-10区

規模と形状 径384×202cmの不整形。

長軸方向 N-76°-E

壁面 南方は2か所抉られた箇所があり、垂直気味に立ち上がる。東西方向は中間場を持ち、段を生じながら立ち上がる。深さは約100～110cmである。

底面 径184×132cmの不整形。凹凸が生じ、一様ではない。

覆土 中位に硬化した黒色土を含む。黒色土には面的な広がりはなかった。

遺物 覆土中から縄文土器（1）が出土した。

所見 本坑は出土遺物から判断して、縄文時代以後の土坑である。具体的な役割は不明である。北西原遺跡第3次調査の55号土坑と、第4次調査の58号土坑に形態的に類似している。

13号土坑出土縄文土器観察表

No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調査	施土			色調 (外側／内側)	備考
						長石	石英	雲母		
1	深鉢	脚部	11.0	RとEの交互の撚糸文。	ナデ	多			黒褐色/墨褐色	繊維多量

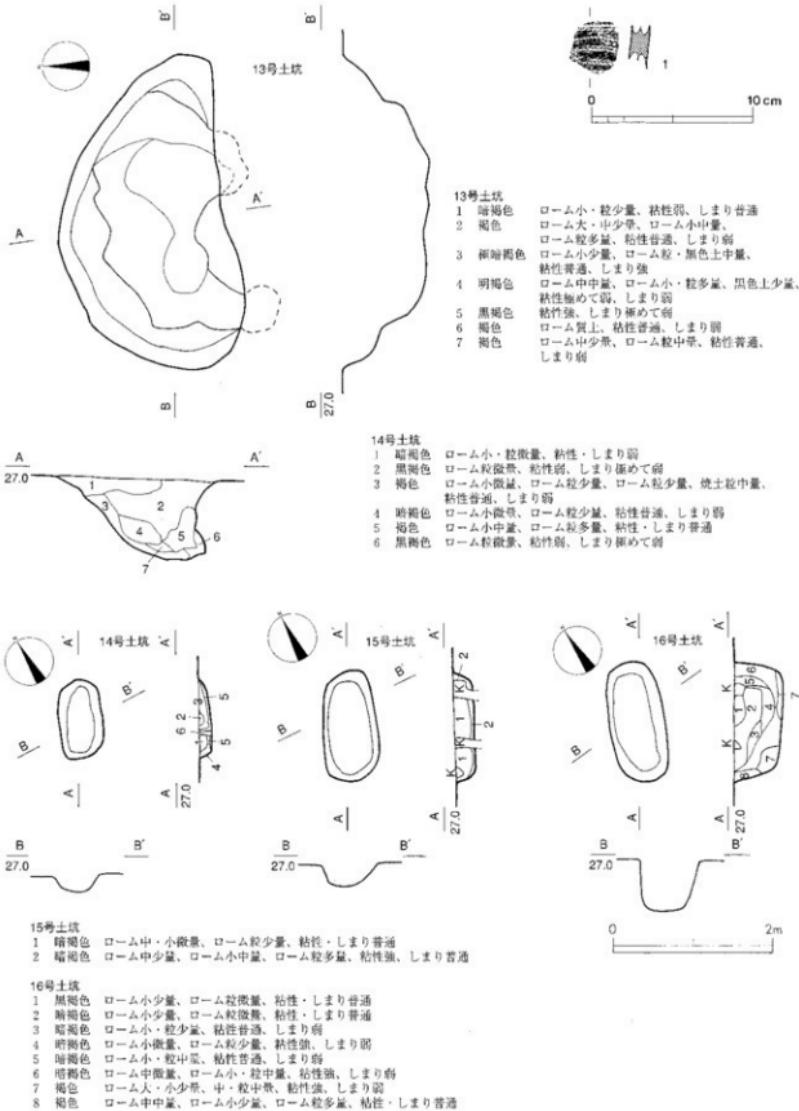
14号土坑〔第90図 P L 38〕

位置 5V-13区

規模と形状 径95×52cmの小判形。

長軸方向 N-22°-W

壁面 深さ9～12cmで、南方は垂直気味、北方は緩やかに立ち上がる。



第90図 13～16号土坑検出状況・出土遺物

底面 径80×32cmの小判形を呈し、北方がやや高い。

覆土 5層を初期の堆積とし、漸次上層が続く。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格は不明である。

15号土坑〔第90図 P L 38〕

位置 5W-13·14区

規模と形状 径121×67cmの小判形。

長軸方向 N-18°-W

壁面 深さ22~24cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径113×51cmの小判形で、平坦である。トレンチャーによる擾乱が著しい。

覆土 遺存部から判断して、暗褐色相の水平堆積であろう。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格は不明である。

16号土坑〔第90-91図 P L 38・65〕

位置 5W-14·15区

規模と形状 径147×68cmの小判形。

長軸方向 N-20°-W

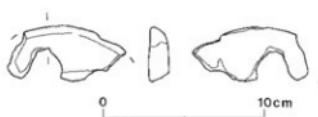
壁面 深さ52~57cmで、垂直気味に立ち上がる。

底面 径121×47cmの小判形で、北方がやや高い。

覆土 トレンチャーによる擾乱が著しい。7·6·8層がまず埋まり、漸次上層が堆積した。

遺物 覆土中から、近現代のレンタンの破片が1点（1）出土した。確実に本跡に伴うものとは断言できない。

所見 本坑の時期・性格は不明である。14·15·16号土坑は、時期や用途に決定的な遺物が出土していないものの、いずれも長軸方向が近い関係にある。営まれた時期が近接しているのかもしれない。



第91図 16号土坑出土遺物

16号土坑出土遺物観察表

調査No	器種	法蓋 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	不明土製品 縁付部	長 (3.4)	覆土中	良好	長石少量 石英微量 長母少量	褐色	円形の板状を呈するものの縁部。2か所準孔痕あり。半周面は白色の物質で覆われる。 レンタンの破片か?	

17号土坑〔第92図 P L 39〕

位置 5T-13・14区

規模と形状 径231×114cm

長軸方向 N-70°-W

壁面 深さ16~18cmで、垂直に立ち上がる。

底面 径217×107cmの方形。概ね平坦である。

覆土 暗褐色を主体とする自然堆積と考える。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格は不明である。

18号土坑〔第92図 P L 39〕

位置 5W-19区。1号方形周溝墓の南東辺沿い。

規模と形状 径70×48cmの楕円形。

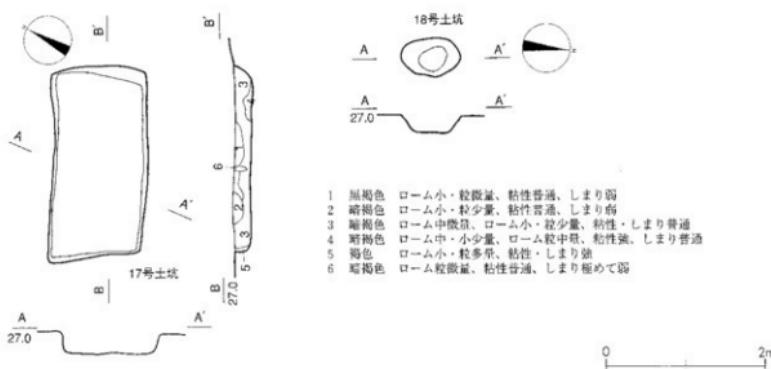
長軸方向 N-2°-W

壁面 深さ18~20cmで、外傾して立ち上がる。

底面 径32×30cmの楕円形。概ね平坦である。

遺物 出土していない。

所見 本坑の時期・性格は不明である。



第92図 17・18号土坑検出状況

第5節 溝

山川古墳群第1次調査では、溝7条が検出された。以下に解説を加える。

1号溝〔第93・94図 P L34・66〕

位置 2E～2J-23、2B～2E-24、2B-25、Z-2A-26、
2I-24～28、2H-27～31区。

規模と形状 総長77.8m、上幅1.1～2.3m、下幅30～150cm、深さ25～42cmを測る。南壁から北北東に延び、2I-23区でクランク状に屈折して、西壁に当たる。調査区外にそのまま延進するものと思われる。

重複関係 1号溝と2・3・5号溝は重複関係にある。しかしながら上面の精査時には、先後関係を明らかにしえなかつた。

覆土 水平方向に堆積し、褐色の單一層であることから、自然堆積であると考える。

遺物 覆土中から十数点の遺物が出土している。器種は、土師質土器（1・2・7・8）、陶器（5・6）、磁器（3・4）、砥石（12・13）、泥人形（11）など多種に及ぶ。概ね、近世後期に帰属する遺物である。最新のものは3の瀬戸美濃系磁器で、19世紀以後の遺物である。

所見 本溝の具体的な役割は不明である。時期的には、出土遺物から考えて19世紀以降のものであろう。

2号溝〔第93・94図 P L34〕

位置 2F～2I-24区

規模と形状 総長約8m、上幅50～80cm、下幅20～40cm、深さ10～20cmを測る。1号溝の曲折部手前から分派して西方に延び、同じく1号溝に重複する。

覆土 水平方向に堆積し、褐色の單一層であることから、自然堆積であると考える。

遺物 出土していない。

所見 本址の役割は不明である。時期的には1・3号溝と近い頃のものであろう。

3号溝〔第93・94図 P L34・66〕

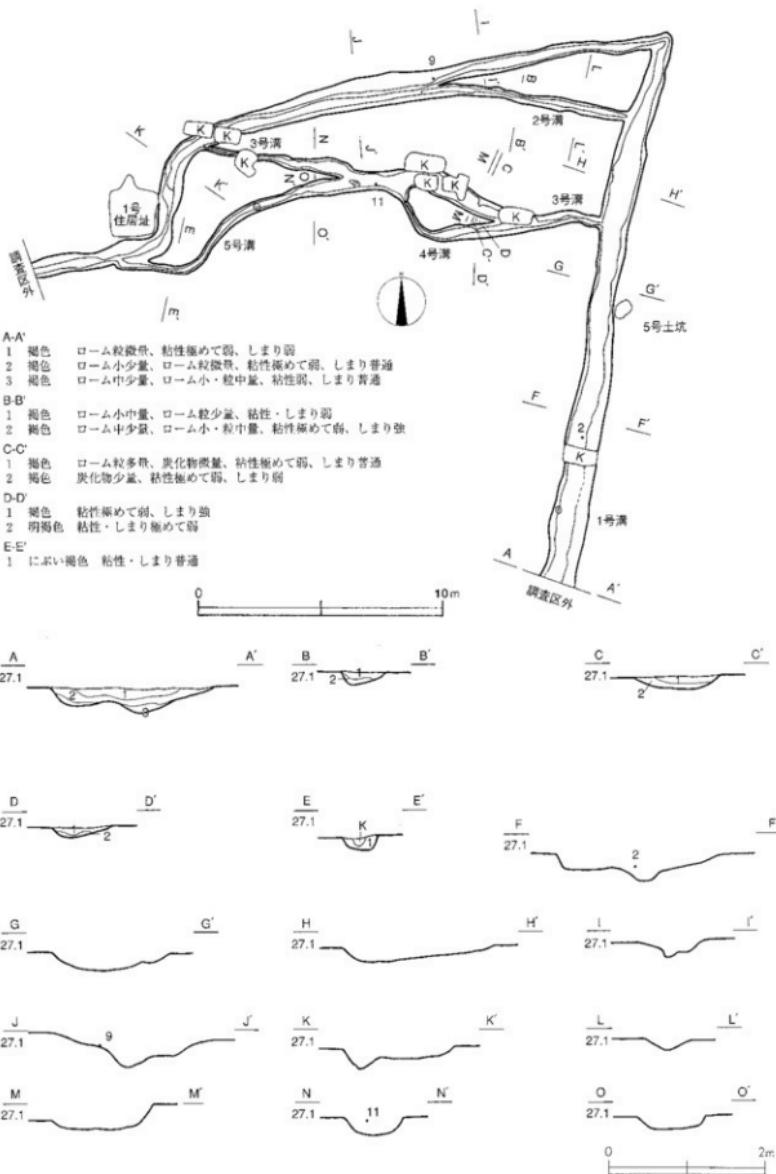
位置 2B・2I-25区。

規模と形状 総長約25m、上幅50～110cm、下幅10～90cm、深さ12～20cmを測る。1号溝のほぼ中央から西方に直線的に延び、再び1号溝と重複する。途中4・5号溝を分派し、西方にゆくに従って幅狭となる。

覆土 水平方向に堆積し、褐色の單一層であることから、自然堆積であると考える。

遺物 土師質土器内耳鉢片（10）が1点、出土している。1号溝出土のもの（7）と形態的に類似しており、溝の同時性を示すものかもしれない。

所見 本址の役割は不明である。時期的には1号溝とは同時期のものであろう。



第93図 1～5号溝検出状況

4号溝〔第93図 P L34〕

位置 2F・2G-26区。

規模と形状 総長約8.6m、上幅20~80cm、下幅10~56cm、深さ11~14cmを測る。3号溝から2叉状に分派し、南から西へ曲折し、再度3号溝と重複する。西方は幅狭となる。

覆土 水平方向に堆積することから、自然堆積であると考える。

遺物 出土していない。

所見 本址の役割は不明である。時期的には1・3号溝と近い頃のものであろう。

5号溝〔第93図 P L34〕

位置 2C・2D-25区、2A・2B-26区

規模と形状 総長16.5m、上幅0.4~1m、下幅10~50cm、深さ5~16cmを測る。3号溝から2叉状に分派し、西方へ曲折した後、1号溝に重複する。

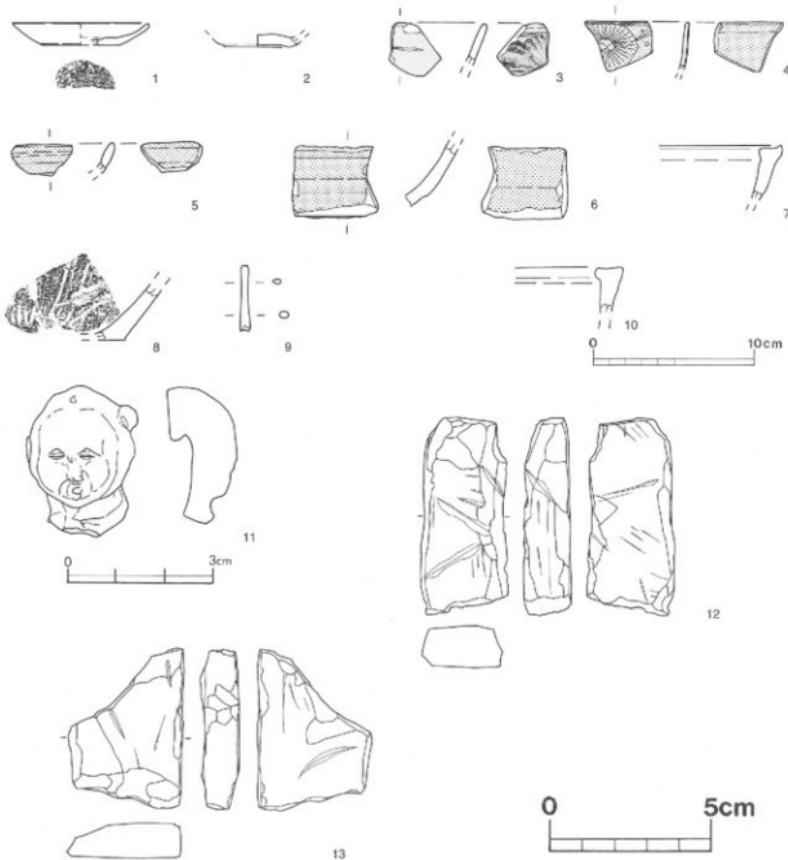
覆土 水平方向に堆積することから、自然堆積であると考える。

遺物 出土していない。

所見 本址の役割は不明である。時期的には1・3号溝と近い頃のものであろう。

1号溝出土遺物観察表

図版No	器種 形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	土師質土器 小皿 口縁~底部	A [8.4] B [4.8] C 1.4	1号溝 覆土中 20%	堅緻	精良	褐色	底面に回転糸切り痕を残し、外縁しながら直立する。口縁部は横ナギ。薄子である。	近世・近代以降
2	土師質土器 小皿 底部	B 4.0 (0.4)	1号溝 覆土中 10%	不良	素面少茶	褐灰色	底面回転糸切り痕。内底面ナギ。被熱し黒色化した痕跡が見られる。	
3	磁器(染付) 鏡組類 口縁部	C (2.6)	1号溝 覆土中	堅緻	黒色撒摩 鏡作 精良	灰白色	外面には羅状、内面には花状の文様が描かれる。直立して立上がる口縁部。	瀬戸美濃系 近世
4	磁器(染付) 鏡組類 口縁部	C (3.0)	1号溝 覆土中	堅緻	精良	灰白色	内外面共に施釉。外面には梅花状の文様、口縁部には内外面内側に1条の團扇が描かれている。	肥前系 近世



第94図 1~3号溝出土遺物

図版No	器 器 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
5	陶器 碗皿類 口縁部	C (1.9)	1号溝 覆土中	堅硬	赤味ある 灰色を呈す	灰白色	白濁する長石離を内外面共に厚く施す。点状 に孔があき、胎土が露出する。様やかに立ち 上がる口縁部。	瀬戸美濃系 志野
6	陶器 漆直又は鉢類 脚部	C (4.4)	1号溝 覆土中	堅硬	微気泡を生 じる 良土	黄褐色	外側下方以外直角、外面の胎土には輪廻りが 生じ、器種を判断する。内外面に胎土目痕が 1か所づつあり。	瀬戸美濃系 近世
7	陶器 内耳錐 口縁部	C (3.3)	1号溝 覆土中 10%	堅硬	長石較少量 雲母少量	にぶい褐色		
8	土師質土器 擦り鉢 底部	C (3.1)	1号溝 覆土中 15%	堅硬	石英少量 赤色微砂 少量	にぶい赤褐色	立氣味に立上り、内外面・縫合共に剥取ら れる。口唇外縁にはつまみ出したような後が 生じる。内外面共にナデ調整。	
10	土師質土器 内耳錐 口縁部	C (2.8)	3号溝 覆土中 10%	良好	雲母微量 長石較少量	明赤褐色	やや外傾して立上り、口唇部内側に胎土をつ まみ出した後が生じ、面取られる。内外面ナ デ調整。	
11	土製品 陶人形 頭部	長 (2.9) 幅 (2.9) 厚 (1.3)	2号溝 覆土中 5%	良好	雲母微量	にぶい黄褐色	情形あるいは稚児の頭部。内面に指痕がある ことから影押し成形か。頭部に2か所の整 らしき痕跡有り。	近世

1号溝出土青銅製品観察表

No.	種 類	全長(cm)	吸口径(cm)	接合部径(cm)	重量(g)	色 調	出土位置	備 考
9	青銅質環状口器	3.9	0.2	0.5	2.4	黒オリーブ色	縫合部はわざかに欠損し、全面に錆跡が付着する。	

1・3号溝出土石器観察表

No.	種 類	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重 量(g)	石 材	備 考
12	砥 石	6.1	2.6	1.4	34.8	磁灰岩	板土 括
13	砥 石	5.2	3.9	1.2	21.6	磁灰岩	覆土 括

6号溝〔第95図 P L34・65〕

位置 2B・2C-21、2D-20・21、2E・2F-20区

規模と形状 長さ15.2m、幅1.05(~0.5)mを測り、直線的に伸びる。溝の両端部は搅乱される。

長軸方向 N-24°-W

壁面 深さ8(~4)cmで、浅く立ち上がる。

底面 幅40~50cmで、凹凸の生じた箇所もある。

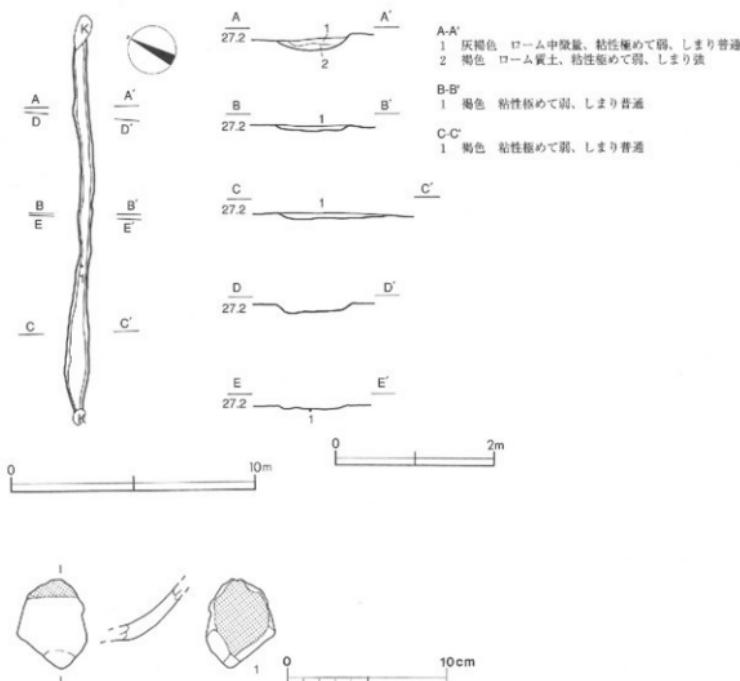
覆土 深度が浅く不明確だが、褐色の單一相の自然堆積と思われる。

遺物 溝の中央部、底面直上から、瀬戸美濃系陶器片(1)が1片、出土している。

所見 時期的には近世以降の溝であるが、役割は不明である。

6号溝出土遺物観察表

図版No	器 器 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
1	陶器 漆皿又は鉢 脚～底部	C (4.2)	底面直上	堅硬	微かに気泡 が生じる	明オリーブ 色	外面に輪廻りが生じたために器種を判断す る。 内外面に施釉あるも、外側は僅かである。	瀬戸美濃系



第95図 6号溝検出状況・出土遺物

7号溝 [付図2 第96図 P L34]

位置 51号トレンチの北端。3号墳より約30m北に位置している。溝の両端外は、諸般の事情により調査範囲から外された。

規模と形状 上幅191cmで、やや弧を描く。

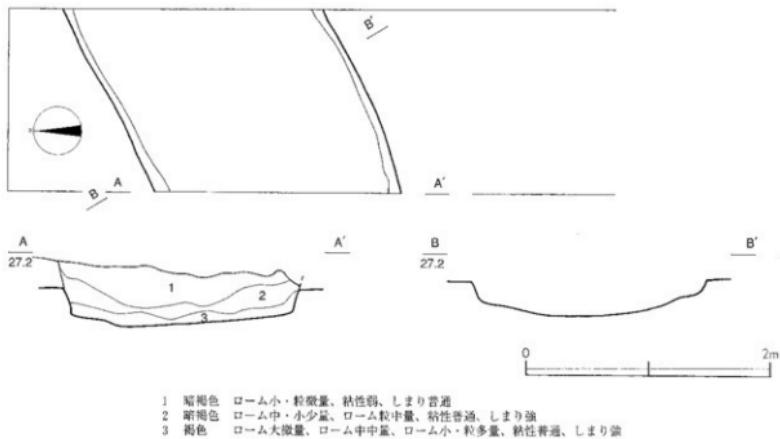
壁面 深さ20~28cmで、外傾して立ち上がる。

底面 幅182cmで、中央が若干凹んでいる。

覆土 水平堆積で、暗褐色を主体とする自然堆積と考えられる。

遺物 出土していない。

所見 本址の時期・性格は不明である。更に、調査区外に延進するものと思われる。



第96図 7号溝検出状況

第6節 不明遺構

当節では、調査中に発見した遺構のうち、性格の不明なものを扱う。山川古墳群第1次調査では、古墳と判断しがたい橋円形の溝を1号不明遺構として当節に収める。

1号不明遺構〔第97・98図 P L40・66〕

位置 2D・2E - 27・28区

規模と形状 外縁径8.27×7.58m、上端幅60~140cmの溝が円形に巡る。周溝の外側は、南北で70~130cm幅で張り出し、浅く落ち込む。

壁面 深さ14~38cmで、外傾して立ち上がる。

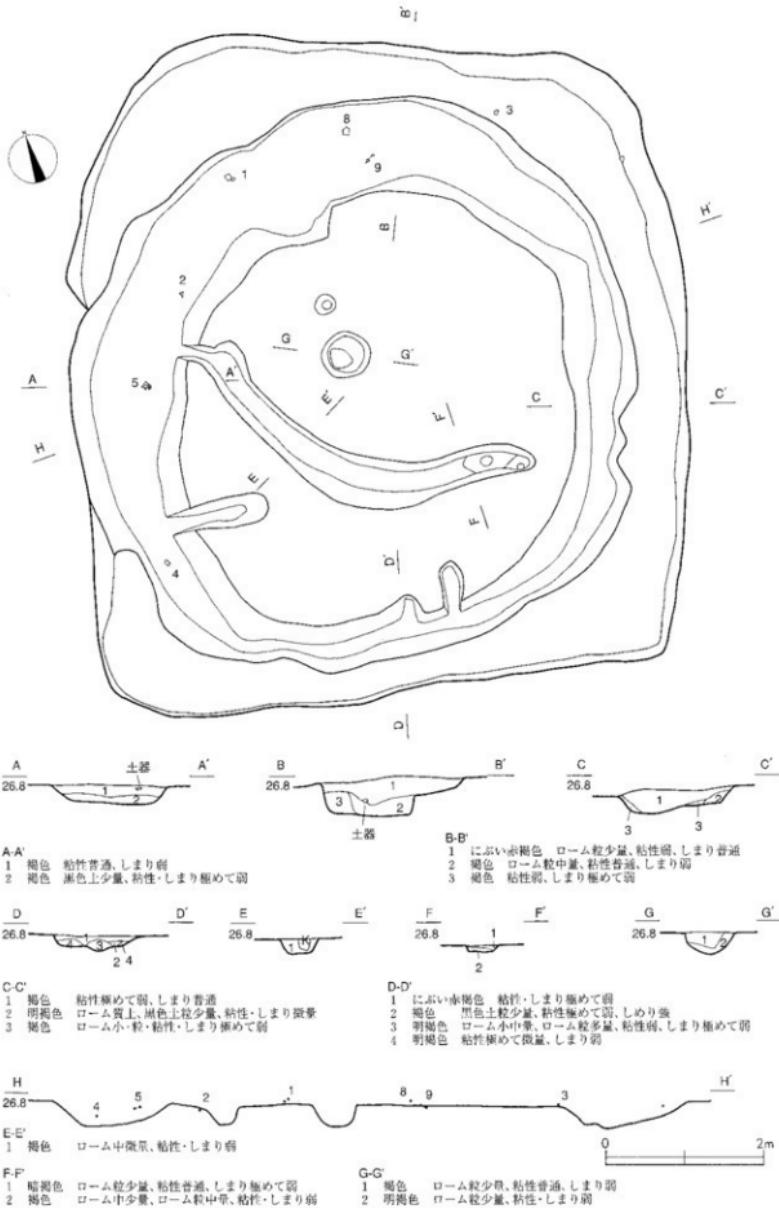
底面 幅22~110cmと広狭が激しい。概ね平坦であるが、張り出しを含む箇所は凹凸が著しい。南側は幅狭となる傾向が強い。

付属施設 周溝内縁から周溝内区にかけて、幅30~40cm・深さ9cmの溝状の落ち込みがみられた。この他、ピットが2穴（径60cm・深さ20cm、径25cm）確認された。

覆土 上面はローム調の土質であったため、当初はプランの確認が困難であった。

遺物 溝の上層から中層にかけて、十数点の遺物が出土した。出土高や遺存状況を考慮すると、遺構に直接伴う可能性は少ない。器種も、平安期の須恵器（1）から中世後期の内耳土器（4）・瓦質播り鉢（11）、近世の燈籠（8）・肥前系磁器（6）など様々である。

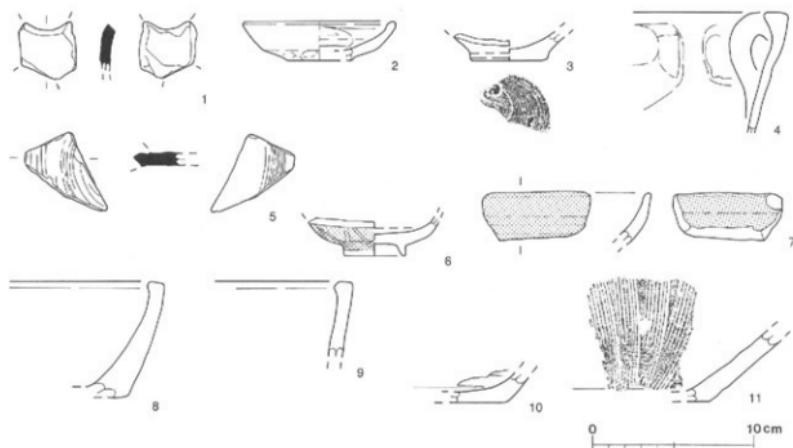
所見 本址の本来的用途は不明である。出土遺物に古墳期のものが乏しく、溝に広狭があることから、一連の古墳群には相当しないものと考える。埋没時期は、最新の遺物の年代から江戸期に比定することができる。



第97図 1号不明遺構検出状況

1号不明遺構出土遺物観察表

図版No	器種 形	法量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
1	須恵器 瓶 底部	C (0.8)	覆土上層	良好 長石微量 石英微量 雲母微量	灰色	濃青面に円形の透かし孔があり、器形を判断する。透かし孔はヘタ削り、他はナデ。	古代	
2	土師質土器 小皿 口縁～底部	A [9.1] B [4.1] C 2.4	覆土中層 10%	良好 黒色微砂 少量 良土	褐色	外輪した後、直線的に立上がる。外側面中央に後をもつ。外面下部に指痕痕。ナデ整形。		
3	土師質土器 小皿 底部	B 4.4 C (1.7)	覆土上層 10%	堅微	長石粒少量	に赤い橙色	底部が僅かに直立した後、体部は外反する。底部回転糸切り痕。	
4	土師質土器 口縁 口縁部	C (7.4)	覆土中層	良好 長石少量 雲母少量	灰褐色	直立気味に立上がる。内外面共にナデ調整。口唇部平坦に面取る。耳の接合部外縁には指痕痕が顯著に残る。外面に煤付着。	中世	
5	須恵器 高台付杯 底部	C (0.6)	覆土上層	良好 長石少量	黄褐色	ロクロ成形。底面に回転ヘラ切り板をもつ。高台との接合部を殺し、器形を判断。	古代	
6	磁器（染付） 碗 刷毛 口縁部	B 3.8 C (2.1)	覆土中 10%	堅微 稍良	明緑灰色	高台から直立気味に立上がる。豊竹以外は施釉。外面には樹脂状の文様、高台外縁には2条の沈縫が描かれる。	肥前系 くらわんか手 18世紀以降	
7	陶器 碗 刷毛 口縁部	C (3.3)	覆土中	堅微	黑色微砂 微量	灰白色	外輪して立上がる。白濁した長石粒が外側面に厚く難される。	瀬戸美濃系 志野
8	瓦質土器 倍格 口縁～底部	C (7.1)	覆土上層 10%	良好 長石少量 石英微量 雲母微量	に赤い黃褐色	平底の底部から外輪して立上がる。口唇部は平坦に面取られる。内面はやや内反り気味。外側面に煤付着、ナデ痕跡。	近世	



第98図 1号不明遺構出土遺物

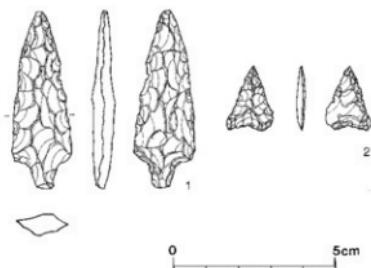
図版No.	器 形	法 量 (cm)	出土位置 残存率	焼成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
9	瓦質土器 始格 LII縁部	C (4.6)	覆土中 10%	堅微	長石粒少量 雲母・赤色 鐵粉微量	灰黃褐色	ナデ整形。口縁部は錐面と内面の2か所が削取られる。始格にしてはやや薄手過ぎるくらいがある。	近世
10	瓦質土器 始格? 底部	C (1.6)	覆土上部 10%	良好	長石粒微量	黑褐色	平底の底部から外縁して立上がる。ナデ整形。	
11	瓦質土器 拂り跡 崩~底部	C (3.8)	覆土中 10%	良好	長石粒微量	にほい青褐色	7条1単位の鋸目が重複して内底面をはしる。内底の鋸目は良く発達する。平底の底面から外縁して立上がる。	

第7節 遺構外出土遺物

当節では、表探・グリッド出土または当該遺構に伴わずに出土した遺物を報告する。報告に当たっては、石器・石製品、縄文土器、その他の3種に分けて各項目ごとに解説を加える。

石器〔第99図 P L 65〕

以下に、石器の遺構外出土遺物を挙げる。



第99図 遺構外出土石器

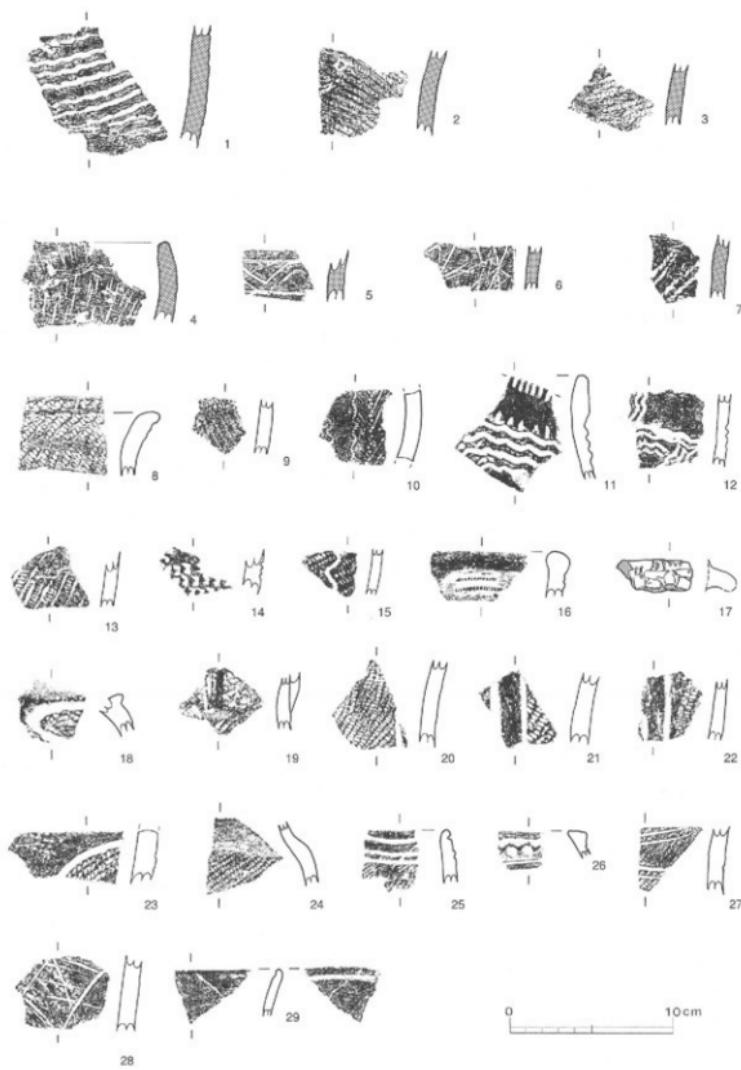
遺構外出土石器観察表

No.	種類	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石 材	備考
1	有舌尖頭器	54	18	7	6.0	安山岩	
2	石 砺	20	14	2	0.5	黒曜石	

縄文土器〔第100図 P L 67〕

当調査区からは、縄文時代前期から後期にかけての土器片がテンバコ1箱分出土した。時期的には前期中葉から中期後半の土器が大部分を占め、後期の土器は数点のみである。

1~7は前期前半の纏維土器で、波状沈線・鋸齒状沈線などを有する。8~9~11~14~16~17は前期末葉の土器で、結節縄文・側面圧痕・結節状浮縄文などを有する土器である。このうち、11~12は大木5式である。10は中期前半五領ヶ台式、15~18~24は中期後半加曾利E式の垂下沈線文などを有する土器である。25~29は後期の土器で、堀之内式・加曾利B式の粗製土器が多い。縄文地文に、斜行沈線・口縁内側を巡る沈線・紐線文を特徴とする。



第100図 遺構外出土縄文土器

遺構外出土縄文土器観察表

No.	器種	部位	器厚 (mm)	器形と文様の特徴	内面調整	胎 土			色 調 (外面/内面)	備 考
						長石	石英	雲母		
1	深鉢	胴	11.4	口縁の平行する2面	横ナデ	多			にぶい青褐色/にぶい青褐色	縄通中量
2	深鉢	胴	8.0	口縁直彎	横ナデ	巾			褐色/にぶい褐色	縄通中量
3	深鉢	胴	8.8	レバ指印入	横ナデ	少			にぶい褐色/灰褐色	縄通中量
4	深鉢	口縁	10.6	口縁部に斜めあわせ、腹部の近辺部をややくぼ文	横ナデ	少			にぶい褐色/灰褐色	縄通中量
5	深鉢	胴	9.8	側位平行式縄文	横ナデ	中			にぶい青褐色/にぶい青褐色	縄通少量
6	深鉢	胴	7.3	斜めの腹縫を2面に有り、不規則	横ナデ	中	少		にぶい青褐色/灰褐色	縄通少分
7	深鉢	胴	8.6	たての文の文	横ナデ				にぶい青褐色	縄通少分
8	深鉢	口縁	9.4	口縁部に直彎、口唇部直下より凹窓	横ナデ	多			灰褐色/にぶい青褐色	縄通中量
9	深鉢	胴	18.7	孔井型縄文	横ナデ	中	少		にぶい青褐色	
10	深鉢	胴	10.6	U型切妻式	ミガキ	少			にぶい青褐色/褐色	
11	深鉢	口縁	8.4	波打たれ面に引目 1面浮出部は底面の優勢、下部に參差接縄文、腹帶下に平行する側位式縄文、並列直彎	横ナデ				にぶい青褐色/褐色	
12	深鉢	胴	7.1	側位や倒位の平行する直彎式	横ナデ				にぶい青褐色	
13	深鉢	胴	7.9	波打たれ直彎式	横ナデ	中			にぶい青褐色/褐色	
14	深鉢	胴	10.3	全面に波打たれ直彎	ミガキ				にぶい青褐色/にぶい青褐色	
15	深鉢	胴	6.0	孔井式直彎、腹縫の連続式	横ナデ				にぶい青褐色/にぶい青褐色	
16	深鉢	口縁	9.9	口唇部直彎を形成し、2条の平行する腹縫の縦彌合縄文	横ナデ	多	多		にぶい青褐色	
17	深鉢	胴	—	2条の腹縫、横彌合縫と底部に直彎か直彎式	横ナデ	多	中		にぶい青褐色	
18	深鉢	胴	8.8	新潟三形の腰縫と直彎による複合式の腹縫、腹縫は底面の角で対接、底面は上端で	横ナデ				浅褐色	
19	深鉢	胴	8.2	北側を含むための側面と背側を対接する腹縫	横ナデ	中	中	多	灰褐色	
20	深鉢	胴	8.5	孔井式直彎、腹縫直彎	横ナデ	中	中	中	にぶい褐色/灰褐色	
21	深鉢	胴	9.2	孔井式直彎、腹縫の側位式縄文、底面直彎	ナデ	多	多		明褐色	
22	深鉢	胴	8.3	孔井式直彎、腹縫の側位式縄文、底面直彎	ナデ	多	多		明褐色/灰褐色	
23	深鉢	胴	12.0	孔井のびった北側による直彎、底面に2点を直彎式	横ナデ	中			灰褐色	縄通少
24	深鉢	胴	8.0	直彎式の口縁直彎	横ナデ	中			にぶい青褐色	
25	深鉢	口縁	8.6	口縁部に2条の腹縫が平行する下に直彎式	ミガキ				新褐色/にぶい青褐色	
26	深鉢	口縁	5.9	口縁部腰縫と直彎下に直彎式の腹縫式	横ナデ	中			新褐色/にぶい青褐色	
27	深鉢	胴	9.4	孔井式直彎、腹縫の側位式縄文による複合式直彎	横ナデ				にぶい青褐色	
28	深鉢	胴	10.2	全周に直彎を有し、下部直彎	横ナデ	中			灰褐色/にぶい青褐色	
29	深鉢	口縁	5.9	口縁部は削られ、口縁部に腹縫式直彎が残る、外縁は直彎	横ナデ	中	少		にぶい青褐色/灰褐色	

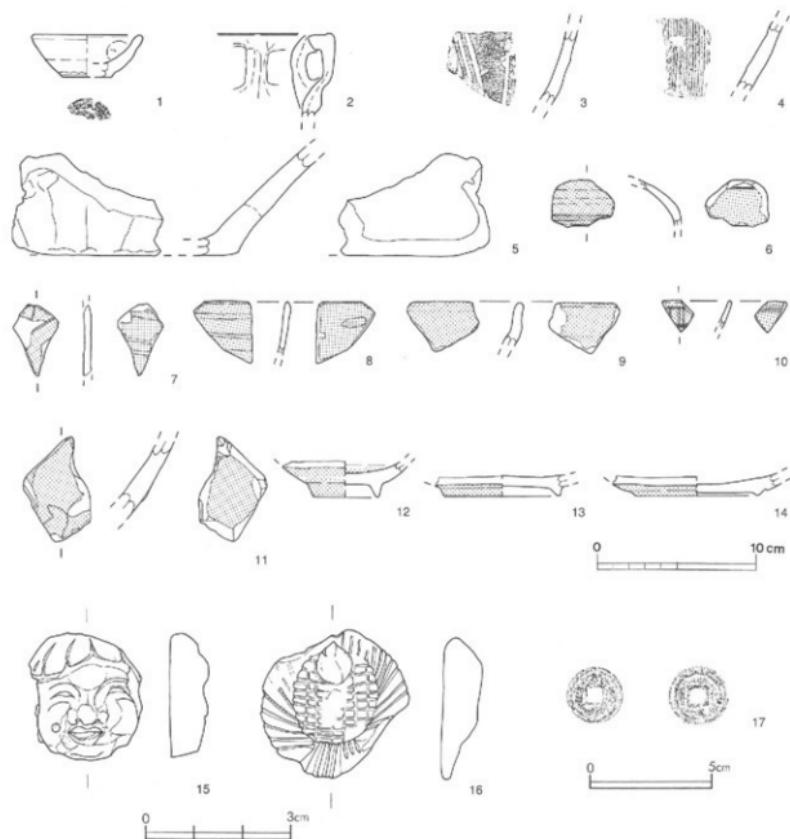
その他〔第101図 P L68〕

以下に、石器と縄文土器以外の遺構外出土遺物を挙げる。

遺構外出土遺物観察表

調査No.	器種	法 量 (cm)	沿土位置 残存率	施成	胎 土	色 調	器 形・技 法 の 特 徴	備 考
1	土師質土器 小豆 U縁～底部	A [6.8] B [3.0] C (2.6)	表土 15%	良好 微少量 雲母微量	長石・黒色 微少量 雲母微量	褐色	微かに直立した後、外傾して立上がる。外側面下部に株を生じる。底面に円転系切痕。内側横ナデ調整。	
2	土師質土器 内耳鍋 口縁部	C (5.2)	表土	良好 長石粒微少 雲母少量	灰褐色	やや直立気味に立上がる。口縁部は平底にて内耳に残る。外側には内耳に対応して直径底を残す。外側集付着。	中世在地系	
3	土師質土器 猪口鉢 胴部	C (4.5)	表土	良好 長石・雲母 赤色微少 微量	明赤褐色	3系以上を1単位とする鉢身日が、直後せず に配される。外側は剥落する。	中世在地系	

図版No	器 器 種 形	法 量 (cm)	出 土 位 置 残 存 率	焼 成	胎 土	色 調	器 形 ・ 技 法 の 特 徴	備 考
4	陶器 擂り钵 肩部	C (4.2)	表土	堅緻	裡かに気泡 を生じる 良土	に赤い褐色	9条以上の押し目を内面に刻む。 外面はナデで、沈線が横位に施される。 押し目は磨滅していない。	瀬戸美濃系
5	陶器 擂り钵 底部	C (6.6)	2H・2I・2J -21区	堅緻	長石粒多量 黒色微砂 少量	に赤い褐色	底面に長石粒多く付着。外側は堅位のヘラ削 り。内面はナデを施し、平滑化している。	宮清窯 中世
6	磁器 壺又は瓶 肩部	C (2.2)	33H+チ	堅緻	粘性あり	暗赤褐色	外側に鉄釉、内面に透明釉。外側に2条の凹 部が巡り、颈部へとすぼまる。	瀬戸美濃系



第101図 遺構外出土土師質土器他

図版No	器種形	法量(cm)	出土位置 残存率	焼成	胎土	色調	器形・技法の特徴	備考
7	青白磁 梅瓶 胴部	C (4.3)	表土	堅緻	精良	明緑灰色	外面に渦呑文を施す。内面には強い横ナデ。外筒のみ施釉される。	景徳鎮系 中世
8	磁器 碗 口縁部	C (3.5)	表土	堅緻 良土	僅かに気泡 を生じる	黄褐色	内外面に暗緑色の施釉。外面に沈金文が数条 施される。	瀬戸美濃系 19世紀以降
9	陶器 天目 口縁部	C (3.2)	表土	堅緻 良土	僅かに気泡 を生じる	黒褐色	僅やかにS字状に湾曲する口縁部片。外面に 鉄物が施される。	瀬戸美濃系
10	磁器(染付) 碗蓋類 口縁部	C (2.0)	2J-29区	堅緻	良土	灰白色	外面は柄子状の文様、内面は口唇部寄りに横 位2条の線が描かれる。	瀬戸美濃系 19世紀以降
11	陶器 深皿又は鉢 脚部	C (4.7)	2C-21区	堅緻	黑色微砂 微量 粘性あり	オリーブ色	内外面に施釉。外面下方には輪廻りが生じて おり、器種を判断する。	瀬戸美濃系 近世
12	磁器 碗 底部	B [4.3] C (1.9)	表土 25%	堅緻	緻密で精良	灰色	外面に厚く長石釉をかける。骨付は無釉。 直立した高台から、僅やかに立ち上がる。	
13	陶器 碗 底部	B [7.0] C (1.3)	表土 15%	堅緻	黑色微砂を 僅かに含む 良土	灰白色	底部は圓軸切り切り底を残す。見込みに長石釉を 施すが、重ね焼の為に輪状に釉を落さざる。	瀬戸美濃系 志野?
14	陶器 碗蓋類 底部	B [7.5] C (1.4)	2D-28区 15%	堅緻	良土	灰白色	内外面共に白濁した長石釉を施す。割り出し 高台。体部は徐々に外方に開く。	瀬戸美濃系 志野
15	土製品 泥面子	径 2.4 厚 0.7	表土 80%	良好	やや粉質	橙色	頭髪を中央で分け、笑みを浮かべた男児の顔 面部分。	
16	土製品 泥面子	径 3.1 厚 0.8	表土 80%	良好	黑色微砂 少量	橙色	亀状の動物の下部に沈金が模様に施される。モ チーフは不明。	

No	種類	外径(cm)	内径(cm)	重量(g)	色調	出土位置	備考
17	寛永酒甕	2.3	1.9	2.0	暗緑灰色	2J-30区	表裏共に良く施釉し、鐵鉢は判別しづらい。いわゆる新寛永。

第6章 結語

北西原遺跡第3次調査は、桜川低地に派生する小支谷に面した古墳時代前期のむらの跡と、点在する繩文時代の遺構を発見した。今までの3次にわたる調査の累積によって、北西原遺跡で検出された古墳前期の竪穴住居数は100軒を越える。この住居数は、従来の土浦市内の古墳前期の遺跡には見られない密度の濃さを示している。ただしながら、平成6年度調査と比較した場合に本年度調査区は、谷部から離れて台地中央に寄っており、遺構の分布密度は傾向としてやや少ない。第4次調査にいたっては、土坑と溝のみが希薄に分布する結果となった。

今年度の山川古墳群第1次調査は、この古墳群が古墳時代を通じて営まれた墳墓群であることを明らかにした。その組成は、古墳時代前期が方形周溝墓、古墳時代中期が円墳（または前方後円墳）からなるものである。これ以外にも山川古墳群には、墳丘を残す古墳が今回の調査区の東側に2基存在するほか（茨城大学1984）、墳丘を失って地下に埋没する古墳や方形周溝墓も未調査区に存在する可能性は高い。また調査区から直線にして約100m南方には、市内第3位の規模の常名天神山古墳があるが、この前方後円墳も墳丘形態から、5世紀前半代のものと考えられている（茂木・水野・長洲1991）。他にもこの近辺には、前方後円墳の挑戦塚古墳（現在は湮滅）の所在が伝えられる（土浦市史編さん委員会1974）ほか、昭和48年にも古墳時代後期の可能性がある箱式石棺が発見されて発掘調査されており（土浦市教育委員会1974）、近在の前方後円墳もあわせた一大墳墓群が営まれていた可能性が想定できる。

この二つの調査は、古墳時代前期のむらの跡と墳墓群という対照的な2遺跡を明らかにした。両者は一部の時期で並存しており、同一台地の北端に集落を営み、南端に墓域を設定するという立地的にも対照的な在り方をしている。このうち、むらが北側にあることの原因の一つは、桜川低地からT字状に嵌入する大きな谷を谷津田などにして利用していたため、谷頭にあたる位置にむらを構える必要があったことを指摘できよう。

一方、台地の南側には、古墳時代の墳墓群が営まれ続けた。部分的な調査のために不明な点も少なくないが、同一台地で2~300mしか離れていないこの墓地とむらが、有機的に何らかのつながりをもっていたことは確かであろう。つながりの一つには、北西原遺跡のむらの有力者が、山川古墳群の方形周溝墓や円墳の造立主体者であったのかもしれない。なおこの古墳群は、立地上台地の南端に営まれているが、この立地は周辺の古墳のありかたにも概ね共通する傾向である。桜川や霞ヶ浦などの交通の要衝を眼下にする位置に、墳墓を営む必要があったのであろうか。

ところで北西原遺跡では、過去の調査で北陸系や畿内系などの外米系の土器が出土している。山川古墳群1号方形周溝墓でも、南関東から東海地方東部の影響を受けた壺が出土している。このことは、常名台に住んだ人々が他の地方の人々と広く人や物の交流があったことを示している。

同じ台地の上で古墳時代前期の集落跡と墳墓群が併存したという例は、土浦市内の検出例は未だ無いものである。以上のことから、今年度の北西原遺跡第3次調査と山川古墳群第1次調査の発掘調査は、当地方の古代史を解明する上で、重要な資料を提示するものといえるだろう。

最後になりますが、今回の発掘調査および整理調査において、ご協力を賜った関係各位の方々に衷心より御礼申し上げます。

（比毛君男）

引用・参考文献 (敬称略・50音順)

- 茨城県教育委員会 2001 『茨城県遺跡地図』
- 筑波大学人文学部史学科六研究室(茂木雅博) 1984 『土浦の遺跡－埋蔵文化財包蔵地－』 土浦市教育委員会
- 上高津貝塚ふるさと 1996 『土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場年報第2号(平成7年度)』
歴史の広場
- 筑波大学 1991 『筑波大学先史学・考古学研究調査報告VI「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚
の研究』
- 土浦市遺跡調査会(黒澤春彦) 1991 『土浦市八幡下遺跡発掘調査報告書』 土浦市教育委員会
- 土浦市教育委員会 1974 『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』
- 土浦市教育委員会 1992 『土浦市埋蔵文化財地図』
- 土浦市史編さん委員会 1966 『図説土浦市史』 土浦市教育委員会
- 土浦市史編さん委員会 1974 『土浦市史別巻土浦歴史地図』 土浦市教育委員会
- 土浦市史編さん委員会 1975 『土浦市史』 土浦市教育委員会
- 土浦市史編さん委員会 1991 『図説土浦の歴史』 土浦市教育委員会
- 土浦市文化財保護審議会 1978 『土浦市の文化財』 土浦市教育委員会
- 『土浦の石仏』編集委員会 1985 『土浦の石仏』 土浦市教育委員会
- 土生朗治 1994 『茨城県教育財團文化財調査報告第84集(仮称)上高津团地建設事業
地内埋蔵文化財調査報告書 寄居遺跡・うぐいす平遺跡』
財團法人茨城県教育財團
- 増田精一・岩崎卓也ほか 1986 『武者塚古墳 武者塚古墳・同2号墳・武具八幡古墳の調査』 武者塚古墳調査團
新治村教育委員会
- 茂木雅博・水野佳代子・長洲順子 1991 『土浦市における古墳の測量』『博古研究』創刊号

報告書抄録

ふりがな	きたにしらはいせき だい3じ・だい4じちょうさ 一やまかわこみんぐん だい1じちょうさ						
書名	北西原遺跡（第3次・第4次調査）・山川古墳群（第1次調査）						
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
卷次	第3集						
編集者名	比毛君男	著者名	鶴町明子 中野耕太郎 比毛君男 渡辺丈彦				
編集機関	土浦市遺跡調査会						
発行機関	土浦市教育委員会						
所在地	〒300-0812 土浦市下高津2-7-36						
発行年月日	2004(平成16)年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村 遺跡番号	北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
きたにしらはいせき 北西原遺跡	いばらきけんつくばみや 茨城県土浦市 おひめびとたち 大字常名2799 番地他	08203 238	36° 6' 9"	140° 11' 5"	1995(平成7)年 5月21日～ 10月13日	第3次調査 2,600m ² 第4次調査 13,000m ²	市総合運動 公園建設事 業
やまとかわこみんぐん 山川古墳群	いばらきけんつくばみや 茨城県土浦市 おひめびとたち 大字常名2542 番地他	08203 235	36° 6' 1"	140° 11' 12"			13,000m ²
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
北西原遺跡 (第3次調査)	集落跡	古墳時代(前期)	竪穴住居址 土坑	20軒 1基	土師器、土製品 縄文土器	前次調査と同様古墳時代	
		縄文時代				前回の集落跡である。	
		時代不明	竪穴住居址 溝 土坑 不明遺構	2軒 1条 9基 1基			
(第4次調査)		時代不明	溝 土坑	1条 2基	陶器、磁器		
山川古墳群 (第1次調査)	墳墓群	古墳時代(前期) (中期～後期)	方形周溝墓 円墳 土坑	3基 4基 1基	土師器、須恵器 滑石製模造品	古墳時代前期の方形周溝 墓、中期の古墳が同一台 地縁部に点在する。方 形周溝墓は北西原遺跡の 集落と同時期に当たる。	
			縄文時代	土坑	3基	縄文土器、石器	
		奈良・平安時代	竪穴住居址	1軒	土師器、須恵器		
		時代不明	溝 土坑 不明遺構	7条 15基 1基	陶器、磁器		

写 真 図 版



調査前の状況



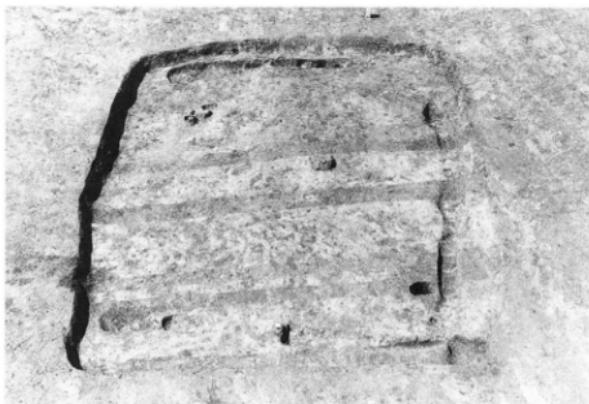
表土除去風景



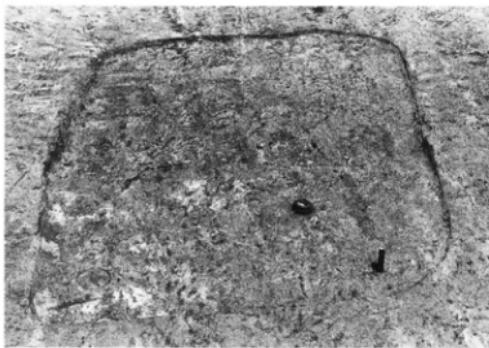
精査風景



91号住居址検出状況



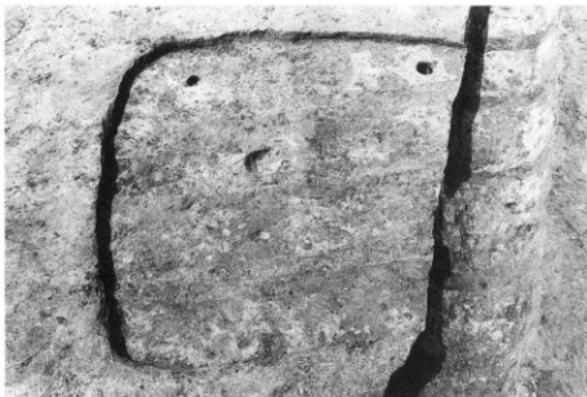
92号住居址検出状況



92号住居址遺物出土状況



92号住居址炉址検出状況



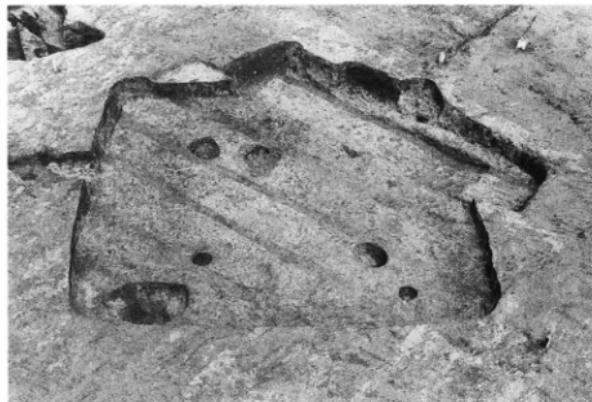
93号住居址検出状況



93号住居炉址検出状況



調査区坑打風景



94号住居址検出状況



遺物出土状況



炉址検出状況



貯蔵穴検出状況



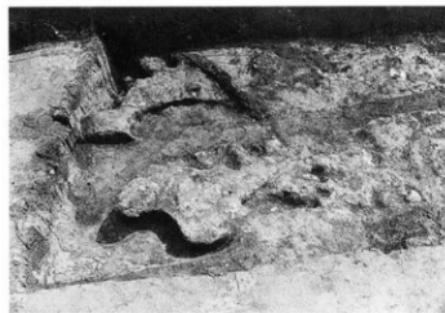
柱穴 (b-b') セクション



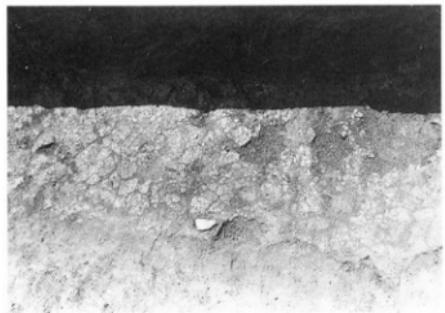
95号住居址検出状況



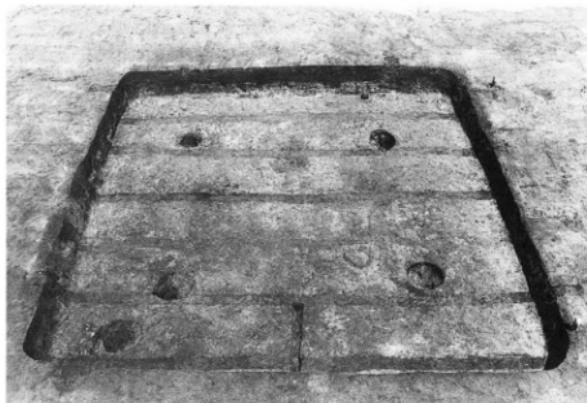
遺物出土状況



焼土検出状況



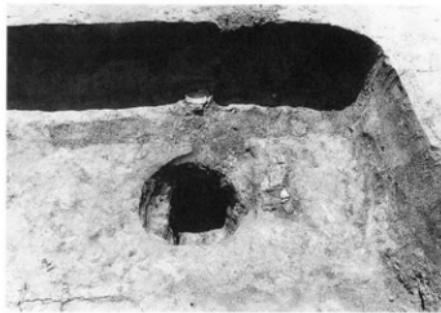
被熱硬化した床面



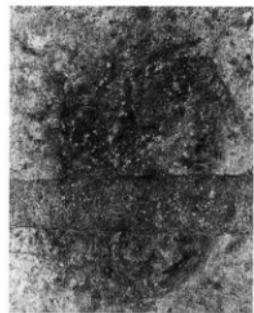
96号住居址検出状況



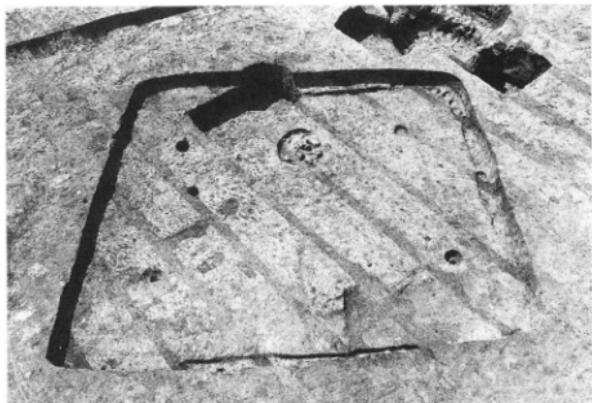
遺物出土状況



貯藏穴検出状況



炉址検出状況



97号住居址検出状況



遺物出土状況



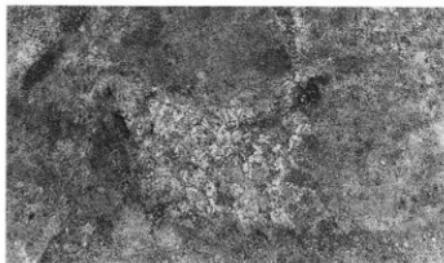
遺物出土状況（拡大）



遺物出土状況（拡大）



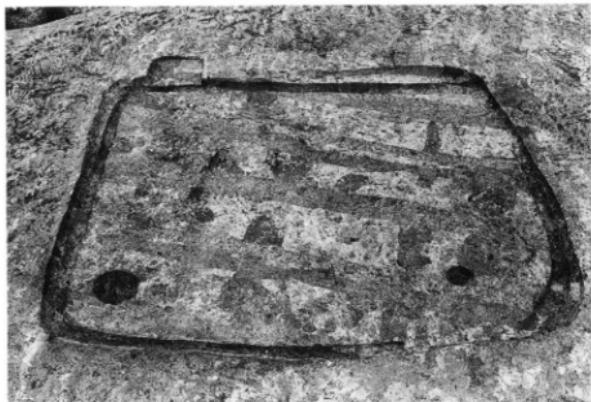
98号住居址検出状況



98号住居炉址検出状況



竪穴住居址検出風景



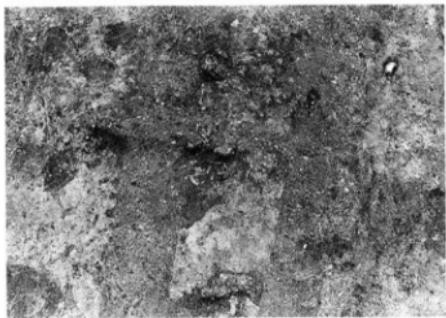
99号住居址検出状況



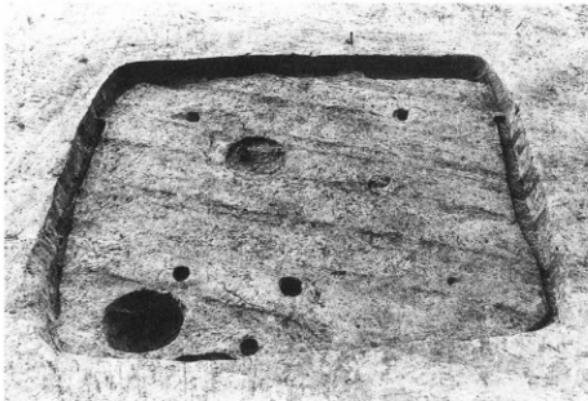
遺物出土状況



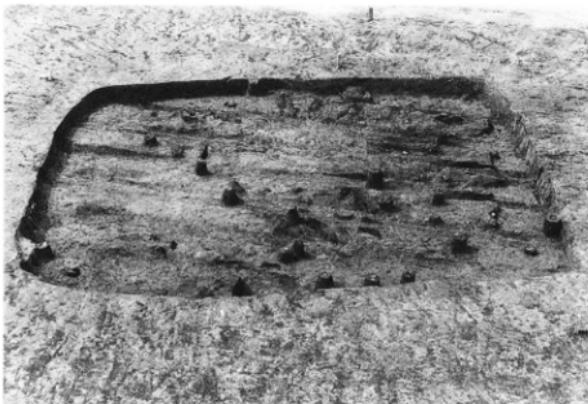
遺物出土状況（拡大）



炉址検出状況



100号住居址検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況（拡大）



炭化材出土状況



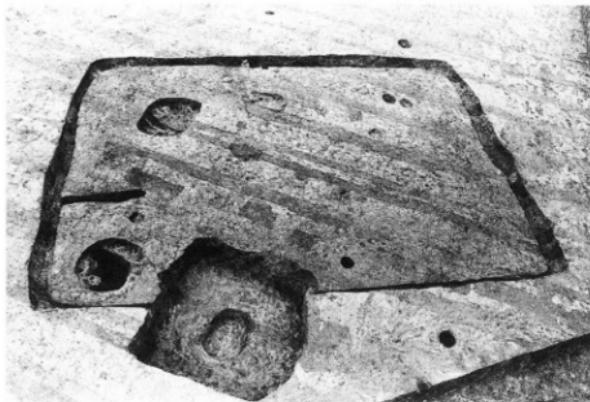
101号住居址検出状況



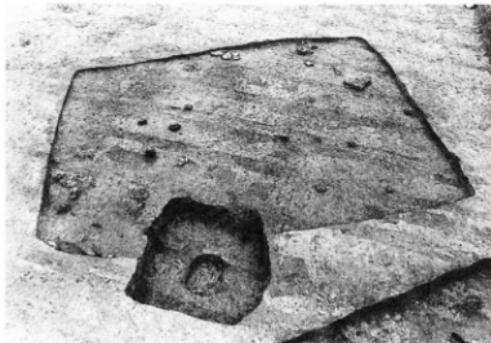
101号住居址遺物出土状況



炉址検出状況



102号住居址検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況（西壁）



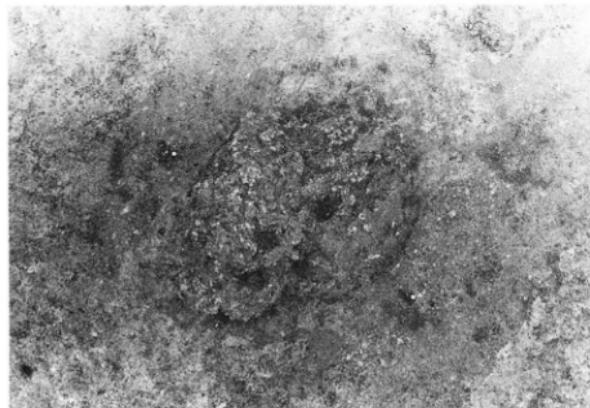
遺物出土状況（北壁）



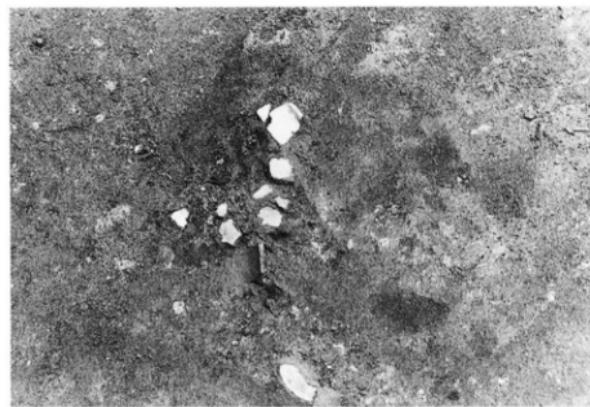
遺物出土状況（北壁）



103号住居址検出状況



炉址検出状況



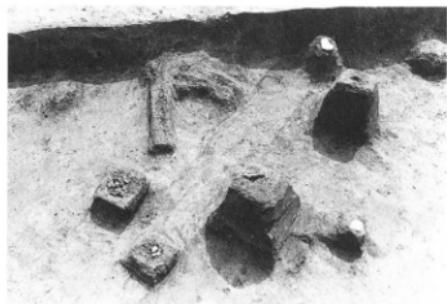
遺物(土師器細片)出土状況



104号住居址検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況（西壁）



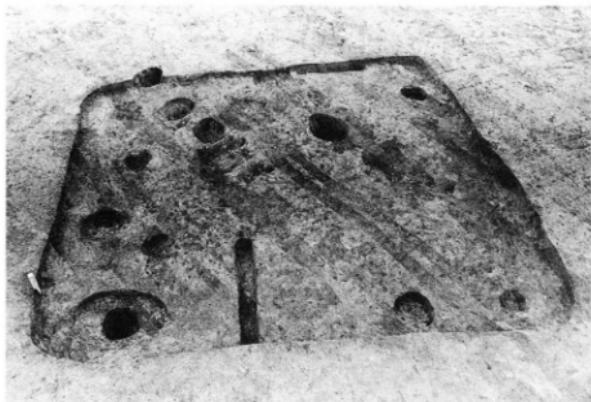
炉址検出状況



炉址遺物出土状況



遺物出土状況



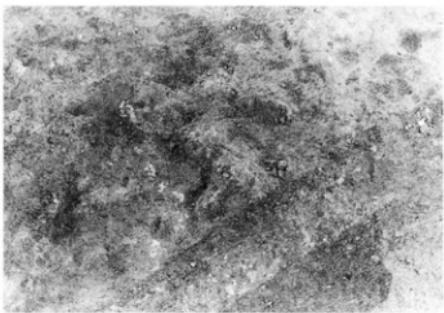
107号住居址検出状況



遺物出土状況



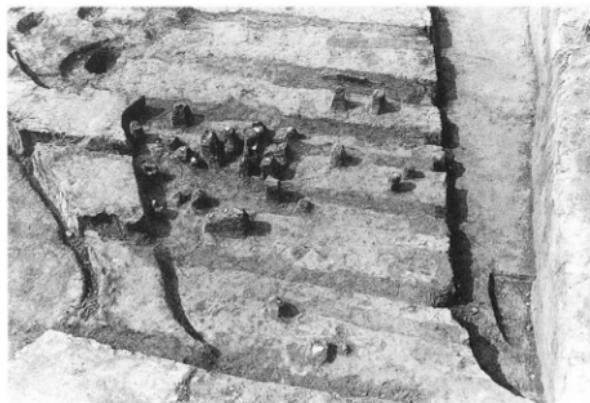
遺物出土状況（拡大）



炉址検出状況



108号住居址検出状況



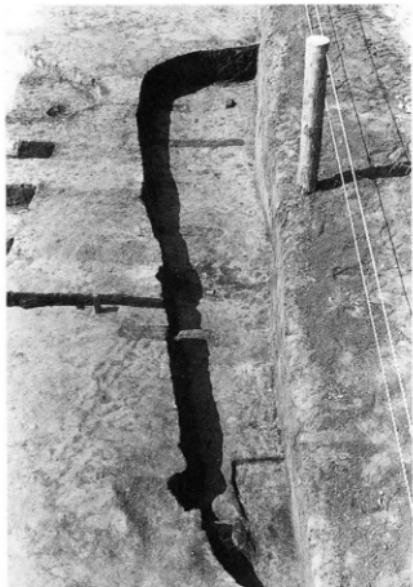
遺物出土状況



遺物出土状況（西壁・拡大）



遺物出土状況（拡大）



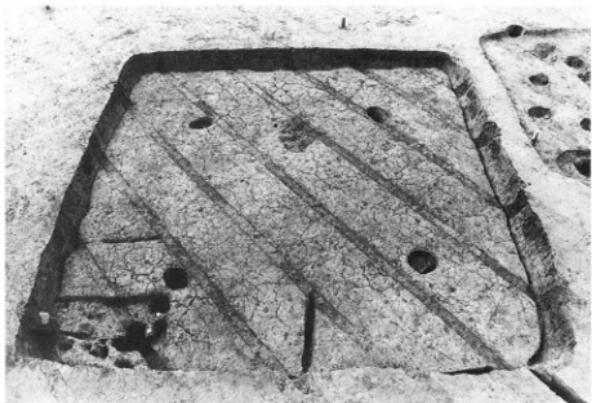
109号住居址検出状況



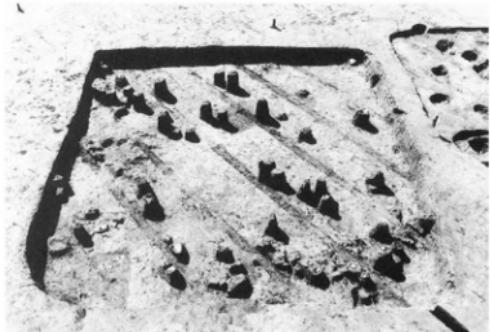
遺物出土状況（西壁）



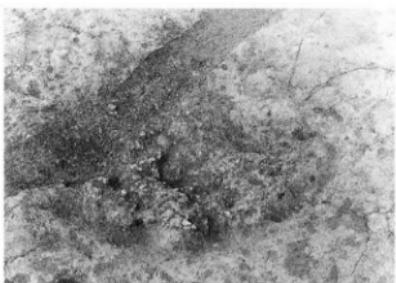
南西隅の落ち込み部分（拡大）



111号住居検出状況



遺物出土状況



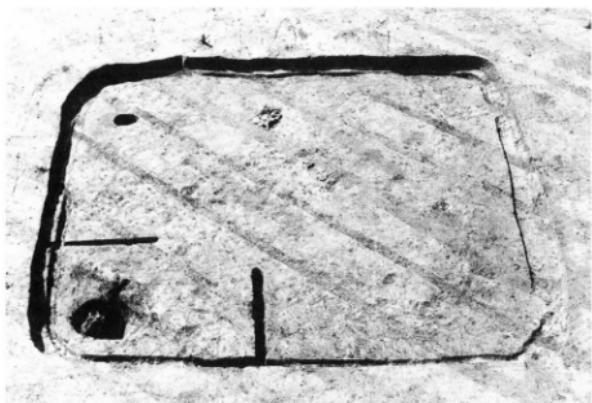
炉址検出状況



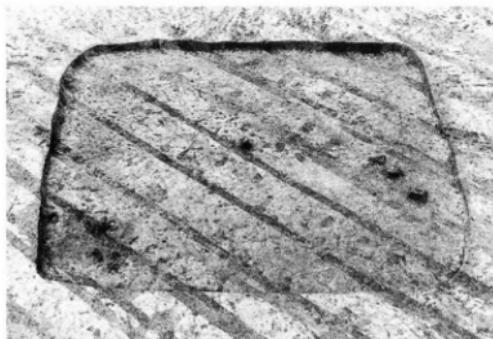
貯藏穴部分遺物出土状況



貯藏穴部分検出状況



113号住居址検出状況



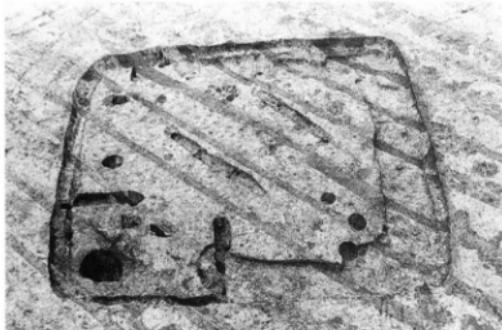
遺物出土状況



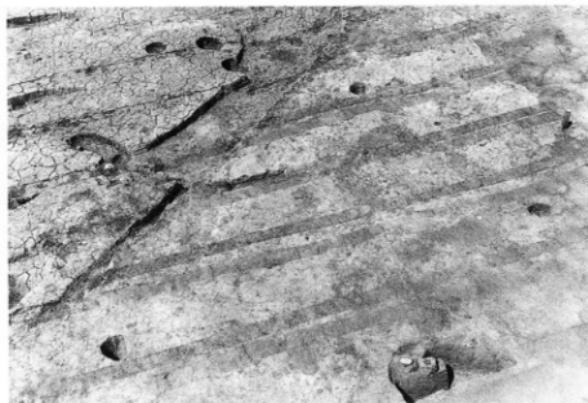
貯藏穴遺物出土状況



炉址検出状況



U字状溝（掘り方？）検出状況



114号住居址検出状況



P 4 (貯藏穴?) 検出状況



作業風景



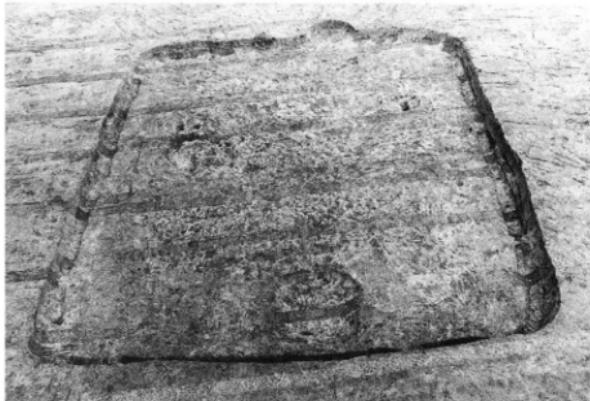
115号住居址検出状況



遺物出土状況



遺物出土状況



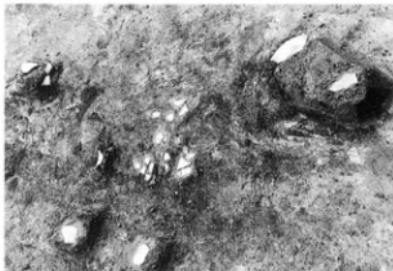
118号住居検出状況



遺物出土状況



炉址覆土堆積状況



遺物出土状況（拡大）



遺物出土状況（北東隅・拡大）



45号土坑检出状况



47号土坑检出状况



56号土坑检出状况



55号土坑状况



覆堆积状况



烧碟出土状况



10号溝検出状況（中央から北へ）



10号溝検出状況（中央から南へ）



1号不明遺構検出状況



57号土坑検出状況



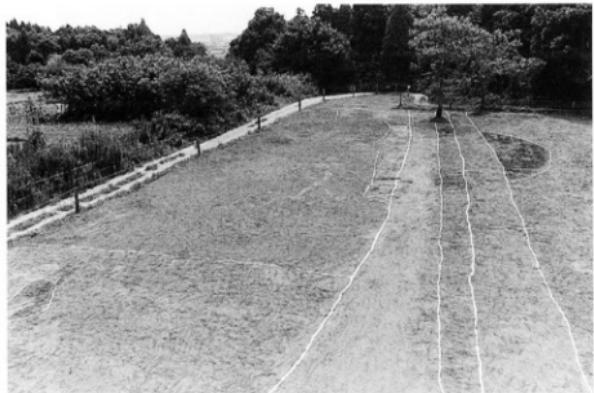
58号土坑検出状況



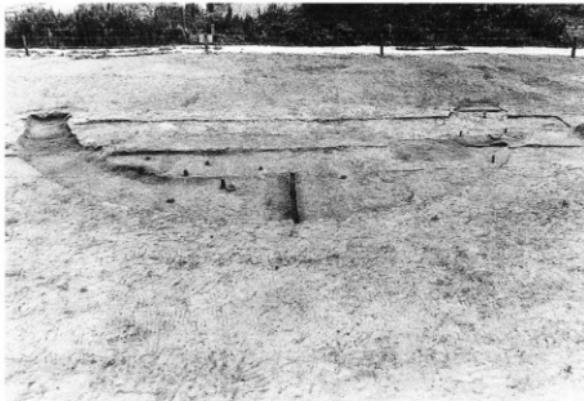
11号溝検出状況



山川古墳群 西側調査区を望む



現代の道路と4号墳周溝の確認状況



4号墳検出状況



4号墳遺物出土状況



5号墳検出状況



上空より 6号墳を望む



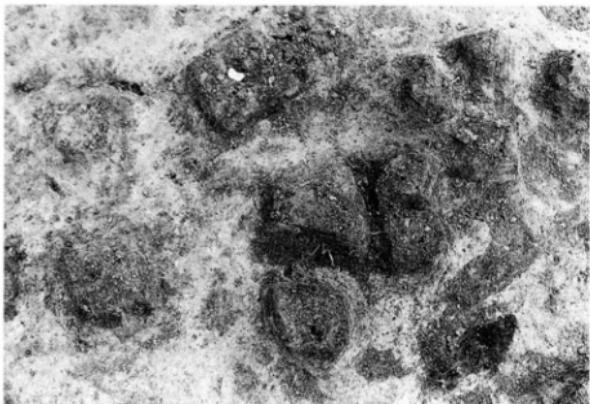
6号墳検出状況



7号墳検出状況



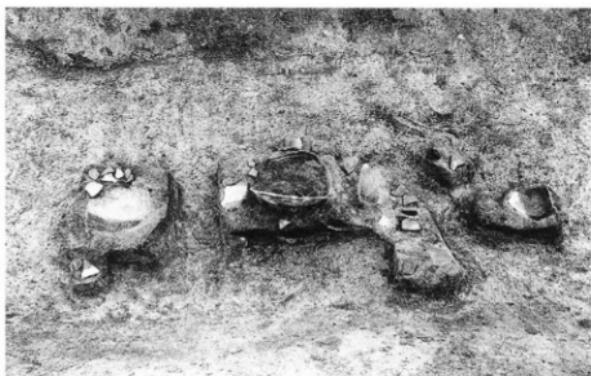
滑石製模造品出土状況
(竹串が位置を示す)



滑石製模造品出土状況（拡大）



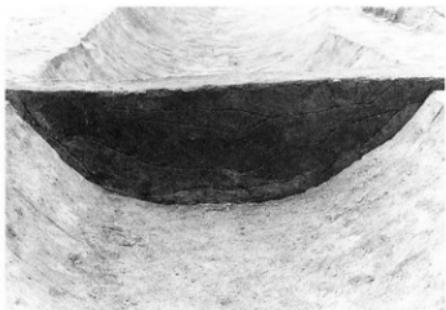
1号方形周溝墓検出状況



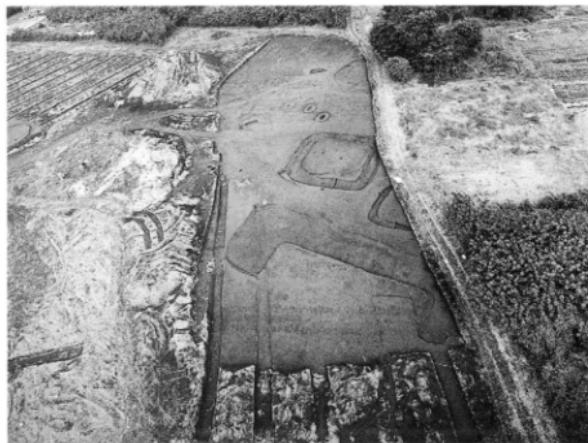
周溝北西部遺物出土状況



遺物出土状況



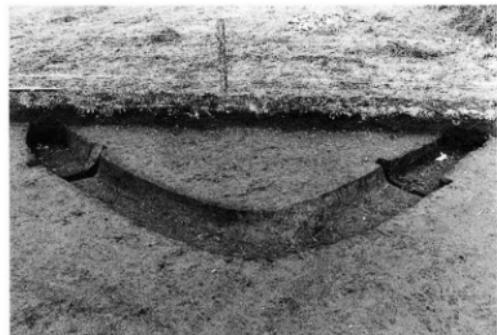
周溝南側(B-B')土層



東側調査区を望む



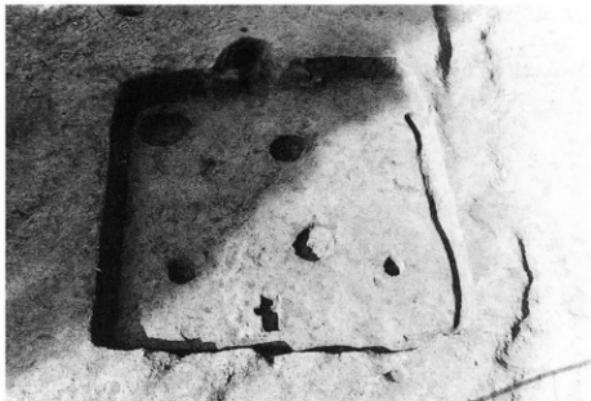
周溝西側（A-A'）土層



2号方形周溝墓検出状況



3号方形周溝墓検出状況



1号住居址検出状況



遺物出土状況



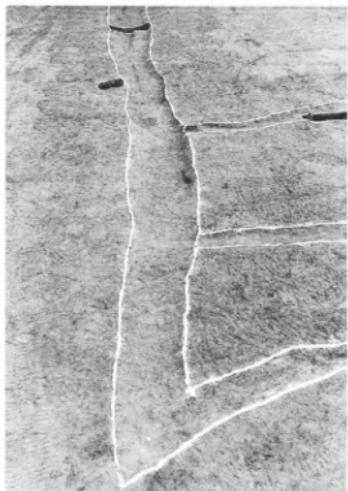
遺物出土状況（拡大）



カマド内部遺物出土状況



カマド検出状況



1号溝検出状況（北から南）



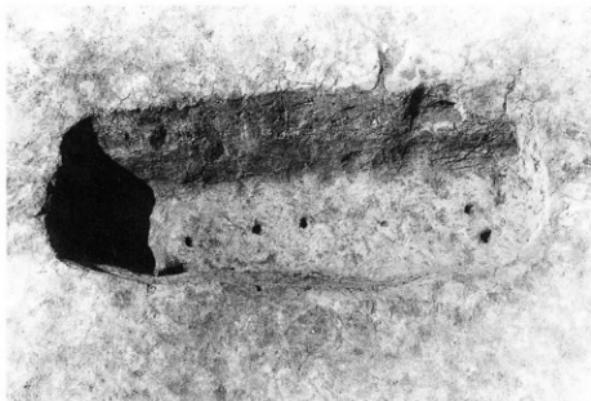
1~5号溝検出状況



6号溝検出状況



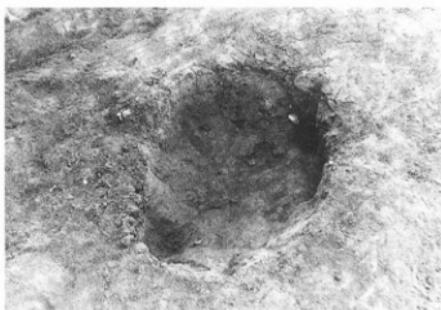
7号溝検出状況



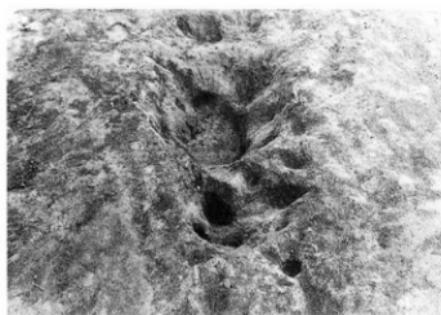
1号土坑检出状况



1号土坑坑底部扩大



4号土坑检出状况



7号土坑检出状况



8号土坑検出状況



遺物出土状況



覆土堆積状況



9号土坑検出状況



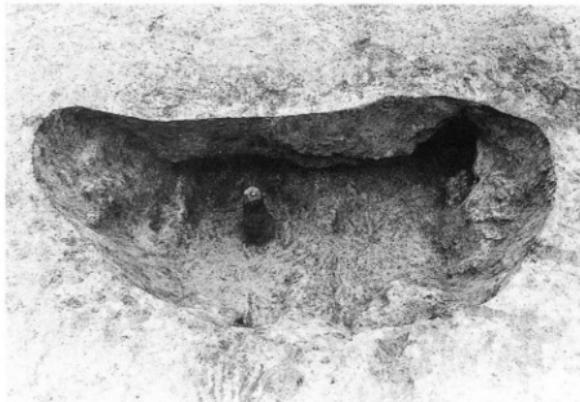
10号土坑検出状況



11号土坑検出状況



12号土坑検出状況



13号土坑檢出狀況



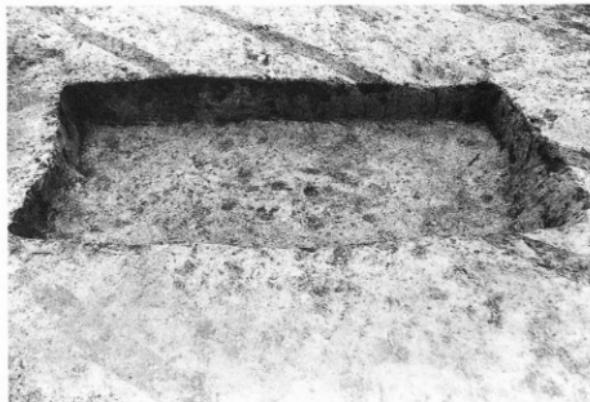
14号土坑檢出狀況



16号土坑檢出狀況



15号土坑檢出狀況



17号土坑検出状況



18号土坑検出状況



14~17号土坑検出状況



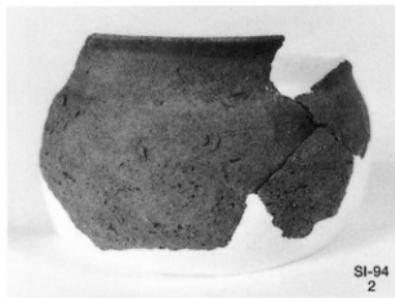
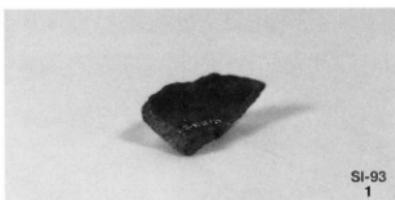
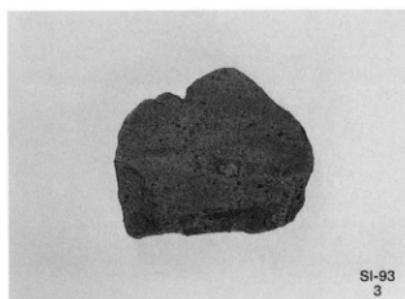
1号不明遺構検出状況



遺物出土状況

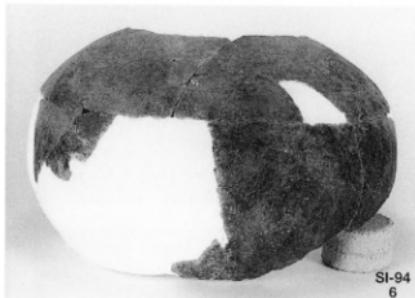


遺物出土状況





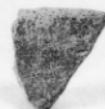
SI-94
5



SI-94
6



SI-94
7



SI-94
8



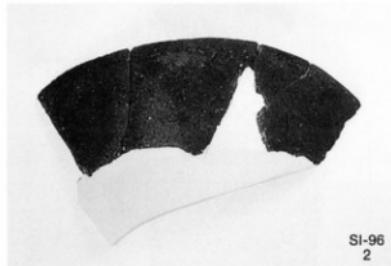
SI-94
9



SI-94
10



SI-94
11





SI-96
6



SI-96
7



SI-96
8



SI-96
9



SI-96
10



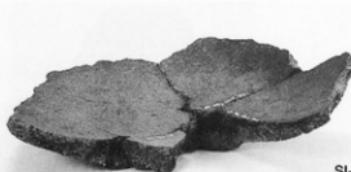
SI-96
11



SI-96
12



SI-96
13



SI-96
14



SI-96
17

SI-96
20

SI-96
21



SI-96
18



SI-96
19



SI-97
1



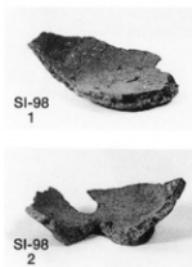
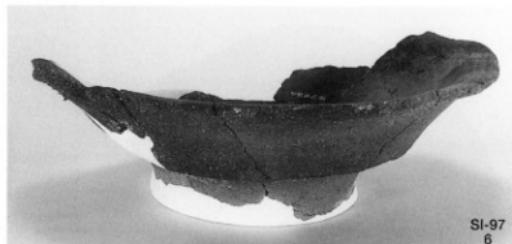
SI-97
2

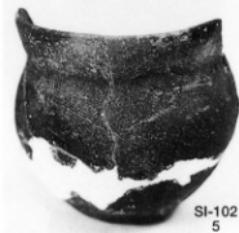
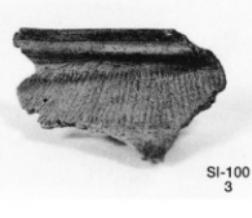


SI-97
3



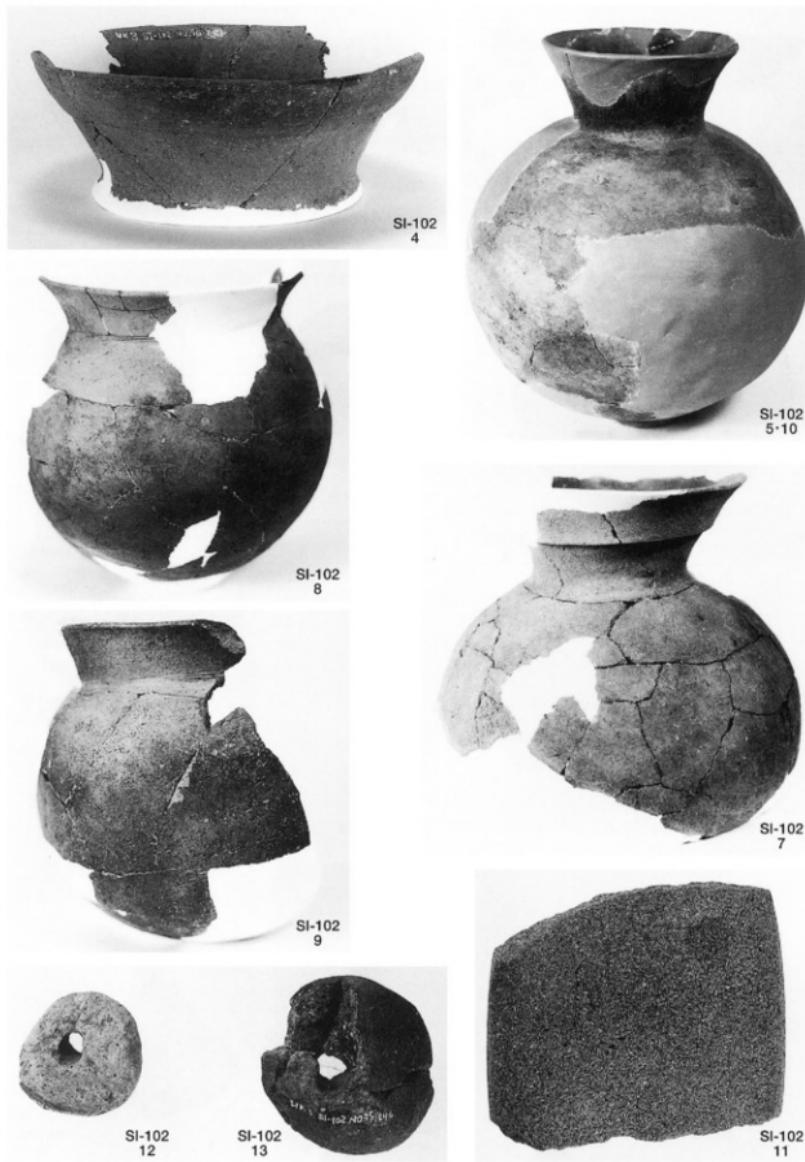
SI-97
4

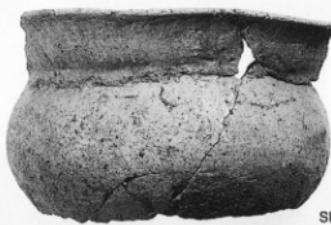


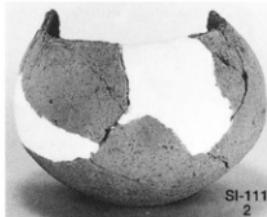
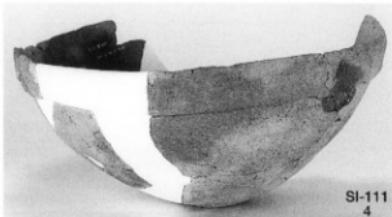


SI-101
1











SI-111
12



SI-111
13



SI-111
14



SI-113
1



SI-113
2



SI-113
3



SI-115
1



SI-118
2



SI-118
1



SI-118
3



SI-118
10



SI-118
6



SI-118
7



SI-118
8



SI-118
4



SI-118
5



SI-118
9



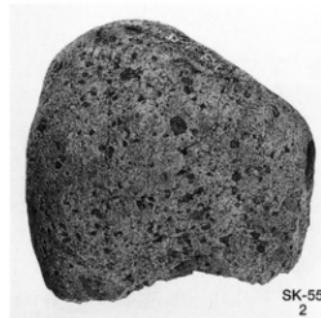
SI-118
11



SI-118
12



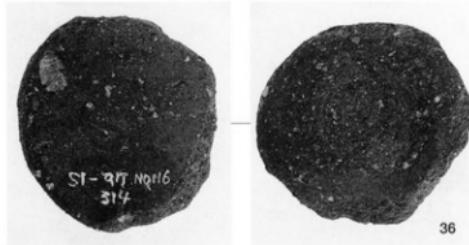
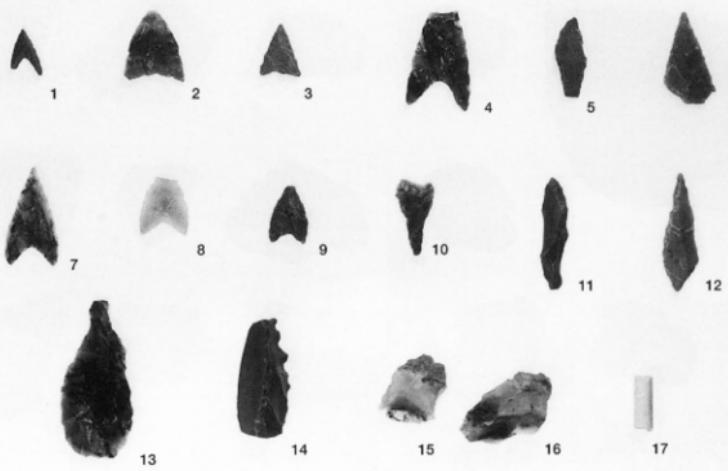
SD-10
1



SK-55
2



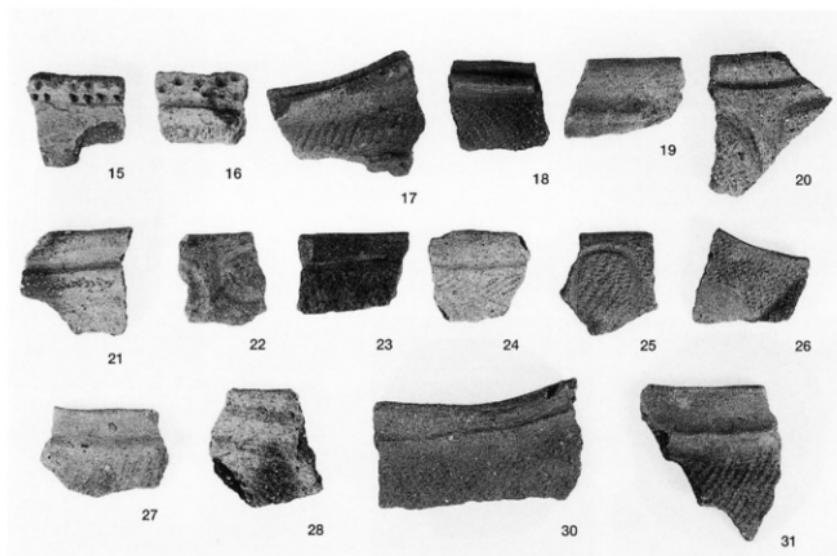
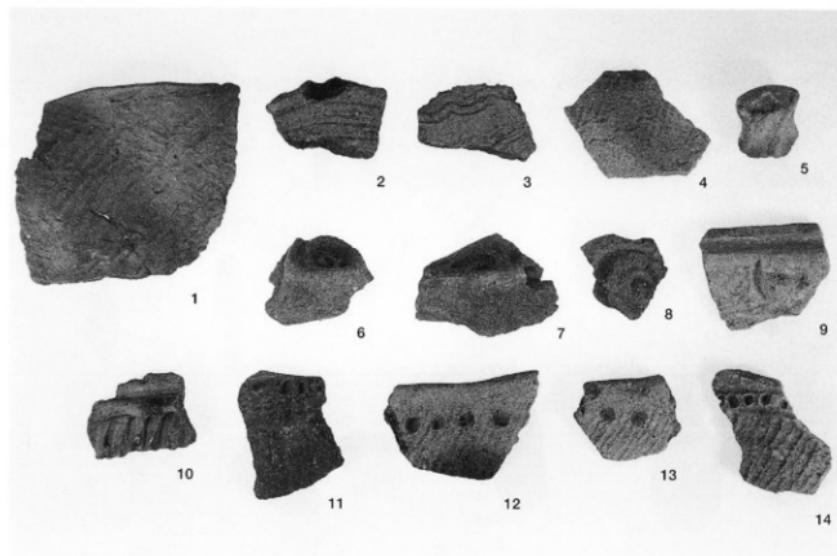
SK-55
1

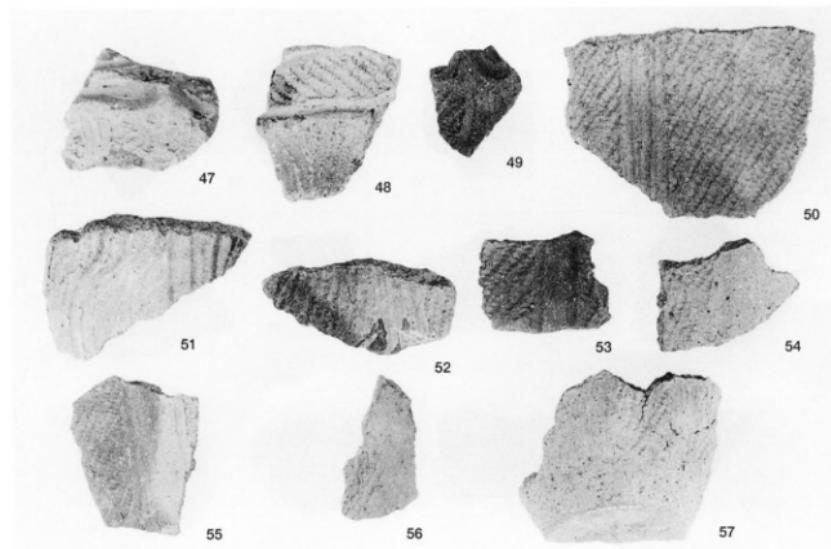
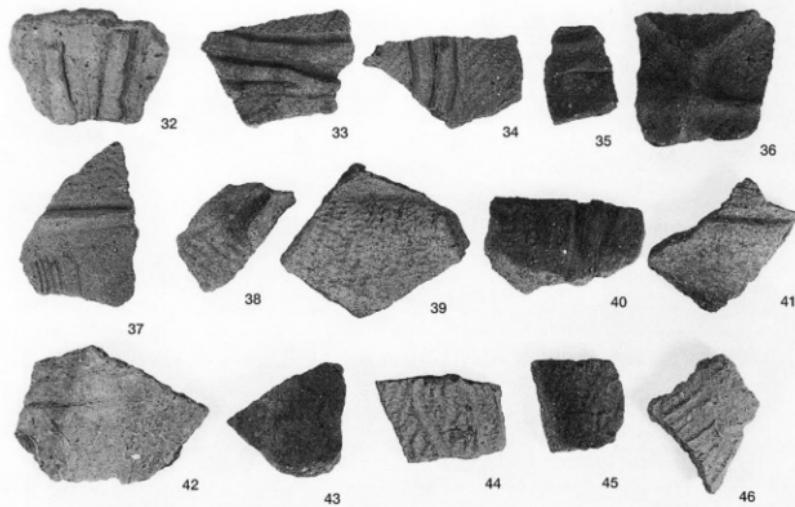


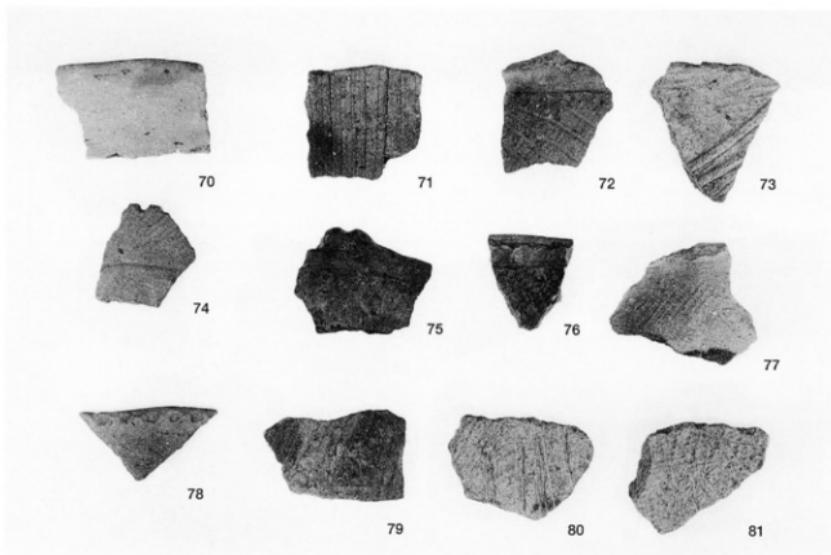
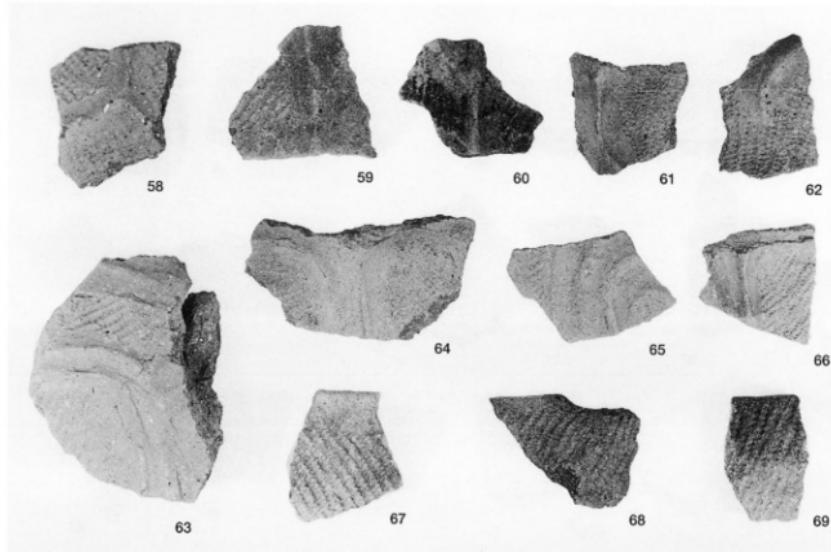
36

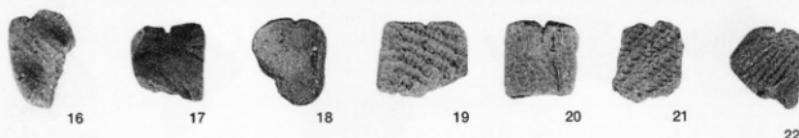
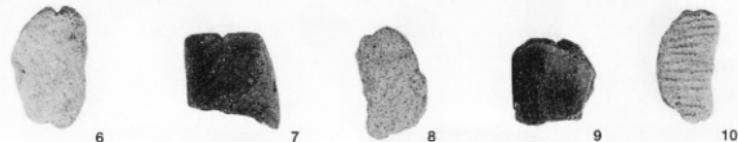


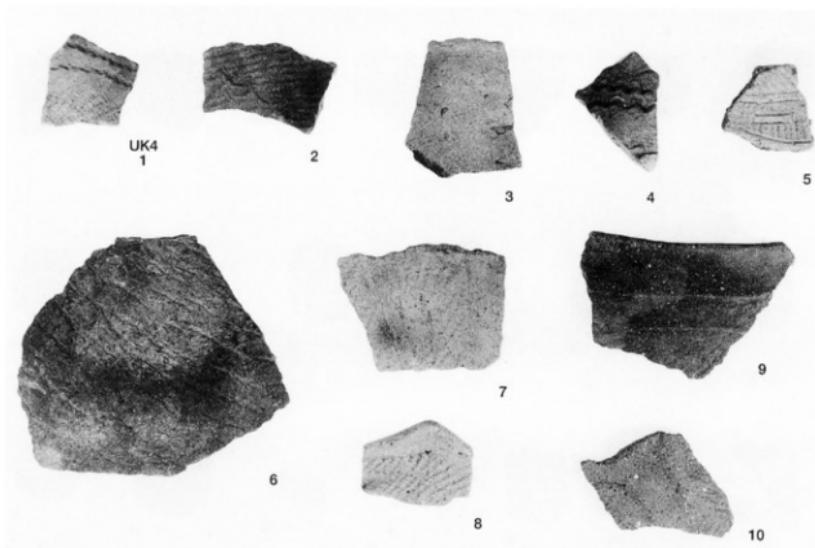
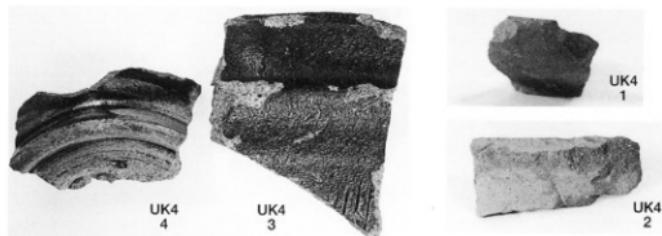
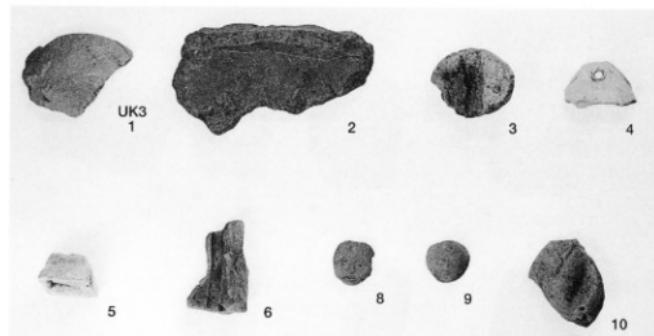
14

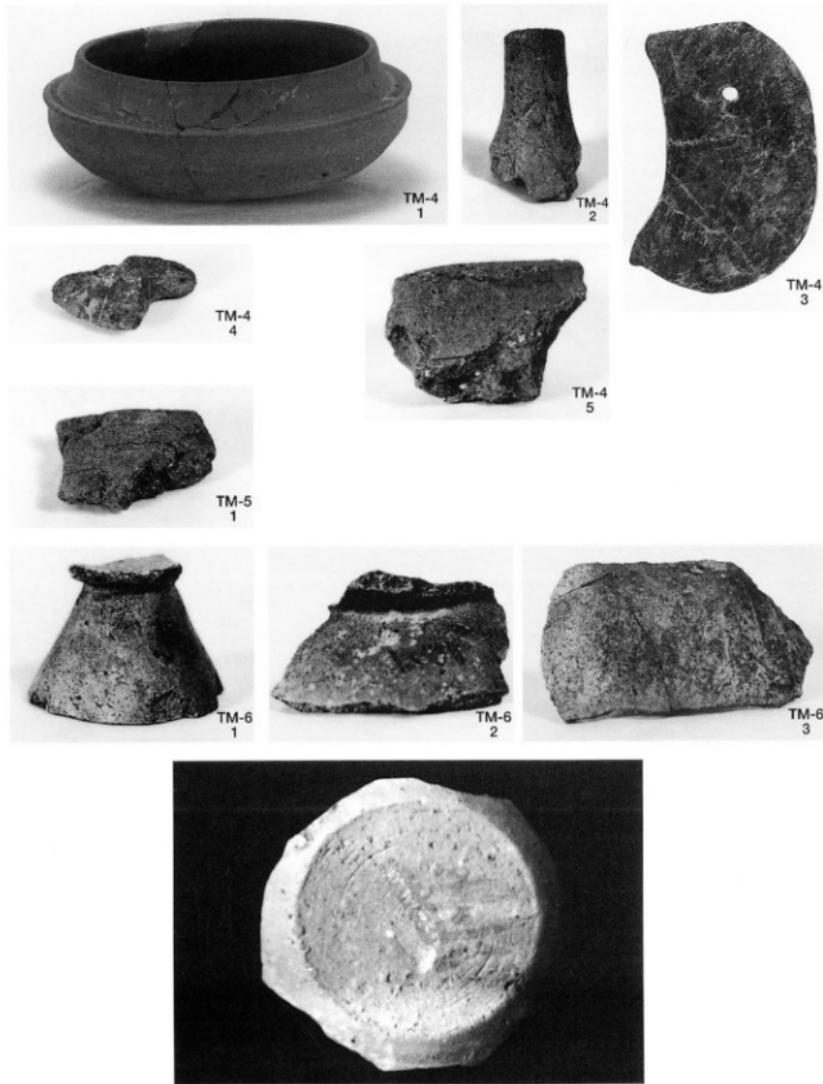












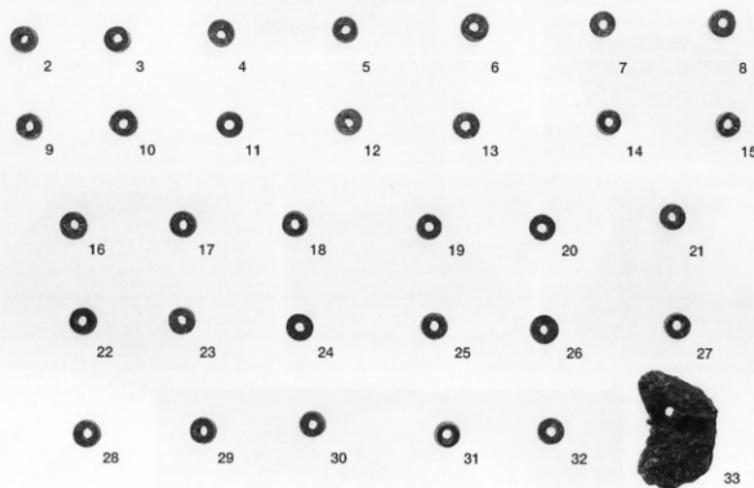
S1-1 3 墓書部分赤外線写真
撮影協力 財団法人茨城県教育財団
国立歴史民俗博物館



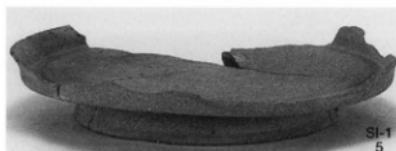
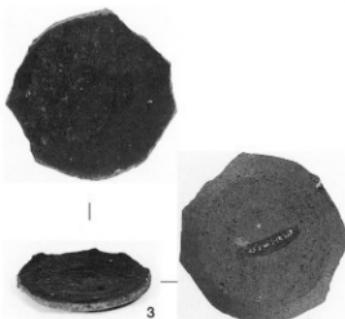
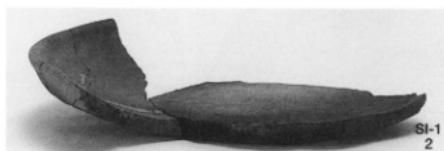
TM-7
1



TM-7
34











SK-8
1



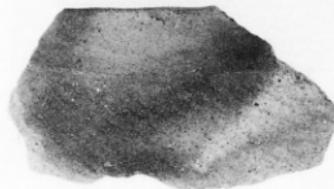
2



3



4



5



6



7



8



9



10



11



12



13



SK-8
14



15



16



17



18



19



SK-8
20



SK-16
1



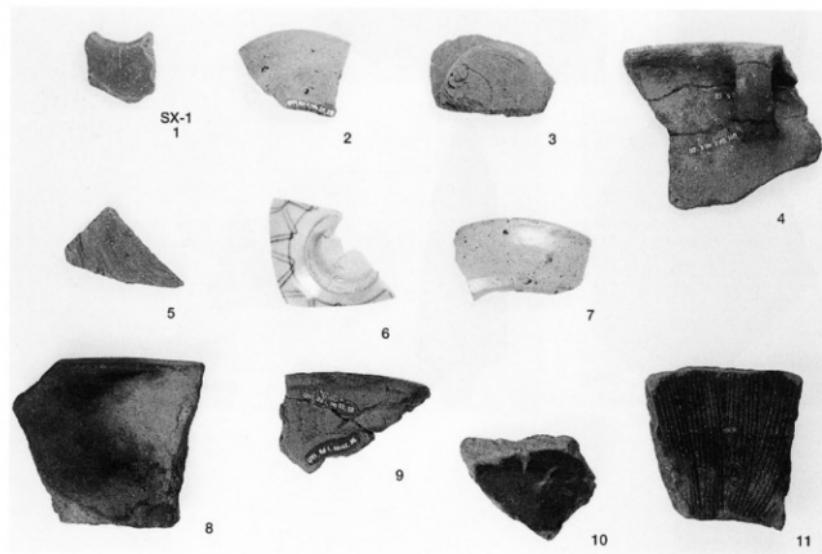
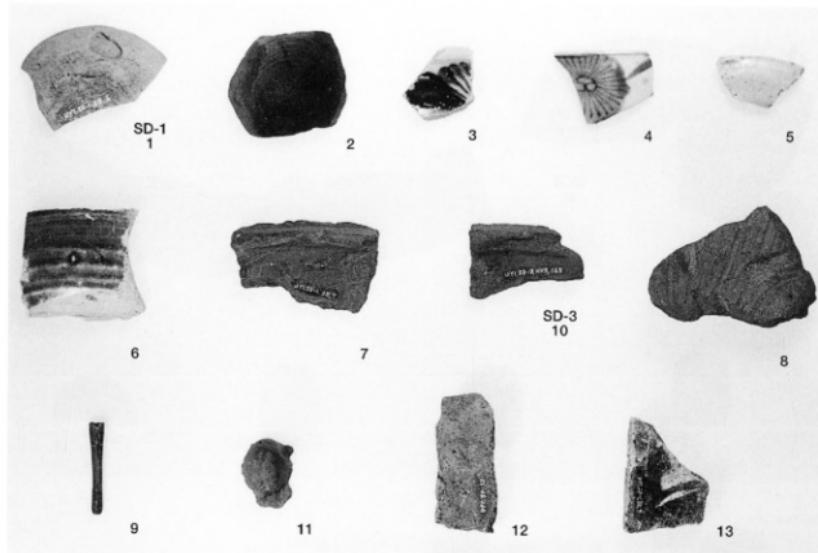
SD-6
1

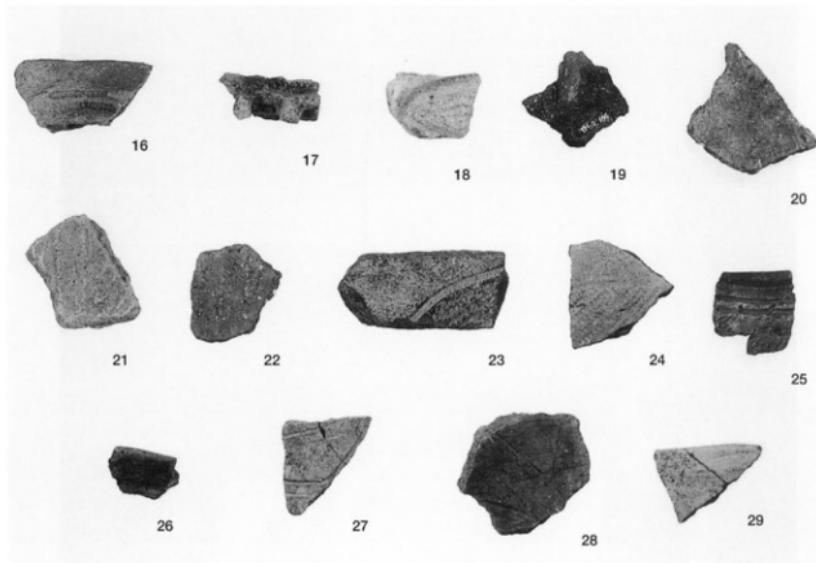
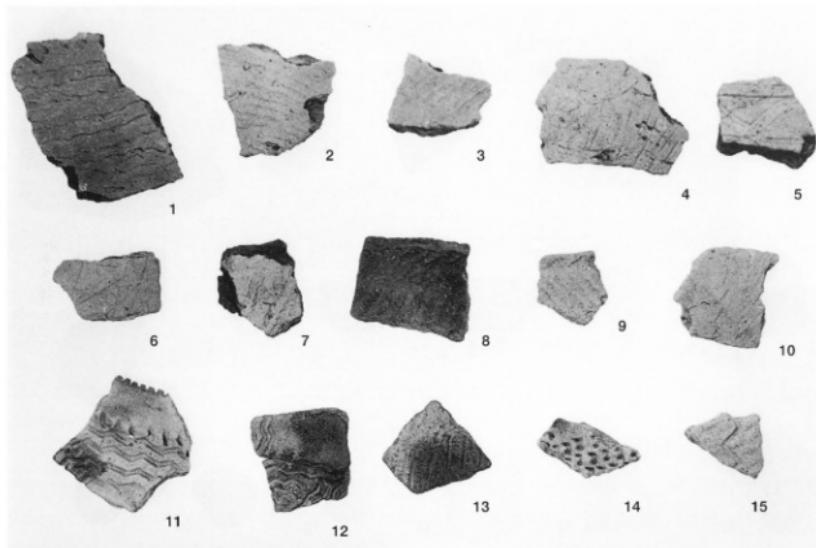


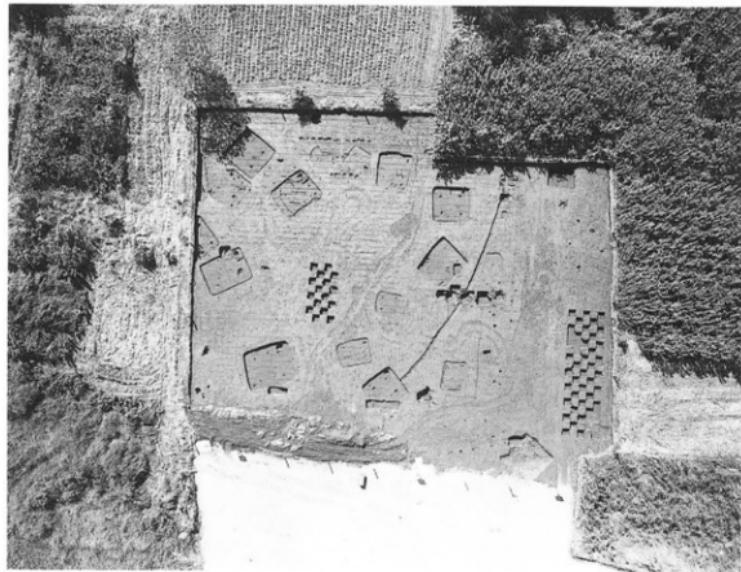
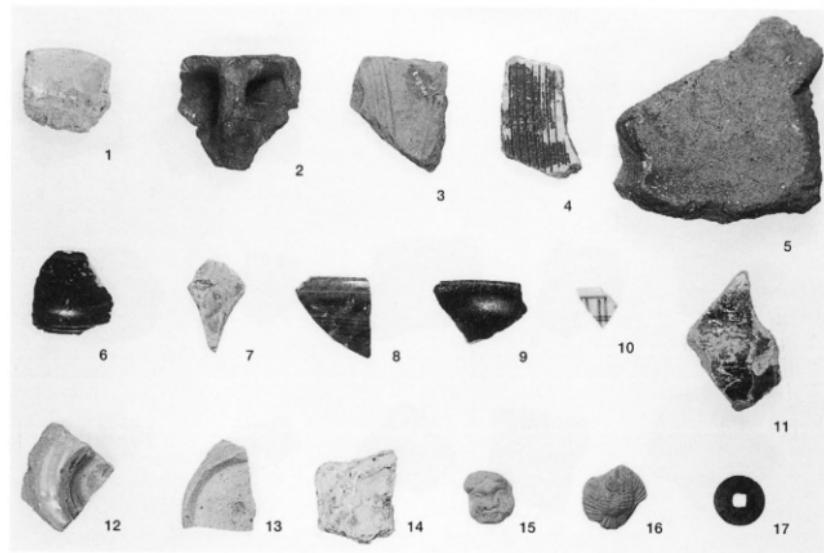
遺構外
1



遺構外
2







UK3 全景

北西原遺跡

(第3次・第4次調査)

山川古墳群

(第1次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第3集

編 集：土浦市遺跡調査会

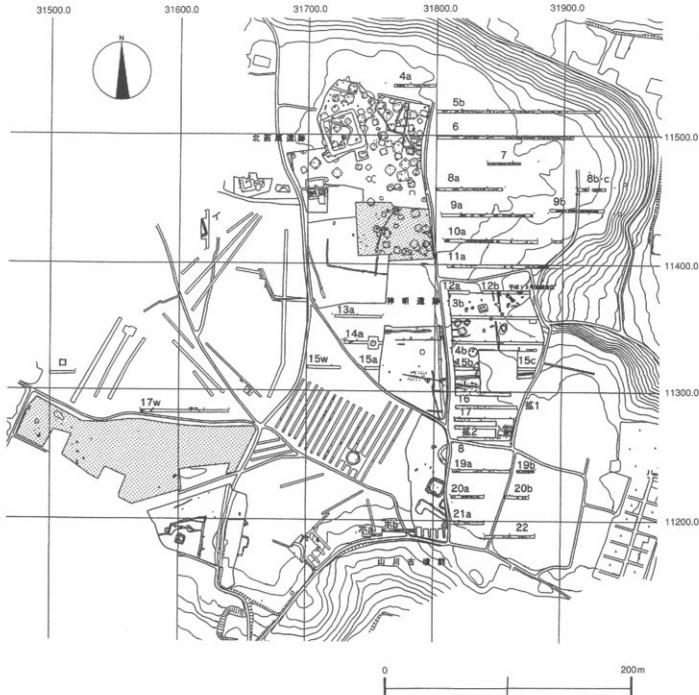
発 行：土浦市教育委員会

〒300-0812 土浦市下高津2丁目7-36

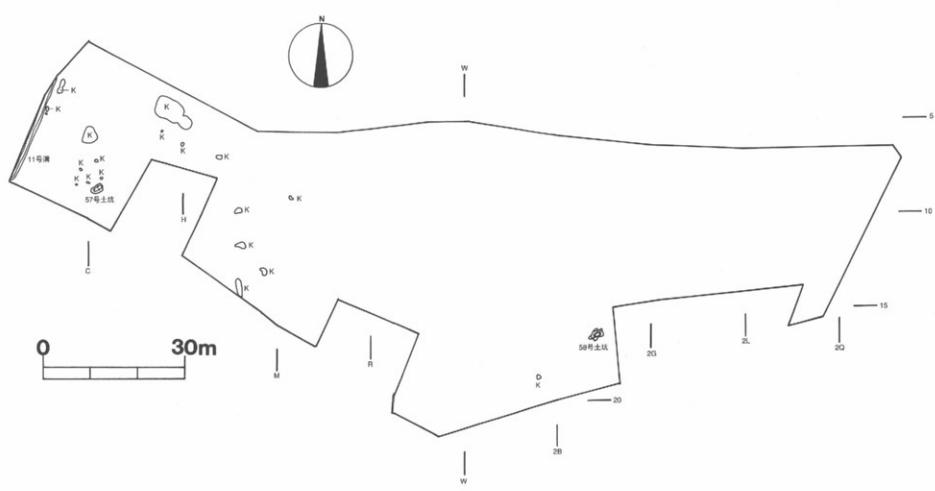
T E L 029-826-1111(代)

発行日：平成16(2004)年3月31日

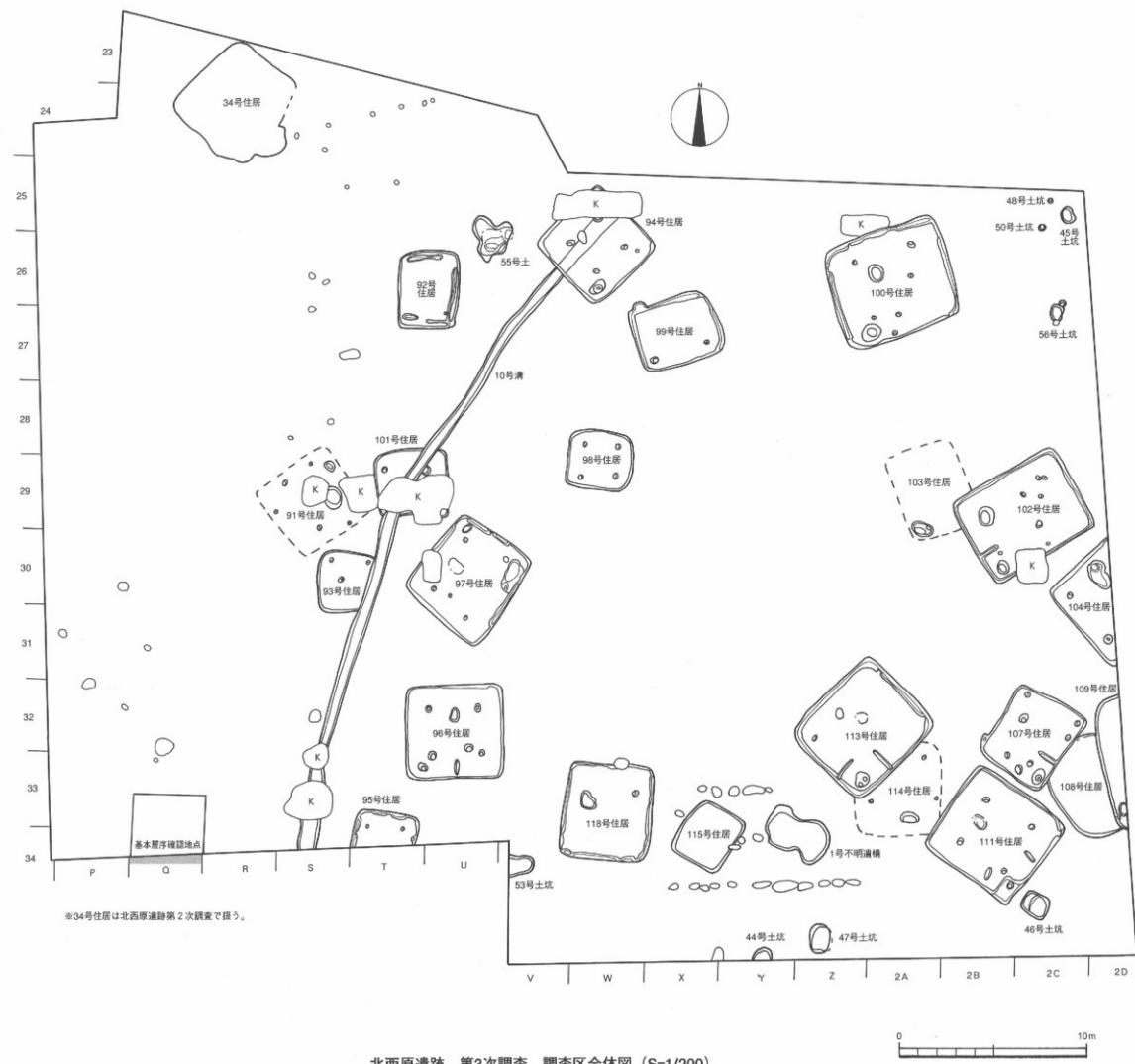
印 刷：株式会社 あけぼの印刷社



調査区位置図 (S=1/3000)



北西原遺跡 第4次調査 調査区全体図 (S=1/800)



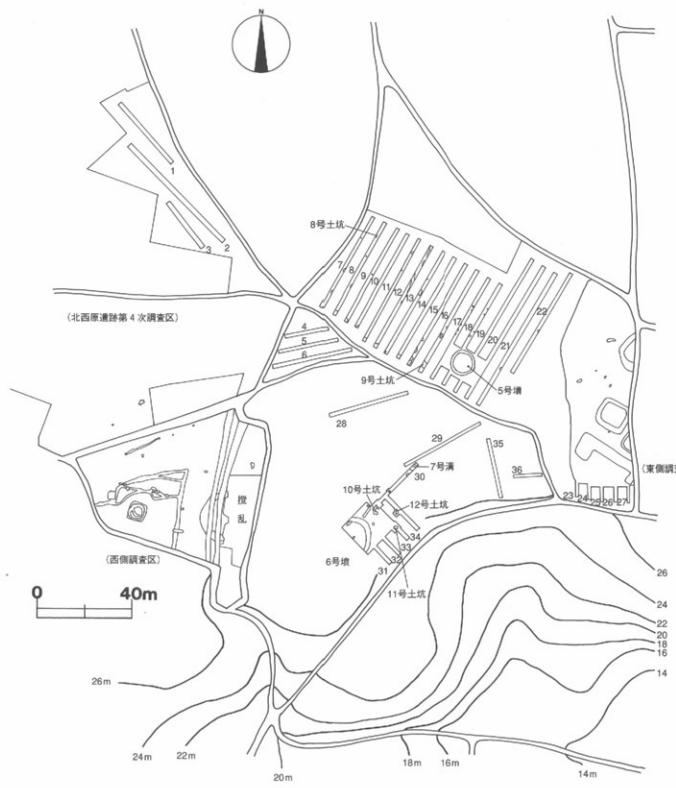
北西原遺跡 第3次調査 調査区全体図 (S=1/200)

付図1 北西原遺跡 第3・4次調査

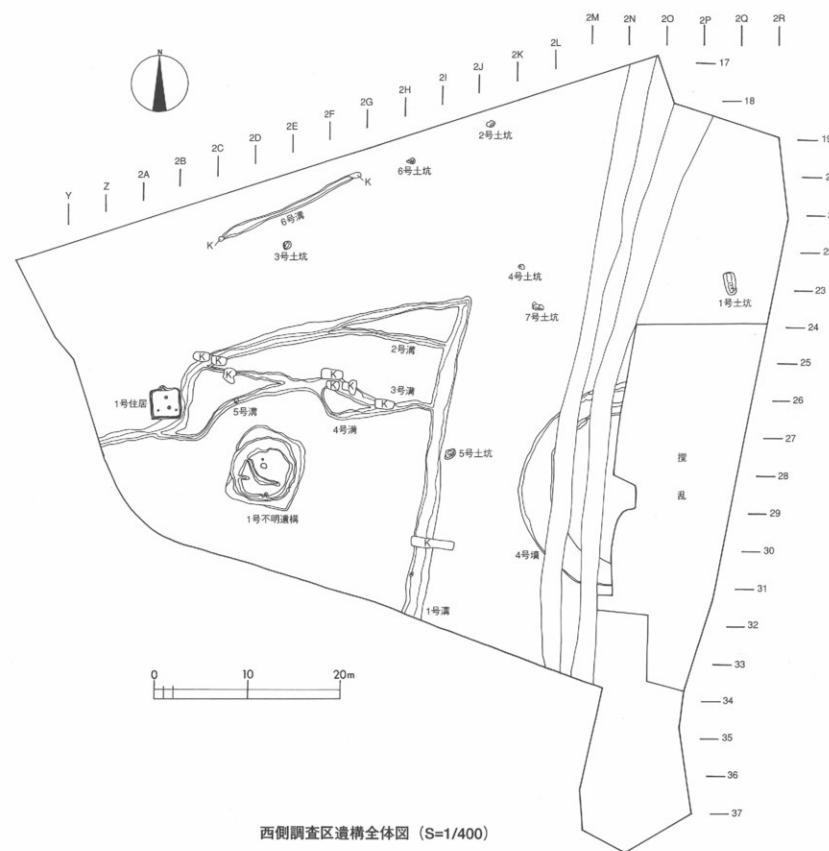
「北西原遺跡（第3次・第4次調査）
山川古墳群（第1次調査）」
(2004 土浦市教育委員会)



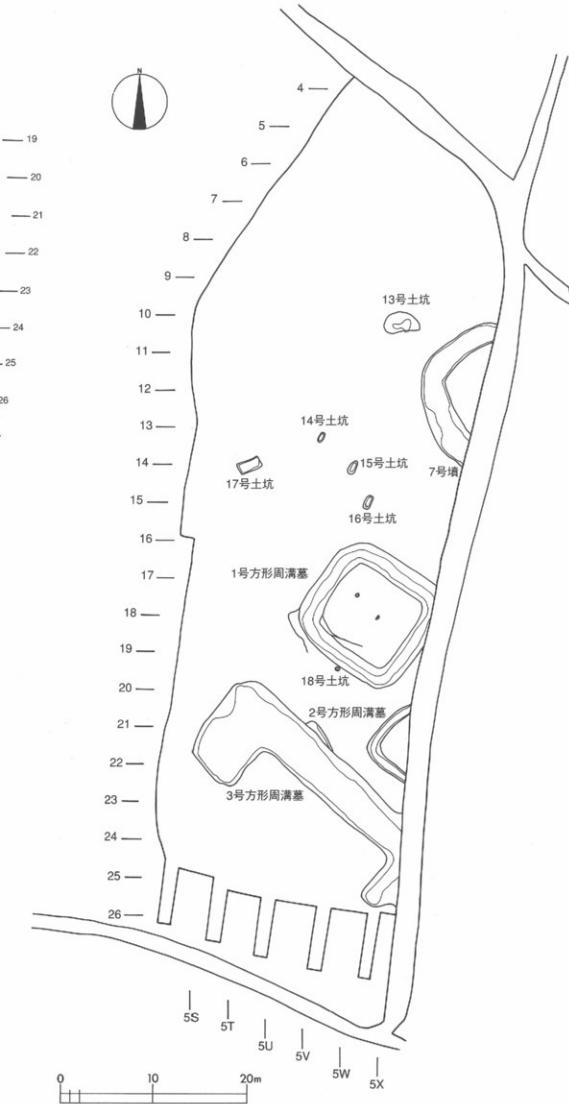
調査区位置図 (S=1/3000)



山川古墳群 第1次調査 調査区全体図 (S=1/1600)



西侧調査区遺構全体図 (S=1/400)



東側調査区遺構全体図 (S=1/400)

付図2 山川古墳群 第1次調査